

その一着がスポーツ熱を刺激する。



(財)日本学校体育研究連合会特別賛助会員

(財)日本学校体育研究連合会推薦品

COLUMBINE
ACTIVE SPORTS WEAR

児島 株式会社

〒711-0911 岡山県倉敷市児島小川2-4-60
TEL 086-473-4634 FAX 086-472-0866

URL: <http://www.netlaputa.ne.jp/~kojima/>



JQA-EM 5215
ISO 14001 認証取得



JQA-QM7340
ISO 9001
JIS Q 9001

第五十一回全国学校体育研究大会

研究紀要



北海道大会実行委員会



(財)日本学校体育研究連合会

第51回 全国学校体育研究大会 北海道大会

研究紀要

北海D@! Plus One



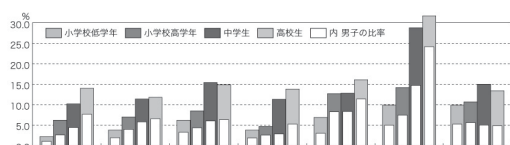
平成 24 年 10 月 25 日(木)・26 日(金)

開催地 札幌市・恵庭市・北広島市

生きる力の育成は“足育”から

児童生徒、足トラブルの実態

小学生 36%・中学生 57%・高校生 74% は
足トラブルの経験がある。



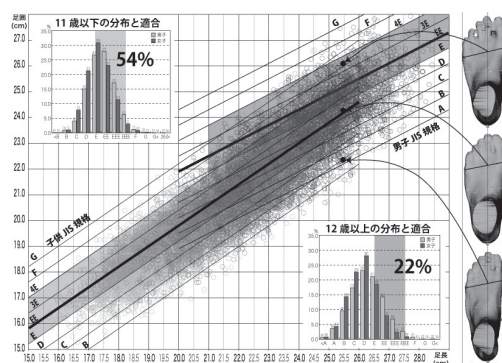
児童生徒 10,000 人の足計測の結果、子どもの足トラブルが、
足専門医の予想より、**10 倍も多い**ことがわかりました。
また、親世代に比べ、足は長細くなっており、
子ども達の足アーチが低下していると考えられます。



シューズが足に合っていない

小学生 46%・中学生 81%・高校生 73% は
足に合う学校シューズを選べなかった。

足に合わないシューズは、足トラブルの原因になりますが、
学校シューズは、児童生徒の 60% に適合していません。
さらに、70% が大きいサイズを履いているので、
足に合ったシューズを履いているのは 10% 程なのです。
これは、**体力・運動能力低下の一因**であると思われます。



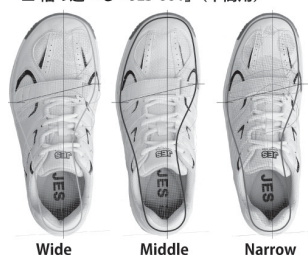
足元からの健康教育“足育”を

“足育”は、足を知り、足に合った靴を選び、
正しく履いて十分な運動をすることから。

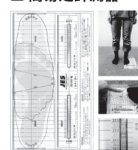


足計測データに基づいた、学校シューズの研究開発をはじめ
足育研修会や、足計測の普及など“足育”を進めています。

■ 幅の選べる「JES-001」(中高用)



■ 簡易足計測器



■ 重心足圧計測器



■ 足幅対応「瞬足」(幼小用)



■ 幅調整インソール (幼小用)





北海DCC! Plus One



第51回全国学校体育研究大会 北海道大会

主催 文部科学省 財団法人日本学校体育研究連合会

後援 北海道教育委員会 札幌市教育委員会

北海道学校体育研究連盟

主管 第51回全国学校体育研究大会北海道大会実行委員会

ホームページ <http://www.h-taikenren.jp/>

ごあいさつ



財団法人 日本学校体育研究連合会
会 長 片 岡 暁 夫

第51回全国学校体育研究大会は、北海道札幌市を中心に行われることになりました。本大会の開催にあたり、ご尽力いただきました文部科学省をはじめ、北海道教育委員会、札幌市教育委員会、北海道学校体育研究連盟、そして第51回全国学校体育研究大会北海道大会実行委員会の方々、そして関係各位に、日本学校体育研究連合会を代表いたしまして、心から御礼申し上げる次第です。

さて、本大会では、「未来へつなぐ健やかな心と体をはぐくむ体育学習の充実」という主題を掲げ、副題として～授業から日常へ、授業から未来へ～を加えて、大会主題とされております。全国からの参加者の期待が大きい内容であると思います。

そこでこの主題について考えてみたいと思います。まず「未来へつなぐ」という言葉が目に入ります。「未来」は重要な言葉です。人間は、未来に実現すべき設計図をつくることができます。それを実現して生きる力をもっています。目標やめあてを立てて実現しようとしします。それは、さまざまな設計図からなり、しかも短期のものや長期のものまであります。そこで一貫するのは個人や集団の態度です。粘り強く、あきらめないで、目標を実現する態度です。それぞれの人と集団の個性に応じた態度を形成していくことが重要でしょう。困難や障害を乗り越える意思の形成、冒険を恐れなくて愛好する態度を培うことは、世界的に活躍する民族の特徴です。人類の未来のために活躍する人間の形成は、日本人を育てる教育の課題でありましょう。北海道の大地から人類の未来を担う人々が育つことを期待するものであります。

次のキーワードが「健やかな心と体をはぐくむ」ことであります。そのためには、自分たちの体と心が溶け合っていることを深いところで知ることが大切でしょう。そこで必要なのは達成意欲のある練習です。その時々で、目標は変わるかもしれませんが、その目標と融合する体と心は練習により未来と結びつきます。「健やかな」という生き方とは、未来を実現する心身のエネルギーに満ちた生命力あふれる人間に支えられるのであります。そのような人々の育成を少なくとも12年間委託されるのが学校体育でしょう。幼・小・中・高の15年間で、未来に向けた日本人の育成の基盤として整備されることを期待して、大会の挨拶といたします。～授業から日常へ、授業から未来へ～と教育の働きが展開していく在りように期待するものであります。

北海道からはスケールの大きな人物が輩出されてきました。特色のある風土であります。本大会の主題をめぐってさらに深い考察が展開されることと思います。ここでは私の所感の一端を述べさせていただきます。

最後になりましたが、二日間にわたって行われるシンポジウムや公開授業、そして研究発表をもとに、スポーツ基本法の時代背景のもとに指導要領の理解を深める研究討議が展開され、全国各地に成果を持ち帰られることを期待して、挨拶といたします。

ごあいさつ



第51回全国学校体育研究大会
北海道大会実行委員会

委員長 飯 沼 晃

皆様、四季の彩り鮮やかな北の大地北海道、時計台の鐘の音が鳴り渡るロマンの街札幌に、ようこそおいでくださいました。

全国各地より学校体育に情熱を傾けておられる多くの学校体育関係者の皆様をお迎えし、平成2年度、平成14年度に次ぐ3度目となります「第51回全国学校体育研究大会北海道大会」を開催できますことを大変嬉しく、ご参会の皆様にご心よりお礼申し上げます。

さて、現代社会の少子高齢化、高度情報化、国際化、消費社会化などの急速な進行は、青少年を取り巻く環境に大きな影響を与えてきています。基本的な生活習慣の乱れ、コミュニケーション能力の低下、人間関係の希薄化、社会的自立の遅れ、体力・運動能力の低下傾向や積極的に運動する子どもとそうでない子どもの二極化傾向などです。

このような中、「生きる力」を理念として改訂された新学習指導要領の趣旨、過去2回の全国大会、そして47回に及ぶ北海道学校体育研究大会の成果を踏まえながら、「北海 DO! Plus One」のキャッチフレーズの下、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校が一つとなって準備を進めてまいりました。

私たちは、幼・小・中・高の各発達段階を考慮し、心と体を一体とした指導及び実生活や実社会に生きる指導の充実を図ることが、生涯にわたって生き生きと運動・スポーツに親しむ子どもの育成につながると考え、大会主題を「未来へつなぐ健やかな心と体をはぐくむ体育学習の充実～授業から日常へ、授業から未来へ～」といたしました。生涯にわたって生き生きと運動・スポーツに親しむ幼児・児童・生徒の姿を目指し、育成したい確かな体育の力を「技能」「知識、思考・判断」「態度」「課題解決能力」と明確化し、その手立てとして、「生涯スポーツにつながる教材の開発・工夫」「協同的、課題解決的に取り組む学習過程の構築」「確かな学力を保障する指導と評価の充実」の3つの視点を設定しました。

ご参会の皆様には、道産子の学習の様子をご覧いただいたり北海道各地での実践提案等をお聞きいただき、忌憚のないご意見、ご指導を頂戴し本大会が実り多いものになるとともに、新しい時代における我が国の学校体育の在り方について論議が深まることを願っております。

終わりに、北海道大会を開催するにあたりお力添えをいただきました文部科学省、財団法人日本学校体育研究連合会はじめ関係諸機関、講師、指導助言者の皆様に心からお礼申し上げますとともに、このたび表彰を受けられます学校、指導者の皆様に心からの敬意とお祝いを申し上げます。あいさつといたします。

目 次

1	ごあいさつ	(財)日本学校体育研究連合会会長	片岡 暁夫	
2	ごあいさつ	北海道大会実行委員会委員長	飯沼 晃	
3	開催要項			1
4	開会式次第			3
5	主催・共催団体関係			4
6	北海道大会実行委員会			6
7	北海道大会運営委員			10
8	分科会一覧			12
9	基調報告			15
10	公開演技			25
11	解 説			27
12	シンポジウム			29
13	特別講演			35
14	分科会研究発表資料			
	(幼稚園)			
	第1分科会 札幌市立白楊幼稚園			37
	(小学校)			
	第2分科会 札幌市立白楊小学校			47
	第3分科会 札幌市立宮の森小学校			65
	第4分科会 札幌市立福住小学校			83
	第5分科会 札幌市立資生館小学校			101
	(中学校)			
	第6分科会 札幌市立上野幌中学校			119
	第7分科会 札幌市立月寒中学校			137
	第8分科会 札幌市立向陵中学校			155
	(高等学校)			
	第9分科会 北海道恵庭南高等学校			173
	第10分科会 北海道北広島高等学校			183
	(特別支援学校)			
	第11分科会 北海道札幌市立豊明高等養護学校			193
15	分科会指導助言者紹介			203
	広告協賛			

第51回全国学校体育研究大会北海道大会

開 催 要 項

1 趣 旨

現代社会においては、子どもたちを取り巻く環境の変化に伴う運動機会の減少による体力の低下、生活習慣の乱れや精神的なストレスによる健康への影響等が依然として深刻な問題となっている。このような中、未来に生きる子どもたちに健やかな心身の育成を図り、生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現していくことは極めて重要である。

本大会は、子どもたちが自ら進んで運動やスポーツに親しむ資質や能力を身に付け、体力の向上とともに健康な生活を実践することができるよう、教育関係者及び体育・スポーツ研究者が一堂に会し、公開授業・保育、研究発表、シンポジウム等を通して、これからの学校体育の充実方策について研究協議を行う。

そこで、本大会における研究主題は、新学習指導要領の趣旨とこれまでの北海道の体育研究の成果を踏まえ、『未来へつなぐ健やかな心と体をはぐくむ体育学習の充実』と設定した。

この主題は、発達段階を考慮し、心と体をより一体とした指導および実生活や実社会に生きる指導の充実を図ることが生涯にわたって生き生きと運動・スポーツに親しむ子どもの育成につながると考え、設定したものである。

北海道では、研究主題の具現化のために、体育・保健体育で育成したい力、すなわち「技能（運動）」、「態度」、「知識、思考・判断」の指導内容を確実に身に付けさせていくために【生涯スポーツにつながる教材の開発・工夫】【児童、生徒が共同的、課題解決的に取り組む学習過程の構築】【児童、生徒の確かな学力を保障する指導と評価の充実】の3点を柱として授業を中心とした研究を積み上げてきた。

本大会では、これまでの成果を踏まえ、公開授業・保育並びに分科会において、学校体育の充実の在り方について提案し、研究協議を行うものである。

2 大会主題 「未来へつなぐ健やかな心と体をはぐくむ体育学習の充実」

～授業から日常へ、授業から未来へ～

3 主 催 文部科学省 財団法人日本学校体育研究連合会

4 共 催 北海道教育委員会 札幌市教育委員会
北海道学校体育研究連盟

5 主 管 第51回全国学校体育研究大会北海道大会実行委員会

6 期 日 平成24年10月25日(木)・26日(金)

7 会 場 (1) 第1日全体会会場 北海道総合体育センター「北海きたえーる(愛称)」
(北海道札幌市豊平区豊平5条11丁目1-1)

(2) 第2日 分科会会場 全11会場

第1分科会 札幌市立白楊幼稚園	第2分科会 札幌市立白楊小学校
第3分科会 札幌市立宮の森小学校	第4分科会 札幌市立福住小学校
第5分科会 札幌市立資生館小学校	第6分科会 札幌市立上野幌中学校
第7分科会 札幌市立月寒中学校	第8分科会 札幌市立向陵中学校
第9分科会 北海道恵庭南高等学校	第10分科会 北海道北広島高等学校
第11分科会 北海道札幌市立豊明高等養護学校	

- 8 参加対象者** (1) 全国の幼稚園、小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校の教員並びに保健体育行政関係者
(2) 社会体育等の指導者および大学等の研究者
(3) 一般参加者 等

- 9 内 容** (1) 全体会（第1日）
 ①開会式
 ②表彰式
 ③基調報告
 ④解説「効果的・効率的な評価の在り方」
 文部科学省スポーツ・青少年局体育参事官付 教科調査官 石川 泰成
 ⑤シンポジウム 「指導と評価の一体化を目指した授業づくり」
 コーディネーター 岡出 美則（筑波大学 教授）
 シンポジスト 岩田 靖（信州大学 教授）
 須黒 祥子（東京都駒場高等学校 主任教諭）
 高木 健（佐賀県立香楠中学校 教諭）
 三戸部文彦（札幌市教育委員会 指導主事）
 ⑥特別講演 「武道と人づくり」
 東海大学 教授 山下 泰裕氏
 (2) 分科会（第2日）
 ①公開授業・保育
 ②研究発表・研究協議
 ③指導講評
 ④閉会式

10 日 程

全体会 10月25日(木) 北海道立総合体育センター「北海きたえーる」

9:30	10:00	10:40	11:30	12:10	13:10	14:00	15:50	17:00
受 付	開会式	表彰式	基調報告	昼 食 (公開演技)	解 説	シンポジウム	特別講演	

※昼食時に恵庭南高等学校新体操部と平岸天神(ヨサコイソーラン)の公開演技があります。

分科会 10月26日(金) 札幌市・恵庭市・北広島市 11会場

9:00	9:30	12:00	13:00	15:00
受 付	公開授業・保育	昼 食	研究発表 研究協議	指導講評 閉会式

※第2日（分科会）の日程は、会場により多少の違いがあります。

※(財)日本学校体育研究連合会理事・評議員会、都道府県代表者会議は10月24日(水)14時からホテルライフオー・札幌にて行います。

11 参 加 費 5,000円

12 問い合わせ先 北海道大会実行委員会事務局
 札幌市立手稲北小学校
 〒006-0860 北海道札幌市手稲区手稲山口653番地 2
 T E L 011-681-4182 F A X 011-681-7359

開会式 次第

1 **開会のことば**

北海道大会副実行委員長

成 田 純 一

2 **国歌斉唱**

3 **開会のあいさつ**

北海道大会実行委員長

飯 沼 晃

4 **主催者あいさつ**

文部科学省 スポーツ・青少年局長
財団法人日本学校体育研究連合会会長
北海道教育庁 教育次長

久 保 公 人
片 岡 暁 夫
吉 田 一 昭

5 **来賓祝辞**

北海道知事

高 橋 はるみ

6 **歓迎のことば**

札幌市長

上 田 文 雄

7 **次期開催県あいさつ**

東京大会実行委員会会長

古 家 眞

8 **閉式のことば**

北海道大会副実行委員長

下 山 信 弘

主催・共催団体関係

□ 文部科学省	
スポーツ・青少年局長	久保公人
大臣官房審議官(スポーツ・青少年局担当)	山脇良雄
スポーツ・青少年局スポーツ・青少年総括官	山口敏
スポーツ・青少年局体育参事官	長登健
スポーツ青少年局体育参事官付教科調査官	白旗和也
スポーツ青少年局体育参事官付教科調査官	石川泰成

□ 財団法人日本学校体育研究連合会										
会 副 副 理 理 理 理 理 参 参 参 参 監 監 事 事	会 会 事	長 長 長 長 事 事 事 事 事 与 与 与 与 事 事 局 局					片 高 本 後 岡 友 菅 池 村 櫻 加 古 田 手 関 奈 寺 藤	岡 橋 村 藤 出 添 原 田 上 井 藤 川 中 打 尾 嶋 井	暁 健 清 一 美 秀 健 延 み 康 正 浩 美 和 毅 文 か	夫 夫 人 彦 則 則 次 行 子 治 克 洋 子 明 彦 力 代 子

□ 北海道教育委員会

教 育 長
教 育 次 長
健 康・体 育 課 長
健 康・体 育 課 主 幹
健 康・体 育 課 主 査
健 康・体 育 課 主 査
健 康・体 育 課 指 導 主 事

高 橋 教 一 昭
吉 田 一 彦
土 井 寿 崇
蓑 島 一
佐々木 純
駒 井 博
瀬 越 義 和
範

□ 札幌市教育委員会

教 育 長
教 育 次 長
学 校 教 育 部 長
指 導 担 当 部 長
教 育 研 修 担 当 部 長
幼 児 教 育 セ ン ター 担 当 課 長
指 導 室 指 導 主 事
指 導 室 指 導 主 事

北 原 敬 文
町 田 隆 敏
金 山 正 彦
池 上 修 次
大 友 裕 之
松 田 昌 樹
三 戸 部 昌 彦
秀 島 文 起 也

□ 北海道学校体育研究連盟

委 員 長
副 委 員 長
副 委 員 長
副 委 員 長
副 委 員 長
監 事
監 事
事 務 局 長
事 務 局 次 長
事 務 局 次 長
事 務 局 次 長
事 務 局 次 長
事 務 局 次 長
事 務 局 次 長

飯 沼 晃
成 田 一
黒 井 子
下 山 弘
藤 岡 朗
山 本 幸
佐 藤 保
松 井 一
渡 井 元
矢 辺 雄
山 口 希
登 本 宏
吉 尾 治
林 田 樹
夫

平成24年度 第51回全国学校体育研究大会 北海道大会実行委員会役員

顧問	北海道教育委員会教育長 札幌市教育委員会教育長	高橋教一 北原敬文
参与	北海道学校体育研究連盟歴代委員長 北海道学校体育研究連盟歴代委員長 北海道学校体育研究連盟歴代委員長 北海道学校体育研究連盟歴代委員長 北海道学校体育研究連盟歴代委員長 北海道学校体育研究連盟歴代委員長 北海道学校体育研究連盟歴代委員長 北海道学校体育研究連盟歴代委員長 北海道学校体育研究連盟歴代委員長 北海道学校体育研究連盟歴代委員長 北海道学校体育研究連盟歴代委員長 北海道学校体育研究連盟歴代委員長 北海道国公立幼稚園園長会会長 札幌市立幼稚園長会会長 北海道小学校長会会長 札幌市小学校長会会長 北海道中学校長会会長 札幌市中学校長会会長 北海道高等学校長協会会長 北海道高等学校教育研究会会長 北海道特別支援学校長会会長 北海道教育委員会学校教育局健康・体育課長 札幌市教育委員会学校教育部指導担当課長 札幌市教育委員会学校教育部指導担当課長 札幌市教育委員会学校教育部幼児教育センター担当課長	鈴木木豊 栗城正 石原金治 杉本幸一 金井孝 永田弘 山越正敏 炭谷邦弘 竹本征雄 宮崎岩次 西村正 工藤誠 鈴木木眞行 上千田道子 千葉理恵子 蔵本康彦 飯沼晃 谷直人 後藤文裕 山本伸弘 守屋開 伊藤政勝 土井寿彦 森岡毅 檜田英樹 松田昌樹

札幌市立白楊幼稚園長
 札幌市立白楊小学校長
 札幌市立宮の森小学校長
 札幌市立福住小学校長
 札幌市立資生館小学校長
 札幌市立上野幌中学校長
 札幌市立月寒中学校長
 札幌市立向陵中学校長
 北海道恵庭南高等学校長
 北海道北広島高等学校長
 北海道札幌市立豊明高等養護学校長

綿屋圭子
 飯塚泰久
 飯沼晃
 大久保雅人
 益村豊
 下山弘
 南博
 塚野昭臣
 藤岡二朗
 三品純一
 北嶋智史

委員長 北海道学校体育研究連盟
 副委員長 北海道学校体育研究連盟
 〃 北海道学校体育研究連盟
 〃 北海道学校体育研究連盟
 〃 北海道学校体育研究連盟
 監事 北海道学校体育研究連盟
 〃 北海道学校体育研究連盟

飯沼晃
 成田純一
 黒井育子
 下山弘
 藤岡二朗
 山本孝幸
 佐藤善保

平成24年度 第51回全国学校体育研究大会
北海道大会実行委員会事務局・専門部役員

委員長	飯沼晃	(札幌市立宮の森小学校長)
副委員長	成田純一	(札幌市立あやめ野小学校長)
〃	黒井育子	(札幌市立本町小学校長)
〃	下山信弘	(札幌市立上野幌中学校長)
〃	藤岡二朗	(北海道恵庭南高等学校長)
監事	山本孝幸	(札幌市立福井野小学校長)
〃	佐藤善保	(札幌市立中の島中学校長)
事務局長	松井光一	(札幌市立手稲北小学校長)
事務局次長	矢口宇希雄	(札幌市立豊平小学校長)
〃	山本宏	(札幌市立藻岩小学校長)
〃	登尾俊治	(札幌市立南白石小学校長)
〃	渡辺元	(札幌市立西岡北小学校長)
〃	吉田俊樹	(札幌市立厚別南中学校長)
〃	林俊夫	(北海道千歳北陽高等学校長)

【総務部】

顧問	山室隆幸	(札幌市立石山東小学校長)
	猪股徹	(札幌市立北白石中学校長)
部長	長尾明也	(札幌市立厚別北小学校長)
副部長	大山勉	(北海道恵庭南高等学校副校長)
	金子博之	(札幌市立福井野小学校教頭)
	金星野正彦	(札幌市立西岡北中学校教頭)
部員	石塚洋	(札幌市立豊平小学校)
	田川紀	(札幌市立もみじの森小学校)
	野村則淳	(札幌市立西岡北小学校)
	岩田悟	(札幌市立白楊小学校)
	芳賀康平	(札幌市立月寒東小学校)

【研究部】

顧問	高井雅一	(札幌あすかぜ高等学校長)
	北嶋智史	(北海道札幌市立豊明高等養護学校長)
部長	引地秀美	(札幌市立平岡公園小学校長)
副部長	山本興嗣	(札幌市立ふくいの幼稚園長)
	綿屋圭子	(札幌市立白楊幼稚園長)
	中野正毅	(札幌市立緑丘小学校教頭)
	大牧眞一	(札幌市立資生館小学校教頭)
	小野寺正	(札幌市立八軒東中学校教頭)
	富川浩	(札幌市立米里中学校教頭)

部員		松西橋嶋道前村佐	林川本本佛田岡藤	正浩由智美孝	比呂司貴剛志潤世一	(北海道北広島高等学校教頭) (北海道札幌市立豊明高等養護学校教頭) (札幌市立白楊幼稚園) (札幌市立幌南小学校) (札幌市立もみじの森小学校) (札幌市立宮の森小学校) (札幌市立福住小学校) (札幌市立伏見中学校)	
		【編集部】					
		顧問	山加星宇平鈴松岸相永	口藤留間野木田馬井	哲和紀雅昭泰敬	司美生準嗣真雄弘聡仁	(札幌市立定山溪小学校長) (北海道江別高等学校長) (札幌市立常盤小学校長) (札幌市立北野台中学校長) (北海道北広島西高等学校副校長) (札幌市立北白石小学校教頭) (札幌市立東札幌小学校教頭) (札幌市立琴似小学校教頭) (札幌市立月寒小学校) (札幌市立発寒東小学校)
		部部長					
		部員					
		【式典部】					
		顧問	新藤渡大金西牧村堀	見本辺野光坂内田江	一勝寛朋健敏邦	美芳志子二彦夫仁仁	(札幌市立元町小学校長) (北海道野幌高等学校長) (札幌市立元町北小学校長) (札幌市立北陽中学校長) (札幌市立新琴似小学校教頭) (札幌市立清田南小学校教頭) (札幌市立平岸中学校教頭) (札幌市立真駒内桜山小学校教頭) (札幌市立東川下小学校)
		部部長					
部員							
【事業部】							
顧部副	問長長	畠山成清今小石木千石	山脇田水井甲岡村葉橋	貴代義雅直哲智秀	志栄則修悟之樹郎明二	(札幌市立伏古小学校長) (札幌市立豊園小学校長) (札幌市立厚別西小学校長) (札幌市立東月寒中学校長) (北海道野幌高等学校副校長) (札幌市立藻岩小学校教頭) (札幌市立美香保中学校教頭) (札幌市立羊丘小学校) (札幌市立苗穂小学校) (札幌市立陵陽中学校)	
部員							

北海道大会運営委員

分科会	第1分科会	第2分科会	第3分科会	第4分科会	第5分科会
会場校	札幌市立 白楊幼稚園	札幌市立 白楊小学校	札幌市立 宮の森小学校	札幌市立 福住小学校	札幌市立 資生館小学校
会場校校長 会場校副校長 会場校教頭	綿屋 圭子	飯塚 泰久 石原 和人	飯沼 晃 佐藤 辰也	大久保雅人 神島 正和	益村 豊 大牧 眞一
運営委員長 運営副委員長	山本 興嗣 串山 昇	新見 一美 茂木 清貴 松野三津夫 樫山 正直 神谷 敦	山室 隆幸 鈴木 真 島津 伸宏 島貫 修 三浦 史人	山口 哲司 成田 義則 橋本 均 辻 雅夫 小野 正裕	矢口宇希雄 小甲 雅之 小笠原教夫 吉田 雅昭 金野 智
会場校主任 会場校副主任	渡辺 元 金光 健二 渋谷かおり	畠山貴代志 石原 和人 金子 博之 井出 光典	黒井 育子 佐藤 辰也 中野 正毅	山本 宏 神島 正和 西坂 敏彦 岸 泰弘	登尾 俊治 大牧 眞一 松田 昭雄 村田 仁司
司 会 記 録	野村 淳一 石塚 洋 神 充哲	千葉 智明 秋元 洋一 藤塚 圭一	山形 昇平 田川 則紀 渡邊 裕治	相馬 聡 島内 英延 樺澤 聡	田中 徳光 矢野 聡史 金田 和也
運営チーフ 運営委員	井村 隆夫 森 美由紀 青柳 貴子 上月 暁子 川口いずみ 本間 真純 木村亜矢子 太田 縁 村上由規乃 今 たち子 和田 尚美 加藤 由紀 山下 洋一 横山 理子	永井 敬仁 清水 健史 成田 慶輔 後藤 良太 井上 直哉 石川 瞳 高瀬 勇人 山本由紀子 山田 健 余田 峻也 水上 健志 五十嵐康夫 菅野 順一 伊藤 倫朗 辰田 章人 本間 大介	安藤 九一 谷 寧 山口 耕昌 武田 洋樹 宮崎 直也 川島 貴裕 鎌田 直広 西村 義仁 越山 紘州 河本 岳哉 勝沼 大空 村上 雅之 石黒 智志 服部 隆 石橋 恭 山本 三楽	木村 哲郎 田牧 亜紀 浅野 純子 安藤 信宏 田口 牧 吉田 康人 佐藤 倫子 米代 直美 吉田 潔 菅原 貴広 佐藤 錦一 平林 莉恵 久保 陽平 高橋 俊介 立野 弘高	堀江 仁 佐賀 主昌 三浦 祐大 鈴木 英恵 安達 隆之 濱田 風太 今野 大介 嘉藤 尋信 中塚 宗太 吉野令欧奈 生駒 大地 下岡 幸織 井上 貴臣 青山 拓也 宇留間 歩
授 業 者	青柳 貴子, 上月 暁子 本間 真純, 川口いずみ 木村亜矢子, 太田 縁 村上由規乃, 今 たち子 和田 尚美, 渋谷かおり	千葉なつき 岩田 悟	石村 宣人 山崎 稔英	上木 一也 石田 愉良	山本 敦史 長谷部舞里
研究発表者 研究主任	橋本 由貴(授業者) 橋本 由貴	岩田 悟 道佛 智志	前田 潤 前田 潤	村岡美千世 村岡美千世	生駒 大地 嶋本 剛

第6分科会	第7分科会	第8分科会	第9分科会	第10分科会	第11分科会
札幌市立 上野幌中学校	札幌市立 月寒中学校	札幌市立 向陵中学校	北海道 恵庭南高等学校	北海道 北広島高等学校	北海道札幌市立 豊明高等養護学校
下山 信弘 山根 弘之	南 博 前田 寿嗣	塚野 昭臣 相原 正典	藤岡 二郎 大山 勉 堀内 雅史	三品 純一 渋谷 誠人 松林正比呂	北嶋 智史 西川 浩司
佐藤 善保 大野 朋子	宇留間 準 猪股 徹	吉田 俊樹 清水 修	藤岡 二郎 大山 勉	林 俊夫 松林正比呂	山本 孝幸 西川 浩司
石岡 直樹 小野寺 正 吉田 幸司 佐田 利典	林原 昌生 土田 英之 和田 正教 長谷川 仁	牧内 邦夫 星野 正彦 富川 浩 荒川 芳央	加藤 忠	堀川 政彦	四戸 基樹 正武家重治
熊谷 圭悟 木村 由久 牧内奈保巳	佐藤 孝一 駒込 幸則 小林 大介	桑原 俊二 牧内 志友 鈴木 隆史	佐藤 恒司 山石 裕司 岩渕 裕介	井戸 利樹 黒田 祥嗣 南原 賢二	西川 浩司 今野 邦彦 黒江 貴志
佐藤 典明 奥山 隆敏 西下 賀恵 木口 朋子 堀 貴博 吉田摩里子 高橋 正年 竹内 吉徳 遊佐嘉寿美 谷内 公一 山下 康則 渡部 堅 佐藤寿美子 上山 敦司 木下 雅裕 栗城 正宏 村山 直樹 秋川 直慶 長島 周平 今井 聖子	佐藤 克也 石橋 秀二 金野 睦子 網島 七恵 笹川 恒春 大崎 聡 岸本 淳志 佐藤 公規 坂本 純 大良 友美 川田 佑一 岩本 良一 長岡 訓子 山崎 武司	池田 恵美 島田 誠大 牧内 泰子 勝平 愛 内海 力男 大賀 郁恵 中濱 絵里 野沢 周 広瀬恵理子 高橋伸素美 塚本 真澄 林 功 菅原 伸一 高橋 舞 家内賢一郎 大井 一雄 阿部 義秀 尾崎 英弥	加藤 忠 数馬田奈津紀 川島 圭司 竹田 麻衣 繁野 昌司 工藤 高司 森河 浩 太刀川建一 佐藤 真吾 塚原 康隆 田中 眞 赤松 幸広 酒井 伸哉 吉岡ゆかり 佐賀るみ子 三上 明美 (運営アドバイザー) 高井 雄一 平野 雅嗣 今井 悟	堀川 政彦 重成珠里恵 仲見 孝仁 柴田 宏樹 中川 暁 尾形 一彦 西川 剛 山田 信雄 清水 大策 橋本 裕也 数馬田 基 寺内晋太郎 池下美由紀 相馬 優子 浅野 雅子 (運営アドバイザー) 加藤 和美 藤本 勝芳	矢口 知巳 藤江 和輝 長内 伸子 前川 慈彦 真島 毅 菊地美智子 西野 昭子 中村 和愛 二本柳一穂
伊東芙美枝 齊藤 研介 太田 吏 太田 吏	佐藤 光 津村 昌彦 (研究発表者) 藤田ゆきえ 山口 肇 藤田ゆきえ	片山 慎司 市川 みお 大川 潤 大川 潤	工藤 直人 栄花 英幸 加藤 忠 加藤 忠	森田 有 堀川 政彦 内海 久 内海 久	伊藤沙保里 小原 要 兒玉 亜来 矢口 知巳

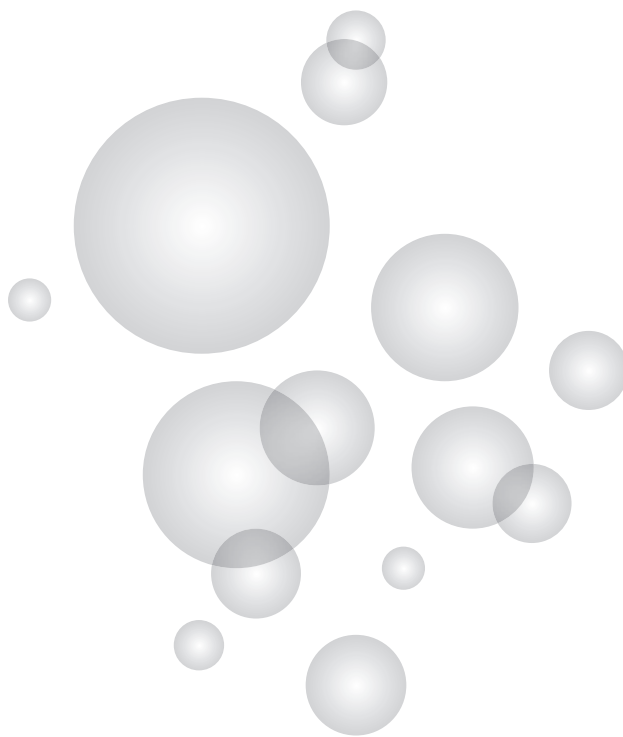
分 科 会 一 覧

	分 科 会	会 場	研 究 主 題	指 導 助 言 者
幼稚園	1	札幌市立 白楊幼稚園	遊びを中心とした生活の中で幼児期にはぐくみたい力とは ～たくましい心と体を育てるために～	札幌学院大学 教授 大垣 清美
小 学 校	2	札幌市立 白楊小学校	楽しさがある！共に学ぶ！伸びがある！ 体育学習 ～今こそ確かな体育の力を！～	宮崎大学 教授 三輪 佳見
	3	札幌市立 宮の森小学校	何度も挑戦し、仲間と動きを高め合う 体育学習	北海道教育大学 理事 城後 豊
	4	札幌市立 福住小学校	仲間との自分を見つめる学び合いで、 「できる」喜びを味わう体育学習	東京学芸大学 准教授 水島 宏一
	5	札幌市立 資生館小学校	「わかる」「できる」夢中になる体育学習 ～体を動かす心地よさや、動きの高まりを 共に喜び合える子どもを目指して～	宮城教育大学 教授 木下 英俊
中 学 校	6	札幌市立 上野幌中学校	未来へつながる保健体育学習 ～自ら、仲間と高め合いながら、 心と体をはぐくむ生徒の育成～	東海大学 教授 中村なおみ
	7	札幌市立 月寒中学校	「わかる」「できる」楽しさを味わう 授業のあり方 ～仲間と関わりながら、 健やかな心と体をはぐくむ～	国土舘大学 教授 田原 淳子
	8	札幌市立 向陵中学校	仲間とともに学び合う保健体育学習	北海道教育大学 教授 古川 善夫
高 等 学 校	9	北海道 恵庭南高等学校	「運動好きな生徒を育て、豊かなスポーツ ライフの基礎をはぐくむ体育学習」 ～仲間と共に心と体をはぐくむ 「体づくり運動」と「剣道」の実践～	東海大学 教授 小澤 治夫
	10	北海道 北広島高等学校	仲間と共にスポーツの楽しさに触れ、知的 に理解することを通して、生涯にわたって 豊かなスポーツライフを継続する資質をは ぐくむ体育学習の追求 ～新学習指導要領の先行実施を通して～	早稲田大学 教授 友添 秀則
特別 支 援 学 校	11	北海道札幌市立 豊明高等養護学校	「生徒が主体的に取り組むための学習と 支援の在り方」 ～円滑な社会活動を行うための 知識の会得と実践力の育成～	北海道教育大学 教授 安井 友康

公開授業・保育①	公開授業・保育②	研究発表者	
心と体を動かしながら楽しむ遊び 青柳 貴子,上月 暁子,本間 真純 橋本 由貴,木村亜矢子,川口いずみ 太田 縁,村上由規乃,今 つち子 和田 尚美,渋谷かおり	学級活動 青柳 貴子,上月 暁子 本間 真純,橋本 由貴	札幌市立白楊幼稚園 橋本 由貴	
1年 ゲーム 「鬼遊び」 千葉なつき	4年 体づくり運動 「多様な動きをつくる運動」 岩田 悟	札幌市立白楊小学校 岩田 悟	北海道学校体育研究連盟 十勝支部 更別村立更別小学校 青木 真理
3年 走・跳の運動 「幅跳び」 石村 宣人	6年 ボール運動 ゴール型 「フラッグフットボール」 山崎 稔英	札幌市立宮の森小学校 前田 潤	北海道学校体育研究連盟 函館支部 函館市立八幡小学校 酒井 光史
6年 体づくり運動 「体力を高める運動」 上木 一也	1年 器械・器具を使って の運動遊び 「マットを使った運動遊び」 石田 愉良	札幌市立福住小学校 村岡美千世	北海道学校体育研究連盟 旭川支部 旭川市立千代田小学校 塩崎 真美
6年 器械運動 「マット運動」 山本 敦史	2年 ゲーム 「ボールゲーム」 長谷部舞里	札幌市立資生館小学校 生駒 大地	北海道学校体育研究連盟 上川支部 当麻町立当麻小学校 中山 敬史
2年男女 武道 「柔道」 伊東芙美枝 (上野幌中)	3年男女 ダンス 「創作ダンス」 齊藤 研介 (光陽中)	札幌市立上野幌中学校 太田 吏	北海道学校体育研究連盟 釧路支部 釧路町立別保中学校 所 桂太郎
1年男女 体育理論 「運動やスポーツの多様性」 佐藤 光 (月寒中)	2年男女 球技 「ソフトボール」 津村 昌彦 (あやめ野中)	札幌市立月寒中学校 藤田ゆきえ 山口 肇	北海道学校体育研究連盟 渡島支部 知内町立知内中学校 加藤 晃
1年男子 器械運動 「跳び箱運動」 片山 慎司 (向陵中)	1年男女 体づくり運動 「体力を高める運動」 市川 みお (稲陵中)	札幌市立向陵中学校 大川 潤	北海道学校体育研究連盟 留萌支部 天塩町立天塩中学校 伊藤 大輔
1年 体づくり運動 工藤 直人	2年 剣道 栄花 英幸	北海道恵庭南高等学校 加藤 忠	
1年 体育理論 森田 有	2年 創作ダンス 堀川 政彦	北海道北広島高等学校 内海 久	
1年 性の指導 「大人になるための学習」 伊藤沙保里	2年 球技 「グラウンドゴルフ(室内)」 小原 要	北海道札幌市立 豊明高等養護学校 兒玉 亜来	

[illegible]

基調報告



中島公園 豊平館(札幌市 中央区)

未来へつなぐ健やかな心と体をはぐくむ体育学習の充実

～授業から日常へ，授業から未来へ～

1. 主題設置の背景

北海道の体育研究

これまでの北海道の体育研究では、『どの子ども楽しめる教材の開発・工夫』と『人との豊かなかかわりを重視した課題解決的な学習の構築』を中心に研究を進めてきた。教材の開発・工夫により，子どもにスポーツの楽しさや必要性，価値を理解させ，生涯にわたって運動・スポーツに親しむことができるようにすることを目指してきた。また，人との豊かなかかわりを重視した課題解決的な学習の構築により，自ら課題をもち，解決していく力を高めるとともに，運動・スポーツを通して仲間と教え合ったり，協力したりするなどの態度や人とかかわる力，自他の心と体を大切にする態度等をはぐくんできた。

平成2年 第29回大会

北海道では，平成2年と平成14年に全国学校体育研究大会を開催し，その時の時代背景や子どもの実態等を踏まえ，学校体育の在り方について研究を深めてきた。

平成2年に開催した第29回全国学校体育研究大会北海道大会では，研究主題「21世紀を豊かに，たくましく生きる子どもの育成を目指す学校体育の在り方を求めて」のもと，学校体育の在り方を発信した。具体的には，子どもたちが現在及び将来の生活に進んでスポーツを取り入れ，それを楽しみとし，生活を充実させたり，豊かにしたりする生涯スポーツへと発展させ，心身ともに健やかな生き方を求めていくことができるようにするための体育授業を構築してきた。成果としては，子ども自らが自分の能力に適した課題をもち，その課題に向かって自発的・自主的に工夫し，努力し，達成することができる子どもの側に立った学習指導の改善が図られたことが挙げられる。

平成14年 第41回大会

平成14年に開催した第41回全国学校体育研究大会においては，研究主題「はずむ心と体，共に高め合う体育活動」のもと，一人一人が適切な課題をもち自ら解決していく過程を軸とし，仲間と共に支え合い高め合う喜びを実感できる学習指導の在り方について主張した。具体的には，児童生徒が心と体をはぐくませ，意欲に満ちた学習活動を展開する中で，生きる力の育成にもつながる体育授業を構築した。成果としては，教材化の工夫と仲間と豊かにかかわる場を重視した課題解決的な学習を構築することで，夢中になって運動に取り組み，互いに励まし合ったり教え合ったりしながら意欲や技能を高め合う体育活動を展開できたことが挙げられる。

私たちはこれまで、北海道で開催した過去2回の全国大会の成果を踏まえ、誰もが夢中になって運動に取り組むことのできる教材の開発・工夫や課題解決的な学習の構築、個々の学びや技能の高まりを促す支援の在り方を中心に研究を進める中で、自らかかわり、高め合う体育活動を創造してきたところである。基礎的・基本的な内容を確実に身に付けることはもちろん、運動の楽しさやよさ、喜びを十分に味わう中から、自らの健康や体力、技能の向上、運動の仕方を広げていくための課題や方法を選択し、解決していく主体的な学びの獲得を目指してきた。また、主体的な学びから積極的に仲間や教師にかかわる中で、自分のよさを感じると共に他者を理解する心や思いやりの心、感動する心をもちながら、共に追求し高め合っていこうとする意欲や態度をはぐくんできたところである。

北海道の子どもの実態

平成23年度に北海道教育委員会が独自に実施した道内の児童生徒の体力・運動能力、運動習慣等調査結果の状況は以下のようになっている。

体力・運動能力の状況

〔小学校〕

- ・男子は握力と長座体前屈の2種目が、女子は握力とソフトボール投げの2種目が、22年度の全国平均を上回っているが、それ以外の種目は下回っている。体力合計点は男女とも下回っている。

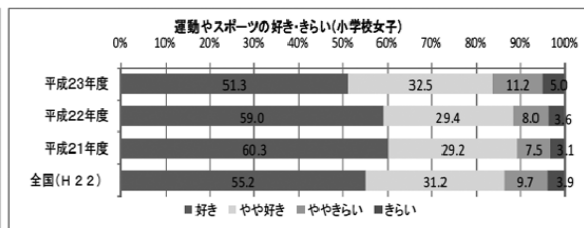
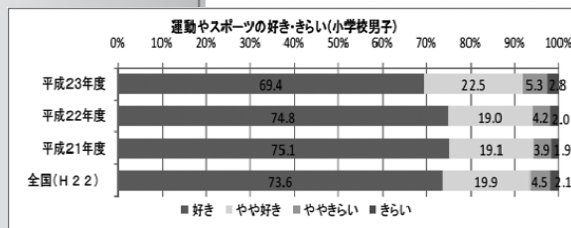
〔中学校〕

- ・男子は、握力とハンドボール投げの2種目が22年度の全国平均を上回っているが、それ以外の5種目は下回っており、合計得点も下回っている。女子は、全ての種目が全国平均を下回っている。

運動やスポーツに関する意識の状況

小学校の運動やスポーツに関する意識の状況は以下の結果となっている。

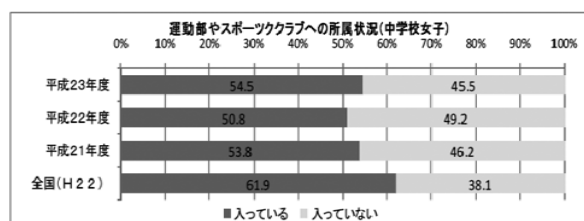
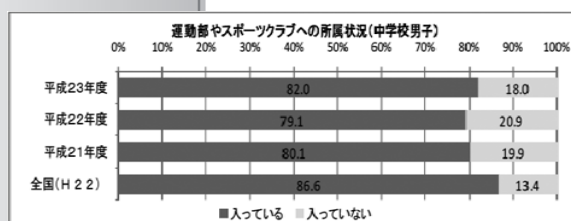
運動やスポーツをすることが「好き」または「やや好き」と回答した割合は、男子が91.9%で、22年度と同程度、女子が83.8%で、22年度と比べ若干減少した。



運動習慣の状況

中学校の運動習慣の状況は以下の結果となっている。

運動部やスポーツクラブへの所属状況は、運動部やスポーツクラブに「入っている」と回答した割合が、22年度と比べ男子で同程度、女子で若干増加した。また、22年度の全国平均と比べて、男子では若干下回り、女子では下回った。



- ・全国との
差がある体力
- ・運動やスポーツ
が好きな子の減
少



体育学習の充実



運動やスポーツが
日常へ・未来へ

北海道の子どもたちは、全国に比べ体力・運動能力が下回っている結果が示されている。また、運動やスポーツが「好き」な児童生徒が減少している傾向にあることから、全ての子どもが行う体育学習の場で、運動やスポーツがもっと好きになり、継続して取り組もうとする意欲を育てる手だてが私たち教師に求められているのである。子どもたちが仲間と楽しみながら運動に取り組み確かな力を身に付けることで、「放課後も運動しよう！少年団活動や部活動を楽しもう！次の体育の時間も楽しもう！次の校種に進んでも運動しよう！社会に出ても運動を続けよう！」とする意欲や態度を育むことができると考える。運動が日常化し、将来へと継続していくためには、学校における授業が極めて重要であり、運動することの楽しさや必要性を実感し、生涯スポーツの基礎となる知識・技能や思考力・判断力、態度が身に付くように指導内容を明確化し、発達段階に応じた授業を構想していくことが大切と考える。

学習指導要領の改訂

改訂された学習指導要領は小学校が平成23年4月から、中学校は今年の4月から、高等学校は平成25年度入学生から全面实施となる。

平成20年1月の中央教育審議会の答申において示された体育科の改善の基本方針には、小学校、中学校及び高等学校を通じて、「体育科、保健体育科については、その課題を踏まえ、生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現することを重視し改善を図る。その際、心と体をより一体としてとらえ、健全な成長を促すことが重要であることから、引き続き保健と体育を関連させて指導することとする。また、学習したことを実生活、実社会において生かすことを重視し、学校段階の接続及び発達の段階に応じて指導内容を整理し、明確に示すことで体系化を図る。」とある。また、幼稚園教育要領解説のねらい及び内容の「健康」の領域においては、十分に体を動かす気持ちよさを体験し、自ら体を動かそうとする意欲が育つようにすることが新たに示されている。これらのことは、子どもたちが生涯スポーツに向けた発達の段階に合った力を確実に身に付けていくことを求めていると捉えることができる。

- ・北海道の
体育研究
- ・北海道の
子どもの実態
- ・学習指導要領



研究主題・副主題

以上の北海道の体育研究の取組、子どもの実態、学習指導要領の趣旨を踏まえ、発達段階を考慮し、心と体をより一体とした指導及び実生活や実社会に生きる指導の充実を図ることが、生涯にわたって生き生きと運動・スポーツに親しむ子どもの育成につながると考え、研究主題『未来へつなぐ健やかな心と体をはぐくむ体育学習の充実』を設定した。また、体育学習の充実とは、全ての子どもの学びの場である授業の工夫・改善そのものであり、全ての教師の創造的な仕事であり責務であることから、研究副主題を『授業から日常へ、授業から未来へ』と設定した。

2. 研究で目指すもの

研究主題

研究主題『未来へつなぐ健やかな心と体をはぐくむ体育学習の充実』は、以下のような育てたい子どもの姿を想定したものである。

未来へつなぐとは

未来へつなぐ

- ・ 次の時間の学習でも夢中になって運動に取り組む姿
- ・ 次の校種でも意欲的に運動に取り組む姿
- ・ 次のライフステージでも主体的に運動・スポーツに親しみ続ける姿

健やかな心と体とは

健やかな心と体

- ・ 体を動かす気持ちよさを体験し、運動好きで自ら進んで体を動かそうとする姿
- ・ 運動の必要性や楽しさ、親しみ方や学び方を理解し、自らの学びを創っていく姿
- ・ 仲間と共に協力したり、教え合ったりして、課題を解決していく姿
- ・ 自他のよさを生かしながら運動に粘り強く取り組み、達成感や自信を得ていく姿

目指す
幼児児童生徒の姿

発達の段階を考慮し、心と体をより一体とした指導及び実生活や実社会に生きる指導の充実を図ることが生涯にわたって生き生きと運動・スポーツに親しむ子どもの育成につながると考え、目指す幼児児童生徒の姿を、『生涯にわたって生き生きと運動・スポーツに親しむ子ども』と設定した。

確かな体育の力

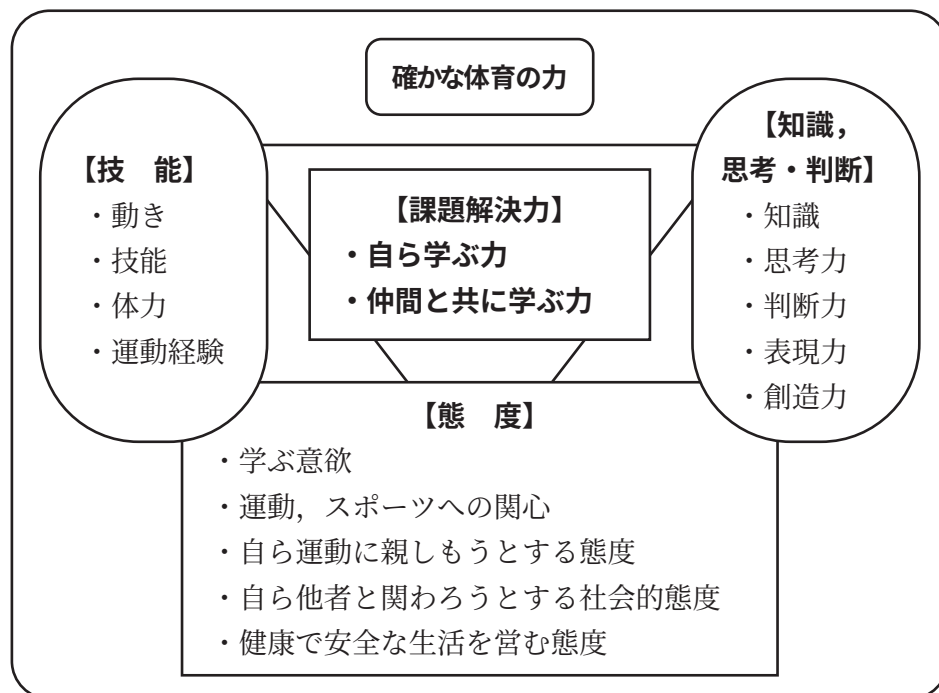
研究主題を具現化し、生涯にわたって生き生きと運動・スポーツに親しむ子どもをはぐくむためにはその基盤としての育成したい力を明確にすることが必要である。

今回の研究では、学習指導要領に指導内容として明確化された「技能」「態度」「知識、思考・判断」の3つに課題解決力を加えて確かな体育の力とおさえた。課題解決力（自ら学ぶ力、仲間と共に学ぶ力）は北海道が継続して大切にしてきた子どもにはぐくみたい力でもある。また、指導計画の作成に当たって、下枠に示す内容が小学校学習指導要領において示されていることから、課題解決力が重要であると捉えている。

—小学校学習指導要領 指導計画の作成と内容の取扱い—

地域や学校の実態を考慮するとともに、個々の児童の運動経験や技能の程度に応じた指導や児童自らが運動の課題の解決を目指す活動を行えるよう工夫すること。

確かな体育の力



今回の研究では、「技能」「態度」「知識，思考・判断」「課題解決力」の4つの力を確かな体育の力としておさえ、それらをバランスよく育てる体育学習を通して、未来へつなぐ健やかな心と体をはぐくんでいくことを目指すこととした。

研究仮説

そこで、これまでの研究成果も踏まえ、子どもの側に立って、確かな力を身に付けさせるために、次のような仮説をもって、研究を推進することにした。

研究仮説

生涯スポーツにつながる教材の開発・工夫及び、協同的，課題解決的に取り組む学習過程を構築し，指導と評価の充実を図ることで，確かな体育の力をはぐくむことができる。

確かな体育の力をはぐくむ手だて

また，確かな体育の力をはぐくむ手だてとして以下の3つの視点を設定した。

確かな体育の力をはぐくむ手だて

視点1

生涯スポーツにつながる教材の開発・工夫

視点2

協同的，課題解決的に取り組む学習過程の構築

視点3

確かな学力を保障する指導と評価の充実

視点1 生涯スポーツにつながる教材の開発・工夫

確かな体育の力をはぐくむためには、運動の楽しさや喜びを味わうことができるようにするとともに、運動やスポーツの必要性や効果、意義を理解できるようにすることが大切である。そのためには、以下の4つのポイントをもとに教材の開発・工夫をしていくことが必要であると考えた。

4つのポイント

- 身に付けさせたい動きや技能の明確化
- 子どもの実態に応じた教材の開発・工夫
- 運動との出会いや場の工夫
- 生涯スポーツへの視点

身に付けさせたい動きや技能の明確化

身に付けさせたい動きや技能の明確化については、対象となる運動にどんな魅力を感じてどんな欲求を充足していくかということを発達の段階に応じてしっかりと捉え、運動の楽しさを味わえるようにしたいと考えた。さらに、運動技術のポイントやコツを明らかにし、授業を通して獲得し、達成感を味わうことができるようにしていきたいと考えた。

子どもの実態に応じた教材の開発・工夫

子どもの実態に応じた教材の開発・工夫については、学校や学級の子どもの運動能力や運動に対する関心の実態、体育の学力の習得状況を把握し、教材の開発・工夫をすることである。

運動との出会いや場の工夫

運動との出会いや場の工夫については、「自分にもできそう」「おもしろそう」「挑戦してみよう」「必要な運動だから取り組もう」と意欲をもてるようにすることが大切である。また、今できる力で楽しむことができるように易しい運動からできそうな運動へとステップアップさせていくことで、子ども一人一人が確実に技能を身に付け、伸びを実感したり、自信をもったりすることが重要である。

生涯スポーツへの視点

生涯スポーツへの視点については、授業を通して「伸びる楽しさ・できる楽しさ・わかる楽しさ」を実感できるようにするだけではなく、運動やスポーツの必要性を理解したり、みんなで学ぶ楽しさや効果を実感させたりすることで、日常的な運動やスポーツの取組につながっていくと考えた。また、運動の特性に基づき、基礎・基本と活用・発展を捉えたり、発達の段階における育成したい力の系統性を捉えたりすることで、どの子にも着実に確かな力をはぐくんでいくことができると考えている。

以上のポイントを大切に教材の開発・工夫をしていくことで、授業から日常へ授業から未来へとつないでいけるようにしていきたいと考えた。

視点2 協同的,課題解決的に取り組む学習過程の構築

課題解決的な学習の構築とは課題把握、課題追求、課題解決の3つのステップからなる。共通の学習課題に対して、自らの興味や能力に合った課題を設定し、運動のコツを見付けたり、運動の仕方を工夫したりしながら追求する。そして、「分かったことを試してみたらできた」「みんなのおかげでできた」「勝てた」といった成就感や達成感を味わわせ、次の意欲をもたせ、自ら学ぶ態度や力を育むことをねらっている。

課題把握

まず、課題把握に向かう教材との出会いでは、「自分にもできそう」「おもしろそう」「挑戦してみよう」など、子どもの心を動かすように単元の導入を工夫することが大切である。次に、どの子にも身に付けさせたい力を獲得させるために既習経験や生活経験を生かして解決できる共通の学習課題を設定したうえで、子どもが「自分は〇〇はできるから」「自分は〇〇はできそうだから」「自分は〇〇に挑戦してみたいから」などと、自分の能力や興味に応じて課題を選択したり、決定したりする場を設定することが必要である。

課題追求

課題追求の場では、動きを通して自分なりに動きのコツや作戦を考えたり場やルール、行い方を工夫したりできるよう思考・判断の手助けをする場や活動を設定し、根拠をもって解決に向かえるようにしている。また、仲間とのかかわりを生かした追求となるように仲良くしたり、力を合わせて行ったり、仲間と動きを見合ったり教え合ったりして、コツを見付けることができるような運動や場を設定していくことを大切にしている。

課題解決

課題解決の場では、全体やグループで、言語活動の場でもある交流場面を設定し課題を解決できるようにする。獲得した知識を基に動きを通しての解決となるように、具体的な場や活動を設定する。そして、自己評価や他者評価、教師による評価によって「コツは有効だった」「みんなのおかげでできた」などと、喜びや達成感を味わわせたいと考える。

協同的な学び

体育学習では、仲間と生き生きと夢中になって運動に取り組んだり、知識や技能を追求し合ったりする中で、思考力やコミュニケーション能力を育成していきたいと考えている。また、主体的な学びを通して、自ら進んで仲間や教師にかかわり、互いのよさや存在感・有用感を捉え、他者を理解する心や思いやりの心、感動する心も育んでいきたい。さらに、目標を共有し、共に高め、追求し、尊重し合っていこうとする意欲や態度を育んでいくことも目指していきたいと考えている。体育学習は、学校でしか実現できない協同的な学びの場であり、その中で豊かな人間性を身に付けていくことができる大切な場である。

視点3 確かな学力を保障する指導と評価の充実

身に付けさせたい力を明確にし、指導方法を工夫した後は、適切な評価によって、個々への指導を行い確かな学力を身に付けさせていくことが重要である。

評価基準と
評価方法

評価については、国立教育政策研究所の「評価基準の作成のための参考資料」を基に内容のまとまりごとの評価基準、単元の評価基準、本時の学習活動に即した評価基準を設定した。身に付けさせたい力を明確にし、評価基準を絞り込み、1時間に評価する内容は1、2個に絞り、右図のように指導案に位置けることとした。

評価方法は、行動観察、発言、発表、学習カード、ネームプレート、VTR撮影など、事前に評価方法を定め、的確に見取れるようにした。見取りを記録化することで次の指導に生かすようにした。

私たちは、見取ることだけに集中するのではなく、幼児児童生徒に、運動したいという気持ちを高めていくことが重要である。そのために、伸びやできばえへの積極的な称賛行動を取ることが必要である。具体的な成果を称賛することで、その子の取組をしっかりと価値付けることになり、「自分は〇〇なことができています。このまま続けよう」と追求を継続させることになる。また、「〇〇さんの方法はよい方法だからまねしてみよう」等と促すことで、他者の学びに対するヒントにもなる。

評価

【スキー】

技能

長い斜面や変化のある斜面をリズムやスピードを調整しながら安定した動作で滑ることができる。

〈評価方法〉

斜面状況に応じて滑る様子やリズムやスピードを調整する様子から見取る。

【手だて】



○教師や友達の後を滑ることでスピードやリズムを調整できるようにする。

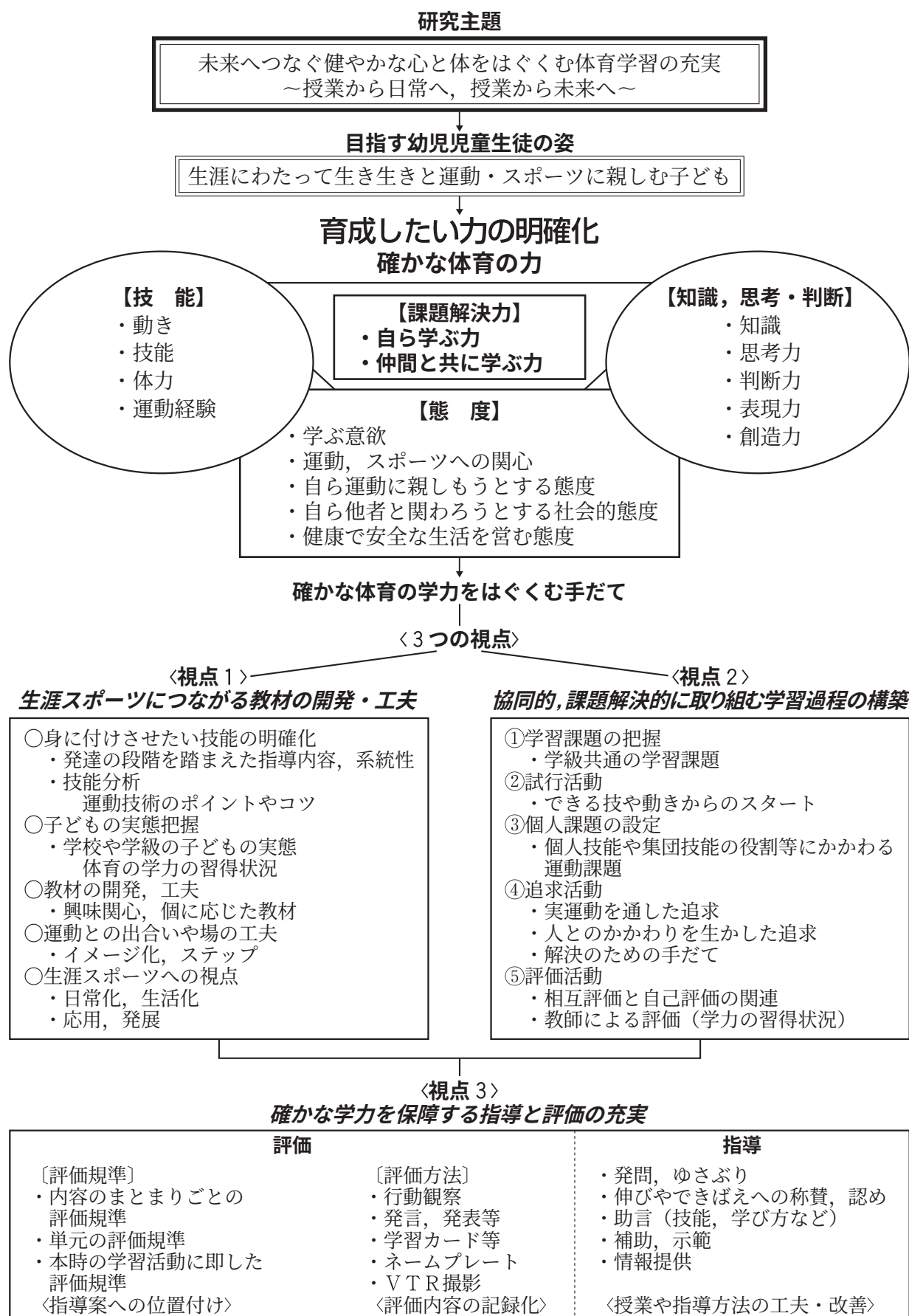
指導の手だて

指導案に位置付けた観点の目標を達成できるようにするために次のような【手だて】をもって指導にあたることとした。

手だて

- 思考・判断を促す発問、ゆさぶり
- 伸びやできばえへの称賛、認め
- 技能、態度を高める運動のコツや学び方の助言
- 技能、思考・判断を高める補助や示範
- 技能、思考・判断を高める活動の場や情報の提供

3. 研究の全体構造図



今までの北海道の体育研究，平成2年と平成14年に開催した全国学校体育研究大会北海道大会，全国各地における全国学校体育研究大会の成果を踏まえ，私たちは，今大会におけるキャッチフレーズを以下のように設定して，北海道から体育学習の在り方を全国に提案したいと考えた。

北海D o ! Plus One

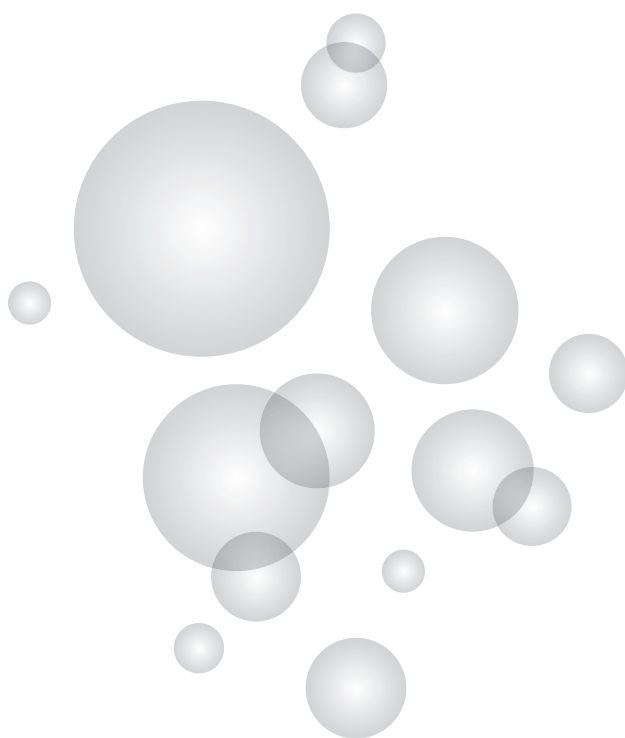
- 北海道らしさを表現している。
- 「Do」が体育道や教師道の「道」を表し，プロの体育教師としての在り方の主張になる。
- 北海道の子どもたちに発達段階に合った力を身に付けさせる「道」をつくることで未来へ意欲という糧をつないでいくことができるようにする。
- 「Do」が「動」を表し，心と体の「動き」の高まりを表現している。

- 他都府県の研究実践にプラス・ワン
- 過去2回の全国大会・北海道大会の成果にプラス・ワン
- 課題解決型の学習をベースにした研究にプラス・ワン
- 今，一人一人の教師ができる実践にプラス・ワン

このキャッチフレーズには，常に新しいものに取り組もうという私たち北海道の体育研究人の心意気が込められている。

今後も，心と体をより一体とした指導及び実生活や実社会に生きる指導の充実を図ることが生涯にわたって生き生きと運動・スポーツに親しむ子どもの育成につながると考え，『未来へつなぐ健やかな心と体をはぐくむ体育学習の充実』を図っていきたい。

公開演技



平岡公園 梅園(札幌市 清田区)



北海道恵庭南高等学校

男子新体操部

部 活 DATA

○部 員 数 22 名

	3 年	2 年	1 年
選 手	6 名	6 名	5 名
マネージャー	2 名	1 名	2 名

○主な成績

13年連続インターハイ出場！

2005年インターハイ 第2位

2006年全国高校選抜 第3位

男 子新体操を知っていますか？新体操といえば、レオタード姿で足を高く上げながらリボンを回したり踊ったりする、女子新体操をイメージする人の方が多いのではないのでしょうか。同じ新体操でも、男子新体操は少し違います。1 番の違いは、女子では禁止されているアクロバット技（バック転、バック宙など）があることです。迫力のある音楽に合わせて、リズムカルなダンス、美しいバランス技や倒立、ダイナミックなアクロバット技を6人で行う団体の演技は、一度見たら忘れられなくなります。男子新体操は日本で生まれたスポーツで、競技人口は日本全国で1000名ほどですが、TBSドラマ「タンブリング」やカルピスソーダのCMで取り上げられ、少しずつポピュラーになってきています。平成19年には所さんの「笑ってコラえて」男子新体操のコーナーで、恵庭南高校が長期にわたって放送され、ご覧になった方も多いと思います。



恵庭南オリジナル技(レインボー交差)の連続写真



恵 庭南高校新体操部は創部21年の伝統ある部です。今年で13年連続でインターハイに出場しており、全国屈指の強豪校として知られています。しかし、高校から新体操を始めたという部員も多くいます。入学した頃は、倒立やバック転が全くできなくても、3年生になって全国大会のレギュラーメンバーとして活躍した、というOBが多数います。新体操未経験者であっても、やる気さえあれば全国のアスリートに必ずなれます。恵庭南高校で一緒に夢を描きませんか？



顧問 紹介 顧問 工 藤 直 人 (教科：保健体育)
青森県出身－国士舘大学体育学部卒業

私が北海道に来て28年、恵庭南高校に赴任して13年になります。28年前、大学を卒業し北海道にやって来た私には心に決めた目標がありました。

「新体操の指導者を育てたい。そして、その指導者が育てた選手が全国大会で優勝する…」



現在、中学校で体育教員をしている教え子がありますが、昨年の全国大会でその教え子が指導するチームが準優勝しました。想い描いていた夢が叶いつつあります。頂点に登りつめる日まで、まだまだ私の夢は続きます。

副顧問 大 澤 裕 史 (教科：数学)
北海道出身－北海道大学理学部数学科卒業

平岸天神

Speed/Sharp/Strong/Smile の4 Sが平岸天神のモットー

今から20年前、郷土として平岸の歴史と開墾の精神を次世代の若者に“伝えていきたい、何か残していきたい”との思いから、郷土芸能として『平岸天神太鼓保存会』が発足いたしました。その5年後、平成4年に平岸天神太鼓のメンバーが地元有志とともに、平岸中央商店街のバックアップの下『もう一つの平岸の郷土芸能』をめざし、『平岸天神ソーラン踊り保存会』を発足させました。

創設時より平岸天神のモットーは、4 S「speed スピード」「sharp 切れの良さ」「strong 力強さ」「smile 笑顔」です。『平岸天神ソーラン踊り保存会』の踊りは、この4 Sを基盤とし、北海道の労働歌である「ソーラン節」に込められた、労働の苦しみ・大漁への願い・支える浜の女の愛・そして大漁の喜びを躍りで表現し、開拓のフロンティア精神そのままに、5分間の演舞をメンバーとスタッフが自ら作り上げています。

踊りと曲は、毎年「YOSAKOI ソーラン祭り」の6月には新しいものが出来あがりますが、作品は決して使い捨てではなく、メンバーが過去の楽曲も踊れるよう通年にわたって練習を反復し、披露しています。また、小・中学生にて構成される『平岸天神ジュニアチーム』は、平岸天神のメンバーより受け継がれ、過去の曲を毎年「YOSAKOI ソーラン祭り」で踊っています。

メンバーが過去の作品を常に踊れるようにすること、ジュニアの子供達が過去の舞曲を覚え、そして成長し新たなメンバーとして加わること、それが地域文化継承としての保存会活動であり、郷土芸能として全国に、全世界に発信できることでもあります。

これまで、「YOSAKOI ソーラン祭り」では大賞8回、準大賞7回、(参加チーム中、最多受賞)高知「第一回よさこい祭り全国大会」では「粋」受賞いたしました。

結成10年目の平成14年には、北海道厚生年金会館にて『平岸天神太鼓保存会』と「合同記念公演」を開催、平成19年には第3回目となる15周年の記念講演を開催し、4000人を超える多数の観客の方々が会場を埋めつくし、大きな節目を盛大に迎えることができました。

平成20年7月には、洞爺湖で開催された『先進国首脳会議(G8サミット)』の歓迎レセプションにて踊りを披露し、各国大統領、首相の方々から拍手喝采を受け、名誉ある国賓行事に参加することが出来ました。

郷土芸能としての「ソーラン節の真髄」「開拓精神の真髄」を忘れずに『さらなる感動を全ての人に!』を合い言葉にたゆまぬ努力を重ね、新たな感動と熱気を全国・全世界へと発信し続けます。



解 説



大通公園 ライラック祭り(札幌市 中央区)

解説

「効果的・効率的な評価の在り方」

文部科学省スポーツ・青少年局体育参事官付教科調査官

石川泰成

[illegible]

[illegible]

シンポジウム



羊ヶ丘展望台 クラーク像(札幌市 豊平区)



テーマ

「指導と評価の一体化を 目指した授業づくり」

コーディネーター 筑波大学

教授 岡 出 美 則

●略 歴

- 昭和55年 3 月 奈良教育大学教育学部小学校教員養成課程卒業
- 昭和57年 3 月 筑波大学大学院修士課程体育研究科体育方法学専攻修了
- 昭和57年 4 月 奈良県北葛城郡香芝町立下田小学校教諭
- 昭和58年10月 愛知教育大学助手教育学部
- 昭和64年 1 月 愛知教育大学助教授教育学部
- 平成 9 年 8 月 筑波大学講師体育科学系
- 平成11年 4 月 筑波大学助教授体育科学系
- 平成18年 4 月 国立大学法人筑波大学大学院人間総合科学研究科准教授
- 平成20年12月 国立大学法人筑波大学大学院人間総合科学研究科教授
- 平成23年10月 国立大学法人筑波大学体育系教授

●主な著書・研究業績・委員等

- 平成22年 岡出美則：体育の基本的性格. 高橋健夫、岡出美則、友添秀則、岩田靖(編)
新版体育科教育学入門. 大修館書店：東京. pp.10-17
- 平成23年 岡出美則：体育理論を理解するために 中学校第2単元、高等学校第2単元.
佐藤豊・友添秀則(編著) 楽しい体育理論の授業をつくろう. 大修館書店.
pp.38-49, pp.86-97, p.115, pp.117-120
- 平成23年 Yoshinori Okade: Making Standard for Ball Games in Physical Education
(PE). Kruger, M. and Neuber, N. (Hrsg.) Bildung im Sport. VS Verlag.
pp. 187-199
- 平成23年 岡出美則：体育のカリキュラムモデルとカリキュラム評価. 日本体育科教育学会(編)
体育科教育学の現在. 創文企画：東京. pp.57-71
- 平成24年 Myrian Nunomura, Yoshinori Okade and Paulo Carrara: How much artistic
gymnastics coach know about their gymnasts' motivation. Science of Gymnastic
Journal. 4(2):27-37
- 平成24年 鬼澤 陽子, 小松崎 敏, 吉永 武史, 岡出 美則, 高橋 健夫; バスケットボール
3対2アウトナンバーゲームにおいて学習した状況判断力の3対3イーブ
ンナンバーゲームへの適用可能性: 小学校高学年を対象とした体育授業に
おけるゲームパフォーマンスの分析を通して. 体育学研究. 57(1):59-69



提言テーマ

「指導と評価の一体化を目指した 体育授業づくりの前提条件」

シンポジスト 信州大学 教授 岩田 靖

□略歴

昭和61年 3月 筑波大学大学院体育研究科
修了
昭和61年 4月 筑波大学文部技官
平成元年 5月 宮崎大学教育学部助手
平成2年 4月 宮崎大学教育学部講師
平成5年12月 宮崎大学教育学部助教授
平成11年 4月 信州大学教育学部助教授
平成19年10月 信州大学教育学部教授
博士（体育科学）

□主な著書・研究業績・委員等

新版・体育科教育学入門，共編著，大修館書店（2010）
体育科教育学の現在，共著，創文企画（2011）
体育の教材を創る，単著，大修館書店（2012）
学校体育実技指導資料第8集・ゲーム及びボール運動，
作成協力者，文部科学省・東洋館出版（2010）
子どもの体力向上指導者養成研修講師（2010，2011）
体育・保健体育デジタル教材作成協力者（2012）
日本体育学会代議員（2009－）
日本スポーツ教育学会理事（1996－）
日本体育科教育学会理事（2007－）

□発表要旨

「指導と評価の一体化」とは、「指導したこと」との対応の中で、「評価」を考えることであり，また，その「評価」から得られた情報を次の授業改善に活用していくべきことを意味していよう。このことからすれば，評価の観点になることがらが，指導の目標・内容として形式的に掲げられるだけでなく，実際の授業の中にまさに立ち現れ，その成果が確認できる対象として位置づけられることがこの課題解決の大前提であろう。その意味で，「技能」（技能的領域）・「態度」（社会的行動領域）・「知識，思考・判断」（認知的領域）の学習が単元の授業展開の中で密接に結びつく授業づくりを目指すことこそが，指導と評価の一体化を裏打ちするものとなろう。換言すれば，「できる・かかわる・わかる」ことが子どもたちの学習活動において必然化していく授業づくりが求められているのであり，それに向けての教師の授業の構想力，イマジネーションが問われているのだと言ってもよい。そのことが，「知識，思考・判断」の評価を考える土台となろう。

「できる・かかわる・わかる」ことが結びついていく授業づくりを探究することにおいて重要になるのは，学習対象となる運動の本質的な課題性を解釈し，それに向けた学習プロセスを子どもたちに提供していくことである。そのためには特に，運動技能に関わった課題性を核とした学習内容を抽出・設定していくことが不可欠であろう。なぜなら，運動の技能的達成（できる）を目指した学習活動においてこそ，「わかる」こと，「かかわる」こととの関係性が濃厚に生まれてくるからである。「できる」ことに向かって「わかる」ことが，また「わかる」ことを通して「かかわる」ことが重要になるからである。

さらに，このような授業づくりを念頭に置いた場合，今日的な大きな課題は，子どもたちが運動についてわかるようになり，できるようになるために，何をこそ「わかち伝える」必要があるのか，また，「わかち伝える」ことができるのかといった具体的な「学習内容－教材」に関するさらなる探究が授業実践者である教師に，そして研究者に求められていると考えられる。

シンポジウムでは，教員養成大学における体育の指導法に関わった授業科目の中で取り上げている，授業づくりと評価の関係を見通した思考についての具体的事例をもとに，私に与えられたテーマに迫ってみたいと考えている。



提言テーマ

『球技における「思考・判断」の指導と 評価の一体化について』

シンポジスト 東京都立駒場高等学校 主任教諭 須 黒 祥 子

□略歴

平成5年 日本体育大学体育学部健康学科卒業
平成20年 早稲田大学スポーツ科学研究科
学校体育マネジメントコース卒業
平成6年 東京都立九段高等学校 非常勤講師
平成10年 東京都立江東商業高等学校 教諭
平成14年 東京都立つばさ総合高等学校 教諭
平成21年 東京都立駒場高等学校 教諭

□主な著書・研究業績・委員等

平成23年度
「評価基準、評価方法の工夫改善に関する調査研究」
協力者

□発表要旨

「球技における「知識、思考・判断」についての指導と評価の一体化」

「球技」は生徒に大変人気のある領域であると感じています。今回のロンドンオリンピックによる、サッカーやバレーボール（女子）日本代表の活躍などにより、世間での注目度もより一層高まってきているように思います。

生徒たちにとっても、このように運動をするだけでなく観る機会も多いので、興味や関心も高いと思われます。しかし、授業に関して言えば、生徒たちの多くは単にバスケットボールやバレーボールのゲームをしているだけでも、楽しかったと答えることが予想されますが、実際には「技能」についての指導や、ゲームを実施することが多くなっているのではないのでしょうか。

高校の球技の授業を例に、個人のスポーツに取り組む際の課題、設定の仕方、自己や仲間、チームの課題に応じた練習計画の立て方や作戦の立て方などの運動を継続するための取り組み方を工夫することができるようにする等の思考・判断にかかわる内容の指導に際して、現在、どのような課題を感じ、その解決に向け、どのようなアイデア、試みをしているのか。といった点を紹介したいと思います。



提言テーマ

「生徒の思考・判断を促す指導方法の工夫」 ～知識、思考・判断の評価を通して～

シンポジスト 佐賀県立香楠中学校 教諭 高 木 健

□略歴

平成3年 早稲田大学人間科学部卒業
平成5年 鳥栖市立鳥栖西中学校 教諭
平成11年 基山町立基山中学校 教諭
平成17年 佐賀県教育庁体育保健課 指導主事
平成18年 文部科学省スポーツ・青少年局
企画・体育課学校体育振興係 研修生
平成19年 佐賀県教育庁体育保健課 指導主事
平成20年 佐賀県立香楠中学校 教諭

○主な著書・研究業績・委員等

〈国立教育政策研究所〉
評価規準、評価方法等の工夫改善に関する調査研究協力者（平成22年）
〈独立行政法人教員研修センター〉
子どもの体力向上指導者養成研修講師（平成20・21・22年）
「楽しい体育理論の授業をつくろう」大修館書店（授業実践者）
「中学校新学習指導要領の展開」明治図書（共著）

□発表要旨

「指導と評価の一体化」については、すでに多くの研究が行われており、全国の先生方の研究は参考になるものばかりである。しかしながら、自分の授業実践を振り返って見ると、どうしても「技能」の指導に重点を置いてしまっている。単元の構図作成についても、「技能」の学習内容の選択及び配列、指導方法に十分時間をかけているが、他の3観点とはいうと、「技能」ほど力が入っていないのが現状である。そこで、今回「技能」以外の観点、中でも「思考・判断」における「指導と評価の一体化」について提案ができればと思っている。

「思考・判断」を取り上げたいと考えたのは、保健体育の授業を通して、生徒に「考える力」をつけさせたいと思ったからである。学習指導要領の教科の目標中に、「明るく豊かな生活を営む態度を育てる」とある。さらに、この部分について、学習指導要領解説には、「現在及び将来の生活を健康で活力に満ちた明るく豊かなものにするという教科の究極の目標を示している」とある。義務教育終了の段階までに、現在及び将来にわたって、健康で安全な生活を営むための思考力・判断力などの資質を身につけさせることで、この究極の目標に実現に迫れるのではないかと考え、「思考・判断」を取り上げてみることにした。

次に、どの領域を取り上げるかということについては、次のような考えで「体づくり運動」を取り上げることとした。

生徒が学校を卒業して運動を継続しようと考えた場合、保健体育の学習の中でも、「体づくり運動」の学習内容が基礎となる。特に、「体力を高めるための運動」で学んだ運動の行い方や運動の計画の行い方を活用することで、その時々のライフステージに応じて適切な運動を選択し、効果的に実行していくことが可能となる。したがって、義務教育終了までの段階で「運動に親しむ」ことや「運動の行い方」「運動の計画の立て方」を身につけておくことがとても重要となる。そこで、生徒一人ひとりが、これらのことを正しく身につけ、運動を実生活の中に取り入れることのできるような指導と評価の在り方について提案ができればと思い、「体づくり運動」を取り上げることとした。

実践事例としては、本年度担当している中学校3年生の指導例をもとに提案したいと考えている。

指導の流れは、①「1・2年次の学習内容の確認」②「知識の確認」③「思考・判断で活用する情報の整理」④「自己のねらいの設定」(コースの選択)・健康に生活するための体力向上のコース・運動を行うための体力向上のコース⑤「1週間の運動プログラムの計画立案」⑥「実践を踏まえた修正」として行い、国立教育政策研究所から出されている、「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」の実践事例を参考とした。

この取り組みから見てきた成果と課題は、成果については、自己の生活や運動経験をもとに運動の計画を立てることが必要であるということを生徒は理解できた。

課題については、生徒が行う思考・判断について、教師の評価が適切かどうかについて、一人の教師だけでは判断しづらいというところである。評価規準に「体力に応じて」という文言が入っている場合、その生徒が自分の体力に応じて頻度や強度、回数、あるいは運動を選んでいるかについて、どのように見取り、評価すればよいかが、なかなかしっくりいかなかった。例えば、ノート記述を評価する場合、どのような内容があれば「おおむね満足」と判断するかについては、随分と頭を悩ませた点である。このことについては、提案というよりは、よりよい方法がないか全国の先生方の力をお借りしたい点である。

最後に、取り組みを通して「体づくり運動」で学習する思考・判断の内容は、現在及び将来の生活を健康に送る上でとても重要であることを改めて認識することができた。

ただ、その指導は簡単なものではなく、他の先生方とも情報交換を行い、よりよい指導の在り方を追求し続けていきたいと思う。

そして、生徒の思考を刺激しつつ、望ましい判断力を養い、中学校を卒業した後も、「運動を続けよう」という生徒を一人でも多く育てていきたい。



提言テーマ

「指導と評価の一体化を目指した授業づくり」 ～小学校 思考・判断をどのように評価するか～

シンポジスト 札幌市教育委員会 指導主事 三戸部 文彦

□略歴

平成4年 北海道教育大学札幌分校卒業
平成4年 札幌市立西白石小学校 教諭
平成8年 札幌市立幌西小学校 教諭
平成13年 札幌市立緑丘小学校 教諭
平成16年 札幌市立真駒内小学校 教諭
平成21年 札幌市立白楊小学校 教諭
平成24年 札幌市教育委員会 指導主事

□主な著書・研究実績・委員等

札幌市小学校教育課程編成の手引作成委員
(平成22年・20年・16年)
札幌市子どもの体力向上支援委員(平成21年)

□発表要旨

①小学校において育てたい『思考・判断』の力とは？

- ・ ロンドン五輪における選手のコメントの変化…「話す」アスリート
運動、戦術分析、周囲への感謝などのコメントから見えること
- ・ 評価観をもつ
とらえて(評価)、かかわり(具体的な指導)、見取る(評価)～評価から指導へ
- ・ 学習指導要領の目標から
評価のための授業ではなく、育てたい『思考・判断』の力を明確にし、一人一人が身に付けていく授業を展開する。
「気付く」「選ぶ」「見付ける」「工夫する」という子どもの姿を生み出す。

②授業場面での指導と評価

- ・ 『思考・判断』する内容の重点化及び評価方法の効率化
- ・ 『思考・判断』する場面の設定
- ・ 評価を生かす～①個々へ返す ②授業改善へつなぐ
- ・ チェックのみに終わらずに、今の学習状況を見極め具体的な指導に生かす手だてへ
- ・ 授業の具体から

③学校全体、市全体に広める取組

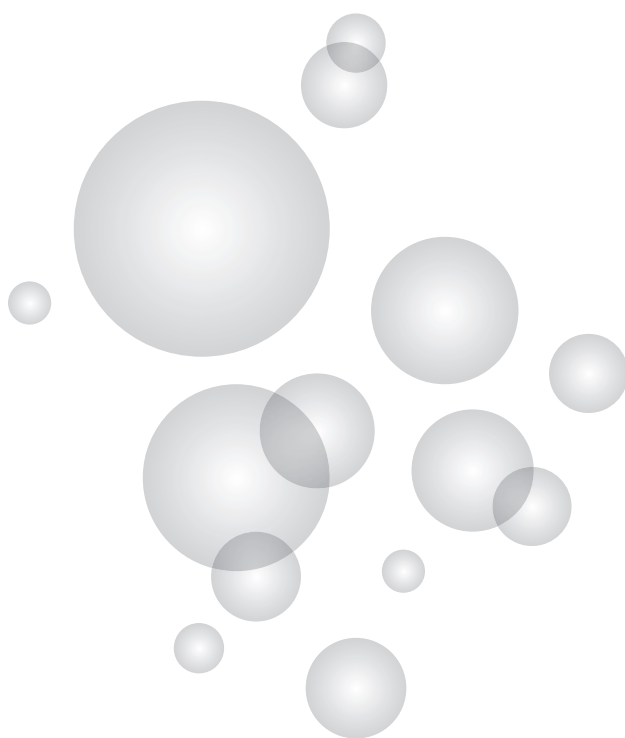
- ・ 小学校全教員の9割に当たる体育専門外の先生方へ伝える取組
- ・ 札幌市教育委員会
「教育課程編成の手引」 ～イラストも入れながら評価だけでなく、指導の手だてについて、わかりやすく示す。
「子どもの体力向上リーフレット」：いい汗かこう さっぼろっこ(全家庭へ配付)
～運動の楽しさや日常化を啓発する。
「札幌市教育研究推進事業」～市内10区毎の授業公開、研究交流、研修会など。
- ・ 北海道学校体育研究連盟の取組
「実技研修会」～体育連盟会員以外の教職員対象

④結びに

- ・ 目指すのは、「授業から日常へ、授業から未来へ」
- ・ 体力調査結果下位の北海道～その中での授業の在り方
- ・ 学校としてできること、北国としてできること

[illegible]

特別講演



北海道庁旧本庁舎 赤レンガ(札幌市 中央区)



演 題 『武道と人づくり』

東海大学理事・副学長

NPO法人柔道教育ソリダリティー理事長

山 下 泰 裕

1957年6月1日、熊本県上益城郡矢部町生まれ（現・山都町）。浜町小4年から祖父・鯛蔵さん（故人）の勧めもあり柔道を始める。熊本市立藤園中・九州学院高・東海大相模高（転校）を経て76年、東海大体育学部入学。東海大柔道部の根幹をつくった佐藤宣践監督から薫陶を受けた。77年、史上最年少で全日本選手権優勝。80年に東海大を卒業、大学院に進み83年3月、体育学研究科修士課程終了。4月から東海大教員になり、教授を経て09年4月から体育学部長。80年モスクワ五輪は日本政府がボイコットを主導、JOC（日本オリンピック委員会）も従ったために“幻のモスクワ代表”と言われた。84年ロサンゼルス五輪無差別で待望の金メダル獲得。右足に重傷を負いながらも、決勝でラシュワン（エジプト）に一本勝ちした姿に多くの国民が感動の拍手を送った。同年10月、国民栄誉賞受賞。85年6月、全日本選手権9連覇、203連勝の大記録を残して現役引退。88年から全日本男子強化コーチ、92年10月にはヘッドコーチとなり96年アトランタ、00年シドニー五輪の指揮を執った。4回の世界選手権でも采配を振るい実績を挙げている。柔道ルネッサンス委員会委員長。03年9月にIJF（国際柔道連盟）教育コーチング理事に就任し、柔道の世界的発展に寄与した。07年9月にIJF役員から退いた。06年には認定NPO法人「柔道教育ソリダリティー」を設立し、柔道を通じて海外との異文化交流、相互理解、開発途上国に対する柔道衣などの援助などを行っている。ロシアのプーチン大統領との交流が深い。主な優勝記録は77～85年まで全日本選手権9連覇。世界選手権は79年パリ、81年マーストリヒト、83年モスクワで95kg 超級。81年は無差別との2冠。この他、75、76年全日本ジュニア、76年世界ジュニア。78年世界学生、77～80年、82、83年全日本選抜体重別、82年嘉納杯国際など。著書は『武士道とともに生きる』『プーチンと柔道の心』『指導者の器』『背負い続ける力』など多数。講道館柔道8段。

現在は、東海大学理事・副学長・体育学部長であり、NPO法人柔道教育ソリダリティー理事長、またフェアプレーの精神を掲げ、いじめ撲滅運動を神奈川から発信している神奈川県体育協会会長。全日本柔道連盟理事として幅広く活動中。

山下泰裕公式ホームページ

<http://www.yamashitayasuhiro.com/>

NPO法人柔道教育ソリダリティーホームページ

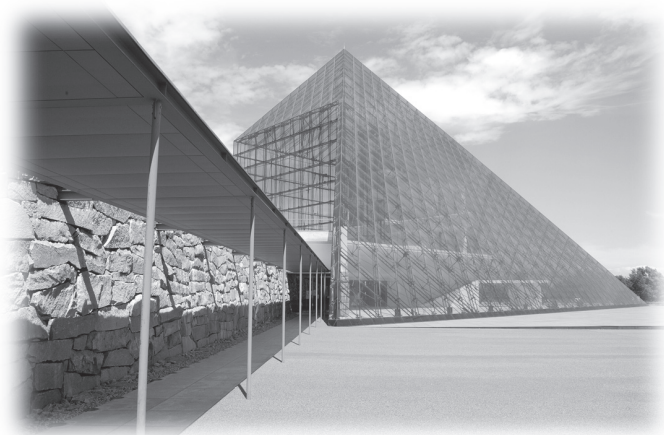
<http://www.npo-jks.jp/index.html>

[illegible]

幼稚園部会

第1分科会

札幌市立白楊幼稚園



モエレ沼公園 ガラスのピラミッド(札幌市 東区)

【研究主題】

遊びを中心とした生活の中で
幼児期にはぐくみたい力とは
～たくましい心と体を育てるために～

【日 程】

9:30		10:45		11:20		13:00		14:35		15:00	
9:10		10:30		11:00		12:00		13:10		14:55	
受 付	第 一 次 公 開 保 育	公 開 交 流 活 動	休 憩	第 二 次 公 開 保 育	V T R 視 聽	昼	休	開 會 行 事	研 究 發 表 ・ 協 議	指 導 講 評	閉 會 行 事
						食	憩				

【会場案内】



札幌市立白楊幼稚園



所在地	札幌市北区北24条西7丁目1-10
電話	(011) 736-0764
園長	綿屋 圭子
園児数	90名

◎教育目標

- ・よく遊ぶ子ども
- ・ねばり強い子ども
- ・よく考える子ども

◎特色

- ・ 本園は札幌市の公立幼稚園としては比較的歴史があり、旧園舎は隣接する白楊小学校を活用して開設した。札幌のほぼ中央に位置し、園周辺に小学校、警察署、消防署、区役所などの公共施設が多い。地下鉄駅を中心に商店街が密集している街中ではあるが、園庭には実のなる木が多く、緑も豊かである。また、園外に一步出ると、歩いて行ける大きな公園が点在し、北海道大学の構内など草花に触れられる場所があるなど、環境には恵まれている。
- ・ 隣接する白楊小学校の校庭へ『仲良しドア』で行き来ができ、小学生と日常的に触れ合える。また、5年生と年長児との交流も始まり、遊びの刺激や関わりの楽しさを感じている。また、小学校の校庭やビオトープは幼児にとって魅力的であり、小学校を身近に感じられる環境である。
- ・ 保護者は、園の教育活動に関心が高く熱心である。

授業者の紹介

第1分科会 公開保育

札幌市立白楊幼稚園

3歳児ひよこ組(年少)

副担任:今つち子 主任:渋谷かおり



担任:青柳貴子

副担任:川口いずみ

4歳児うさぎ組(年中)

副担任:本間真純 副担任:和田尚美



副担任:木村亜矢子

担任:上月暁子

5歳児りす組(年長)



担任:橋本由貴

副担任:太田縁

副担任:村上由規乃

～幼児の発達や学びの連続性を
ぜひご覧ください～

3歳児みどころアピール:自分でやりたい遊びを見つけ、教師や友達と一緒に走ったり、踊ったりすることが楽しくなってきた年少組。小さくてかわいらしいですが、できることは自分でしょうとするたくましさも見られるようになってきています。「おもしろい!」と感じたことは何度も繰り返すという3歳児の発達特性を生かし、幼児が夢中になって遊ぶ中で、体を動かす楽しさや心地よさが感じられるように、意識しながら保育しています。

4歳児みどころアピール:明るく元気な年中組の幼児は、じっくりとごっこ遊びを楽しむことも、体を動かすことも大好きです。特に体を動かす遊びでは、心が弾むような踊りや友達と一緒に遊ぶことが楽しくなるような集団遊び、穴を掘ったり、工事現場に見立てたりして筋肉がもりもりつく砂遊びなどなど、それぞれの教師の持ち味を生かして日々保育しています!当日も心と体を動かしながら「もっとやってみよう!」「友達と一緒に楽しい!」と幼児が感じられるような環境構成や援助を心掛けたいと思います。

5歳児みどころアピール:「とにかく、体を動かすことが大好き!」という幼児が多い年長組では、教師の体力が追い付かない場面もちらほら……。教師の体力低下も実感している今日この頃ですが、しっかり体づくりをし、当日は、様々な遊びの場面の中で、『友達と一緒にやってみよう』という経験から『学び合う』ということにつながっている姿、幼児が主体的に遊びに取り組む中で体を動かす楽しさ・心地よさを味わっている姿を見ていただければと思っています。また、教師の環境構成や援助の工夫についても、率直なご意見を聞かせていただきたいです。

研究主題

遊びを中心とした生活の中で 幼児期にはぐくみたい力とは

～たくましい心と体を育てるために～

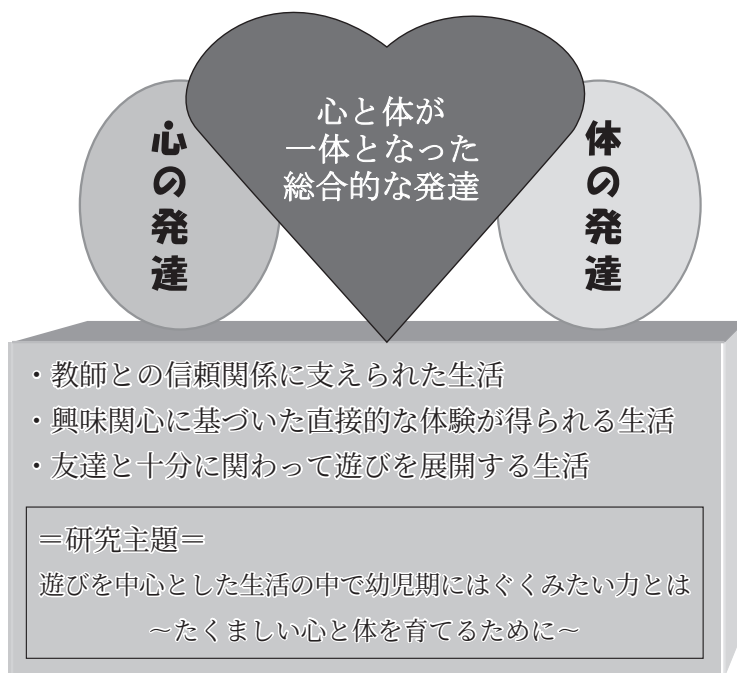
札幌市立白楊幼稚園

1 研究の概要

(1) 研究主題設定の理由

ア 本園の研究経過から

幼児の発達には、心と体が相互に関連し合いながら、多様で豊かな体験を通して総合的に成し遂げられていくものである。そのため、たくましい心と体を育てるためには、幼児の「楽しいから取り組む」「面白いから集中する、繰り返す」という特性を生かし、主体性を発揮しながら取り組む「遊び（直接的な体験）」を通して、教師や友達と関わりながら、心と体を存分に動かす経験を積み重ねることが大切であると考えます。



昨年度の研究では、3歳児は「安心感」、4歳児は「自己発揮・共感」、5歳児は「自信・認め合い」など、それぞれの時期に育てたい心情面が明確となり、その基盤としては、「自己肯定感」をしっかりと育むことが大切であることが分かった。また、幼児期に身に付けておきたい様々な体の動きは、特定のスポーツに特化することで身に付くものではなく、「日常の遊び」の中にこそたくさん含まれているということが事例を通して確認された。それらのことから、幼児期にたくましい心と体を育てていくためには、幼児期から小学校以降へとつながる発達の過程を見通し、「今の時期に、この遊びで、こんな力を育てたい」という教師の強い願いと、「楽しいから、面白いから、やってみたい!」「先生や友達と一緒にだから、もっとやりたい!」という幼児の思いを基に、3、4、5歳児の発達の特性に合った援助や環境の構成を的確に行い、発達に必要な経験を積み重ねられるようにしていくことが大切である。またその際、鍵となるのは、この時期に経験させたいことの見極め、実態把握などの、教師の「幼児の育ちを見取る目」、活動の場面に応じた適切な指導や援助などの「幼児を育てる力」であり、それらを高めていくことが重要であることを再確認した。

イ 幼児の実態から

ほとんどの幼児は教師や友達との信頼関係が築かれており、安定感を基に、興味をもったことに進んで関わる姿がある。また体を動かす遊びについても楽しんでいる。しかし、中には階

段を一段ずつ昇降したり、歩く、走るなどがぎこちなかったりするなどの姿が見られる。今春の入園児の中には、ベビーカーで登降園してきた幼児がいたり、平らな床面でも転倒しやすく、口元の怪我を繰り返したりする幼児もいる。保護者との会話からは、入園前は戸外遊びや雪遊びの経験がほとんどなかったという幼児や、園や家庭において母親に身の回りのことをほとんどしてもらっていたような幼児がいるなど、ますます過保護な傾向が目立つようになってきた。これらの実態から、本来、乳幼児期に獲得すべき力や動作が身に付いていないことや、我が子の知的な発達や発育状態には関心があるものの、身の自立を促すことや、歩く、走るなどの基本的な動作がぎこちないということには気付かず、保護者が楽で快適であることを優先しがちな子育てに対する姿勢が伺える。そのことから、教師が、幼児の体を動かす機会や直接体験をする機会を十分に保障することが大切であると、心にしっかりと刻んで保育しなければならないと考える。本園では、幼稚園教育要領の5領域から「健康」を窓口とし、日常の「遊び」を見直し、「遊び」を通して本園の幼児に必要な経験を積み重ねていくことで、心も体もたくましい幼児を育てていきたいと考える。

遊びを中心とした生活の中で
たくましい心と体を育てるために

○環境の見直し

- ・幼児が体を存分に動かせる場を保障し幼児がより体を動かしたくなる、自ら関わりたくなる魅力的な環境づくりを工夫する。



○地域の自然環境の活用

- ・白楊小学校校庭やビオトープ、北大など、園外の自然環境を積極的に活用し、自然との関わりから幼児の経験の幅を広げるとともに、目的をもって歩くことを積み重ね、幼児の体力向上を図る。



○保護者啓発

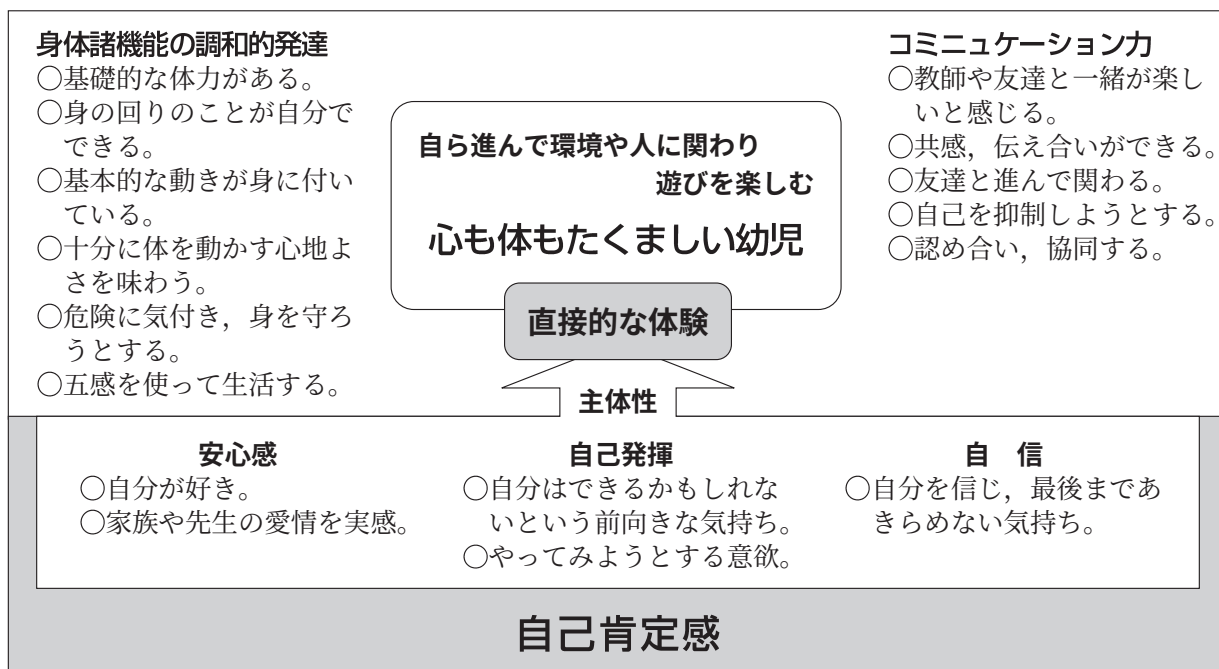
- ・体を動かすことの意義や必要性、園での取組について、懇談会やおたより、保育写真の掲示や登降園時の会話の中などで伝え、家庭でも日常的に歩く、できるだけ戸外で遊ぶなどしてもらえるよう、保護者の意識改革や生活の改善を促す。



(2) 目指す幼児像

目指す幼児像である「心も体もたくましい幼児」を以下のように押さえた。

- 自己肯定感をもち、主体的に遊ぶ幼児。
- 身体諸機能が調和的に発達し、進んで体を動かす幼児。
- 教師や友達との関わりを喜び、進んで関わる幼児。



(3) 研究の仮説

教師が3歳児，4歳児，5歳児の発達特性をしっかりと押さえ，幼児が心と体を存分に動かしながら夢中になって遊ぶことができる環境の構成や適切な援助を行い，幼児に様々な経験を積み重ねていくことで，生涯生きていく力の基礎となるたくましい心と体をもった幼児を育成することができる。

(4) 研究の視点

日常の様々な「遊び」を運動的な視点から見取り，充実させていくためには，どのような環境や援助が必要なのか，より深く探っていきたいと考え，以下の視点を設定した。

視点1：自ら関わりたくなる環境や援助

進んで体を動かすようになるために必要な環境や援助にポイントを絞って探る。

視点2：友達とつながりながら遊ぶための環境や援助

友達と関わりながら体を動かすことを楽しめるようになるための環境や援助にポイントを絞って探る。

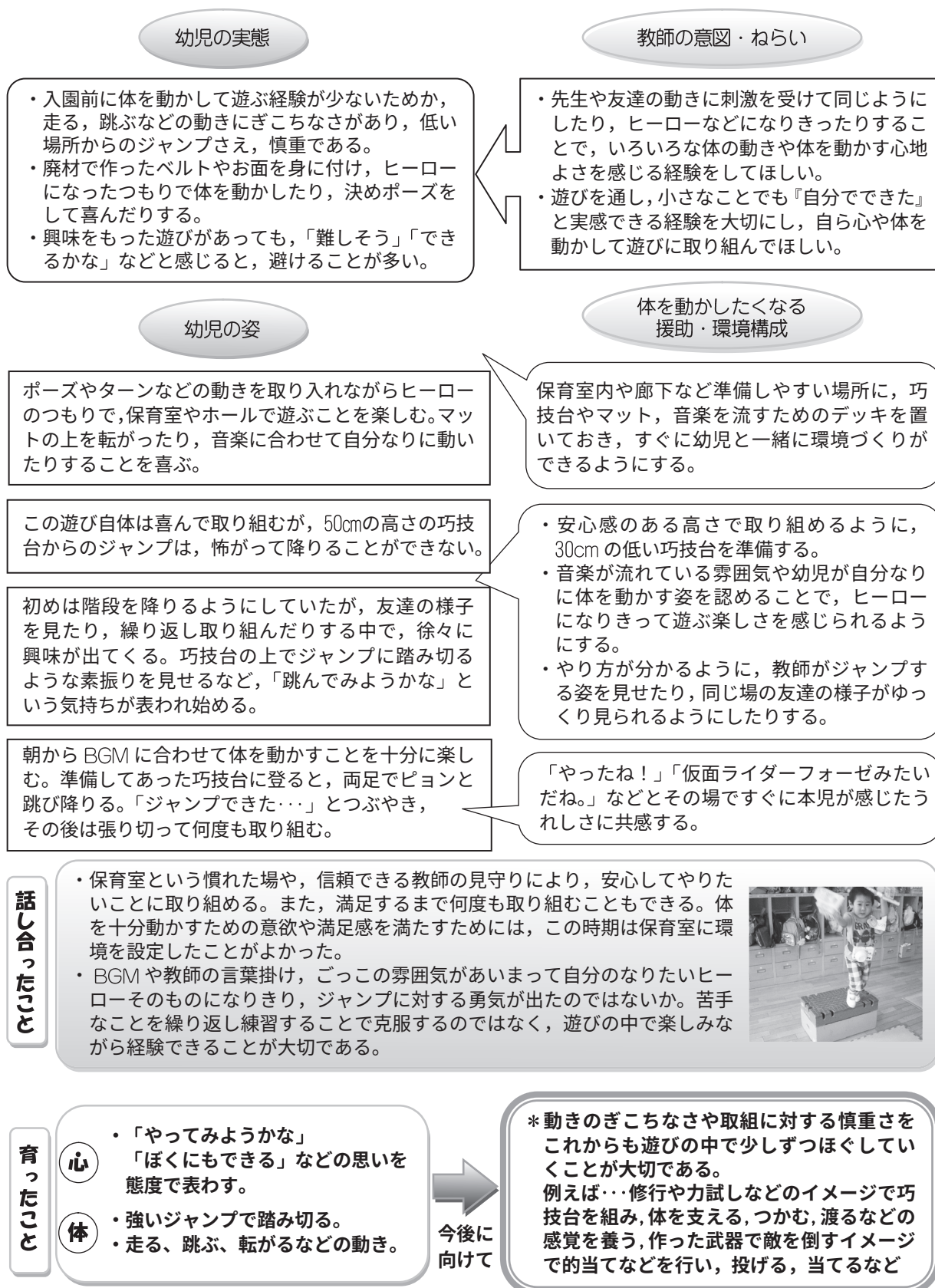
『たくましい心と体』の発達過程～本園の幼児の姿から捉えた学びの連続性～

学年	3 歳児	4 歳児	5 歳児	小学校低学年
安心感	自己発揮・共感		自信・認め合い	
基本的な動きを何度も繰り返すなど遊びをいゆくまで楽しんで時期	基本的な動きの獲得に友達、教師の存在が大きく影響する時期		基本的な動きの組み合わせができる時期	
基本的な動きをいゆくまで楽しんで時期	基本的な動きの獲得に友達、教師の存在が大きく影響する時期		基本的な動きの組み合わせができる時期	
幼児の姿	- 先生に親しみ、安心感をもちながら、一緒にやりたい遊びを楽しむ。 - 体を使った遊びの中でいろいろな動きを経験し、何度も繰り返すことに面白さを感じる。 - 先生や友達のしていることに興味をもち、喜んで遊ぶ。 - 身の回りのことや自分でできることをやろうとする。	- やりたい遊びに自分から取り組んだり、友達や先生と一緒に取り組んだりする。 - 先生や友達がいる遊びや気に入った遊びを真似したり繰り返して楽しんだりする。 - 友達と遊びを分かち合い、相手の思いを聞いたり気遣いしたりする。 - ルールや決まりがある遊びの楽しさに気付く。 - 遊びに必要な物を選んで使おうとしたり、片付けたりする。 - 腕を振って走る。 - 階段の2・3段の高さから跳び降りる。 - キャロップ・けんけん・スキップをする。 - 片手で投げける。 - 鉄棒に両手でぶら下がる。 - ブランコの座りこぎ、立ちこぎをする。 - 短縄跳びの前跳びをする。 - 長縄跳びの『大波小波』をする。	- それまでの経験から思うように体を動かせるようになり、進んで運動遊びに取り組みようになる。 - 少し難しいことや多少の失敗にも簡単にあきらめずに最後まで取り組もうとする。 - 全力で走ったり、思い切り跳んだりするなど自分の力を十分に発揮する。 - 自分たちでルールや決まりをつくることにおもしろさを感じる。 - 友達と考えを出し合いながら、共通の目的に向かって力を合わせ、満足感ややり遂げた喜びを感じる。 - 友達と相談しながら、遊びの場をつくったり、必要な物を準備したりする。 - 全力疾走する。 - 足を前に出して片手で投げる。 - 片足で5～10秒立つ。 - 鉄棒で前回り、逆さでぶら下がる。 - ブランコを大きくこぐ。 - 回っている長縄跳びに入って跳ぶ。	小学校 低学年の体育 (小学校学習指導要領 目標より) (1) 簡単なきまりや活動を工夫して各種の運動を楽しむことができるようにするとともに、その基本的な動きを身に付け、体力を養う。 ・各種の運動を楽しむための活動の仕方や競争のルールなどを工夫する。 ・基礎的・基本的な資質や能力を育てる。 ・体の基本的な動きや各種の運動の基礎となる動きを身に付ける。 ・運動を楽しむ行い、力いっばい活動する中で、体力の向上を図る。 (2) だれとでも仲よくし、健康・安全に留意して意欲的に運動をする態度を育てる。 ・順番やきまりを守って仲よく運動したり、協力して仲よく勝敗を競ったりする。 ・運動する場所や器械・器具の安全に気を付けたり、水遊びの心得を守ったりして、健康・安全に留意する。 ・各種の運動に進んで取り組む。
身に付けたことを確認し、体の動き	- 手を使わずに一人で階段を登る。 - かけっこをする。 - 片足で数歩跳ぶ。 - 両足をそろえて前に跳ぶ。 - 両手で投げる。 - 鉄棒に両手でつかまる。 - ブランコの上に乗る、立つ。	- 胸を振って走る。 - 階段の2・3段の高さから跳び降りる。 - キャロップ・けんけん・スキップをする。 - 片手で投げける。 - 鉄棒に両手でぶら下がる。 - ブランコの座りこぎ、立ちこぎをする。 - 短縄跳びの前跳びをする。 - 長縄跳びの『大波小波』をする。	- それまでの経験から思うように体を動かせるようになり、進んで運動遊びに取り組みようになる。 - 少し難しいことや多少の失敗にも簡単にあきらめずに最後まで取り組もうとする。 - 全力で走ったり、思い切り跳んだりするなど自分の力を十分に発揮する。 - 自分たちでルールや決まりをつくることにおもしろさを感じる。 - 友達と考えを出し合いながら、共通の目的に向かって力を合わせ、満足感ややり遂げた喜びを感じる。 - 友達と相談しながら、遊びの場をつくったり、必要な物を準備したりする。 - 全力疾走する。 - 足を前に出して片手で投げる。 - 片足で5～10秒立つ。 - 鉄棒で前回り、逆さでぶら下がる。 - ブランコを大きくこぐ。 - 回っている長縄跳びに入って跳ぶ。	小学校 低学年の体育 (小学校学習指導要領 目標より) (1) 簡単なきまりや活動を工夫して各種の運動を楽しむことができるようにするとともに、その基本的な動きを身に付け、体力を養う。 ・各種の運動を楽しむための活動の仕方や競争のルールなどを工夫する。 ・基礎的・基本的な資質や能力を育てる。 ・体の基本的な動きや各種の運動の基礎となる動きを身に付ける。 ・運動を楽しむ行い、力いっばい活動する中で、体力の向上を図る。 (2) だれとでも仲よくし、健康・安全に留意して意欲的に運動をする態度を育てる。 ・順番やきまりを守って仲よく運動したり、協力して仲よく勝敗を競ったりする。 ・運動する場所や器械・器具の安全に気を付けたり、水遊びの心得を守ったりして、健康・安全に留意する。 ・各種の運動に進んで取り組む。
教師の援助及び環境構成	* 家族以外の身近な存在である『先生』に丸ごと受け止められ、愛されているという安心感をもちようとする。 * 同じ場で心ゆくまで楽しめる遊びの場をつくり、体を動かす心地よさを感じられるようになる。 * 友達の存在を意識し、友達と過ごす楽しさを感じられるようにする。 * 他学年からの刺激を受けて興味関心が広がるように、他学年の様子を見たり真似したりすることができるようになる。 * 褒めたり認めたりすることで、自分の身の回りのことができた喜びや自信がもてようとする。 * 所持品の始末や遊具や用具の片付けなどは一人一人に繰り返し知らせ、少しずつ身に付けられるようにする。また、必要な物を自分で出したり、使った後の片付けがしやすいように置き場所を工夫したり、分かりやすい絵などで表示したりする。	* 幼児のイメージや発想、要求を十分に受け止め、実現できるようにする。 * 幼児の興味や関心を捉えながら体を動かす遊びに誘い掛けていく。また、教師も一緒に遊びながら楽しい雰囲気をつくり、体を十分動かして遊べるようにする。 * 遊びを楽しむ友達や教師の姿そのものが魅力的な姿になるようにする。また、その環境からの刺激を生かし、自ら遊びに関わろうとする意欲を引き出す。 * 進級児をモデルとしながら、入園児も一緒にいろいろな遊具や用具を使って遊べるようにする。また、必要な物を自分たちで出したり、使った後の片付けをしたりしやすいように分かりやすい表示をする。	* 自分なりに目的をもち、力を発揮できるような環境をつくる。また、簡単に諦めないよう頑張りを認めて褒め、自分の成長を実感できるようにする。 * 一人一人のよさを認めることで、幼児の自信や友達同士で認め合う関係をつくるようにする。 * 楽しみながら体力を付けられるよう適切な時期に明確な目的をもった遊びを投げ掛ける。 * 遊びの様子を見取り、必要に応じて幼児と一緒に考えた必要な物を準備したりするなど、友達と相談しながら自分たちの力で実現できるようにする。 * 必要となるときはいつでも自分たちで用具を出し入れできるように配置を工夫し、自分たちで遊びの場を設定してあげるようにする。	小学校 低学年の体育 (小学校学習指導要領 目標より) (1) 簡単なきまりや活動を工夫して各種の運動を楽しむことができるようにするとともに、その基本的な動きを身に付け、体力を養う。 ・各種の運動を楽しむための活動の仕方や競争のルールなどを工夫する。 ・基礎的・基本的な資質や能力を育てる。 ・体の基本的な動きや各種の運動の基礎となる動きを身に付ける。 ・運動を楽しむ行い、力いっばい活動する中で、体力の向上を図る。 (2) だれとでも仲よくし、健康・安全に留意して意欲的に運動をする態度を育てる。 ・順番やきまりを守って仲よく運動したり、協力して仲よく勝敗を競ったりする。 ・運動する場所や器械・器具の安全に気を付けたり、水遊びの心得を守ったりして、健康・安全に留意する。 ・各種の運動に進んで取り組む。

2 研究の具体

(1) 実践例Ⅰ 3歳児 6月

「なりきって遊ぶ中で勇気がわき、喜んで体を動かすようになった幼児の事例」



(2) 実践例Ⅱ 4歳児 10月

「鬼ごっこを通して、友達と一緒に体を動かす楽しさを感じるようになった事例」

幼児の実態

- ・運動会の取組の中でかけっこや踊りなどを経験し、体を動かす心地よさを感じることができた。その後、氷鬼やサッカーに取り組むなど体を動かしたい気持ちが高まっている。
- ・友達と一緒に走ることは十分楽しんできたが、跳び上がる、跳び下りる、かわすなどの動きが十分ではなく、幼児同士でぶつかることがある。
- ・遊びへの意欲はあるが、仲間を誘うなどして自分たちで遊び始めることは難しい。教師を誘って遊びを始めるうちに、学級の友達が集まってくることが多い。

教師の意図・ねらい

- ・体を動かしたいと感じている気持ちを受け止め、満足できるような遊びをつくりたい。
- ・鬼ごっこの中に跳ぶ、上る、バランスを取るなど、走るだけでない動きを取り入れ、いろいろな動きを経験できるようにしたい。高鬼を投げ掛けてみたい。
- ・教師と一緒に遊ぶ中でいろいろな友達と関わる経験を積み重ね、遊びの仲間が増えたと遊びがもっとおもしろくなると思えるようにしたい。

幼児の姿

教師が提案した高鬼に興味を示し、喜んで取り組む。鬼ばかりやりたい子、逃げるのが楽しい子、どちらも経験したい子など、それぞれの楽しみ方をする。

逃げる中で、同じ場所（固定遊具）から動かない幼児が増えてくる。高さのある場所が離れて点在しているため、移動をためらっている。

リールの上では幼児同士落ちないように抱き合って体を支えたり、逃げ場所を探している友達に声を掛け、引っ張り上げたりする。友達を追いかけて思い切り走ることやいろいろな高さの物に瞬時に上って逃げるスリル感に加え、友達と触れ合ったり、助け合ったりする楽しさを感じる。



高鬼に興味をもつ幼児が増え、繰り返し楽しむ。友達を誘ったり、鬼決めをしたりし始め、『高い所は10秒まで』『鬼が一人は大変だから二人にする』など遊びがより楽しくなるようなルールに気が付き、変える。

体を動かしたくなる 援助・環境構成

『鬼は順番にしよう』と先に決めるのではなく、まずは自分の興味のあることを存分に楽しむことを認め、『おもしろい』『またやりたい』という思いを積み重ねる。

園庭で日常的に使われているリールや積木を活用したり、固定遊具以外にも高さのある場所があることに気付かせたりして、動きのある鬼ごっこを楽しめるようにする。また運動能力や経験差を考えて用具の数や高さ、置く間隔を工夫する。

興味をもつ幼児が増えてきているタイミングを捉え、学級の教師間で連携し、やりたいときにすぐに取り組める体制や一人一人の育ちや苦手な動きの確認、援助のポイントなどの共通理解をする。

幼児からのいろいろな発想を試したり、その発想に遊びの仲間同士が共感したりできるように支え、友達と一緒にだからこその楽しいという思いにつなげる。

話し合ったこと

- ・まだ「先生と自分」という関わりが多く見られる4歳児にとっては、初めから細かなルールにとらわれず、一人一人の楽しみ方に応じた援助をしながら遊びを進めることが大切である。その中で、徐々に幼児同士が関われるような環境づくりをしたり、幼児がルールに気付くような働き掛けをしたりすることが援助のポイントだと考える。
- ・逃げ場所のバリエーションを増やしたり、リールの間隔を遊びの経過と幼児の姿から徐々に変化させたりすることで、遊びへの期待や挑戦意欲がくすぐられ、喜んで体を動かすことにつながった。
- ・いろいろな教師から見た幼児の成長や課題を共有し合う体制をとり、遊びに関わったことが、幼児の体を動かしたいという欲求を満たしながら育てていくことにつながった。



育ったこと

心 仲間が増えると楽しいという思い、ルールの工夫

体 走る、跳び上がる、跳び下りる、かわす、バランスを取るなどの動き

今後に向けて

*すばやく動いたり判断したりする力が身に付いてきたようだ。また小さな集団で遊ぶ楽しさを感じ始めているので、遊びの幅を広げながら様々な動きを経験すると良い。
例えば…十字架鬼、けいどろなどでフェイントをかけながら逃げたり、追いかけてたりする。アスレチックごっこなどのイメージで坂を駆け上がる、一本橋を渡るなど。

(3) 実践例Ⅲ 3, 4, 5 歳児 2月 ～雪山の斜面登り～

「年長児への憧れの気持ちが、3, 4 歳児の『やってみたい!』という意欲につながった事例」

幼児の実態

5 歳児 2 年間の雪遊びの経験から、友達と誘い合い、穴を掘ったり、探検隊ごっこで歩いたりするなどして遊ぶ。

3 歳児 4 歳児 新入園児の中には、入園前の雪遊びの経験がほとんどない幼児もいる。初雪が降ったときから雪に触れる経験を大切にしてきたため、尻滑りやそり滑りを喜ぶようになってきた。



教師の意図・ねらい

- ・年長児には、園庭や校庭の雪山を自分の力で登ったり、友達とタイヤチューブで滑ったりするなど、ダイナミックに雪遊びを楽しんでほしい。
- ・3, 4 歳児には年長児の遊ぶ様子に刺激を受け、真似たり、一緒に遊んだりしながら、雪に触れて遊ぶことを楽しんでほしい。

園庭の環境

- ・園庭に大きな雪山を作り、滑る、登るなど様々な遊びができるようにする。

幼児の姿

年長児数名が園庭の雪山を『崖』に見立て、「冰山だ。」「頂上まで、登るぞ!」と、雪の斜面登りに挑戦している。シャベルを斜面に刺して体を引き上げたり、斜面に空いた穴に足を引っ掛けて登ったりする。頂上まで登り切ると幼児同士で喜び合う。

年長児の姿を見て、3, 4 歳児数名が雪の斜面登りに取り組もうとするが、手袋が滑って雪のこぶを掴めなかったり、足で踏ん張ったりすることができず、斜面からずり落ちる。しかし「もう1回!」と言ってあきらめない。

様子を見ていた年長児が励ましに来る。『隊長』のイメージで「手にもっと力を入れるんだ!」などと登るコツを教える。頂上間際で3, 4 歳児に手を差し伸べて引っ張り上げる。「登れた!」と3, 4 歳児が喜ぶ。



体を動かしたくなる 援助・環境構成

- ・「ファイト一発!」などの合言葉や探検ごっこのようなやりとりを幼児と共に楽しみ、挑戦意欲を高められるようにする。
- ・急な斜面のため、幼児の意欲と安全をよく見極め、幼児と約束事を確認したり、気付けたりする。

- ・『探検チームの特訓』と称して校庭の大きな雪の塊に登り降りするなど、体を使う経験を積み重ねられるようにする。
- ・「年長さんみたいだね。」と繰り返し取り組む姿を認めることで『もっとやってみたい』『自分はできる』という気持ちを高められるようにする。

年長児の言葉を受けて「こうするといいんだね。」と具体的に掴む場所や手足の動かし方を知らせたり、体を支えたりして、3, 4 歳児が、自分の体の動きに生かせるようにする。

話し合ったこと

- ・5 歳児の様子に興味をもった3, 4 歳児が遊びに取り組んでも、体格の差や経験の差から、なかなかイメージ通りに体が動かない。しかしこの『できない』という経験があるからこそ、『いつかできるようになりたい』という強い憧れの気持ちをもつことにつながる。その葛藤が心を育て、幼児の体を動かす『あきらめない』という強い気持ちや『何度も挑戦する』という主体的な態度につながっていくと考える。
- ・雪の性質の面白さや、雪山に登ったり転がったり滑ったりするなどの、冬以外の季節では味わえないスリル感や楽しさを体全体で実感することで、厳しい寒さも忘れ、長時間雪遊びを楽しむ姿につながる。
- ・雪や氷のもっている、凍ったり解けたりする性質上、遊び方によっては滑ったり転んだりしやすいという危険を伴うこともあるが、春からの体を使った遊びの積み上げにより、幼児が自分で危険を回避しようとするような『とっさの身のこなし』を身に付けさせていきたい。
- ・『雪』は滑る、登る以外にも、ふかふかな雪の中に飛び込むなど、北国ならではの経験ができる貴重なツールであり、たくましい心と体を育てるために不可欠である。教師自身が冬の寒さや『雪』を生かした遊びの楽しさを十分分かって援助することが大切である。また、継続的に遊ぶということも大切にし、寒さに負けず元気に遊ぶ生活を続けたい。

育ったこと

- ① 寒さに負けず遊ぶたくましさ
- ② 雪で遊ぶおもしろさが分かる
- ③ 年長児への憧れ
- ④ 滑らないように登るための試行錯誤
- ⑤ 踏ん張る、引っ張り上げる、支える、登るなどの動き

今後に向けて

＊北国ならではの『雪』を生かした遊びを工夫することが大切である。
例えば…チューブを使った腹滑りでバランス感覚を養う、探検ごっこのイメージでこぼこや埋まりやすい雪の上を歩く、『けりけりアイス』作りで走る、蹴るなど

3 研究の成果と課題

【視点に関わって】

視点1：自ら関わりたくなる環境や援助

見失ってはならない 「遊び」の大切さ



「遊び」の自由性・柔軟性・多様性が、 幼児の心と体を動かす



- ・ 幼児の興味関心や気持ちの高まりを予想し、幼児の心が動いたタイミングを逃さず遊びに取り組めるようにすることが、「楽しい。」「もっとやりたい!」と実感できる経験となり、幼児の自信や意欲、そして自ら進んで遊びに取り組む姿勢につながっていった。幼児が主体的に取り組む「遊び」を通して味わった、体を十分に動かした楽しさや満足感は、次の遊びや他の活動への意欲・原動力となっていく。何よりも重要なのは、「幼児が主体的に取り組む遊び」を通して、発達に必要な経験としての様々な体の動きを得られるようにしていくことである。
- ・ 体を動かすことに自信のもてない幼児も、自由性・柔軟性があり、きまりや正解の無い「遊び」だからこそ、「自分なりの動きでも大丈夫」と安心して取り組み、体を動かすことを心ゆくまで楽しめるようになると考える。また、「やってみたら楽しかった」という幼児の実感を「もっとやってみよう」とする意欲や経験につなげるため、園全体の教師が他学級の幼児の実態を把握し、遊びに取り組もうとした時には機会を逃さず経験できるようにしていくことが大切であり、その実践を積み重ねているところである。

視点2：友達とつながりながら遊ぶための環境や援助

教師や友達が遊びに 取り組む姿そのものが、 魅力的な環境

- ・ 幼児にとって、楽しく活動している教師や友達の姿そのものが魅力的な環境であり、教師や友達と一緒に取り組む楽しさが、幼児が自ら体を動かそうとする意欲につながっていった。友達からの刺激を意図的に生かした環境の構成や教師の援助を考えていくことが大切である。

【環境の見直し・地域の自然環境の活用・保護者啓発】

幼児側より

教師側より



- ・ 積極的に戸外に出て遊ぶようになったことで、戸外で遊ぶ心地よさや体を動かして遊ぶ楽しさ、先生や友達と集団で遊ぶ楽しさが味わえるようになり、興味関心や体験の幅が広がった。
- ・ 幼児の実態への危機感が教師の意識に根付き、「日常的に幼児がもっと体を動かせるようにしよう」「遊びの中に様々な体の動きを取り入れよう」「計画的に散歩に出掛け、歩く機会を積み重ねよう」とするようになったことが幼児の実態を確実に変化させ、進んで体を動かそうとする姿につながった。目の前の幼児の姿から不足している経験を的確に見取り、育てていこうとする教師の継続した実践力や、保護者から納得して協力を得られるような発信力が今後、より一層必要である。

小学校部会

第2分科会

札幌市立白楊小学校

第3分科会

札幌市立宮の森小学校

第4分科会

札幌市立福住小学校

第5分科会

札幌市立資生館小学校



野幌森林公園 北海道百年記念塔
(札幌市厚別区 江別市 北広島市)

【研究主題】

楽しさがある！共に学ぶ！伸びがある！体育学習
～今こそ確かな体育の力を！～

【日 程】

9:40			10:45		11:35		13:10			14:35		15:00	
9:00		10:25			10:50		13:00			14:15		14:55	
	全校歌の広場 受付	第一次公開授業	ふれあい遊び	休憩	第二次公開授業	昼食	休憩	開会行事	研究発表協議Ⅰ	研究発表質疑応答Ⅱ	指導講評	閉会行事	

【会場案内】

**札幌市立
白楊小学校**
〒001-0024
札幌市北区
北24条西7丁目1-1
TEL：011-726-4158

【アクセス】
地下鉄南北線「北24条駅」下車
↓
徒歩7分

札幌市立白楊小学校



所在地 札幌市北区北24条西7丁目1-1
電 話 (011) 726-4158
学校長 飯塚 泰久
児童数 427名

◎教育目標

- ・よく考え、くふうする子
- ・力を合わせて がんばる子
- ・心の豊かな やさしい子
- ・明るく げんきな子

◎特色

『歌のひろば』…毎週金曜日の朝に全校児童が体育館に集まって歌を歌っています。平成15年から始まった取組で、月ごとに歌う曲が変わります。お互いの学年のよさを感じながら、全校で響き合わせることをめあてに取り組んでいます。

『チャレンジ』…総合的な学習の時間で、『茶道・空手・わら細工・手打ちそば・昔遊び・華道・野外炊飯・和太鼓・腹話術』のゲストティーチャーの方々にお越しいただいて、3年生以上の児童がそれぞれ分かれてプロから学ぶ学習をしています。

『白楊アイスクャンドル』…札幌市の教育で重点の一つである「雪」についての取組です。生活科と総合的な学習の時間で全校児童が学年ごとにグラウンドにアイスクャンドルの台を作り、今年度は2月15日(金)の夕方に点灯します。地域の方々には、小さな重機で雪山づくり、おやじの会では、雪の滑り台づくり、PTAの方々にはココアなどの温かいものを用意していただくなど、学校と地域・PTAが一つになる取組の一つで、周辺の地域の方々もこの日の点灯をととても楽しみにしていただいています。

授業者の紹介



第2分科会 授業①

札幌市立白楊小学校

千葉 なつき

1年2組 担任

中学, 高校, 大学(インカレ3回出場)

クラブチームでバスケットボール

授業の見どころアピール

1年生の子どもたちと、タオルのしっぽを使った鬼遊びの授業をします。子どもたちがたくさん汗をかきながら、友達と仲よく楽しく運動し、鬼遊びの攻め方を見付けていける体育授業を目指します！ よろしくお願ひ致します。

ひとりごと

自分が小学生の時には、夜、真っ暗になるまで毎日楽しんでた鬼遊び。子どもたちが放課後にも鬼遊びをしたくなるような授業にしたいです！



第2分科会 授業②

札幌市立白楊小学校

岩田 悟

4年1組 担任

バスケットボールの教員チーム

「北籠倶楽部」コーチ

JBA公認D級コーチ

授業の見どころアピール

「体づくり運動」で、中学年ならではの基本的な動きを組み合わせる運動に挑戦します。子どもたちが多様な動きを高める様々な運動にたっぷりと浸る中で、「運動の行い方を工夫」する姿にぜひご注目ください。

ひとりごと

授業を通して子どもたちに「確かな体育の力」を育むことを諸先輩・仲間から学んでいます。仲間と共に追い求めてきた「授業のエキス」がちりばめられた1時間にしたいです！

研究主題

楽しさがある！共に学ぶ！
伸びがある！体育学習

～今こそ確かな体育の力を！～

札幌市立白楊小学校

1 研究の概要

(1) 研究主題設定の理由

ア 本校の研究経過から



本校では、第11回教育実践発表会を開催した平成21年度までの3年間、「豊かな関わり合いから確かな力を育む授業」の研究テーマのもと、研究実践を行ってきた。成果として、授業にターニングポイント（本時の価値へと迫る見方・考え方が生まれる時）を盛り込むことで、子どもたち一人一人が自分の学びをもとに、より一層友達と関わろうとする状態を作り出すことができた。そのことが、技能や知識を始め、自分の考えを様々な場面で表現したり、人と関わり合いながら学ぶ意欲など、確かな力の育成につながった。そして、平成22年度からは、「どの子どもも生きる授業をつくる」ことをテーマに、問いをしっかりともち、そこから学ぶ価値に向かって考えを深めていく子の育成に努めている。

イ 児童の実態から

今年度実施した新体力テストの結果を見ると、全体的に全国平均と比べて下回る種目が多く、総合評価がD、Eの子は合わせて全体の4割に及び、全体的に体力を十分に身に付けているとは言えないのが実態である。また、野球やサッカーなどのクラブに所属して毎日のように運動を行い、専門的な技能を身に付けている子も多いが、体育の学習以外はほとんど運動をしないという子も少なくなく、本校でも運動習慣の二極化傾向が見られる。

一方で、学び方や学習に対する意識についての以前の調査では、考えたことを工夫して発表することが好きな子は6割、友達と話し合いながら進める学習が好きな子は9割と高い値を示した。友達と一緒に工夫したり、お互いに表現し合ったりすることに、大変前向きな傾向があることが伺える。体育の学習時においても、運動のコツを友達と一緒に探求していく姿、自分たちに合った作戦を工夫する姿、お互いにアドバイスし合って動きを高めていく姿をよく見ることができる。また、委員会活動などで企画したボールゲーム大会やなわ跳びの記録会などが行われる時にはたくさんの子どもたちが集まり、大変意欲的に運動を楽しむ姿がよく見られる。

（２）目指す児童像

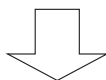
確かな体育の力をバランスよく本校の子どもたちに育んでいくために、以下のような児童像を設定した。

- 運動の楽しさを味わい、意欲をもって学習する子
- 友達と関わり合いながら、運動のコツや作戦などを考え工夫する子
- 運動の技能の伸びを実感する子

（３）研究の仮説

目指す児童像に迫るために以下の仮説を設定した。

運動することそのものに楽しさを味わうことができ、友達と共に追求しながら、伸びを実感できる体育学習を展開することで、確かな体育の力をバランスよく育むことができる。



【研究主題】

楽しさがある！共に学ぶ！伸びがある！体育学習
～今こそ確かな体育の力を！～

〈楽しさがある！〉

子どもが体育の学習で行う運動と出会ったとき、「楽しそうだ」「できそうだ」と思えることが、意欲をもって学ぶための第一歩と考える。恐怖感やできないことを人前でさらす羞恥心が前面に出てしまうとやる気は起こらない。どの子にとっても易しい運動を行っていく。一方で、身に付けさせたい技能を明確にし、子どもの実態に応じた教材・学習展開でもなければならぬ。子どもにとって適度な抵抗感があり、「やってみたい！」という意欲を引き出す体育学習を目指している。

〈共に学ぶ！〉

嶋野道広氏（文教大学教授）は、『仲間と良好な関係を紡ぎ上げる中で、今まで分からな（できな）かったことが分かった（できた）り、自分の考えや言動が影響を受けたり、協力することができるようになったりすることが、学びの充実の実感につながっていく』（H19札幌市立琴似中央小学校研究会講演より）と述べている。体育の学習の中でも、実運動を通して友達



と共に運動の仕方やコツなどを追求し、問題を解決していくことが、次なる意欲をもったり、自分の思いをもって表現したりする子どもの姿を引き出していくことができると考える。子どもが友達と共に学ぶ中で、集団的な達成感を味わえる学習展開を目指していきたい。

〈伸びがある！〉

基礎的な技能など、学びのベースとなるものについては単元を通じてしっかりと指導していく。また、子どもに問題意識をもたせながら追求する場面も設定する。指導を徹底していく場面と運動の仕方や作戦などを工夫する場面を明確にし、技能や思考力・判断力を育てていく。1時間の学習や単元全体を通して、子どもが自分の伸びを実感できる学習展開を目指していきたい。

〈幼小連携〉

札幌市立白楊幼稚園と隣接している立地条件を生かし、幼小連携の観点からも確かな体育の力の育成を図っている。教職員間で互いに保育や授業を参観し合ったり、実技研修会を実施したりして、授業や保育のねらいや子どもの実態の交流を繰り返しながら、発達段階に応じた教師の関わり方や具体的な手だてを明らかにしていくことを目指している。



このような学習展開や幼小連携の実践を積み上げていくことで、確かな体育の力をバランスよく育てていくことができると考える。体育の学習を通じて、運動の楽しさや友達と共に学ぶよさ、自分の伸びの実感をたっぷりと味わわせていくことで、「休み時間にもやろうよ！」「今日、公園でもやってみようか！」といった運動の日常化につなげていきたい。そしてこれらの積み重ねが、生涯にわたって生き生きと運動・スポーツに親しむ子どもを育てていくことにつながっていくものと考えている。

（４）研究の視点

〈視点１〉

**「楽しさがある！共に学ぶ！伸びがある！
教材の開発・工夫と学習展開」**

- ・身に付けさせたい技能の明確化
- ・子どもの実態把握
- ・教材の開発・工夫
- ・運動との出会いや場の工夫
- ・生涯スポーツへの視点
- ・学習課題の把握
- ・試行活動
- ・個人課題の設定
- ・追求活動
- ・評価活動

〈視点２〉

**「確かな体育の力を保障する指導と
評価の充実」**

- ・評価規準の明確化
- ・評価方法の明確化
- ・評価規準に達しない子への手だての工夫
- ・子どもの自己評価や相互評価の充実
- ・授業や指導方法の工夫・改善

2 研究の具体

(1) 実践例Ⅰ 第4学年 単元名「ゲーム ゴール型ゲーム～フラッグフットボール～」

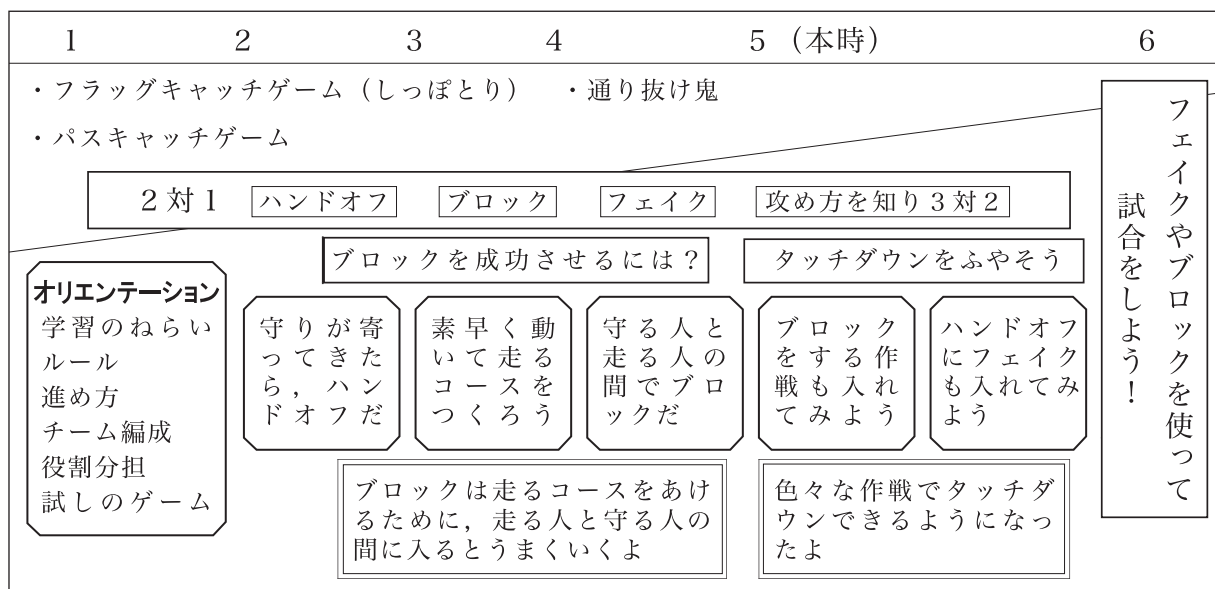
ア 授業のねらい

ゴール型ゲームでは、コート内で攻守入り交じってボールを手や足で操作したり、空いている場所に素早く動いたりして、ゴールにシュート或いは陣地を取り合って得点ゾーンに走り込むゲームである。フラッグフットボールはゴール型に属するが、さらにその中の「陣取り型」のボールゲームである。ボールを持って走ることができるなど、ドリブルやシュートの技能を要求されることがないので、誰でも容易にゲームを楽しむことができる。また、チームで立てた作戦に基づいて一人一人が役割を実行することになるので、運動に対して苦手意識をもっている子など誰もが容易にゲームに参加することができ、成功体験を味わいやすいことも特徴である。

子どもたちの多くは体を動かすことが大好きで、クラスの88%の子が体育の学習が楽しみで心待ちにしている。一方で12%の子が体を動かすことに苦手意識をもっている。中には、「運動が得意な人がどんどん攻めて自分は役に立っていない」という思いをもっている子がいることも分かった。

このような実態を踏まえ、どの子も運動の楽しさや心地よさを感じながら成功体験を得やすい構成にした。ボールを持つ人と持たない人のそれぞれに役割があり、全員がその役割を果たす中で作戦の成功を目指す。そうすることで、どの子も活躍したり、認められたりすることを通して、運動への意欲を高めていくことをねらった。

イ 単元構成



ウ 授業の実際

〈どの子も成功体験ができる教材の工夫〉

①ランプレーや手渡しパスに限定した構成

②攻撃側が数的優位になるゲームの設定

というルールを設定した。フラッグフットボールを初めて経験する子どもたちであっても、ランプレーや短いパス中心のゲームであれば、自分たちで工夫した作戦を実際にゲーム中に

生かしやすいと考えた。また、攻撃チームに数的優位をもたせる「2対1」や「3対2」というゲームを設定することで得点の機会を増やし、タッチダウンや仲間と協力して攻撃する喜びを味わわせたいと考えた。

〈運動課題を個の動きから集団としての戦術面へ〉

ゲームの中で、運動課題を個の動きの課題からチームとしての動きの課題へと発展していくように構成した。例えば、個のブロックの動きから、味方が走るコースを作るためのブロックへ、個のフェイクの動きから味方と協力して相手を惑わすフェイクの動きへ深化する課題によって、ゲームの楽しさをさらに深く味わう子どもの姿が見られた。

〈よい気づきを共有〉

易しいゲームの設定により、運動に苦手意識をもつ子も汗いっぱいになりながらゲームをする姿が見られた。5時間目では、「ハンドオフ（手渡しパス）を使ったフェイクを成功させるには？」という課題に焦点化した。全体交流では、教師がクロスしながらハンドオフしていたチームの動きを取り上げたことで、子どもたちはチームとして動くことの有効性に気付くことができた。

- T：どこが上手だった？
C：後ろを向いていたから、誰がボールを持っていたか分からなかった。
T：ボールを持っていない人は何をしていたの？
C：もらったふりをして、ボールを隠すようにしていたよ。
C：ふりをすると、守りが分からなくなるね。
T：ボールを持っている人はどう？
C：つかまらないうちに走っていたよ。
C：渡したように見せていたよ。
T：みんなの力を合わせたら、できそうだね！



ただ、その後のゲームではねらっていた動きを選択しないチームもあり、課題と子どもの必要感、必然性との関係が大切であることも分かった。

〈考えて動く楽しさを実感〉

本実践では、チームで協力して考えた作戦をゲームで実行し、それが成功した時にはハイタッチをしたり歓声をあげたりして、子どもたちが大喜びする場面が多く見られた。理由として、攻撃のたびに「ハドル（作戦タイム）」が設けられるため、チーム内一人一人の役割が明確になること、ゲームが1プレーごとに行われるため、作戦の成果が分かりやすいことなどが挙げられる。

フラッグフットボールで考える楽しさ、動く楽しさを味わった子どもたちは、この後のポートボールやサッカーなどのゴール型ゲームでも、作戦を生かして動こうとする姿が見られた。

(2) 実践例Ⅱ 第6学年 単元名「ハードル走」

ア 授業のねらい

ハードル走は、インターバルの距離やハードルの台数などのルールを定めて競走したり、自己の記録の伸びや目標とする記録の到達を目指したりしながら、ハードルをリズムカルに走り越えることができるように行う運動である。

子どもの実態としては、50m走のタイムの平均値は全国平均と比べて低いことを始め、決して運動能力が高くはない。しかし、体育の学習が好きだと答えた子は83%と高く、意欲的である。また、5年生時の学習で50m走とハードル走のタイムの比較から、そのタイム差を縮めるために決まった踏み切り足で跳び越えるや、インターバルを3～5歩の歩数で走り越えることを学習している。

このような実態を踏まえ、本単元では自分の目標とするタイムを目指すことで意欲の持続を図り、インターバルでもリズムカルにハードルを走り越えることに焦点化した構成により、目標を達成しようと学習する子どもの姿を目指した。

イ 単元構成

1	2	3 (本時)	4
シンクロハードル走 (4～5人1組でリズムを合わせてミニハードルを越えていく運動)			
オリエンテーション 50m走記録計測 試しの記録測定 目標の設定 学習の進め方	目標とする記録を目指して ハードル走に挑戦しよう！ 第1ハードルを決めた足で跳べるよ 第2ハードルまでをリズムに乗って走れるようになったよ スタートから第2ハードルぐらいまではうまくいくよ。でもだんだんスピードが落ちてくるな…。	インターバルのスピードを落とさずに走るには？ 跳び越えるときに前傾するといいよ 自分にあったインターバルの距離が分かったよ リズムに乗ってハードルを走り越える方法が分かったよ。目標のクリアができそうだ！	目標記録に挑戦しよう！

ウ 授業の実際

〈「リズムカル」を追求する構成〉

単元を通して、「ハードルをリズムカルに走り越えること」を中心に据えた学習を構成した。準備運動の一環として毎時間取り入れた「シンクロハードル走」は、4～5人でリズムとスピードを揃えてミニハードルを走り越えるものにした。リズムよく走るのに慣れるだけではなく、3歩や5歩でインターバルを走り越えるリズム感を習得することにもつながった。また、なかなかリズム感をつかみにくい子にとっても、友達と息を合わせて走ることで、徐々にハードル走に慣れることもできた。

また、第1ハードルを決まった足で踏み切ることや、空中姿勢、インターバルを3歩か5歩で走り越えることを、導入段階よりしっかりと指導することで基礎的な技能が身に付き、次の段階である「インターバルのスピードを落とさずに走りたい」という問題意識を生むことができた。

〈足音の対比から「リズム」へ着目〉

リズムカルなハードリングを身に付けさせていきたいが、足音は跡が残らないので子どもはなかなかリズムや足音を意識することができない。そのための手だてとして、まず足音をタンバリンで鳴らしていく関わりを、単元を通して行った。耳からリズム感を刺激し続けることで、常にリズムを意識して走る姿が見られた。友達同士でインターバルのリズムを手拍子し合い、よりスムーズな走り方を探るために関わり合う姿も引き出すことができた。



さらに、友達同士でインターバルの足跡にマークを置かせていくことで、歩幅とリズムの関係にも目を向けさせていく交流を行った。教師の師範（よくない例）と早いリズムで合理的に跳び越えていく友達のハードリングのリズムや足音を対比していくうちに、リズムが遅くなる原因の一つは大股になり過ぎていることに子どもたちは気付くことができた。

これらの手だてにより、リズムが遅くならないように自分にあったインターバルの距離を見付けたり、5歩のインターバルでは細か過ぎてリズムが遅くなるので3歩でクリアできるよう挑戦したりする姿が見られた。

さらに、早いリズムを維持するために、頭や手の位置にも注目する発言も見られた。この気付きもクラス全員で共有し、跳び越えるときに上体を前に傾けたり、そのために振り上げ足とは反対の手を前に出したりして、頭の位置が変わらないように走ったりといった工夫を子どもたち自らが追求していく姿が見られた。

〈運動を「見る目」と「語れる言葉」〉



「インターバルでもリズムが遅くならないように走るにはどうしたらよいだろうか。」という問題意識をもった子どもたちが、それまでの体験を生かして関わり合いながら解決していく学習展開を図ることができた。このような過程を経た子どもたちは、「もっと上体を前に倒した方がいいと思うよ。」「インターバルの3歩目が広がっているから勢いが無くなっているよ。」などの言葉を使ってアドバイスし合う姿が見られるようになった。

子どもたちには単元を通して、ハードルをリズムカルに走り越えるためのコツを見抜く目が育ち、運動のポイントを押さえた言葉で語り合える力も育っていった。

本単元では、自分の目標を明確にしてどの子にも意欲をもたせていくことや、基本的な技能の習熟ができるようしっかりと指導する場面と、問題意識をもって友達と一緒に運動のコツを見付けていこうと工夫する場面を明確にしていくこと、さらには学習で培った「見る目」「語れる言葉」でアドバイスし合う姿を引き出していくことができた。その結果として、子どもたち一人一人が目標タイムの達成を実現していく姿へとつながっていった。

3 研究の成果と課題

〈楽しさがある！共に学ぶ！伸びがある！教材の開発・工夫と学習展開〉

どの子も「やってみたい！」「できそうだ！」と思えるような易しい場やルール，学習展開を心掛けたことにより，意欲をもって学ぶ姿が見られた。また，ゲーム感覚で友達とリズムを合わせてハードリングのリズム感を習得していくなど，学びのベースとなる基礎的な技能を身に付けるためのスモールステップを単元を通して取り入れたことも効果的であった。

課題としては，本時の課題と子どもの必要感，必然性との関係をもっとよく吟味することである。例えば，ゲームを楽しむための基礎的な技能が十分に身に付いていない子どもにとっては，ねらった所にパスができなかったりキャッチが難しかったりするために，ボールを持たない時の動き方に問題意識をもつことはできない。定められた授業時数の中で確実に技能を身に付けられる学習展開や指導方法が求められる。また，ハンドオフを使ったフェイクを成功させるための方法を課題にしたにも関わらず，ゲームになるとその作戦を選択しないということもあった。共に考え，共に動くことの楽しさや喜びを味わうことのできる授業に取り組んでいきたい。



〈確かな体育の力を保障する指導と評価の充実〉

5年生「ソフトバレーボール」の学習で，子どもたちは「ブロックをかわすためにはどうすればよいのか？」という問題意識をもった。全体で交流しながら実際の動きをスローモーションで行わせたり，棒の先にボールを固定して場面を止められるようにしたりしたことで，フェイントや速攻の有効性に気付くことができ，それぞれのチームで作戦を工夫することにつながることができた。このように，子どもの問題意識を焦点化することや，どの子も共感したり，よさを共有できたりするような手だてを教師がもつことが，確かな体育の力を育むために有効であることが明らかになった。

課題は，友達同士よりよい動きについて進んで見合ったり，高め合ったりするような姿を引き出せなかったことが少なからずあったことである。子どもの問題意識に沿って，しっかりと解決に導く場の構成や，子どもの発見を引き出す話し合いにおける教師の関わりが大切である。子どもに確かな体育の力を育むには，自分たちで運動の課題を見付け，よりよい運動ができることが大切である。さらに，自分たちの運動のよい変化を実感することで，子どもたちは成就感や達成感を味わうことができると考える。

〈幼小連携〉



保育・授業参観交流や研修会を実施し，校種を越えて運動場面における発達段階ごとの具体的な子どもの姿や有効な手だてを明らかにできた。運動遊びで高い台に登ろうとする園児に「手をグイとしたに強く押すように登ってごらん」といった，小学校でも行っている声掛けができ，幼小を通して継続して指導できるといった取り組みも行えた。今後も，継続的に少しずつ交流の幅を広げていき，実践を積み重ねていきたい。

研究主題

自ら進んで学び ともに高め合う体育活動

北海道学校体育研究連盟十勝支部 更別村立更別小学校

発表者 教諭 青 木 真 理

1 十勝支部の研究について

(1) 研究主題の設定の理由

ア 支部の研究経過から

十勝支部は、平成10年度に立ちあげ、平成14年度から本格的に授業研究を行ってきた。部員が約15名と少数ではあるが、結成以来精力的に研究に取り組んでいる。

平成17年度から平成20年度までは、課題解決的な学習を基本とした「十勝の授業の型を作る」ことに主眼を置いて研究を進めてきた。「準備運動」から始まり、「課題把握」「全体交流」「課題解決」「技能定着」の流れを作ることだけでも多くの課題があったが、他の支部開催の全道大会への参加や、部員による授業研究を進めていく中で、「分かったからやりたい」「みんなといっしょにできたから楽しい」という目指す授業の姿が明確になってきた。平成20年度には、道連盟、他支部の協力を得て、結成4年目にして「第45回北海道学校体育研究大会十勝大会」を開催した。このことが十勝の体育において、一つの節目を迎えることと同時に、今後の十勝の体育の在り方について多くの示唆を得る貴重な機会となった。

第45回北海道学校体育研究大会十勝大会 成果と課題

〈成果〉

- 仲間とともに本気で学び合い、分かってできる喜びを感じる教材の工夫（タスクゲームや場の設定）が、十勝の主張である「自ら進んで学び、ともに高め合う体育活動」に結びつくものと確信された。
- 教え合いや励まし合い、補助などの自己評価や相互評価に関わる取組が、少しずつ子どもたちの運動の見方を育むことにつながり、分かってできる学習に近付くことができた。

〈課題〉

- 「なぜ、その動きが必要なのか」「どうしてそこに動くことが大事なのか」という理由や納得をともなった認知学習をさらに進め、分かったからできるという授業づくりを目指していく必要がある。
- 授業評価による授業改善を行うに当たっては、常に子どもの側に立って学習を進めていく教師の姿勢が重要となる。場面に応じた教師の姿勢を追求すること、及び効果的な授業評価の在り方を検討していくことが必要である。

H20.11.27 十勝支部研修会より

平成21年度からは、全道大会の成果と課題を受け、次のような方向性をもって取り組んでいる。

☆子どもたちに運動の楽しさを十分に味わわせ、自ら進んで運動やスポーツに親しむ資質や能力を育む。

☆全体交流や小集団交流を通して認知学習を進め、「分かる」「できる」が味わえる授業の実践研究をする。

イ 児童生徒の実態から

昨年度末、部員を対象に、新小学1年生、新中学1年生の体力・技能の様子についてアンケートを取り、以下のような結果を得た。

- 「投げる」「蹴る」などのボール操作技能が依然として低い傾向がある。
- 保育所、幼稚園において体力向上に向けた取組が盛んに行われてきており、成果が見られるものの、持久力走に取り組んだ園もあれば、マット運動に特化して取り組んできた園もあるなど、その内容にはばらつきが見られる。
- 全般的に、体を使って遊んで身に付くような動きが身に付いていない。
- 小学校では、ルールを工夫してボールゲームに取り組んできており、中学校でも意欲的に取り組んでいる。反面、バスケットボールやソフトボールなど既存のスポーツ種目に関する用語やルールを知らないこともある。

この結果から、子どもたちには多様な運動経験を積ませること、安全面に十分配慮しながら「できる喜び」を十分に味わわせること、実技だけではなく各運動・スポーツの基礎知識や特性をしっかりと指導することなどを研究に取り入れている。これは、平成20年度の全道大会、またそれ以降も十勝支部で目指してきた「分かる・できる体育授業」の展開が必要不可欠であることを示すものと考えている。

(2) 目指す児童生徒像

☆進んで運動に取り組む子

○動き方を工夫する子

◇動きを高められる子



目指す授業像

☆夢中になって運動に取り組める授業

○自分に合った課題解決活動が行える授業

◇仲間と関わり合いながら、動きを身に付け、高められる授業

(3) 研究仮説

○誰もが楽しめるよう教材・教具を工夫することにより、進んで運動に取り組ませることができ。

○児童生徒の実態把握や運動の特性に合わせた学習過程の工夫により、子どもたちに自ら課題をもたせ、その解決の仕方を工夫させることができる。

○意見を交流したり教え合いなどができるよう学習形態や場を工夫することにより、仲間と関わり合いながら、運動に関する知識や技能を習得させることができる。

(4) 研究の視点

研究の視点1

「分かる」「できる」が
実感できる教材化

〈児童・生徒の実態の把握〉

○既習事項、運動技能実態の把握

〈動きの分析と教材の工夫・開発〉

- 運動の特性の分析と身に付けさせたい動き、目標の設定
- 児童・生徒の実態に合わせた教材の工夫、開発

研究の視点2

よりよい動きを追求し、
学び合う授業づくり

〈課題解決的な学習過程の構築〉

○課題把握、課題追求、課題解決の3段階の場面設定

〈学び合う学習形態の工夫〉

- 動きや考えをお互いに評価し合える場面の設定
- 全体で行う課題の把握、知識の習得
- 小集団で行う教え合い、動きの習得

2 研究の具体

(1) 実践例Ⅰ 〈「分かる」から「できる」過程を重視した事例〉

第3学年 単元名「マット運動」

更別村立更別小学校 第3学年 指導者 青木 真理

ア 授業のねらい

本実践の学級は、運動経験の多い子と少ない子の二極化が顕著であった。そこで、運動を苦手としている子どもたちも、動き方や技のコツが分かり、さまざまな場で練習したり仲間と教え合ったりして、できた喜びを味わわせることができるような単元構成や授業構成を考えた。

単元の初めは、ゆりかごやカエルの足打ちなどを通しての感覚づくりや、前学年までに取り組んだ技を繰り返したり条件を変えたりしながら、前後転の回転の勢いを高めることを目指した。

4時間目以降は、「きれいさ」「ダイナミックさ」など技のできばえを意識させたり、新しい技を紹介する場面をつくり、「～な技に挑戦したい」「もっと上手になりたい」という新たな欲求が生まれるようにした。そして、「どう動くといいか」を全体交流で話し合い、技のポイントを見付け（分かる）、練習して動きを身に付けたり高めたりする（できる）授業づくりを行った。

イ 単元構成

単元の目標

- ・仲間と協力して、安全に気を付けながら楽しんで学習することができるようにする。
- ・技のポイントを理解し、自分の課題に適した場を選択して技に取り組むことができるようにする。
- ・基本的な回転技ができるようにする。

単元構成

時	め あ て	主な学習活動	・支援 ◇評価
1 2 3	・オリエンテーション ・前学年で取り組んできた技を行う。 ・できる技にチャレンジする。 ・友達と教え合いながら練習する。	・マット運動の学習の進め方や約束を確認する。 ・今まで学習した技に取り組む。 ・前転、後転を行う。	・感覚づくりの運動を取り入れる。(かえるの足打ちなど) ◇約束を守り、友達と助け合って技の練習をしようとしている。(観察)
4 5	・「できる技」を「もっとできる技」にする。 ・新しい技にチャレンジする。	・どんな姿が「きれい」「ダイナミック」といえるか全体交流の場で確認をする。 ・開脚前転、開脚後転を行う。 ・課題を設定し、解決できる場で練習する。	◇自分の課題に合った練習の場を選んでいる。(学習カード)
6 7	・技を組み合わせて行う。	・練習してきた技、できる技を組み合わせる。	◇自分の力に合った技の組み合わせで演技できる。(観察)

ウ 授業の実際

- ・単元の初めにマット運動の動きづくりの時間を設定し、子どもたちに十分に取り組ませたことにより、どの子にも技能の高まりが見られた。4時間目以降に新しい技に挑戦した時にも回転力が高まったため、容易に技を身に付けることができた。
- ・イラストなどを用いながら技のポイントを気付かせたことにより、理解してから練習に取り組むことができた。また、坂道マットや段差を付けたマットなど技能に応じた場作りによって、「できた」という気持ちを味わわせることができた。
- ・学習カードや掲示物を使って一人一人が課題をもてるよう工夫したことにより、共通する課題をもつ仲間が集まり同じ練習をすることができた。また着目点を子どもたちに理解させることにより、教え合いなど仲間との関わりが生まれ、技能習得につなげることができた。

↓

イラストや黒板を用いた視覚情報を活用することにより、技のポイントを理解させることができた。また、場の設定を工夫して複数準備し、共通する課題の子どもをグループ化することにより、互いに教え合いながら技能を習得することができた。十勝支部が考える「分かったからできる」がよく表れた実践であった。

(2) 実践例 〈仲間との交流を重視した事例〉

第3学年 単元名「フラッグフットボール」

幕別町立札内南小学校 指導者 細田 泰稔

ア 授業のねらい

フラッグフットボールは、攻守の切り替えの時間を確保することができ、児童が考えた作戦を生かしやすい教材である。その特性を生かし、作戦の立案、改善、工夫などの活動を重要な交流の場面として位置付けることにより、伝え合い、教え合い、励まし合いなどの仲間との豊

かな関わりが生まれると考えた。そこで本単元では、3～5時間目にランプレー・パスプレーを学習させ、その後は、それらを加えながら作戦が工夫できるような計画を立てた。

また、ボールをもらうためにディフェンスをかわすことや、動きながらボールを受けることは、サッカーやバスケットボールにもつながっていくことから、ボールを持たない時の動き方に視点を当てた学習内容を考えた。

イ 単元構成

単元の目標

- ・味方に正確なパスをすることができるようにする。
- ・作戦を工夫して考えることができるようにする。
- ・ボール保持者と自分の間に守備者がいないように移動したり、ボールを受け取ったりすることができるようにする。

単元構成（8時間）

時	めあて	主な学習活動	・支援 ◇評価
1 ・ 2	・フラッグを取られないように走ったり、正確にボールを投げたりする。	・フラッグフットボールのルールや約束を知る。 ・1対1でしっぽを取られないように、ゴールする。 ・的当てボール投げをする。	・フラッグを取られないで逃げる運動を意識させる。 ◇ルールやマナーを守り、友達と助け合って運動しようとしている。（観察）
3 ・ 4 ・ 5	・2対1や3対2を通して、パスプレーやランプレーでゴールをねらう。 ・いろいろな動き方でディフェンスをかわす。 ・良かった動きを作戦として記録する。	・2対1や3対2で、ボールを持って走り、しっぽを取られないようにゴールする。（ランプレー） ・2対1や3対2で、ボールをパスして、しっぽを取られないようにゴールする。（パスプレー）	・動き方が分からない子どもには、コート図に示したり一緒に動いたりして理解させる。 ◇ボール操作やボールを受けるための動きができる（観察）
6 ・ 7 ・ 8	・フラッグフットボール大会を行う。 ・試合の前に作戦を確認する時間を確保し、作戦を試合に生かす。	・チーム編成をして4対4で試合をする。 ・ランプレーやパスプレーの作戦を考えて試合に生かす。 ・成功した作戦を交流する。	◇簡単な作戦を立てている。（学習カード）

ウ 授業の実際

- ・作戦をグループごとに考える場面では、児童が自ら進んで作戦を考え、グループの児童とともに作戦を練り合う場面が見られた。特に、「～のときは、…した方がいいね」など、動き方を想定する内容が多かった。1プレイごとにチームが集まって、どの子も作戦を考えたり、作戦通りに動いたりして、互いに学び合う場面を多く見ることができた。
- ・ボールを持たない動きについては、選択肢（前後、左右）を与えたことでディフェンスの状況に応じて判断し、動く児童が現れるようになった。また、試合では、作戦を立てたことによって全員が作戦を意識して動くようになり、立ち止まってしまう子はほとんど見られな

かった。

- ・ 今後はパスプレーやパスの技能をいかに発展させていくかが課題となった。



自分や仲間の動き方がはっきりと分かるように作戦ボードを活用したり、各チームの練習時間の確保をしたりすることにより、子ども同士の豊かな関わり合いが生まれた。また、技能が高まるにつれて、複雑な動きを必要とする作戦が増えてきたが、子ども同士の教え合いや励まし合いも同時に増えることとなり、技能の習得とともに、仲間と一緒に運動する楽しさを十分に味わえる実践となった。

(3) 実践例Ⅲ 〈冬季スポーツにおいて、運動の生活化を目指した事例〉

第4学年 単元名「スケート」

新得町立屈足南小学校 指導者 児玉 祥洋

ア 授業のねらい

十勝では自然環境を生かしたスポーツとしてスケートが盛んに行われており、もっとも代表的なものは、スピードスケートである。しかし、近年、スケート技術の専門性の高まりやスケートの機能が変わる（スラップの登場）など、スケートが「専門的な競技」として見られるようになり、子どもたちからスケートが次第に遠ざかっている実態も見られる。

十勝の多くの小学校では、習熟度別によるスケートの学習を行っている。そこで下記のような技能レベル表を作成し、6年間の教育課程を作成した。これを用いることによって、子どもたちがそれぞれにもつ現在の技能を使って、スケートを十分に楽しめることを学ばせ、放課後や休日にもスケートを楽しもうとする意欲がもてるようにしたいと考え、実践を行った。

6年間の教育課程

学年	技能	学習の視点(子ども)	重心からみる技能発達	練習内容展開例
1・2年生	初心 初級	スケートになれることで、「氷上を滑って移動する」楽しさを味わうことができる。	重心は体の中心 ※左右の動きが生まれにくく、よちよちと前進するのみ。	・リズムに合わせてその場足踏み ・両足をそろえて、後ろから押してあげる。 ・安全な転び方を知る。 ・ハの字で前進をする。 (スケートをおいていくイメージ)
3・4年生	中級	姿勢や重心の移動を用いて、よりスピード感を得て楽しく滑走することができる。	前後の重心移動 ※低い姿勢になることにより、左右の重心移動が可能になる。	・ハの字で前進をする。 (スケートを滑らすイメージ) ・コースバリエーションを作る。 (ジグザグや狭いコースなど)
5・6年生	上級	コーナーやスタートの方法を知り、自己の記録を短縮することでスケートに興味をもつことができる。	重心移動の往復 ※重心を連続して移動させることで、ダイナミックな動きが可能になる。	・低い姿勢と蹴って前進する意識 ・足の引きつけ動作 ・コーナーの練習 ・リンクを自在に滑る技術 ・フォームの固定

イ 単元構成

単元目標

- ・安全に気を付けながら、楽しんで学習することができるようにする。
- ・スピードスケートの特性を理解し、技能の向上を目指そうとする態度を育てる。
- ・短距離走，長距離走において記録・持久力の向上を実感できるようにする。

単元構成（10時間）

時	めあて	主な学習活動	・支援 ◇評価
1 ・ 2	・前学年までに行ってきた技能を振り返る。 ・安全なスケートを心がける。	・スケートの技能の振り返りと予想される危険についての事前説明を行う。 ・姿勢やスタンスの確認を行う。	◇用具の安全に気を配ろうとしている。（観察）
3 ・ 4	・前に強く進めるための技能を身に付ける。 ・友達の姿を見て推進力を得るための技能を理解する。	【推進力を得る】 ・ハの字でリンクに立ち，スケートのインエッジを使いながら氷をとらえ（蹴る），推進力を得る。 【夢中になる発展教材】 ○人間スクーター，テンポ走	・運動量を確実に確保するためのコースレイアウト ◇インエッジを使って滑走することができる。（観察）
5 ・ 6	・片足に重心を乗せて滑走する技能を身に付ける。 ・友達の姿を見て，滑走するための技能を理解する。	【安定した滑走】 ・蹴った力を反対の足にのせ，片足で長く滑っていく技能の習得（短い距離から次第に長く乗っていけるための場面設定） 【夢中になる発展教材】 ○片足滑り，切り替えポイント表示	・滑走するための広い場を選び，安全を確保させる。 ◇友達の動きを見て教え合うことができる。（学習カード・観察）
7 ・ 8	・学習してきたことを組み合わせ，スケティングをできるようにする。	【まとめ】 ・推進力を得ることと長く滑走することを融合させる。 【夢中にさせる発展教材】 ○ワールドレコードに挑戦	・技能を組み合わせ連続できるように意識させる。 ◇体重移動をさせながら長い距離を滑走できる。（観察）
9 ・ 10	・中学年の競技会種目を体験し，記録会に向けた練習を行う。 ・自己目標を設定する。	【記録会に向けて】 ・500m（短距離）1000m（長距離）を体験し，記録会に向けた自己目標設定とレース展開をデザインする。	・自己目標を練習結果をもとに設定させる。 ◇規則やルールを守り，全力で滑ろうとする。（観察）

ウ．授業の実際

スケートの学習においては、6年間の系統の中で1年ずつ技能を習得していけるよう、各学年での技能の特性を子どもたちに分かりやすく説明し、練習を行った。気温が氷点下中の学習のため、全体への説明は短時間で明確になるよう心がけた。また毎時間の技能ポイント（互いに見合う視点）を提示し、2～3人グループで滑走しながら教え合うように指導した。少年団に入団して経験が豊富な児童と、学校体育でしか経験しない児童との授業での格差は非常に幅広いものがあるが、お互いが「授業」の中で豊かに関わり合いながら成長していく姿が認められた。

3 研究の成果と課題

〈成果〉

- ・十勝が考える課題解決的な学習を基本とした授業の型が年々洗練され、研究部員内にとどまらず、管内の先生方に広く浸透しつつある。
- ・動きの分析や、児童・生徒の実態に合わせた教材の工夫・開発によって、子どもたちの運動への意欲は十分に高められることが確認された。
- ・全体交流で「分かる」、小集団交流で「できる」という流れを意識した学習過程により、互いに教え合う姿が見られ、技能習得につながれることが確かめられた。

〈課題〉

- ・仲間と本気になって学び、できる喜びを味わうことができる、さらには日常的な運動や遊びへとつながっていくような教材開発を今後も進める。
- ・動きの分析から、系統性を考慮した単元構成及び年間指導計画を作成するなど、系統立てについて、さらに研究を深める。
- ・授業評価の方法、また次時への活用の仕方、評価規準の設定を含め、今後も研究が必要である。
- ・より多くの先生方が、質の高い体育授業を展開できるよう、研究してきた成果を十勝管内の先生方へ還元していく。

十勝支部では、もう一度十勝で全道大会の開催をしようと盛り上がってきている。今までの成果をもとにさらに研究を進めながら、ほっぺを赤くし、汗で髪の毛を光らせるような元気いっぱいの子どもたちを育てていきたい。

【研究主題】

何度も挑戦し，仲間と動きを高め合う体育学習

【日 程】

	9:40	10:45	11:40		13:00	14:15	14:55	
9:00	10:25	11:30	12:00	13:10	14:35	15:00		
受付	第一次公開授業	休憩	第二次公開授業	移動	VTR視聴	昼食休憩	開会行事	研究発表協議Ⅰ
								研究発表協議Ⅱ
								指導講評
								閉会行事

【会場案内】

**札幌市立
宮の森小学校**
〒064-0954
札幌市中央区
宮の森4条6丁目1-1
TEL：011-631-6356

【アクセス】
地下鉄東西線
「西28丁目駅」下車
↓
徒歩15分

JRバス
～(西21)山手線
～(環20)宮の森環状線
「西高前」下車
↓
徒歩2分

札幌市立宮の森小学校



所在地	札幌市中央区宮の森4条6丁目1-1
電話	(011) 631-6356
学校長	飯沼 晃
児童数	634名

◎教育目標

「かしこく」「やさしく」「たくましく」

- ・ **確かな学力** 広く知性を磨き、自主的創造的に立ち向かう子どもを育てる
- ・ **豊かな人間性** 自然や人間を愛し、思いやりある徳性豊かな子どもを育てる
- ・ **健康と体力** 健康の保持と体力の増強に努め、強い意志と行動力をもつ子どもを育てる

◎特色

「子どもの将来を見通しながらの教育」と「子どもや保護者にとって『魅力ある学校』を創造」を合言葉に、異文化理解学習や全校合唱（全校タイム）、異学年交流（なかよしタイム）などの教育活動を積極的に行っています。また、「宮小運動大好キッズ」という活動を設定し、子どもたちが進んで縄跳びに取り組む姿が日常的に見られます。

授業者の紹介



第3分科会 授業①

札幌市立宮の森小学校

石村 宣人

3年1組 担任

小中学校ではバスケットボール，高校では陸上400mの選手でした。大学ではラグビーと出会い，ウイングとして頑張りました。

授業の見どころアピール

高学年の「走り幅跳び」につながるような動きを意識しつつも，3年生として跳ぶことの楽しさを味わいながら，何度も挑戦したくなるような授業を展開します。子どもたちが友達と声をかけ合い，高め合う姿をご覧ください。

ひとりごと

子どもたちと一緒に，真剣かつ楽しみながら授業を公開したいと思います。ぜひご覧いただきたくさんのご意見をいただきたいと思います。



第3分科会 授業②

札幌市立宮の森小学校

山崎 稔英

6年1組 担任

野球，器械体操，バスケットボールで汗を流してきました。

現在は，サーフィンやスノーボードなどにも取り組んでいます。

授業の見どころアピール

運動の楽しさや喜びを味わうことを大切にしながら技能を身に付けさせることを第1に考えています。子どもたち一人一人が役割をもちゲームに参加することで，楽しさや喜びを実感する場面をお見せできるよう頑張ります。

ひとりごと

日本全国の先生方に授業を見ていただける機会を得ることができ，大変嬉しく思っています。当日は多くのことを学びたいと考えています。よろしくお願いします。

研究主題

何度も挑戦し、仲間と動きを高め合う体育学習

札幌市立宮の森小学校

1 研究の概要

(1) 研究主題設定の理由

ア 本校の研究経過から

本校では、平成23年度に行われた実践発表会まで、重点目標「感性豊かに関わり合う子どもの育成」の下、子どもが実感を伴いながら学習を進め、達成感を味わう体験を大切にしてきた。そのため、「実物を見て触る。」「現地でその様子を肌で感じる。」「体験する。」などの五感を育む活動を通して、子どもの感性の高まりを支えてきた。また、各教科において「自分の思いを伝え合う姿」が生まれる学習展開を工夫し、主体的に課題解決に臨む子どもを育てている。

平成24年度は、子どもたちに学びの基本を身に付けさせるための手だてに着目し、①課題の吟味（子どもの意識と一致しているか）②発問の吟味（多様な答えのある発問かどうか）③既習の活用（見通しがもてる）④できる、分かるからの伝達（自己有能感を高める）というポイントで、子どもと授業を見つめ直そうと取り組んでいるところである。

イ 児童の実態から



「先生、検定お願いします。」休み時間に開放される屋上では、なわ跳びに自分から取り組む子どもの姿が多く見られる。一回旋二跳躍を心地よいリズムで楽しむ1年生から、「はやぶさ」や「三重跳び」など、難易度の高い技に挑戦する高学年までが思い思いになわ跳びを楽しんでいる。10年以上前より学校を挙げて取り組んでいる「宮小運動大好きキッズプロジェクト」の成果が、子どもたちの姿からうかがうことができる場面の一つである。毎年全校児童に、レッド→イエロー→ブルー→グリーン→パープルへと発展していくなわ跳び検定カードを配布し、教師が子どもの取組を見守り、励ますことで、日常的に運動に取り組む姿の増加につながっていると考える。

また、体育授業では、運動のコツを見付けるために何度も動いて試す姿や、よい動きの友達から学ぼうとする場面が、どの学級でも見ることができる。学年ごとに打ち合わせ、目の前の子どもたちに適した場や用具を検討したり、思考を促す学習カードや交流場面を設定したりする取組が、体育学習における課題解決を楽しむ素地を養っているのである。

課題としては、子どもたちがより積極的に多岐にわたる運動に対し、日常的に取り組もうとする姿の増加が挙げられる。豊かなスポーツライフの入口ともいえる小学校時代に、様々な運動がもつ特性と、その楽しさを実感できるよう研究を深める必要がある。

(2) 目指す児童像

生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てることは、体育科の大きなねらいの一つである。運動がもつ魅力を子ども達が実感する経験の積み重ねが、重要であると本校体育部では捉えている。

「課題解決＝困り感を与える」だけでは「やらされる体育」に陥ってしまう。これでは、運動の魅力に触れる前に子どもたちの心が体育から離れていってしまいかねない。

本校体育部が目指す児童像は、「もっと上手になりたい。」と自ら願い、「そのためのコツは何だろう？」と、何度も追求し実際に動きを高めていく姿である。

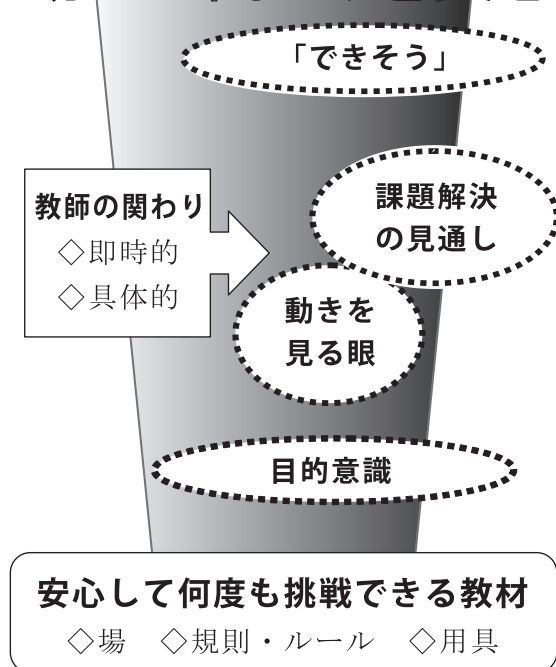
また、「こうするともっとよくなる。」や、「自分の動き方のどこを改善するともっとよくなるのか教えてほしい。」など、必要感をもって小集団や学級の中で自分の思いを伝え合おうとする姿が共に運動する喜びにつながるとも考えている。



(3) 研究の仮説

何度も挑戦したくなる教材と仲間と高め合う交流場面の設定が、動きの高まりにつながる。

日常化への意欲 動きの高まりを実感



「もっとうまくになりたい。」と子どもが運動に対して願いをもって、初めて主体的な学びが成立する。明確な願いをもちながら単元を通して学習に参加することで動きの質が高まっていくと捉えているからである。

そのために本校体育部では、「安心して何度も挑戦できる教材」の開発を重視している。失敗を恐れずに何度も挑戦できる場やルールの保障は、主体的な学びにつながると考える。加えて、安全な教具等の工夫からも、運動に対して、より積極的に関わる姿を引き出すことができる。

同時に、即時的かつ具体的な教師の関わりも重要である。なぜならば、実際に動いているときの自分の姿を客観的に見取るとはとても難しいからである。そこで、教師がその子の追求しようとしていることや動き方のよい部分を見取り価値付けていくことで、個の願いを自力で実現していく学びを支えていく。この積み重ねが、漠然と「できた、できなかった。」といった自己評価から、「ここまでできるようになっ

た。」と、自分の伸びを実感する姿への変容につながると考える。

また、本時の課題とのつながりを意識した交流場面の設定と展開は、「ぼくの考えと〇〇さんの意見は似ている。」といった共通理解や、「こんなコツもあるのか…。」と新たな見方を与える場となるのである。全体交流は、課題解決のきっかけであり、真の解決場面はその後の動きにあ

ると本校体育部はとらえている。そのため、交流で出されたコツを実際に動いて確かめる場も大切にしていきたい。これらの手だてが、「できそうだ。」という、見通しをもち臨む姿につながると考える。

（４）研究の視点

〈視点１〉 積み重ねが活きる教材化

- ☐ 児童の実態と身に付けさせたい技能
- ☐ 何度も挑戦したくなる教材
- ☐ 既習が活きる単元構成
- ☐ 評価規準・評価方法

〈視点２〉 問題意識を共有できる学習展開

- 学習課題の吟味
- 言語による交流活動
- 動きを通した交流活動
- 評価活動

２ 研究の具体

（１）実践例Ⅰ 第２学年 単元名 「鬼遊び」

ア 授業のねらい

本単元「力を合わせて！たからはこびゲーム」は、一定時間内にチームで協力して、何個の宝を取ってくるかを競うゲームである。バスケットボールのコートを利用し、鬼のエリアを２か所設定した。それぞれのエリアに鬼は１人しか入れない規則にすることで、攻め手は常に数的優位となる。それにより、子どもは鬼の隙をついたり、協力して宝を運んだりできるようになる。

本時では、１人１個だけ運べる得点の高い「赤い宝」が登場する。子どもたちは、１個でも多くの赤い宝を通せるように作戦を立てると考えた。また、作戦は、毎時間の始めに行う「スキルアップタイム」での動きが活かせるように単元を構成した。

【単元の目標】

- ・身をかわず、追いかけるなどをして、簡単な規則の鬼遊びができるようにする。【技能】
- ・きまりを守ったり、勝敗を受け入れたりしながら、仲良く遊ぼうとする態度を育てる。【態度】
- ・宝取り鬼の方法が分かり、攻め方を決めたり見付けたりできるようにする。【思考・判断】

本単元では「成功体験」をどの子にも味わえることを目指し、教材化・単元構成・学習展開の工夫に努めている。

【視点1 積み重ねが生きる教材化】

【何度もチャレンジできる教材化】

スキルアップタイムでは、本単元に必要な素早い切り返しや、緩急をつけた身のかわし、鬼を見てどちらに動いたらよいのかを判断できる目を育てようと考えた。

今回準備した教材は、「1回タッチされてもゲームを続けられる」「タッチされてもスタートに戻る」などの工夫をしているので、失敗しても何度も取り組むことができた。「さっきは鬼の前で止まってしまったから、今度は走り抜けよう。」「どれくらいのスペースがあったら通り抜けられるのかな。」と、繰り返し試すことで、成功体験をたくさん積み重ねようと考えた。そうすることで、自信をもって取り組む子どもが一人でも多くなることを期待した。

【視点2 問題意識を共有できる学習展開】

【規則の変更が、多様な作戦を生む】

本時では赤い宝が登場し、1ゲームに1人が1個ずつ運ぶことができるようにした。配点を1個10点とすることで、鬼はなるべく赤い宝を運ばれないように動くことになる。また、攻め手は赤い宝を持った仲間を通すために、2人同時に動いたり、フェイントを入れたりする作戦を試すと考えた。

全体交流では、赤い宝を持った仲間を通り抜けさせるための作戦について焦点を当てた。攻め手が同時に動いたり、壁の役になったりするよさに気付くことができた。さらに作戦タイムを設け、動き方を確認することで、どの子も見通しをもってゲーム2に臨めるように考えた。

イ 単元構成

時	1	2	3	4（本時）	5
主な学習活動	スキルアップタイム ◇通り抜け鬼 ◇一人鬼 ○「力を合わせて！宝運びゲームをしてみよう」 ○赤い宝（10点）の出現 きまりを覚えて、ゲームをしよう。 どうしたら、うまく通り抜けられるかな？ どうしたら、みんなが赤い宝を運べるかな？ ◇鬼をおびき寄せて ◇一斉に動いて ◆赤い宝の子をガード作戦 ◆ブロック作戦 鬼をおびき寄せたり、鬼が見ていないときをねらうといいね。 一人ではなく、チームの作戦で動くといいんだね。				

ウ 授業の実際

◇視点1に関わって

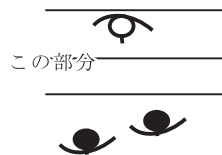
【成 果】

- ・ゲームの規則が比較的簡単で、すぐに子どもたちが楽しめるようになった。
- ・スキルアップタイムでは、切り返しの動き、スピードに乗った動きで鬼を攪乱させる動きができるようになった子どもが多く見られた。
- ・攻め手が常に数的優位になるゲームなので、上の学年でも学習する考え方を提示できた。



【課 題】

- ・鬼のエリア際に立ち、どうしてもできなくなる子どもがいた。スピードに乗って鬼エリアを通り抜けるために、鬼エリア前にさらに線を加え、そこから走れるようにするとよかった。



◇視点2に関わって

【成 果】

- ・赤い宝を登場させることで、鬼は赤い宝を持つ子にねらいを絞ると考えた。本時では子どもたちに狙い通りの課題をもたせることができた。
- ・赤い宝を持つ最後の一人の攻防が生まれた。問題意識をもち、必要感のある交流とすることができた。
- ・子どもたちは、交流後に各チーム練習時間を設定し、「自分たちならこう動く。」というイメージをもたせてゲーム2に進むことができた。

【課 題】

- ・作戦カードを作り自分たちの作戦を視覚化させたかったが、時間を保障できなかった。
- ・本時に学んだ「ガード作戦」に固執させすぎて多様な作戦が生まれづらい結果になってしまった。教師も子どもも、作戦に対してもっと柔軟に考える心構えが必要だった。

(2) 実践例Ⅱ 第5学年 単元名 「ゴール型(バスケットボール)」

ア 授業のねらい

本単元「宮小バスケ(3 on 2)」は、パスやドリブルなどの基本的なボール操作やボールを持たないときの動きによってシュートゾーンまでボールを運び、得点することを楽しむゲームである。オフェンスが数的優位になるよう速攻型のゲームとする。状況判断を容易にすることで、どの子もパスをつないだり、シュートを決めたりする楽しさを味わうことができると考えた。

【単元の目標】

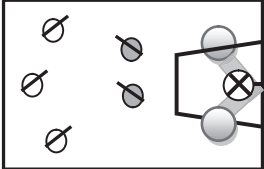
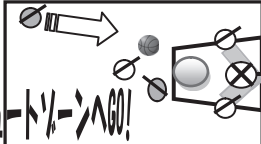
- ・簡易化されたゲームで、ボール操作やボールを受けるための動きによって攻防をすることができるようにする。 【技能】
- ・進んで取り組み、ルールを守り助け合って運動をしたり、場や用具の安全に気を配ったりしようとする態度を育てる。 【態度】
- ・ルールを工夫したり、自分のチームの特徴に応じた作戦を立てたりすることができるようにする。 【思考・判断】

繰り返し取り組むことで自信をもたせる

前時では、シュートゾーンでシュートをすると、点数をたくさん取れることに気付かせる。本時の速攻の場面では既習を活かし、パスやドリブルをして、素早くシュートゾーンに移動する姿を期待している。

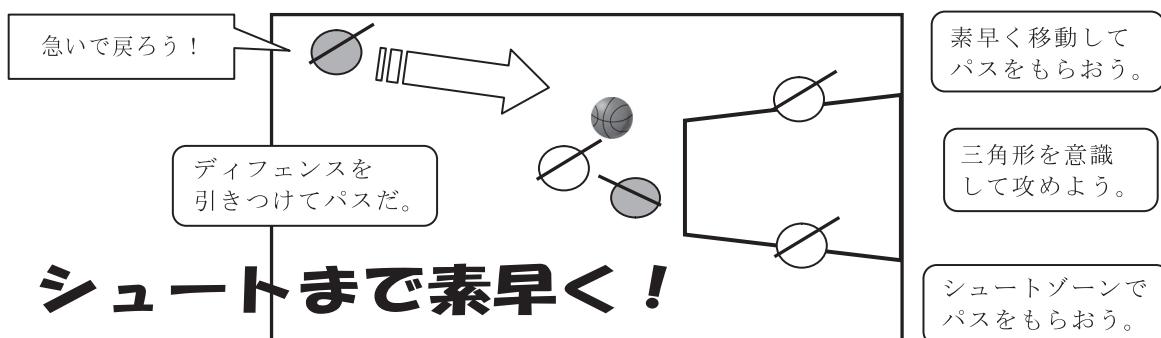
速攻型のゲームを取り入れることで問題意識の共有を図る

素早くシュートゾーンにボールを運ぶ動き方を確かめ合うために、作戦タイムを設定した。この手だてにより、ゲーム②では、お互いの役割が明確になり「ドリブルしてディフェンスを引き付けるよ。」「パスをしたらシュートゾーンに走りこむよ。」など、アドバイスし合う姿が生まれると考えた。

時	1	2	3	4	5（本時）	6
主 な 学 習 活 動	スキルアップタイム ◇ドリブル ◇パス ◇シュート					
	○宮小バスケ[3on2]をやってみよう。		○「速攻」に挑戦だ！			
	 シュートゾーン		得点を増やすためには？ 【パス】 相手がいないところで受けよう。 【GO】 シュートゾーンから打てば確率UPだ！		速攻で得点を増やすには？ 	
	もっと得点を入れたいな。		パスをつないでシュートゾーンへ運ぶ動きをつくりたいぞ。		「速攻」で得点するには、素早くノーマークの仲間を見つけてパスなんだね。	

ウ 授業の実際

ディフェンスに追いつかれる前にシュートをするにはどうしたらいいかな？



◇視点1に関わって

【成 果】

- ・スキルアップタイムで練習を重ねることで基礎技能（パス・ドリブル・シュート）の高まりが見られた。
- ・シュートゾーンでシュートをすると、ジャマー（相手）に妨害されないので、積極的にシュートゾーンからシュートをしようとする姿が見られた。
- ・たくさん点数を取るため、素早くドリブルやパスをしてシュートゾーンに移動することができた。また、てきぱきと行動することで時間を無駄にせずにゲームに取り組むことができた。

【課 題】

- ・子どもの実態に応じて、ルールを変更（シュートゾーンのエリアを狭くするなど）してもよかった。また、リバウンドなどの要素や発展的な技能（ランニングシュート）にも挑戦させるとよかった。

◇視点2に関わって

【成 果】

- ・数的に優位だということを理解し、まてまてマン（相手）に追いつかれる前にシュートゾーンにボールを運ぶことの重要さに気付くことができた。
- ・素早くシュートゾーンにボールを運ぶためには、チームで作戦を立てる必要があることに気付き、作戦タイムで役割分担をすることができた。
- ・作戦タイムで役割分担をしたことで、「シュートゾーンに走って。」「ヘイ！パス。」などという声を掛けることができた。

【課 題】

- ・全体交流では、素早くシュートゾーンにボールを運ぶことを、動きを通して確かめると分かりやすかった。
- ・子どもたちにもっと声を出させるために、得点板を使用し点差を意識させるとよかった。お互いに競わせることも一つの方法だと感じた。



3 研究の成果と課題

(1) 視点1について

視点1 積み重ねが生きる教材化

願いが生まれる教材，安心して何度も挑戦できる教材が主体的な姿を生む。

2実践とも，単元の目標と子どもの願いが同調するように，規則（ルール）と場や教具を工夫することができた。

2年生「ゲーム（鬼遊び）」の実践では，一般的な一定方向へ通り抜ける鬼遊びの型からサーキットのように周回する型へ改善することにより，積極的に鬼の隙を見付け通り抜けようとする姿が見られた。また，5年生「ゴール型（バスケットボール）」では，シュート動作が相手チームに邪魔されない区域を設定することで，「チームの動きでボールをシュートゾーンまで運ぼう。」という単元を貫く願いを生むことができた。

今後も，運動の特性や児童の実態，教師の願いが一致するような教材化を図っていく必要がある。

(2) 視点2について

視点2 問題意識を共有できる学習展開

子どもの願いを想定した課題設定と，見通しをもった交流が動きを高めていく。

明確な学習課題の設定（2年「みんなで赤い玉を取りに行こう。」5年「速攻でたくさん点数を取ろう！」）に，規則（ルール）の付加や変化を加えることで，どの子にも問題意識が生まれるように展開を工夫した。

2年生の鬼遊びでは，全員が赤い玉を持ち帰るとボーナス点を獲得できる規則を追加した。この手だてにより，以前にも増して「チームで連携する」動きを意識する姿が見られた。5年生のゴール型では，3対2のゲームから，守り手の1名が後方から追いかけてくるルールに変化させた。これが「ディフェンスがそろそろ前にボールを運ぶには？」という問題意識につながった。

今後は，全体交流時におけるネームプレートの活用など，子ども一人一人がどのような方法で課題解決に向かう姿が見える展開の工夫が必要になってくると考えた。



言葉による交流活動では，2実践とも多くの子が自分たちの作戦について思いを伝え合っていた。2年生の鬼遊びでの，ゲームスタート直前に，隣の子の耳元で作戦を話す姿が代表的な例である。5年生の実践では，シュートゾーンへ素早くボールを運ぶためのポイントを絞った意見交換が積極的に行われた。

動きを介した交流活動については，教師が全体交流で押さえた動きを全員で試す場を設定し，友達の動きのよさを実感させた。

今後は，子どもが運動中にどの位友達の動きのよさを感じることができるかについて検証していく必要があると考えた。

(3) 今後の方向性

単元を通して願いが生まれる教材化や，1時間の中で願いが生まれる展開の工夫については成果を感じている。今後は，先述したとおり，動きを通しての交流の在り方についての検討や一人一人が課題解決に向かう姿が見える学習展開の工夫などを研究していきたい。また，本校の特色が見える体育授業の型についても実践研究を進めていきたい。

研究主題

運動に魅力を感じ、自ら学び、高め合う体育活動の創造 ～生涯スポーツを目指したカリキュラムの開発を通して～

北海道学校体育研究連盟函館支部 函館市立八幡小学校

発表者 教諭 酒 井 光 史

1 函館支部の研究について

(1) 研究主題設定の理由

ア 支部の研究経過から

函館支部は、函館市小学校体育研究会が母体となり、体育の授業研究を中核とした研究活動を進めてきている。また、支部としては、北海道学校体育研究連盟の発足とともに活動を始め、これまでに、北海道学校体育研究大会を5回開催することができた。最近では、平成10年に「第35回函館大会」、平成16年には「第41回函館・渡島大会」を開催し、研究の成果を上げてきている。

研究については、平成15年から、「生涯スポーツを目指した保健・体育学習の創造」を研究主題として設定し、研究活動を推進してきた。ここでは、旧学習指導要領より重視されてきている学校体育における「生涯スポーツ」の基礎学習を、「スポーツが本来もつ楽しさにふれることにより、スポーツの文化としての意味や価値を実感し、スポーツを生活の一部として楽しむこと」と押さえた。また、実践レベルでは第一にこの考えに基づき、子どもに運動の楽しさや喜びを味わわせることが大切であると押さえた。そして、スポーツを子どもの側から捉え直すことを重視するとともに、子どもの実態に応じて柔軟に学習過程を工夫しながら授業研究を進め、大きな成果を上げることができた。

しかしながらここ数年、研究主題の文言としては意味合いが広く、研究の焦点化を図る必要があるということ、さらには目指す授業像や児童像を、より一層明確に示した研究主題にするべきであるという意見が、会員から指摘されるようになった。また、学習指導要領の改訂に伴い、新しい学校体育の動向を踏まえた新たな研究に舵を切る必要があり、同時に研究主題の見直しが必要であることが、研究部において確認された。

以上のような経過を経て、本研究会では平成23年度より、「運動に魅力を感じ、自ら学び、高め合う体育活動の創造」という新しい研究主題を設定するとともに、「生涯スポーツを目指したカリキュラムの開発を通して」という副主題を設定した。なお、研究主題の見直しに当たっては、子どもからスタートする研究を大切にするために、本市の児童の実態を捉え直す作業から始めた。

イ 児童の実態から

函館支部においては、平成23年7月に、児童の実態に関するアンケート調査を、全市的な規模で実施した。その結果、様々な傾向が把握できた。主な回答としては、以下ようになる。

体育の時間における函館市の児童のよさ
○ルールやコートの工夫など、児童の実態に応じた易しい運動での学習により、楽しく活動を進められる。 ○単元の見通しやめあてが明らかになると、意欲的に取り組める。 ○体育の時間の学びを、休み時間の遊び等に生かすことができる。 ○ゲームの進行・運営を児童に任せることで、主体的に学習を進められる。 ○多様な学習資料の提示により、進んで練習や作戦に生かした活動ができる。
体育の時間における函館市の児童の課題
●運動経験や運動技能に二極化傾向が見られる。 ●意欲はあるが、その意欲を継続できない児童が多い。 ●系統的な学びが展開されていないため、体育の学習の学び方が身に付いておらず、発達段階に応じた豊かな学び合いや運動技能の獲得につながらない。 ●既存のルールにとらわれるため、運動の楽しさに触れることができていない。

これらの実態を受け、研究部では、次の4点を、今後の研究のポイントとして押さえた。

・生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を培うためには、運動の機能的特性を味わう経験を中心目標として学習を展開する必要がある。 ・子どもの発達段階を考慮したカリキュラムを開発・作成し、系統的な指導を展開していく必要がある。 ・子どもの学びの質を高めるために、子どもの発達に応じた「<u>学び方※</u>」の指導を系統的に行う必要がある。 ・子どもが楽しく、自発的に学びながら運動技能を獲得していくためには、子どもの実態に応じて学習過程を工夫したり、学習資料を充実させたりする必要がある。
--

※学び方…学びの時系列における連続性を重視した函館としてのカリキュラムの1つ。

以上の4点を根拠に、研究主題及び副主題を設定するとともに、新しい研究をスタートさせた。

(2) 目指す児童像

研究主題に迫る研究を推進していく前提として、目指す児童像を明確にした。児童像を設定するに当たっては、既に示した実態調査を根拠にするとともに、日常の実践を通して迫りたい児童の具体的な姿をイメージし、設定した。

〈目指す児童像〉 ○ 運動に日常的にかかわる子	・運動に夢中になって取り組む子 ・友だちと教え合い学び合う子 ・技能の向上を目指して努力する子
--	---

「運動に日常的にかかわる子」は、本研究会が目指す究極の児童像として設定した。また、その児童像を実現するために、体育の授業で大切にしたい児童の姿を3つ設定している。授業研究においても、この3つの児童像を、授業を評価する際の重要なポイントとしている。

（３）研究仮説

新しい研究主題の設定に伴い、目指す児童像とリンクする形で、3つの研究仮説・研究内容を設けた。初年度（平成23年度）は、主に研究内容1と3を中心に、研究活動を推進してきた。

・運動に夢中になって 取り組む子	・友だちと教え合い 学び合う子	・技能の向上を目指して 努力する子
研究仮説 1	研究仮説 2	研究仮説 3
子どもの発達や運動の様相の発展を踏まえたカリキュラムを開発し、実践することにより、子どもは運動の楽しさを味わい、夢中になって運動に取り組むことができるであろう。	子どもの発達に応じた「学び方」の指導を系統的に行うことにより、質の高い教え合いや学び合いがなされ、互いに高め合うことができるであろう。	個に応じた学習課題を追究させるとともに、適切な指導を展開することにより、子どもは自らの技能の獲得や向上を目指して努力し続けることができるであろう。
研究内容 1	研究内容 2	研究内容 3
・小学校6年間を見通したモデルカリキュラムの開発 ・各学校、学級の実態に応じたカリキュラムの工夫と改善及び実践	・子どもの実態や発達段階に応じた「学び方」の指導の系統性のモデル化 ・「学び方」の共有化と系統的な指導の積み重ね	・子どもの実態に応じた学習過程の工夫と改善 ・子どもの学び合いを高めたり、多様な自力解決を促したりする学習資料の提示や場の工夫

（４）研究の視点

前述の研究仮説及び研究内容にかかわって、3つの視点を大切にしながら研究活動を推進している。

・視点1：カリキュラムの開発（研究内容1）

常に子どもが夢中になって運動に取り組み続けられるよう、6年間を見通したモデルカリキュラムを開発しながら、日常の授業実践を進めていくことを、研究のポイントとする。

・視点2：「学び方」の指導（研究内容2）

体育の学習指導において身に付けさせたい「学び方」を系統的に指導できるよう、6年間の「学び方」指導のモデル化を研究のポイントとする。

・視点3：学びを支える授業作り（研究内容3）

個やチームの力に応じた学習課題を追究し続けられるよう、単元の学習過程を柔軟に工夫、改善しながら授業実践を進めていくことを研究のポイントとする。

2 研究の具体

(1) 実践例 第6学年 単元名「ベースボール型（スローピッチベースボール）」

函館市立深堀小学校 第6学年 指導者 阿部 辰峰

ア 授業のねらい

- ・単元の前半（ステージ1）では，個人技能に焦点を置き，簡易化されたゲームを楽しむ。個人技能が高まった時点で，集団技能に焦点を置くステージ2に移行する。ここでは，状況に応じた集団技能の発揮の仕方を「作戦」とし，それをゲームの中で効果的に発揮できるように，声を掛け合いながら作戦を確認し，ゲームを楽しめるようにする。
- ・体育館という閉ざされた空間におけるベースボール型の学習により，技能が身に付いていない段階の暴投などによるテンポの悪さを解消できると考える。
- ・チーム内で教え合いや助け合いが生じるように，グループ内異質，グループ間等質でグループピングする。
- ・技能差が大きいので，道具やルールを工夫し，どの子どもも楽しめるようにする。
- ・ゲームを成立させるために必要な捕球と送球は，毎時間のキャッチボールにより，技能を身に付けさせる。その他の技能はチームの特徴に合ったドリルゲームやタスクゲームを通じ，楽しみながら身に付けるようにする。ドリルゲームやタスクゲームは教師側から提示し，チームごとに話し合っ，毎時間選択できるようにする。
- ・技能の確認等，子どもにとって拠り所となる学習資料を作成する。ルールや技能を児童が確認することで，教え合いの姿を促す手だての1つとする。
- ・3チームで学習することで，攻撃・守備・運営を一体としたゲームを行う。客観的に，ただゲームを観戦するのではなく，相手のプレイを主観的に見る目を育む。



	1	2	3	4	5	6	6回まで行くと，一通りの組み合わせとなる（もしくは3回まで）。
Aチーム	攻撃	守備	運営	攻撃	運営	守備	
Bチーム	守備	運営	攻撃	運営	守備	攻撃	
Cチーム	運営	攻撃	守備	守備	攻撃	運営	

イ 単元構成（9時間）

時	学 習 活 動	教師の支援・評価
1	<オリエンテーション> ○学習の流れ，ゲームの仕方，ルールの確認 ○チーム編成，試しのゲーム	・実技を交えて，ルールについて指導する。 ○ルールやマナーを守り、友達と助け合っ、練習や試しのゲームをしようとしている。（関・意・態）【観察】
2 3 4 5 6 7	ねらい1：個人技能を高めるとともに，ルールを工夫しながらゲームを楽しむ。 ○準備運動 ○学習内容の確認 ○練習ゲーム	・個人技能を高める指導を重視するが，徐々に集団技能へ意識を向けられるように支援していく。 ○ボールを打ち返す攻撃や隊形をとった守備をするための動きができる。（技）【観察】

2 1 7	・自分たちのチームの力にあった、練習ゲームを行う ○ゲーム - ゲームの様相の発展予測	・集団技能が出るようになったら、適宜取り上げ、全体場で確認する。
	①打ったボールが、相手のミスで得点が入るゲーム ②打った後、全力で走塁し、ヒットから得点がとれるゲーム ③思い切り打ち、長打・HRが多発するゲーム ④守備力の向上や工夫によって、攻守の切り替えが早いゲーム	
8 1 9	・練習試合（3時間） ・公式戦①（3時間） ○ふりかえり	・練習試合では、毎時間ルールの見直しをする。
	ねらい2：場面に応じた作戦を確認しながら、ゲームを楽しむ。 ○準備運動 ○学習内容の確認 ○ゲーム - ゲームの様相の発展予測 ④守備力の向上や工夫によって、攻守の切り替えが早いゲーム ⑤どこでアウトにするかを考えた守備、走者を進める打撃など、多様な作戦が見られるゲーム	・子どもの思考・判断を大切にし、指示や判断の機会を奪う声掛けは避ける。 ・意欲を高められるよう、肯定的な声掛けをする。 ○チームの特徴に応じた攻め方を知るとともに、自分のチームの特徴に合った作戦を立てている。(思・判) 【観察・学習カード】
	・公式戦②（2時間） ○ふりかえり	

ウ 授業の実際

- ・学級全体に広げたい集団技能が見られた場面では、プレイを中断して称賛するなど、適宜全体指導を行った。その結果、児童の意識が、徐々に個人技能から集団技能に移行していく様子が見られた。
- ・グループ内異質、グループ間等質の3つのチームで学習を進めた結果、各チームにおいては、教え合いや学び合いなど、自発的・自主的な学習が展開された。
- ・「ベースボール型」の学習経験がほとんどない実態にあったため、グループごとに課題に応じた練習を行ったり、問題解決を進めたりする学習展開にはならなかった。したがって、単元を通して学級全体で課題を共有したり、よいプレイを確認し合ったりしながら学習が展開された。
- ・「ベースボール型」は、ゲーム中に子どもが思考したり、瞬時に判断したりしなければならぬ情報や局面が多様であり、子どもにとっては複雑で難しい内容であると言える。しかし、本実践においては、ルールを簡略化したり、的確な学習資料を提示したり、アウトカウントやスコアを視覚的に確認できる機器を用意したりするなど、子どもに寄り添った学習を展開することができた。その結果、子どもが迷うことなくゲームに集中するとともに、存分にベースボール型の楽しさに触れながら活動を楽しむ様子が見られた。

(2) 実践例 第3学年 単元名「ネット型ゲーム（キャッチバレーボール）」

函館市立中の沢小学校 第3学年 指導者 車無田 恵

ア 授業のねらい

- ・ネット型ゲームの学習経験がほとんどない実態にあったため、レシーブ・トス・アタックの全てに「キャッチ」を導入するなど、易しいルールで学習を展開することにする。それにより、3回で相手コートに返す基本的なルールの定着を図るとともに、ラリーが続き、アタックで得点が入る楽しさを味わわせる。
- ・導入段階においては、児童の実態に合わせて、次のような基本ルールで学習を始めることにする。

- ・サーブは下投げで、どこから投げ入れてもよい。
- ・ボールはキャッチすること。ただしトスはできるだけ頭の上でキャッチ・リリースする。
- ・3タッチ目は投げ入れてアタックする。
- ・ゲームはラリーポイントの5点マッチで行う。等

- ・コート内での役割を1試合ごとに固定する（ローテーションなし・セッターを担当する児童の固定等）ことで、ゲームにおける各自の役割を明確にし、混乱なくゲームに取り組むことができるようにする。
- ・ネットの設定を、やや高めの180cmにすることで、高くボールを上げようとする意識を高めるとともに、ラリーの続くゲームを展開できるようにする。
- ・個人差やチーム間の力の差が少ない実態にあるので、学習の課題を学級全体で共有し、問題解決を図りながら技能を高めることにする。また、ドリルゲームをゲーム1とゲーム2の間に入れることで、課題を意識して学習を進められるようにする。

イ 単元構成（8時間）

時	学 習 活 動	教師の支援・評価
1	〈オリエンテーション〉 ○学習の流れ、ゲームの仕方、ルールの確認 ○チーム編成、試しのゲーム	・単元の流れを説明し、学習の見通しをもたせる。 ○場や用具の使い方などの安全を確かめようとしている。(関・意・態)【観察】
2 3	ねらい1：ルールやゲームの進め方を覚える。 ○準備運動 ○基本のルールの確認 ○ゲーム1 ○ドリルゲーム ○ゲーム2 ゲームの様相の発展予測 ①キャッチ・トス・投げ入れを分担して、相手コートに返し合うゲーム ○ふりかえり	・キャッチーキャッチー投げ入れの3回で返すことが定着するよう、声掛けをする。 ・前時の課題及びゲーム1の課題を達成するためのドリルゲームを、教師側から提示する。 ○ラリーを続けたり、ボールをつないだりするための動きができる。(技)【観察】 ・ゲームの状況を見て、基本のルールは随時変更していくようにする。

4 7	ねらい2：攻め方を工夫しながら、ゲームを楽しむ。 ○準備運動 ○学習内容の確認 ○ゲーム1 ○ドリルゲーム ○ゲーム2 ゲームの様相の発展予測 ②勢いよくアタックを打ち合うゲーム ③スピード感あるアタックをキャッチできるようになり、ラリーが続くゲーム ○ふりかえり	・「素早いパス」「強いアタック」をゲーム中に意識させるようにする。 ・課題を常に意識させるために、授業の始めとドリルゲームの2つの場面で課題について確認する。 ○ネット型の特徴に合った攻め方を知るとともに、簡単な作戦を立てている。(思・判)【観察・学習カード】
8	ねらい3：仲間と協力しながら、リーグ戦を楽しむ。 ○リーグ戦 ○成績発表及びベストプレイヤーの表彰 ○ふりかえり	・対戦表を用意することで、見通しをもって取り組むことができるようにする。 ○規則を守り、友達と励まし合って、ゲームをしようとしている。(関・意・態)【観察】

ウ 授業の実際

- ・運動の様相の発展段階を想定することで、単元を通して適切な支援を展開することができた。その結果、どの子も運動技能を確実に高める様子が見られた。
- ・ねらい1の初期の段階においては、ボールの落下点に入ることができなかったり、積極的にプレーに参加したりすることができない様子を見せる子が数多く見られた。しかしながら教師の指導やドリルゲームの積み重ねにより、ゲームの様相の発展予測①の様子がみられるようになるなど、楽しそうにゲームを進める様子が見られた。
- ・ねらい2に入り、アタックの技能を高めることをねらい、ネットの高さを下げる支援や鋭角に投げ入れる技能の指導を行った。その結果、ゲームの様相を発展予測②の攻防に移行させることができるなど、さらなるゲームの活性化につながった。
- ・ローテーションを無くしたこともあり、混乱なくゲームを進める様子が見られた。また、試合ごとに前衛と後衛を交代したり、セッター役を交代したりしながらゲームを進めた結果、どの子もそれぞれの役割に応じた技能を高める様子が見られた。
- ・今回の実践では、アタックによる攻防の楽しさを味わわせることやアタックの技能向上を中心目標に据えて学習を展開した。そのため、結果として守備の技能の一つである、「ブロック」の導入を見送ることになった。次年度以降の学習において、守備力向上の必要性が高まった際にブロックの指導をすることで、さらなるゲームの活性化が期待できることが確認された。
- ・「ネット型」の学習においては、3年生の導入段階で、「キャッチ」を取り入れた学習を展開することが効果的であることを、実践を通して確認することができた。今後は「バレーボール」との関連について検討したり、どのようなカリキュラムで指導を展開していくべきなのかという点について、さらに検討したりする必要があることが確認された。

3 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・実践例で取り上げた「ベースボール型」は、ボール運動の領域では授業研究で取り上げる機会が極めて少ない内容であったが、授業作りを通して、ベースボール型のゲームの様相の発展予測をベースとしたモデルカリキュラムを一未完成の段階であるが—作成することができると、大きな成果を得ることができた。
- ・モデルカリキュラムを作成することで、単元を通して指導すべき内容や身に付けさせたい運動技能を、指導者が明確に意識しながら指導を進めることができた。よって、1時間ごとの支援も的確になされ、子どもたちも授業のねらいに向かって学習を進めるとともに、個々の技能を高める様子が見られた。
- ・実践を通して、子どもの実態に応じた学習過程の工夫の在り方や学習資料の提示の仕方等について、研究を深めることができた。特に、多様な学習資料を教師側から提示し、活用させることで、子どもの自発的・自主的学習を引き出すことができるなど、大きな成果を上げることができた。

(2) 課題

- ・今後は、さらに様々な領域・内容における授業研究を積み重ね、作成したモデルカリキュラムの妥当性を高めていく必要がある。また、中学校の学びとの関連も考慮しながら、改善を図っていく必要がある。
- ・研究内容の2である、「学び方」の指導のモデル化については、今後の検討課題にとどまっている。一言に「学び方」と言っても幅が広く、焦点化する必要があるので、どのような観点に絞ってモデル化していくべきか、検討していく必要がある。平成26年度に本市で開催される全道大会までには明確な形にし、提案できれば、と考えている。
- ・本研究会の理論や研究内容を、研究会内外に一般化していくことが大きな課題となっている。作成したモデルカリキュラムや授業の展開の仕方等を、様々な方法で発信し、一般化を図っていきたいと考えている。



【研究主題】

仲間との自分を見つめる学び合いで、
「できる」喜びを味わう体育学習

【日 程】

	9:40	10:50	12:00	13:10	14:35	15:00
9:00	10:25	11:35	13:00	14:15	14:55	
受付	第一次公開授業	休憩	第二次公開授業	アトラクション	昼食 休憩	開会行事
				研究発表協議Ⅰ	研究発表応答Ⅱ	指導講評
						閉会行事

【会場案内】

**札幌市立
福住小学校**
〒062-0043
札幌市豊平区
福住3条5丁目1-1
TEL：011-854-1318

【アクセス】
地下鉄東豊線「福住駅」下車
↓
徒歩15分

札幌市立福住小学校



所在地	札幌市豊平区福住3条5丁目1-1
電話	(011) 854-1318
学校長	大久保 雅 人
児童数	735名

◎学校教育目標

人間味豊かで実践力に富んだ子どもの育成

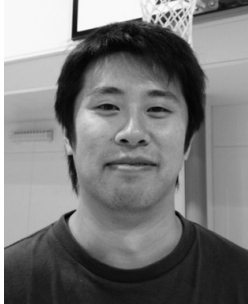
- ・豊かな情操　　－よりうつくしく
- ・強靱な心身　　－よりたくましく
- ・創造的な知性　－よりかしこく

今を大切に　あすに向かって　生きていきます

◎特色

丘陵地帯にあり、教室の窓からは札幌ドームが眺められる。また、近くに羊ヶ丘展望台をひかえ、自然環境にも恵まれている。落ち着いた住宅地が広がり、地域としてのまとまりがある。保護者や地域の方々の学校教育に対する関心が高く、協力的である。朝の読み聞かせやスキー学習、生活科で行う動物園までの探検など、多くの学習活動がボランティアによって支えられている。

授業者の紹介



第4分科会 授業①

札幌市立福住小学校

上木 一也

6年3組 担任

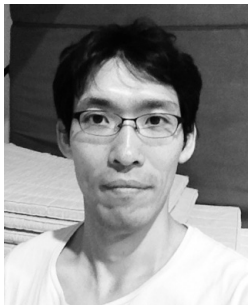
小学校5年生から大学生までバスケットボールを続けていました。
(現在も週1回程度活動しています)

授業の見どころアピール

体づくり運動としてのダブルダッチにグループの仲間、クラスの仲間と関わりながら挑戦していきます。そうすることで巧みさや、体力の高まりを自分だけではなく、みんなとともに感じていけるようになるを考えました。本気になって技に挑戦する姿をご覧くださいと思います。

ひとりごと

最近、2歳になった娘が歌を歌いながら左右にピョンピョン跳ねる動きがダブルダッチにつながるのではないかと考えて見てしまいます。跳びながらくるくる回ったり、片足で2回跳んだり。結構参考になる？考えすぎ？



第4分科会 授業②

札幌市立福住小学校

石田 愉良

1年1組 担任

小学校から始めた野球を、今でも時々やっています。剣道や基礎スキーも、うまくはないですが挑戦しました。一応、剣道は初段、スキーはSAJ準指導員です。

授業の見どころアピール

マットを使った運動遊びで、技能はもちろんですが、意欲的に運動に向かう姿や課題解決的な学習の展開について、検討を重ねてきました。新学習指導要領の学習内容をしっかりと子どもたちが身に付けられる授業が構築されているかを見ていただき、ご意見を聞かせていただきたいです。

ひとりごと

全国大会の授業者として、まず、自分が運動を楽しむべきと考え、フィットネスのスタジオプログラムに通い始めました。なかなか行くチャンスは少ないですが、あまり上手ではないダンスを一生懸命に踊る体験は、子どもに戻った感覚です。

研究主題

仲間との自分を見つめる学び合いで、
「できる」喜びを味わう体育学習

札幌市立福住小学校

1 研究の概要

(1) 研究主題設定の理由

ア 本校の研究経過から



【①伝え合う子】

本校では、平成22年度に行われた実践発表会まで、国語科を中心とした研究実践を行ってきた。【「聞く力」「話す力」を育む単元構成】と【共に学ぶよさを生む教師の関わり】という2つの視点を軸に研究を積み重ね、子どもたちの伝える力（聞く力・話す力）の育成を図ってきた。成果として、様々な場面で子どもの伝える力が伸びてきた様子が見られたこと、課題として、聞く・話す必要感が授業中に生まれる授業構成のさらなる充実が挙げられた。

平成23年度から、研究仮説「伝える力を生かし、学び合う授業を展開することで、子どもは学びを実感できる」を掲げ、これまで国語科で積み重ねてきた伝える力を活用するため、算数科や体育科へと実践を広げることにした。

体育科の研究を行うにあたり、まずカリキュラムを見直した。

全学年がそろって取り組める運動を考え、「なわ跳び運動」に力を入れていくことにした。6年間の体育科の授業で「なわ跳び運動」ができるのは、体づくり運動の中の約10時間である。子どもたちに身に付けさせたい動きを2学年毎にまとめ、短なわや長なわを使った運動のねらいを明確にした。それぞれの学年で目的を意識して取り組むことで、積み重ねを大事にしていこうと考えたのである。

もう一つ、カリキュラムで大きく変わったところがある。どの子も楽しめるボール運動の実践を目指し、5・6学年の授業にフラッグフットボールを取り入れた。初めてこの運動に触れる教師も多く、研究部が主催する研修会でフラッグフットボールを扱ったり、互いの授業を見合ったりした。道具の使い方や作戦の立て方、授業づくりに至るまで、教師同士、基本から学び合った。現在も、試行錯誤しながら授業実践を積み重ねているところである。



【②フラッグ取りゲーム】

イ 児童の実態から

現在の子どもたちにおける課題の一つとして体力低下が挙げられている。下げ止まりという情報もあるが、本校の実態も決して安心できるものではない。

例えば、6年生の短距離走は、男女ともに全国平均より大きく下回っている。投力も、男子は全国平均よりやや下で、女子は大きく下回っている。全ての学年のどの項目も、全国平均を大きく上回るものはないという実態にある。その中でも気になるのが、少年団などで常に運動に触れている一部の子とそうではない子の差が大きいことである。

これらより、本校児童は体力が低いことが明らかであるとともに、運動への親しみも低いととらえることができる。

以上のような実態から、本校の児童には、まずできる喜びを味わえるようにすることが大事ではないかと考えている。今、全校で積極的に取り組んでいる「なわ跳び運動」は、まさにできる喜びを実感できる運動である。そのため、日常的になわに親しむ姿が見られることを願い、様々な工夫を行っている。



【③短距離走スタート】



【④長なわ遊び】

一つは、夏と秋に行われる体育委員会主催の「なわ跳び検定」である。さらに、グラウンドが雪で使えなくなる冬には、朝の10分間、「なわ跳びチャレンジ」の時間を設け、体育館を開放することにした。高学年の各クラスには、ダブルダッチ用のなわも配布した。

今、休み時間のグラウンドでは、サッカーやドッジボールをして遊ぶ子の中に、なわ跳び運動に挑戦する子の姿も見られるようになってきたところである。

(2) 目指す児童像

体育科の目標の一つに、「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる」とある。その手段として、運動の楽しさや喜びを味わえることが挙げられている。運動の楽しさや喜びは、仲間と仲よく運動することで大きくなることは、誰もが経験して理解しているはずである。仲よくということは、互いのことを分かっていることであり、また、分かろうとしていることとも考えられる。このような互いの理解から生まれる認め合いの中で、運動を見合いながら課題を見出し、解決することが体育科での学び合いの意味ととらえている。

また、日常の体育科の学習では、一人では活動できないものがほとんどで、できるためには必ずと言ってよいほど仲間との協力が必要である。マット運動や跳び箱運動などの個人種目でも、準備や補助、アドバイスや応援が必要である。私たちは、伝える力を生かすことで、子どもの「できる」喜びを生み出すよりよい体育科の授業を目指している。そして目指す児童像は、『仲間との自分を見つめる学び合いで、「できる」喜びを味わう子』である。

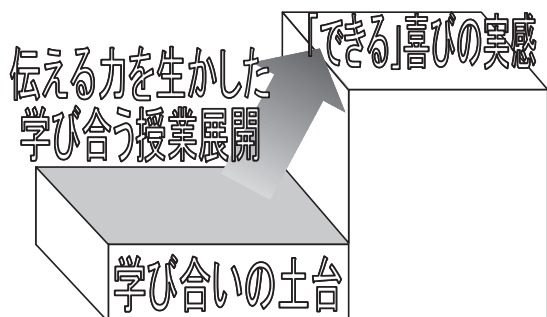


【⑤壁倒立】

(3) 研究の仮説

伝える力を生かし、学び合う授業を展開することで、
子どもは「できる」喜びを味わえる

【⑥仮説検証イメージ図】



1) 学び合いの土台

授業には「学び合いの土台」が必要である。それは、①前單元あるいは前時まで身に付けてきた思考や技能 ②課題の共有意識 ③運動への意欲 ④伝える力 などである。イメージ図の塗りつぶし部分がこれにあたる。これまでの学びの積み重ね、つまり本時まで子どもたちが身に付けてきた力である。一人一人が学び

合いの土台に立って初めて授業が成り立つという、イメージを描いているのである。

2) 伝える力を生かした学び合う授業展開

(2)でも述べたように、体育科の学習では仲間との学び合いが欠かせない。自分の動きを客観的に見ることができない分、友達同士の評価やアドバイスを参考に、動きの獲得を目指していく。そのため、子どもたちの動きを見る目を育てなくてはならない。動きを言葉で表す力も必要である。伝える力を発揮できる場や環境を設定し、よりよい学び合いが展開される手だてを追求していくことが、子どもたちの「できる」喜びにつながると考えている。

3) 「できる」喜びの実感

單元、あるいは1時間の授業の中で、子どもたちが「できる」喜びを味わえる授業を目指している。「できた!」という喜びの積み重ねが自信となり、楽しさと相まって、次の運動の意欲へとつながり、生涯を通して運動に親しんでいく子を育てられると考えている。

(4) 研究の視点

〈視点1〉

「『できる』喜びを味わえる
教材の開発・工夫」

〈視点1〉は、単元を通しての視点である。

- ①身に付けさせたい技能の明確化
- ②実態把握
- ③興味関心・個に応じた教材の開発・工夫
- ④運動との出会いや場の工夫
- ⑤生涯スポーツへの視点
- ⑥評価基準・評価方法

〈視点2〉

「『できる』喜びを味わえる
学習過程の構築」

〈視点2〉は、主に本時についての視点である。

- ①学習課題の把握
- ②試行活動
- ③個人課題の設定
- ④追求活動
- ⑤評価活動



【⑦自己評価活動】

2 研究の具体

(1) 実践例Ⅰ 第5学年 単元名 「マット運動」

ア 授業のねらい

開脚前転の脚を開くタイミングは、単独の技として考えると難しい。そこで、既習である大きな前転との違いから考える。動きは異なるが開くタイミングは同じで、回転の後半に開くと回転力がアップすることを明らかにしていく。

【単元の目標】

- ・回転力をつけていろいろな技で回ることができるようにする。【技能】
- ・きまりを守り、友達と励まし合って進んで取り組むことができるようにする。【態度】
- ・回転力をつけるためのコツを考えることができるようにする。【思考・判断】

本単元では、「できる」喜びをたくさん経験していけるようにしたい。また、その達成感、喜びを仲間と共有できるように単元を構成した。

そのために以下の点を重視している。

〈視点1〉『できる』喜びを味わえる教材の開発・工夫

- 「回転力アップ」に焦点化する。
どの技でも共通して「回転力アップ」を考えることで、子どもの視点を明確にする。
- スモールステップによる単元の構成で「できる」実感を。
きれいな前転～大きな前転～開脚前転と段階的に進むことで、「できる」の経験を積み重ねる。
また、共通な技能、新しい技能を明確にして取り組む。
- チームポイントを取り入れ、喜びを共有する。
チームで一人一人の動きを高めるために、学び合いや教え合いが生まれる。
- 感覚作りの場（福住フレンドパーク）で必要な感覚を身に付ける。
前転を様々な条件で挑戦することで、開脚前転などのマット運動に必要な技能を身に付けていく。
- 評価規準を明確にする。
毎時間、子どもたちが身に付けなくてはならない力を明確にし、評価規準を設ける。

〈視点2〉『できる』喜びを味わえる学習課程の構築

- 話し合いを焦点化する。
足を開くタイミングに焦点化した課題をもつことで、より動きが高まるためのチーム交流をねらう。
- 伝える力を生かす。
チームで考えた動きの中から、回転力アップにつながる動きを全体交流で取り上げる。
- 学びを実感する。
全体交流後、ゆりかごで足を開くタイミングを全員で確認する。その後チームごとに再び開脚前転にチャレンジする場を設ける。



【⑧ゆりかご】

イ 単元構成

おもな学習活動	
第1時	福住フレンドパークに挑戦だ！ 高得点ゲットでボーナスステージゲットだ
前転の 感覚作り	大きな前転 の感覚作り
倒立の 感覚作り	
いろんなステージをクリアできたよ	
第2時	ボーナス1 きれいな前転に挑戦だ 連続で転がってきれいにしゃがむには
体の使い方 ・たまごの形 ・相手を見て	タイミング ・前を見るとき に腕を出す
回転力UP	
回転力アップできれいに転がれたね	
第3, 4時	ボーナス2 大きな前転にチャレンジ 大きな前転でも回転力をアップするには
体の使い方 ・一気に 引き付ける	タイミング ・手を出す ときに
回転力UP	
腕と体でコーナーをクリアできるね	
第5時	ファイナルステージ 開脚前転に挑戦だ (本時) 開脚前転をやってみよう
活動の流れ	「回転力が落ちて上手に起き上がれない」
挑戦①	いつ足を開くとスピードを乗 せて回転できるのかな
グループ解決	体の使い方 ・脚を伸ばして ・一気に開く
全体交流	タイミング ・手をつく 少し前に
回転力UP	
手をつく少し前に脚を一気に開くと回転力をアップできるね	
試しの練習	ゆりかごでコツを試してみよう
挑戦②	開脚前転ができるようになったね

ウ 授業の実際 (第5時)



【⑨大きな前転】

前時までに子どもたちは、きれいな前転、大きな前転に挑戦する中で、回転力アップのための体の使い方を考えてきていた。足の引き付け

と引き付けるタイミングが大事であることを理解し、動きも身に付けていた。

準備活動で行った「福住フレンドパーク」では、様々な場に挑戦することにより、マット運動の基礎となる、腕支持感覚や手の着き方、視線、腰の位置などを学んでいた。丁寧な動きがチームの高得点につながるため、友達同士声をかけ合って行う姿が印象的だった。

「あれ？上手く立てない。」

「手が後ろに着いちゃっているよ。」

本時の主運動である開脚前転に挑戦したときの子どもたちの声である。回転力が不足し、上手く起き上がれないことに課題が焦点化されているのが分かる。

全体交流で話し合われたのは、「いつ足を開くとスピードに乗せて回転できるか」ということである。一気に足を開くとよいという意見が共有できたのは、よい交流であった。ただ、「足を開くタイミング」については、追求することができなかった。教師のイメージする目指す開脚前転が子どもたちの中になかったこと、友達同士の学び合いで見取る手だてが少なかったことなどが原因と考えている。

全体交流後のチャレンジⅡでは、回転力アップを目指す子どもたちの動きが見られた。



【⑩アドバイスし合って】

(2) 実践例Ⅱ 第6学年 単元名 体づくり運動「ダブルダッチ」

ア 授業のねらい

6年生のなわ跳びの学習として、個人では二重跳び、集団ではダブルダッチを全員ができることを目指すことを目標に掲げて取り組んでいる。

本単元においてダブルダッチができるということは、抜け出る最後まで引っかからないこととしている。この設定があってこそ本時のねらいが成り立つ。入る→跳ぶ→抜けるという学びの過程で、なわを使った運動に対する見方を高めていく。分析的に考える傾向のある子や、動いていく中でコツを見付ける傾向のある子の考え方のよさが発揮される交流場面を展開に位置付ける。そうすることで、自分の見方や考え方に合った動きの工夫を生かしながら、ダブルダッチが「できる」へ近付くことができる。

【単元の目標】

- ・体力を高める運動について、ねらいに合った動きを身に付けることができるようにする。

【運動】

- ・体を動かす楽しさや心地よさを味わったり、体力を高めたり、進んで取り組めるようにするとともに、約束を守り助け合って運動をしようしたり、運動する場や用具の安全に気を配ろうとしたりできるようにする。

【態度】

- ・自分の体の状態や体力に応じて、運動の行い方を工夫できるようにする。【思考・判断】

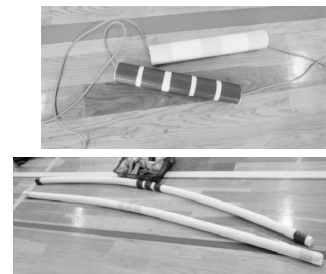
〈視点1〉『できる』喜びを味わえる教材の開発・工夫

○学びの土台をつくる。

- ・何度も挑戦するために少人数のグループを構成する。
- ・なわを「見える化」する。
- ・全員がなわを回すことができる。
- ・青と黄のなわの動きを知り、跳ぶことができる。
- ・グループ交流で「みんなのおかげで上達した」という実感をもっている。

【⑪道具の工夫】

～発泡スチロールを使ったなわ～



〈視点2〉『できる』喜びを味わえる学習課程の構築

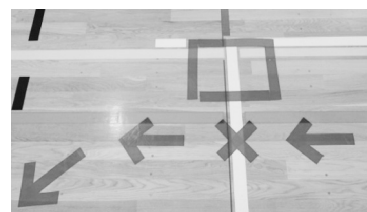
○伝える力を生かし、学び合う。

- ・「みんなができる」ためのコツについて話し合う必要感を生む。
- ・入る、跳ぶ、抜けるにポイントを絞った交流をする。
- ・課題に向かう方向性と意欲の高まりをねらう。

○学びを実感する。

- ・「できる」ことの明確化を行う。
- ・よい動きを表現できる場を位置付ける。
- ・「友達のおかげでできた」という仲間意識を価値付ける。

～「入る～抜ける」の動線を示した床～



イ 単元構成

おもな学習活動		
本時に入るまでに		
上から来る		下から来る
		
かぶりなわ→黄		むかえなわ→青
ダブルダッチをできるようにしよう！		
第1時 入る→跳ぶ→抜けるで「できた!」を目指そう！		
かぶりなわ+むかえなわ=ダブルダッチ！		
ダブルダッチに入るのはいつがいいのだろう		
かぶりなわ	入る	むかえなわ
パンとなったら		なわが通りすぎたら
むかえなわに注目すると 入るタイミングが分かりやすい		
第2時 入って連続して跳べるようになって		
もっとたくさん連続して跳ぶにはどうしたらよいのだろう		
跳ぶリズム なわの音に 合わせて	むかえなわに入る 準備から 声とリズム	回すリズム 跳ばせてあ げる
跳ぶリズムと回すリズムが合うと 連続してダブルダッチを跳べた！		
第3時 入って連続して跳べるようになって		
(本時) あとは、抜けるのが目標だ		
確実に抜けるには、 なわからいつ出るといいのだろう		
青いなわを 跳んだ後	すばやく 奥へGO！	3回か5回 跳んだ後
青いなわを跳んで、すばやく奥に出るといい ダブルダッチを「できた」！		
第4時 ダブルダッチと二重跳びを入れて パフォーマンスをグループでつくろう		
どんな動きだとかっこいいかな		
リズムが 合っている	技が 難しい	流れるよう な動き
いろいろな技ができるようになった！ もっとうまくなりたい！		

ウ 授業の実際（第3時）



【12全体交流】

準備活動では、ペアで30秒間の二重跳びに挑戦していた。友達を応援する優しい眼差しが見られた。むかえなわの八の字跳びにも、1分間グループで挑戦した。これは、主運動であるダブルダッチにつながる大事な動きである。

本時は、ダブルダッチに挑戦して4時間目にあたる。確実に「入る→跳ぶ→抜ける」動きを身に付けるため、6年生らしく、グループごとに追求していく姿が見られた。

全体交流では、「抜け」に焦点を当て、「確実に抜けるには、なわからいつ出るといいのだろう」という課題を追求していった。

これまで十分に運動に浸っていること、グループごとにコツを言葉にして表し、友達同士でアドバイスし合ってきたことから、解決に向かって交流が活発になった。

「青いなわを跳んだ後にぬけたらいいよ。」

「3回か5回跳んでなわから出るといい。」

と、運動の核心をつく意見が出された。

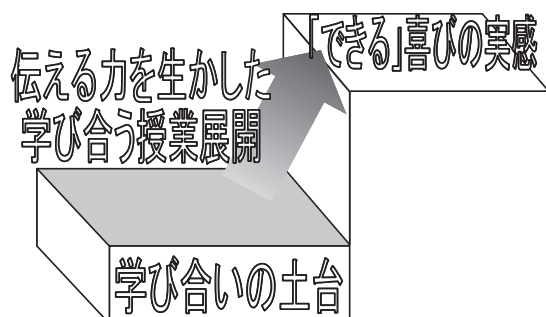
全体交流後の再チャレンジでは、回数を数えながら跳ぶなど、話し合いを生かした動きがどのグループでも見られた。

本時のよさは、何よりなわの工夫（前ページ写真）にある。一瞬で目の前を通り抜けるなわの動きが見えるように、発泡スチロールを使った道具を用意した。運動の苦手な子もゆっくりとしたなわ（発泡スチロール）の動きに合わせて安心して、跳び抜けることができていた。

3 研究の成果と課題

【研究主題】

仲間との自分を見つめる学び合いで、「できる」喜びを味わう体育学習



これまでの実践から、仮説イメージ図をもとに、成果と課題を明らかにしていきたいと考えている。

学び合いの土台は築かれていたか、学び合う授業展開はされていたのか、授業を終え、「できる」喜びを子どもたちは実感したのかなど、検討し、まとめていきたい。

(1) 学び合いの土台

学年を縦で見たとき、同じなわを使った運動の授業に学びの積み重ねの大きさを実感した。6年生の姿からは、以下のような学び合いの土台が見られ、大きな成長を感じることができた。

- ・何度も挑戦できる場や時間が全員に確保されていること
- ・なわを回す技能が全員にあること
- ・短なわを全員が跳べること
- ・交流のよさを全員が実感していること

全てに共通するのは、「全員」という言葉である。全員が同じ土台に立つことで、学習形態は一人一人あるいはグループであっても、目指す課題は一緒になる。今後も学び合いの土台として何が必要なのか、追求していく価値があると考ええる。

(2) 伝える力を生かした、学び合う授業展開

1時間の授業の中に、ペアやグループ、あるいは全体でと、互いに意見を出し合い交流する時間を設定してきた。課題解決のために、有効であった場合もあったが、そうではない授業もあった。なぜ、ここでペアによる交流を入れるのか、この全体交流では何を焦点化して話し合うのか、もっと授業づくりの際に考えていかななくてはならない。

(3) 「できる」喜びの実感

スモールステップによって、子どもが「できた」に近づく姿が表れていた。「できる」ことの明確化も分かりやすく有効だった。また、全員が「できる」という目標をもつことにより、伝え合いの必然性を生んでいた。

一方、課題として、さらに実感をもつため、「できた」という喜びを仲間同士で共有したり、広げたりする場面の設定をした方がよかった。また、教師の関わりを的確に行うため、動きの分析が重要であった。子どもたちの動きを見た瞬間に、何が問題なのかを見取り、適切な関わりを行うことができるよう力を付けていきたい。さらに高学年では、子ども同士で課題を見出したり、練習方法を選んだりできるようにし、「できる」喜びへとつなげていきたいと考えている。

研究主題

豊かにかかわり 高め合う 体育活動をめざして

北海道学校体育研究連盟旭川支部 旭川市立千代田小学校

発表者 教諭 塩 崎 真 美

1 旭川支部の研究について

(1) 地域の概要

北海道旭川市は、旭川大雪公園の連なる山並みに抱かれた上川盆地のほぼ中央、北緯43°に位置し、雪降る日数（年間140日）、最低気温（氷点下41℃）で日本一の記録を持っている。また、最近では行動展示で有名になった旭山動物園は、観光の一番の人気がある。人口は、約35万人（札幌市に次ぐ北海道第二の都市）、面積は約748平方キロメートル（東京23区とほぼ同じ面積）で市内に59の小学校（児童総数約18,000人）がある。旭川の歴史は、明治23年行政体として旭川村がはじまり、以降北北海道の中核的な役割の町として発展を続け、平成22年には「旭川開基120年」を迎えた。学校教育は、明治26年上川地方で最初の公立学校が開校し、以降北国旭川の豊かな自然環境を生かし、フロンティア精神のもと「豊かな心とたくましい体」の育成に努めてきた。

(2) 旭川支部のあゆみ

北海道学校体育研究連盟は、昭和34年に結成され、旭川支部は昭和38年「第3回北海道学校体育研究大会旭川大会」を開催し、以降5回の大会開催の実績をもつ。平成9年の旭川大会では、研究主題を「一人一人が意欲的に取り組む体育学習をめざして」とし、意欲をもって学習に取り組める学習課題のもち方、課題を追求をし、達成するための学習活動の工夫、互いに認め合い高め合う評価活動の在り方について、研究が深められてきた。

平成13年度からは、研究主題を「一人一人が主体的に創り、共に高め合う体育活動をめざして」に設定し、平成14年度に施行された学習指導要領実施に沿った考えの研究を進め、課題解決的学習を基盤とした学習過程の工夫や仲間とのかかわりを大切にした学習方法の工夫の在り方について研究が進められてきた。

平成18年度からは、研究主題を「豊かにかかわり高め合う体育活動をめざして」に設定し、平成23年度に小学校が新学習指導要領全面実施、平成24年度には中学校が新学習指導要領全面実施にあたり、新しい時代が要求するものを見通して、実践研究を重ね、小中の授業を見合い、どのように連携をもって指導していくかを研究を進めている。

2 研究の概要

(1) 旭川支部の研究経過

旭川支部では、平成18年度に行われた全道学校体育研究大会に向け、平成16年にそれまでの研究の成果と課題をふまえ、研究主題及び仮説の見直しを行うとともに、実践を積み重ねてきた。平成16年度には、小学校が跳び箱運動、中学校がマット運動の実践を行い、平成17年度はプレ研として小学校がマット運動とリズムダンス、中学校がマット運動と柔道の実践を行い研

修を深めてきた。

◎「基礎・基本を確実に定着させる」とはどういうことか？

◎そもそも「基礎・基本」とは何をさすのか？

◎授業における教師の役割とは何か？

研究の視点になる部分の話し合いを行ってきた。そのような中で、目標を絞り、子どもにも教師にも分かりやすい授業構築を目指してきた。ポイントを明確にした上で学習内容を工夫し、教師が適切にかかわることで、より効果的な授業が展開できるものと考え、実践を行ってきた。また、小学校と中学校で互いに授業を見合う機会をもつなどして、連携をとりながら取り組んできた。指導案の作成については小中合同で検討を進め、1単位時間における評価の観点を一つに絞り、その時間で「何を教えるのか」が明確になるように、改善に努めてきた。現在、その構築された研究理念をもとに、研究を進めている。

平成23年度からの研究では、学習指導要領改訂の全面実施における指導内容に着目し、「体づくり運動」や「武道」、平成24年度では、「表現運動～リズムダンス」、「ダンス～現代的なリズムのダンス」の研究を行い、「身に付けさせたい力の明確化」と「友達や教師とのかかわり」に視点を当て、小中連携して研究を進めている。

（２）北海道統一主題から

全道統一研究主題「自らかかわり、高め合う体育活動の創造」

旭川支部では、子どもたちが他者とかかわりながら互いの力を高め合い、豊かな人間性を身に付け、たくましい身体を育んでいくことを目指し、本研究主題を設定した。

（３）研究主題について

研究主題～豊かにかかわり 高め合う 体育活動をめざして

「豊かに」……豊かな生活を目指す子どもの姿

「かかわり」…子どもと教師と運動（教材）のそれぞれの適切なかかわり

「高め合う」…子ども同士の学びと、子どもが生涯にわたって身体能力の向上

「体育活動」…体育的な活動及び家庭や地域、将来につながる体育に関する実践

（４）目指す子ども像

自ら求める子	豊かにかかわる子
①自ら進んで運動やスポーツに親しむ子	①人とかかわりを通して高まる子
②自らの目標に向かって粘り強く追求する子	②運動を工夫したり創ったりする子

（５）目指す授業像

～基礎・基本の定着をめざす授業～

○楽しさ

○かかわり

○教師の役割

○体力の向上

（６）研究仮説

・指導内容を明確化・体系化し、かかわり合いの場を工夫することにより、基礎となる体力や技能を高め、人や運動と豊かにかかわる態度を育てることができる。

(7) 研究の視点と研究内容

・視点1 指導内容

身に付けさせたい力を明確化し、課題解決的学習を基盤とした学習過程の工夫

- ・「指導計画の具体化と工夫」
- ・「場づくりの工夫」「教材・教具の工夫」
- ・「目標の明確化・焦点化の工夫」

・視点2 教師のかかわり

仲間とのかかわりを大切にした学習方法の在り方についての工夫

- ・「指導計画の工夫と評価」
- ・「教材解釈・分析の深化」
- ・「指導技術の向上」

3 今年度の研究

(1) 今年度の研究テーマ

「リズムダンス・現代的なリズムのダンスの学習を通して、小中の系統性をもった指導」

(2) 研究視点1「学習内容」

①身に付けさせたい力の明確化

- ・小中の技能の系統性をはっきりさせ、指導の連携を図る。

②心と体をほぐす運動

- ・授業の導入で行うことで、開放的で楽しい雰囲気を作ることをねらう。そして、教師や児童生徒のかかわりを取り入れていくこととする。(体ほぐし運動との関連)

③音楽の選曲

- ・児童生徒が関心の高い曲や軽快に弾むことができる音楽を吟味。

④体力向上・楽しさ

- ・楽しい雰囲気を作り、自然と体を動かせるようにする。そして体力向上につなげる。

(3) 研究視点2「教師のかかわり」

①友達とのかかわり、教師とのかかわり

- ・友達とのかかわりやグループでのかかわり方を工夫する。

②話合いの仕方(言語活動)

- ・自分の気付きや友達のよい動きなど発表したり、交流できるようにする。それを生かして、自分の踊りに取り入れる活動とする。

③評価

- ・ワークシートを活用して、思考・判断の自己評価や授業構築への参考にする。
- ・授業のポイントをはっきりさせて、授業での見取りができるように工夫する。

3 研究の具体

(1) 実践例Ⅰ 小学校第3学年 単元名「リズムダンス」

旭川市立永山西小学校 松岡 政哉

ア 授業のねらい

本単元では、誰もが「全身をはずませながら」踊れるようになることを重点として考えた。全身が「はずむ」とは、はねるような動きの他に、腰を振る、ひねる、回る、大きなモーションから止まる、などの体幹を大きく動かす動きの総称と押さえる。児童には「へそを動かす」ことを単元を通して一貫して意識させることで「全身をはずませる」動きにつながると考える。

単元の最初と単位時間の最初に、仲間と関わりながら心と体の緊張をほぐし、誰もがのびのびと自分の動きを表現できる活動を取り入れた。そして、仲間と関わることの楽しさや喜びを感じながら技能を高め合っていく学習を展開できるようにした。さらに、それらの学習を通して、児童がその素晴らしさを実感し、今後もダンスに親しんでいく下地を築いていくことも期待して単元を構成した。

イ 単元の構成

単元の目標

- ・仲間との関わり合いを大切にしながら仲よく交流し、互いのよさを認め合うことができるようにする。
- ・友達の動きを取り入れたり、多様な動きを考えたりすることができるようにする。
- ・リズムの特徴をとらえ、全身をはずませながら楽しく踊ることができるようにする。

単元の構成（5時間）

	めあて	主な学習活動	手だて・◇評価
1	学習への期待と見通しをもつ。	・学習計画と約束を確認する。 ・心と体を解放する活動を行う。	「のりのりダンス」などで楽しくできそうなイメージをもたせる。 ◇運動の行い方のきまりを守り、仲よく交流しようとしている。
2	いろいろなリズムの特徴にあったはずみ方があることを知る。	・レゲエ、サンバ、ワルツ、ロックなどのリズムにあった動きをし、違いを実感する。	教師から動きを提示し、そのまねをすることを中心とする。 ◇いろいろなリズムの特徴を捉えるとともに、リズムが変わるとはずみ方も変わることがわかる。
3	ロックのリズムの特徴をとらえ、全身をはずませながら踊る。	・へそを動かすようにする。 ・縦にはねるような動き、「ウン・タ」の後打ちのリズムを意識する。	先生や友達のまね→自由に踊る→交流。場を制限して交流しやすくする。タンバリンでリズムをとる。 ◇ロックのリズムの特徴を捉え、全身をはずませながら踊ることができる。
4	サンバのリズムの特徴をとらえ、全身をはずませながら踊る。	・へそを動かすようにする。 ・腰を前後左右に動かすような動き、速いステップを意識する。	先生や友達のまね→自由に踊る→交流。場を制限して交流しやすくする。タンバリンでリズムをとる。 ◇サンバのリズムの特徴を捉え、全身をはずませながら踊ることができる。
5	仲間と関わり合いながら動きを工夫するとともに、さまざまなスタイルで交流し、互いのよさを認め合う。	・2人組での動き方を工夫する。 ・いろいろなリズムに乗りながら、様々な形態で交流しあう。	学習で使用してきた曲を中心に、様々なリズムの曲で踊る。交流は場面を設定すると共に自然発生的なグループ化もできるようにする。 ◇リズムの特徴を捉えている友達の動きを取り入れたり、多様な動きを考えたりしている。

ウ 授業の実際

○のびのびと踊らせるために

- ①単元の最初と各時間の最初に心と体ほぐしの活動を取り入れた。友達と無心に楽しむことで、羞恥心を取り去り、心も体も高揚した状態で活動させることができた。
- ②ワークシートを活用し、学習の途中と最後に自己評価を行った。常に学習のめあてを意識させながら意欲を高めることができた。

○仲間とともに楽しさや喜びを感じさせながら技能を高め合っていくために

- ①3, 4時のリズムの特徴をとらえて踊る活動では、教師のまね→友達のまね→即興的に自由に踊る→様々な形態での交流、という学習過程を組んだ。
 - ・教師のまね→「これならできそう」という安心感と見通しをもたせることができた。
 - ・友達のまね→「楽しく踊れそう」という期待感をもたせることができた。
 - ・即興的に自由に踊る→思いをのびのびと表現し、夢中になって踊らせることができた。
 - ・様々な交流→友達のよさを認め、自分の動きに取り入れさせることができた。
- ②技能のめあてに沿ってダンス名人を選んだり、ワークシートを活用して相互評価をし交流する時間をとったりした。活動しながら感じたことを言語化することで、認め合い高め合う意識をより確かなものにすることができた。

○全身で弾ませるために

- ①各時間の最初に教師が提示する「のりのりダンス」を行った。イメージがもてない子や即興的に動けない子が安心して活動することができ、全員が全身ではずむことができるための大きな手だてとなった。
- ②「へそを動かす」ために腰に「のりのりベルト」をつけた。先生や友達を見てへそが動いているとき、動いていないときの違いがはっきりと分かり、自分のへそを動かす意識をもたせることができた。

(2) 実践例Ⅱ 中学校第2学年 単元・単元の内容「ダンス・現代的なリズムのダンス」

旭川市立緑が丘中学校 田島 徹

ア 授業のねらい

本単元では、現代的なリズムのダンスの中でも特に、「ヒップホップ」を取り上げ、全体を3つのねらいをもって構成し、その特性にふれさせるように計画した。

「ねらい1」の学習では、ロックやヒップホップなどのリズムに乗って、全身で自由に弾んで踊れるようにすることを課題とした。準備運動から音楽を取り入れ、リズムに乗ることに慣れさせるとともに、グループで、体幹を意識しながら全身を動かす自由な発想の振り付けを考えさせ、発表するようにした。

「ねらい2」の学習では、ねらい1での体幹を意識した全身の動きを生かしながら、リズムの乗り方を含めた基本ステップの習得を課題とした。ヒップホップ特有の「ダウン & アップ」の動きを中心に簡単なステップやターンの習得を共通課題とした。

ねらい3の学習では、ねらい2で身に付けた各種のステップやターンを組み合わせたり、生徒に創作させたり最後にグループごとに発表し合うよう全体の流れを計画した。

上記のねらいを達成しやすくするために、学習全体を通して2つのことに取り組ませた。1つ目は、主運動に入る前の準備運動段階からヒップホップ特有のリズムを有する音楽を使用することで、リズムに乗って弾むことに体を慣れさせた。2つ目は、授業の導入段階では「教育

相談の機能を生かした仲間作り」に取り組ませたり、授業の取組を振り返る場面では、班ごとに「シェアリング」の機能を生かしながら自分や仲間のよさを発見させる活動に取り組ませたりする中で、班の中でお互いのよさを認め合いながら学習を進めた。

イ 単元の構成

単元の目標

- ・ダンスに自主的に取り組むとともに、仲間と協力して互いに教え合ったり、よさを認め合ったりし、進んで練習することができるようにする。
- ・練習の中から自己や班の課題を発見し、その課題解決のためにアイディアを出したり、工夫したりすることができるようにする。
- ・ダンスの特性や意義、創作の手順、発表や鑑賞の仕方を理解することができるようにする。

単元の構成

	めあて	主な学習活動	手だて
習得・活用 12	オリエンテーション	・学習のねらいや流れを知る。 ・グループ編成をする。	学習シートを用いて見通しをもたせる。 ◇学習への見通しをもち、意欲的に取り組もうとしている。
	ロックやヒップホップのリズムに乗って、全身で自由に動こう。	・リズムにのったウォーミングアップを取り入れる。(生徒のアイディア)	みんなで一緒に踊ったり、声かけをしたりしていく。 ◇リズムに乗って元気よく体を動かそうとしている。
	ヒップホップダンスの基本ステップを身に付け、リズムに合わせて踊ろう。	・リズムに乗った動的ストレッチ ・リズムトレーニング ・基本ステップの練習 ・足の動き→上半身の動き→全身の動きへ。	VTRを使って自己の動きを把握させて、ステップのポイントや練習方法を助言する。 ◇基本ステップを身に付け、リズムに乗って動くことができる。 ◇基本ステップのポイントを理解し、自己評価することができる。
	自分たちで基本ダンスを組み合わせたたり、オリジナルダンスを加えたりして互いに発表し合おう。	・今まで身に付けた技能を元に課題に基づいて自分たちで振り付けを創作する。	VTRを使って自己の動きを把握させて、ステップのポイントや練習方法を助言する。ダンスの動画を動き作りの参考とする。 ◇創作活動で演技構成のアイデア出し、工夫している。
題材未活用 1	発表会 学習の振り返りと今後に向けて	・各グループごとに発表する。 ・他のグループと自分たちの踊りの評価 ・単元全体の自己評価	学習シートに他のグループへの感想や自己評価を記入させる。 ◇仲間の踊りやがんばりを認めようとしている。

ウ 授業の実際

①身に付けさせたい技能の明確化

→体幹を使った動きを意識させた。

視聴覚機器などを用いて技能習得のポイントを明示した。

②協同的、課題解決的に取り組む学習過程の構築

→シェアリングの機能を生かし、班員でお互いの頑張りを分かち合い、班員同士の絆を深めながら学習を進めた。

③確かな学力を保障する指導と評価の充実

→技能習得のための教師の適切な支援と、VTR等を用いての自己評価と班員同士による他者評価を行い、その後班の中で教え合い・学び合う場を設定した。

3 研究の成果と課題

本年度、旭川支部では、平成18年度の小学校の実践、および平成21年度の中学校の実践を踏まえて、リズムダンス・現代的なリズムのダンスの学習を通して、小中の系統性をもった指導を研究を行ってきた。

〈平成18年度、平成21年度の研究成果〉

(小)児童の多様な動きを引き出し、みんなで踊る楽しさを味わわせる学習となった。

(中)生徒が自ら多様なステップの習得とオリジナルダンス作りを行えるための手だてが考えられ、協同的に課題を解決しながら技能を身に付けていける学習となった。

〈平成18年度、平成21年度の課題〉

(小)身に付けさせたい力である「全身をはずませる」ための手だての弱さがあった。

(中)技能の習得が難しい生徒は最後まで意欲がもてずに終わるという課題が残った。

〈今年度の設定にあたっての課題〉

対象児童・生徒が小学校3、4年生と中学生ということで年代差がある。発達段階大きな差があれば、目標や学習内容にも大きな差があり、系統立てるのが難しい。

〈改善策〉

旭川支部の研究の視点である「基礎・基本の明確化と定着」「友達とのかかわり、教師のかかわり」から考え、以下の3点を共通の大きな柱とした。

- ダンスを楽しむための導入や教材・教具、場の工夫
- 児童、生徒同士が認め合い、高め合うための交流の工夫
- 体幹を中心とした動きを身に付けさせるための具体的な手だて

〈今年度：小学校の成果〉

- ①導入で音楽に乗り教師も一緒になってみんなで楽しく関わる活動を行うことで、心も体も解放してダンスに意欲的に取り組むことができた。
- ②常にへそを動かす意識をもたせることで、学習のねらいがはっきりし、技能を習得するために思考・判断の規準となった。
- ③最初は教師が主導的に関わり、誰もがができる動きを提示し、そのまねから始めることで、安心して学習に取り組み、そこから自分たちの動きの工夫を見い出していた。
- ④様々な形式で友達と関わり合いながら即興的に踊ることで、心も体もダンスに没頭して楽しみ、お互いに認め合ったり高め合ったりすることができた。
- ⑤教材・教具の活用や授業分析により、学習過程や手だての工夫を効果的に行え、子どもたちの変容が明らかだった。

〈今年度：中学校の成果〉

- ・導入で体幹を意識しながら教師も一緒に自由に踊ることで、ダンスを楽しもうとする意欲と、全身を弾ませて踊る意識をもつことができた。
- ・視聴覚機器などを利用することで、生徒が進んで基本的なステップを身に付けたり、グループでの多様な動きを考えたりできた。

- ・ワークシートの活用や仲間と話し合い、教え合ったり高め合ったりすることで、みんなで踊ることの楽しさを味わわせ、技能の向上を図ることができた。

〈今年度：小中連携の成果〉

- ・学習のおさえを明確にすることで、仲間と豊かに関わり合いながらダンスを心から楽しむことができ、もっと踊りたいという意欲をもって学習に取り組むことができた。
- ・基礎・基本となる体幹を中心とした弾む動きを身に付けることができた。
- ・楽しみながら弾んで踊ることで、運動が苦手な子でも無意識のうちに他の単位では見られないような運動量をこなすこととなり、体力向上の面でも大きな成果が見られた。
- ・小学校で全身を弾ませる力を身に付けた児童は、中学校のダンスの学習に大きな期待と意欲をもって臨み、よりダイナミックに体幹を使って踊り、より高いレベルで仲間と関わりながら技能を向上させていくことができるという見通しがもてた。

〈研究の課題〉

- ・小学校のリズムダンスは、運動会で発表するダンスとして扱われたり、フォークダンスに置き換えるように解釈されたりと、十分な指導がされていない現状がある。中学校での意欲の低下や体幹を弾ませる技能の不十分さにつながるということが予想される。
- ・中学校では、ステップを中心に技能に偏った指導になりがちである。簡単なステップの技能は必要だが、まずはステップありきでは苦手な生徒は意欲がもてない。小学校の学習を踏まえ、体幹を意識して自由に踊り、どの生徒もダンスを楽しめるようになった上で、段階的に技能の習得に入っていくことが必要と考える。

4 旭川支部の今後の方向性

今年度の研究は小中の連携に絞って行った。学習指導要領を何度も読み直し、お互いにどのように系統付け研究できるかを探っていった。これまで旭川支部は、「基礎・基本の定着」や「教師がどのように授業に関わるか」を中心に研究を進めてきた。今回の研究も技能を中心に系統づけて見取り、そこから身に付けさせたい力をはっきりさせ、「学習内容」、「友達とのかかわり、教師とのかかわり」を追求していった。今までの研究では小中お互いの単位で見合うだけであったが、共通意識をもったの研究は今後を見通すために意義深いものであった。今後も方向性を確認しながら系統性を探っていききたい。

また、今回の実践をもとに、リズムダンス・現代的なリズムのダンスの学習がどの学校でもより充実していくことを期待したいと考える。

【研究主題】

「わかる」「できる」夢中になる体育学習
 ～体を動かす心地よさや、
 動きの高まりを共に喜び合える子どもを目指して～

【日 程】

	9:40	10:50	11:55	13:10	14:35	15:00
9:00	10:25	11:35	13:00	14:15	14:55	
受 付	第 一 次 公 開 授 業	休 憩	第 二 次 公 開 授 業	ア ト ラ ク シ ョ ン	昼 食 休 憩	開 会 行 事
						研 究 発 表 協 議 Ⅰ
						研 究 発 表 協 議 Ⅱ
						指 導 講 評
						閉 会 行 事

【会場案内】

**札幌市立
資生館小学校**
 〒060-0063
 札幌市中央区
 南3条西7丁目1
 TEL: 011-204-9811

【アクセス】
 地下鉄南北線「すすきの駅」下車
 ↓
 徒歩5分

じょうてつバス
 「資生館小学校前」下車

市電「資生館小学校前」下車

札幌市立資生館小学校



所在地	札幌市中央区南3条西7丁目
電話	(011) 204-9811
学校長	益村 豊
生徒数	598名

◎学校教育目標

「豊かな知恵と心 世界にはばたく すてきな人」

- ・自分の夢や願いにむかい 進んで学ぶ子
- ・相手のことも考えて ともに行動できる子
- ・どんなことにもくじけない 強い心と体をもつ子

◎特色

本校はＪＲ札幌駅周辺・大通公園・すすきの・中島公園を校区とする、札幌の中心に位置する学校です。平成16年度に『札幌都心部子ども関連複合施設』として建設され、しせいかん保育園・子育て支援総合センター・ミニ児童会館が併設された、未来の学校を予感させる小学校です。これらの複合施設と様々な部分で連携をとりながら教育活動を行っています。自慢は札幌市内では唯一の芝生のグラウンド。子どもたちも芝生に愛着をもっており、休み時間には芝の上を転がり回って遊んでいます。

授業者の紹介



第5分科会 授業①

札幌市立資生館小学校

山本 敦史

6年3組 担任

学生時代は野球少年で、現在の趣味は草野球後のビール。スポーツの喜びを毎週味わっています。
基礎スキー1級。

授業の見どころアピール

体格差や技能差を乗り越えて、器械運動の楽しさや喜びに触れることができるような授業を目指します。課題解決的な学習を通して、個人の技能向上だけでなく、人とのかかわり合って学ぶ楽しさを感じられるようにかかわっていきます。

ひとりごと

体育は好き。ボール運動は大好き。でも鉄棒やマットは…。小学生の自分はそんな子どもだった気がします。今回の授業を通して、子どもたちも私も器械運動大好きと言えるようになりたいです！



第5分科会 授業②

札幌市立資生館小学校

長谷部舞里

2年1組 担任

小学4年生から始めたバスケットボールを今も続けています。最近は負け試合ばかりなのが悩みですが…。体力と気力の限界に挑戦中。

授業の見どころアピール

ゲームを通して「弾ませる、つく、投げる、渡す、受けとる」などのボール操作力を高め、さらにゲームの楽しさを広げていけるような授業を目指します。自分の思い通りに得点した時の、瞳を輝かせて喜ぶ子どもの姿が体育館中に満ちるようにかかわっていきます。

ひとりごと

一人でも楽しいけど、友達と一緒にだともっと楽しいボールゲームの魅力に浸ることができればと願っています。「ボールは友達」（『キャプテン翼』で有名な名言）を心に子どもたちと楽しく仲良く授業をつくっていきたいです。

研究主題

「わかる」「できる」夢中になる体育学習

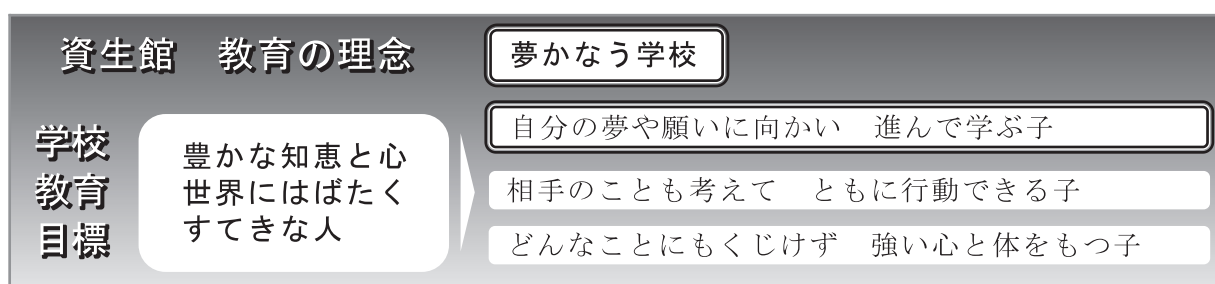
～体を動かす心地よさや、動きの高まりを共に喜び合える子どもを目指して～

札幌市立資生館小学校

1 研究の概要

(1) 研究主題設定の理由

ア 本校の研究経過から



■研究主題■

目指す子ども像

夢をかなえる すてきな子の育成

■研究副主題■

目指す授業像

わかった できた 楽しい授業

本校は「夢かなう学校」という教育理念のもと、開校以来9年間の教育活動が行われてきた。「夢かなう学校」とは、自分の目標や願いをもち、そこに向かって進んでいく意志をもつ子どもを育む学校のことである。子どもが仲間と共に学び、目標を達成する喜びを感じることで、自分の夢に向かって自ら努力し、新しい時代を生き抜く力を育んでほしいという願いが込められている。

この教育理念を達成するために、研究主題（目指す子ども像）を「夢をかなえるすてきな子の育成」、研究副主題（目指す授業像）を「わかった できた 楽しい授業」と設定した。子どもたちが「夢（目標や願い）」をかなえようとする意志をもつには、その夢に近付くための道筋が見えることが大切である。子どもが何か夢をもったとしてもどうすればそれが達成できるのか分からないままでは、抱いた夢もやがてはしぼんでしまう。自分の夢を達成するためにはどうすればよいのかを追求していく力を育むのが、本校の研究である。毎日の課題解決的な授業を通して、一人一人の子どもが自分の課題をもち、それを追求する手だてを仲間や教師と共に学んでいくことで、「わかった」「できた」という実感をもつことができる。学ぶ楽しさ、達成する楽しさを実感した子どもは、再び新しい夢をもって自ら動き始める。このような子どもたちの姿を目指して、日々の実践に取り組んでいるところである。

イ 児童の実態から

本校では、スクールバスでの通学児童が多く、近隣に運動できる場所が少ないといった実態から、運動経験が極端に少なかったり、体を動かすことに苦手意識をもっていたりする子どもが少なからず見られる。何もない場所でつまずいて転ぶ、普通に歩いている際に人や物にぶつかってしまうなど、日常生活に必要な身のこなしもうまくできていない子もいる。昨年度の新体力テストでは、反復横跳びは男女ともほぼ全学年で全国平均値を上回っているものの、それ以外の50m 走、ソフトボール投げ、20m シャトルラン、立ち幅跳び、長座体前屈、握力、上体起こしでは、男女ともほぼ全学年で全国平均値を下回るという結果が出ている。加えて学年が上がるほど、全国平均値との差が拡大していく傾向にある。スポーツ少年団などに入り、積極的に運動に取り組んでいる子はいるが、それ以外の子は日常的に運動に親しむことは少ない。体力の低下、運動する子としない子の二極化という全国的な傾向が本校にも当てはまっている。

また、生活リズムが不規則で、学習へ向かう準備が整わないまま登校をしている児童も見られる。学校生活の中でリズムを整え、運動への関心を高めるために、登校後の朝の時間を活用して全校で体操をしたり、放課後のグラウンドを開放して体を動かす場所を提供したりするなどといった学校一丸となった取組も進めているところである。

こうした本校の子どもたちには、体を動かすことの心地よさを伝え、動きが高まることの喜びや、ともに学び合い高め合おうとすることの楽しさを実感させることが大切だと考えた。「楽しさ、心地よさを感じ運動する」→「仲間との関わり合いの中で高まりを実感する」→「より夢中になって運動に取り組む」というサイクルを体育学習の中で経験していく中で、それ以外の場面でも日常的に仲間と運動に親しんでいこうとする意欲をもつ子どもたちを育てていきたい。

以上の本校の研究経過と児童の実態から、体育科の研究主題を、『「わかる」「できる」夢中になる体育学習～体を動かす心地よさや、動きの高まりを共に喜び合える子どもを目指して～』と設定した。

(2) 目指す児童像

本校の目指す子どもの姿、

「自分の夢や願いに向かい、進んで学ぶ子」

「相手のことも考えて、ともに行動できる子」

「どんなことにもくじけない、強い心と体をもつ子」

をもとに、体育科では以下の児童像を設定した。

○自分の課題をもち、自分から運動へ取り組もうとする姿

○仲間と共に学び、教え合い助け合う中で、動きの高まりや運動の心地よさを味わう姿

○頭と体を働かせ、粘り強く運動に向き合って課題を解決していこうとする姿

(3) 研究の仮説

目指す児童像に迫るために以下の仮説を設定した。

個に応じた課題をもてる運動・人とのかかわりが生まれる運動に十分浸り、個の高まりとともに集団の高まりが達成できる学習を構成することで、一人一人の子どもが「わかる」「できる」を実感し、「もっとうまくなりたい」「もっとみんなと楽しく体を動かしたい」と夢中になって運動に取り組むことができる。

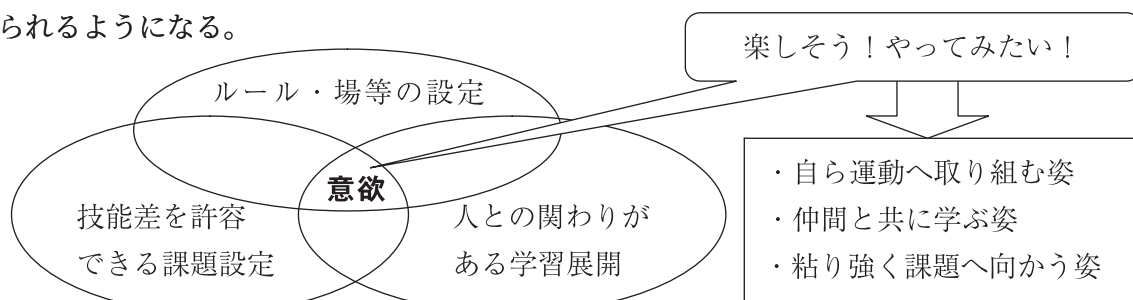
(4) 研究の視点

〈視点1〉 運動への意欲を高める教材化

子どもたちが誰もが「楽しそう!」「やってみたい!」と運動への意欲を高める教材との出会いを設定する。具体的には主に次の3点を重視した教材化を行う。

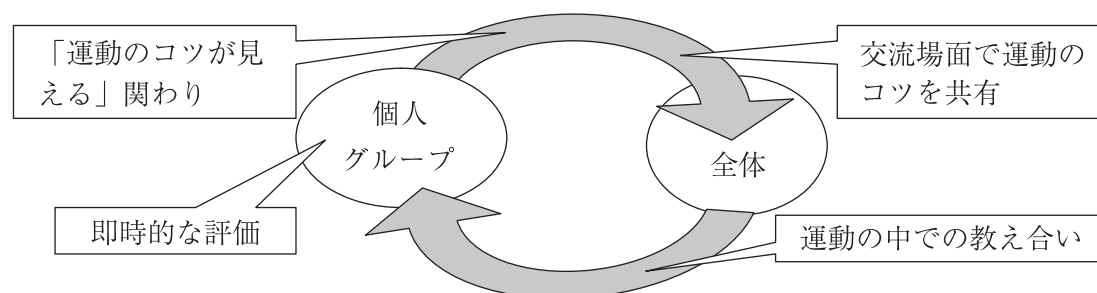
- ・自分にもできそうだという意欲がもてるルール・場等の設定
- ・個々の技能差を許容できる課題設定
- ・人と関わり合いながら運動できる学習展開

このように意欲をもって運動に浸ることができる教材化を図ることで、子どもたちは課題をもって運動に取り組み、互いに教え合い助け合いながら共に動きを高め合っていく姿が見られるようになる。



〈視点2〉 個の高まり、集団の高まりを意識させる教師の関わり

運動場面の中では、子どもが自分の動きを客観的に認識することは難しい。教師が評価の観点を明確にし、動きの高まりが表れた瞬間を価値付け、即時的に評価していく関わりを大切にしていく。そうしてつかんだ個々やグループの高まり、運動のコツを交流場面を通して全体で共有する。具体的には、学習カード、掲示物、映像機器の活用などを通して、「運動のコツが目に見える」ような交流を図る。ここで共有した学びを伝え合い教え合いながら、子どもたちに再び運動に取り組ませていく。このような教師の関わりから、子ども同士が互いの動きに関心を持ち、仲間と関わり合い高め合いながら運動に取り組んでいくことができる。



2 研究の具体

(1) 実践例Ⅰ 第2学年 単元名 『用具を操作する運動遊び』

ア 授業のねらい

用具を操作する運動遊びを楽しく行うための体の基本的な動きや各種の運動の基礎となる動きを身に付けていくことができる。

本単元では、なわ・輪・ボールの種目に限定して行う。1時間目は、一人で行う運動遊びに思いきり楽しみながら用具に親しむことを大切にする。様々な動きがあることを確認するとともに、複数人で遊びを試し始める子の様子を紹介して、もっと遊びが増えそうだという次時への見通しをもたせる。2時間目からは、人数を増やして遊ぶという条件を変化させ、さらに動きを工夫して行えるようにする。子どもはどんどん遊びのレパートリーを増やしていきながら、ねらいとする動きを身に付けていくのである。また、学習した内容を休み時間の遊びや放課後の遊びにつなげて日常化できるようにしていきたい。そのために、遊びの工夫やよい動きを全体で共有したり、価値付けたりして、「もっとやってみたい、工夫したい。」という意欲を育んでいきたい。さらに、人とのつながりに仕向けていく交流をつくり、友達と楽しく関わって運動を工夫していくことができる態度を育てていく。

イ 単元構成

時 間	1	2	3
ねらい	なわ・ボール・輪を使って、遊びにじっくり浸る。	複数人でのボール遊びを試し、多様な動きを体験する。	複数人での輪遊びを試し、多様な動きを体験する。
学習活動	みんなで遊ぼう！チャレンジランド	ボールランドをもっと楽しもう！	フラフープランドをもっと楽しもう！
評価の観点と方法	【関心・意欲・態度】 ・用具を操作する運動遊びに進んで取り組もうとしている。(観察・学習カード) ・運動の順番やきまりを守り、友達と仲良く運動をしようとしている。(観察・学習カード) ・場や用具の使い方などの安全に気を付けようとしている。(観察) 【思考・判断】 ・友達と一緒に運動したり用具を使って運動したりするなど、運動の行い方を選んでいる。(観察・学習カード) ・使用する用具を変えながら、いろいろな運動の仕方を見付けている。(観察・学習カード) ・用具を操作する運動遊びの動き方を知るとともに、友達のよい動きを見付けている。(観察・学習カード) 【技能】 ・なわ、ボール、輪などの用具を操作する動きができる。(観察)		

ウ 授業の実際

運動に浸り、自分なりの遊びを試して広げていく場

なわランドでは、自由遊びの様子から、「なわを回しながら走る遊び」「あや跳びや二重跳びなどに挑戦する遊び」「二人組でやるなわ遊び」に分けられた。「なわを回しながら走る遊び」では、走るスピードを変えて遊ぶ、なわを回すスピードを変えて遊ぶ、いろいろな方向に転換しながら遊ぶ、競争をする、リレーをする、鬼ごっこをする、といった工夫をどんどん考えながら、遊びを楽しむ姿があった。

ボールランドでは、「投げる遊び」「床につく遊び」「転がす遊び」「足を使う遊び」に分けられる動きのバリエーションが活動の中で見られた。遊びながらより高く、より速く、より遠く、より多くという意識が強くなっていた。また、ボールの種類も大きいもの小さいもの軽いもの重いものと色々と試せるようにし、ボールによって、やりづらいもの、やりやすいものがあることに気付きながら、遊びを工夫する姿もあった。

フラフープランドでは、「投げる遊び」「転がす遊び」「回す遊び」「跳ぶ遊び」にあらかじめ動きを分け、よい動きを価値付けながら遊びの種類を増やしていった（写真1）。



写真1 フラフープランド

遊びの工夫や楽しさをみんなで共有する場

「先生、見てみて!」と自分の試した遊びをやって見せたい子が集まってくる。「こうやって遊ぶと楽しいよ!」と興奮しながら説明する子が多く、全体交流で自分のやった遊びを紹介させた（写真2）。その中で、よい工夫や動きをどんどん価値付けていった。交流後には「もっと新しい遊びをやってみたい」「他の人がやっていた遊びを試してみたい」と動きをさらに広げていこうとする意欲をもって活動に取り組むことを期待して、単元を通し必要に応じて全体交流を行っていった。



写真2 よい動きを広げる全体交流

また、練習が必要な技を要する動きについては、上手にできる子からコツを聞いてみたり、教師から新しい遊びを紹介したりする場面も交流の中で、効果的に設定し、動きのバリエーションが増えていくようにした。

条件設定で友達と関わりながら、動きを増やしていく

遊びを考え工夫する過程の途中に、「複数人で楽しむ遊び」という条件設定を意図的に行った。友達とよりよく関わりながら遊ぶことで、遊びの楽しさ、遊びの種類がさらに増していくことが期待できるからである。加えて、一緒に遊ぶ相手を意識することで、用具操作がより丁寧に正確にする意識が高まり、技能を高めることにつながると考えた。

子どもの中には、早い段階から複数人で遊びを楽しもうとする積極的な姿が見られ、それを価値付けしながら全体へと広げていった。「対決・競争する遊び」「タイミングを合わせて用具を受け渡す遊び」「役割を決めて行う遊び」「動きをそろえて互いに見合う遊び」などが見られ、一人遊びでは体験できない動きを試すことができた（写真3）。



写真3 複数人での遊び

(2) 実践例Ⅱ 第6学年 単元名 『ソフトバレーボール』

ア 授業のねらい

ゲームの楽しさに触れ、助け合って運動しながら、簡易化されたゲームでチームの連係による攻防をするためのボール操作やボールを持たないときの動きを身に付けていくことができる。

本単元では、自陣にきたボールを味方同士でつないで返すことで得点が変わるというルールでゲームを行った。相手から来たボールを1～2回で返した場合は1点、3回つなげてから返すことができれば3点というように得点を設定した。また、単元の途中でも子どもたちが必要と感じたときにはルールを工夫して、ボールをつないだり、攻撃しやすくしたりできるようにした。仲間とボールをつなげることで得点が増し、攻撃パターンの幅が広がるルールを設定することで、チームで連係プレーをする必要感が生まれ、互いに教え合って動きを高め合う学びが生まれると考えた。集団での学びの中で、ボールの方向に体を向ける、落下地点に素早く場所を移動する、仲間が受けやすいようボールをつなぐといった個々の技能を高めることをねらった教材化である。

イ 単元構成

時間	1	2	3	4	5
ねらい	ソフトバレーボールを楽しむ	高得点を得るために、チームでボールをつなげるコツをつかむ		おとり・フェイントなど相手がとりにくい攻撃の仕方を考える	
学習活動	ソフトバレーボールをやってみよう	「ゲーム」チームでつないでから相手に返そう		「ゲーム」相手がとりにくいボールを返そう	ソフトバレーボール大会をしよう
評価の観点と方法	【関心・意欲・態度】				
	・集団対集団で競い合う楽しさや喜びに触れることができるよう、ボール運動に進んで取り組もうとしている。(観察・学習カード)				
評価の観点と方法	・ルールやマナーを守り、友達と助け合って練習やゲームをしようとしている。(観察)				
	・場を整備したり用具の安全を保持したりすることに気を配ろうとしている。(観察)				
評価の観点と方法	【思考・判断】				
	・ゲームの行い方を知るとともに、簡易化されたゲームを行うためのルールを選んでいる。(観察・学習カード)				
評価の観点と方法	・チームの特長に応じた攻め方を知るとともに、自分のチームの特徴に合った作戦を立てている。(観察・学習カード)				
	【技能】				
評価の観点と方法	・簡易化されたゲームで、チームの連係による攻撃や守備をするための動きができる。(観察)				

ウ 授業の実際

個々のボール操作を高める手だて

チームの連係プレーによる攻撃を目指すためには、個々のボール操作の向上が必要である。1時間目には、初めてソフトバレーボールに触れる子どもたちに、ゲームを楽しむ中でボールのはじき方の指導を行った。そして毎時間の授業の始めに、ペアの子や同じチームの子たちと、ボール操作の練習にゲーム感覚で楽しみながら取り組める準備活動を行っていった。

短い時間でも、毎時間一人一人の子どもが楽しみながらボールに触れることで、少しずつ片手または両手でボールをはじく感覚を身に付けていくことができた。

**ボールをつなげ
るコツをみんな
で共有する場**

チームでボールをつなぐコツを探りながら練習・ゲームを行う中で「ボールを見てないとだめだよ!」「見るだけじゃなくて、そっちを向いておかないと。」「もっと高くあげないと間に合わないよ。」などと、運動をしながらチーム内で教え合いが生まれてきた。そこでの自然な関わりを教師がその場で価値付け、全体で交流していった。全体交流の場では言葉で動きを表現させるだけでなく、ボールの方向に体を向ける、素早く動き出す体勢を整えておく、仲間がとりやすいよう高いボールを上げる、といった実際の動きを実演しながら、ボールをつなげるために必要な体の使い方を共有させていった(写真4)。その後のゲームでは、自分にボールが来ていない状況でも、全員がボールに対して体を向けて、声をかけ合いながら運動する姿が見られた(写真5)。



写真4 全体交流



写真5 交流後の動き

**新たな意欲を生
む思考・判断の
場**

チームでボールをつなぐことができるようになってきた子どもたちの次の意識は、攻撃の仕方に向かって流れていく。「つないで返しても、相手に拾われたらあまり意味がない。」「相手がとりにくいボールを打ちたい。」という思いをもって、攻撃しやすいルールを考えていった。1回だけボールをキャッチしてよい、1回だけならボールをキャッチし移動してもよい、チームで何回でもボールにさわってもよい、などの工夫が出されていった。その中から、「一人の人が連続でなければチームで何回でもボールにさわってもよい」というルールを採用した。キャッチという要素を取り入れなかったのは、だんだん身に付いてきたボールの落下点に素早く移動するという動きが消えてしまうと考えたためである。新しいルールが設定されたことで、新たな意欲をもって相手がとりにくい攻撃の仕方を考えるという次の課題に向かっていった。「二人でつないでいる間からもう一人がアタックする」「つないで近付いて打ちやすい場所へ進む」「トスをつなぐと油断させてアタック」などの作戦を考え、教え合いながら運動に取り組んでいく姿が見られた。



写真6 つなぐと油断させてアタック

3 研究の成果と課題

〈視点1 運動への意欲がもてる教材化〉

○成果

- ・教材との出会いの時間を大切にし、子どもが運動に浸る時間を確保することで、「もっとこうしたい」「こんなことができるようになりたい」という思いをもってその後の追求活動に向かっていくことができた。
- ・遊び方やゲームのルールを自分たちで考えて工夫させていくことで、主体的に運動へ取り組むことができた。
- ・友達と関わりながらの運動を楽しむ姿が見られた。

△課題

- ・ルールや遊び方の工夫で広がった動きが、授業のねらいからそれてしまった場面があった。

ルール・場などの設定、技能差を許容できる課題設定、人との関わりがある学習展開の3点を意識した教材化を行うことで、単元を通して意欲を持続させながら運動に取り組む子どもたちの姿が見られた。運動に対して苦手意識がある子どもも、自分でもできそうだという意識をもち、仲間と一緒に運動に取り組んでいくことで、たくさん汗を流していくことができた。課題としては、運動の中から子どもたち自身に新たな課題が明確になるような学習展開の吟味をしていく必要がある。適度な抵抗感は子どもの意欲・技能向上に欠かせない。子どもの思いをよく理解した課題設定・ルールや場の工夫を意識して教材化を行っていきたい。

〈視点2 個の高まり、集団の高まりを意識させる教師の関わり〉

○成果

- ・子ども同士が互いの動きに関心をもち、運動の中で声をかけ合いながら学びをつくる姿が見られた。
- ・「運動のコツが目で見える」交流を意識することで、多くの子どもに動きの高まりが見られるようになった。

△課題

- ・集団としての高まりが、十分に一人一人の技能向上につながっていない場面も見られた。
- ・限られた時間の中で効率的な全体交流にならなかった場面があった。

交流の中で、個人やグループのよさを価値付けたり、運動のコツを明らかにしたりすることはできた。仲間との協同的な学びの中で、生き生きと運動に取り組む姿が見られた。課題としては、より効率的で効果的な交流場面の組織の仕方や、集団としての高まりを、一人一人の子どもの高まりに確実ににつなげていく教師の関わり方を吟味していく必要がある。子どもたちにとって必要感があり、個の課題解決に向けた関わりを追求していきたい。

研究主題

運動のよさを実感し、互いにかかわり
学び高め合う体育学習
～運動に熱中し、仲間と学び合う子の育成～

北海道学校体育研究連盟上川支部 当麻町立当麻小学校
発表者 教諭 中山 敬 史

1 上川支部の概要

上川管内学校体育研究会（以下上学体）は、昭和60年に発足し、今年で27年目を迎える。母体となる会員は、旭川市を除く上川管内の教員を中心に構成され、会員数は106名を数える。上川管内は南北225kmと広範囲に及び、情報交換や交流が容易ではないため、「北部」「中央」「南部」と3地区に分け、輪番制で研究会を開催し、研究の成果を発表している。

北海道学校体育研究連盟の大会については、昭和62年に第1期研究主題「自らすすんで運動に参加し、実践力のあるたくましい子どもの育成を目指して」のもと「第25回北海道学校体育研究大会・士別大会」、平成11年には第2期研究主題「一人一人が健やかな生き方を求める体育学習」のもと「第36回北海道学校体育研究大会・鷹栖大会」を開催した。平成25年には「第50回北海道学校体育研究大会・富良野大会」を開催する予定である。

2 研究について

（1）研究主題設定の理由

ア 支部研究の経過から

平成13年からは、第3期研究主題を「自ら追求し、ともに学び高め合う体育学習を目指して」とし、「学習者」・「学習内容」・「教師」という3つの研究の視点を柱に研究を進めてきた。平成16～18年度については、視点2「学習内容」に重点を置いた研究に取り組み、「運動の基礎的・基本的」に焦点を当てた授業づくりを行った。平成19年度からは、視点1の「学習者」を重点とし、「運動を通しての人との豊かなかかわり」に着目して研究に取り組んだ。また、「心と体の一体化」を踏まえ、仲間や教師など「人とのかかわり」を通して、思いやりや新たな気付き、達成感を味わわせることを目指し、子どもの心に働きかけ、人間力を培う授業づくりに取り組んできた。

平成19年度より第4期研究主題の見直しの作業に取り組んだ。見直しにあたって、今までの研究の積み重ねの評価、新体力テストのデータ分析、会員によるアンケート調査、毎年1月に開催される三者懇談会（上学体・北海道教育大学旭川校・北海道教育庁上川教育局）での意見交流を行い、研究主題を模索してきた。

イ 子どもの実態から

上川の子どもの体力面であるが、平成17年度～21年度の新体力テストの結果を分析したところ、握力に関しては全国平均値を上回っているもの、走力・瞬発力・柔軟性に課題があり、特に走力については全国平均と大きな差が見られた。これからは、これらの向上を図るとともに、自分の身体を上手に動かすことのできる力（身体能力）を向上させる必要性が浮かび上がった。

会員アンケートからは、少年団活動や部活動などで積極的に取り組む子どもと運動に対して

消極的な子どもとの間に、意欲面および運動技能面における二極化が生じていることが分かった。また、「集団的活動」や「身体表現」などを通じたコミュニケーション能力の育成や、人との関わりの中で基礎的・基本的を確実に身に付けることが不十分であった。そのために、体育の授業の中で運動の楽しさを味わわせ、運動を日常的に定着させる必要性があることが分かった。

このように、上川の子どもの体力の低下や運動への意欲面や技能面の二極化が進む要因の一つに、「運動は楽しい」という経験を味わったことが少ない子が多いからであろうと考えた。運動の楽しさを感じさせるためには、学校体育では、子どもたちが「運動に夢中になり、熱中する」ような授業展開をしていく必要があると考える。

この運動に夢中になり、熱中する授業を構築するための要素として「運動のよさ」に着目した。その要素は、・体を思い切り動かせる・本気になろうと思える、やってみたいと思える・できる、わかるが実感できる・運動の醍醐味を感じるなどが挙げられる。この運動のよさを意図的に授業の中で味わわせることで「運動を楽しみ」と感じ、子どもたちが運動に夢中になり熱中し、日常的に継続して運動に取り組むようになると考える。

さらに、「他者との関わり」については第3期研究主題でも研究を進めてきたところであり、仲間と多様に関わり合う場面を設定し、協力したり、互いのよさを認めたり、励まし合ったりしながら課題を解決し、仲間との関わりを通して、思考力・判断力・表現力、コミュニケーション能力を培っていくことが求められている。また、北海道学校体育研究連盟の研究主題でも「かかわり」が強調されていることも踏まえた。

以上の点から、平成22年度より、第4期研究主題「運動のよさを実感し、互いにかかわり学び高め合う体育学習」を研究主題として取組がスタートし、「運動に熱中し、仲間と学び合う子の育成」というサブテーマを設け、研究の方向性を具現化した。

平成25年には「第50回北海道学校体育研究大会・富良野大会」が開催される。そこでは、小・中で全面実施された新学習指導要領の改訂の趣旨や、今年度に札幌市を中心に行われる第51回全国学校体育研究大会北海道大会での成果を踏まえ、上学体の研究成果を全道に発信したい。

(3) 目指す児童像

ア 運動に熱中する子

運動のよさを実感した子どもの姿を、「運動に夢中になり、熱中する子」とした。学習内容が教材によって深まり、「まだ、やってみたい」「また、やってみたい」「関わって分かった」「関わってできた」などの意識が感じられる姿である。目指す姿については、発達段階によって変わってくると考えるので、授業を構築する上で明確にする必要がある。

イ 仲間と学び合い、主体的に課題を解決する子

互いに関わり学び高め合う姿を、「仲間と学び合い、主体的に課題を解決する子」とした。授業では、仲間と協力しながら、課題を追求したり、解決したりする姿を追い求めていく。そのためには、体育学習の中で、仲間と関わり高め合うような課題設定や場の設定が必要になる。

(4) 研究の視点

【視点1】 「子どもが熱中する教材づくり」

- ・ 単元構成の工夫
- ・ 場や用具の工夫

【視点2】 「課題解決学習を基盤とした、仲間とかかわり学び合う工夫」

- ・ 仲間とかかわり解決する学習課題の設定
- ・ 課題把握，解決の見通し，追求活動，定着場面での関わらせ方の工夫
- ・ グループ課題，個人課題の連動の工夫

【視点3】 「成長や学びを実感できる評価」

- ・ ねらいを明確化した計画的な評価
- ・ 自己評価や相互評価の工夫
- ・ 教師による適切な見取り

2 研究の具体

(1) 実践例Ⅰ 第4学年 単元名「体づくり運動」

当麻町立当麻小学校 澤渡 千修教諭

ア 授業のねらい

単元を通して、様々な運動や遊びを提供することにより、自分が容易にできる運動とそうでない運動があることに気付かせた。そこで、どうしたら上手くできるようになるのか、課題の設定をさせた。課題把握の場面においては、子どもの気付きを重視して子どもたち自身で課題を考えさせるような、発問をしていった。そうすることで、子どもたちの思考を生かした課題作りにつながっていき、より主体的な学びができると考えた。課題解決の場面では、グループで関わり合いながら、子どもたち自身で工夫して「できた」という満足感を味わわせていった。その後は、発展として、自分達で新しい運動を開発させるなどして、自分が楽しめ、友達と一緒に楽しめるような運動に発展していくことができるように考えた。

そのような願いを達成するために、一人で行うもの、ペアで行うもの、小グループで行うもの、クラス単位で行うもの、様々な形態を活用し活動に取り組ませた。また、それに似合った場作りなどの工夫もしていく必要があると考えた。物やスペース、仲間とのかかわりなど多くの工夫を取り入れた。

始めのうちは、習得させたい運動に効率よく取り組むために、教師主導の授業展開になることもあったが、運動を習得した後は、それらを使って児童が主体的に活用しながら活動にできるような授業展開になった。

イ 単元構成（1年間を通して 12時間扱い 1～6時間 前半 7～12時間：後半）

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
学習 内容		体 ほ ぐ し の 運 動	多様な動きをつくる運動										
			体を移動 する運動	用具を操 作する運 動	基本的な 動きを組 み合わせ る運動	体のバラ ンスをと る運動	力試しの 運動						
			多様な動きをつくる運動										
評 価	態	○		○		○		○				○	
	思		○	○			○	○		○		○	
	技		○		○	○			○		○		○

ウ 授業の実際（本時 6／12時間目）

過程	授業の流れ	教師の指導・支援	形態	○留意事項 ◎評価
課題 把握	・準備運動をする。 ・今までやってきた運動をする。 ・ボールを使って活動する。 ・長なわを使って活動する。 ・運動を生かして、課題をつくる。	・上手にできているのか、子どもたちに確認しながら各グループを回る。	全	○既習の活動が生きるようにする。
解決の見通し	今までやった運動を組み合わせて、熱中できる動きをつくろう！ ・今まで行ってきたことを組み合わせて、体を動かしながら活動を考える。 〈種目内容例〉 ・長なわをしながらキャッチボール ・フープを投げて、ボールを通す。  ・実際にやってみて、面白いと感じられる活動を生み出させる。 ・同じグループの人たちと、上手にできるためのアイディアを出し合う。	・今までの活動より発展的内容になるように配慮する。 ・今までにやったことがないような、発想が出るよう投げかける。 ・組み合わせがいろいろあることを考えさせる。 ・友達のよさを見付けさせながら、活動させる。 ・上手にできるように、コツを話し合わせたり、教えたりする。 ・自分の気付きと友達のよいところを、両方視点をもつ。 ・今までの頑張りが生きるような内容にする。	グ	◎今までの運動を生かし、工夫した発想を出すことができたか。（思考・判断） 【観察】
課題追求	・簡単な記録会をする。 ・今日の気付きと自己評価を行う。		全	○グループの合計だけでなく、クラスの合計も出し、全体の記録も意識させる。
課題解決	・次回、どんな活動をするのか見通しをもつ。			

【視点1】子どもが熱中する教材づくり

普段の休み時間で使っているものを用いたことが有効であった。そのことにより、体育の授業での体験が、日々の活動に生きて新たな発想が生まれ、日常の運動化にも役立った。また「自分たちで見つけた動き」をすることで、より意欲的に運動に取り組むことができた。

【視点2】課題解決学習を基盤とした、仲間とかかわり学び合う工夫

試しの運動から、自分たちで課題「ボールとなわとびを組み合わせ、熱中できる動きをつくろう!」をつくり、活動への意欲化や明確な目的意識化へとつなげた。課題設定後、実際にどんな動きができるのか試行した。その後、見つけた動きの意見交流を行い、その中で「長なわを二人で跳びながら、ジャンケンをしたい!」という意見に全員がまとまり、グループごとにその運動に取り組んだ。授業者は、その動きができていないか、役割分担は適切かを確認しながら各グループを回った。その動きをほとんどの子ができていたので、「長なわを二人で跳びながら、なわの中でボールを何回パスできるか」というステップを上げた運動課題に取り組んだ。これは、「むずかしいそうだけど、できそう」と感じる動きで、グループの活動がより生き生きとし、熱中する度合いのギアが一つ上がったように感じた。この動きは、単純ではあるが、回し手と跳び手の呼吸や声かけが合わないと続かなかった。しかし、うまく跳べない子も、汗をかきながら、熱中している様子が伝わってきた。上手にできるように、コツを話し合ったり、教えたりする姿も見られた。また、課題追求場面では、グループでの活動となり、運動を長く続けるために、友達と教え合ったりする姿や、互いに声を掛け合う姿が見られたが、あまり、上手にできない子も、失敗しながらも運動に熱中していた。課題としては、グループによっては、グループ内の役割が明確ではなかったため、ずっと跳ぶ人やなわを回す人がいてしまったことが挙げられる。また、グループ課題の設定についてであるが、一つの運動にグループで取り組む時間をたっぷりと確保した上で、運動に熱中させないと、グループ課題が浮かび上がってこないことが分かった。



【視点3】成長や学びを実感できる評価

課題解決場面において、今日の気付きと、友達のよかった点やまねしたい点を発表した。その相互評価によって、友達のよい面やがんばりが形として見られて、学びを実感することができた。また、動きのよいグループを教師が取り上げて褒めることで、学ばせたい動きを共有し価値付けすることにつながった。

(1) 実践例Ⅱ 第5学年 単元名「タグラグビー」

当麻町立当麻小学校 中山 敬史教諭

ア 授業のねらい

ボール運動の領域では、既習経験などによって得手・不得意があったり、ボールを扱う技能面の難しさがあったりすることから、ゲームの中でボールに触れることができない児童がいることがあった。タグラグビーは、全員攻撃・全員守備が基本で、簡易的なルールにすれば前述のことを解消できる児童にとって易しい教材であり、攻撃はパスとランで地域を進め、守備はタグを取ることで安全性を確保できた。また、全力でグラウンドを走り回ることによって運動量を確

保できた。

本単元では、タグ取り鬼ごっこ、ボール集め競争、円陣パス、対面パスなど、基本技能を向上させるための練習を毎時間取り入れ、タグラグビーの試合に必要な技能を学ばせていき、全員が試合に参加することを大きなねらいにした。そうすることで、全員が運動のよさを実感することにつながると考えた。

ゲームにおいては、トライ（点数をとる）経験を味わわせるために、攻撃に関する作戦を立てることができるように授業を構成した。特に、ボールを持つ人の動きである「タグを取られてからパスをする」ことと、ボールを持たない人の動きである「（ボールを持つ人が）タグを取られたら、後ろから走り込む」ことを重点にした。パス回し、攻めの陣形、クロス、フェイク等の動きによる得点は、プレイの幅が広がるが、全員が習得することが難しいこともあり、試合でそのような動きが出てきたら、取り上げていきたいと考えた。

ルールについてはスローフォワード・簡略的なオフサイド、4タグなどゲームの中核となる事項は定めておくが、児童の慣れや技能の向上に合わせ易しいルールから児童の実態に合ったルールへと話し合いを通して決定していくようにした。そして、ゲームではチームのめあてから自分のめあてを考え、その達成のための作戦や練習方法を自分達で考えられるようにしていった。

単元構成（6時間扱い）

時	指導計画
1	試合に必要な技能の習得 オリエンテーション（DVD視聴） 「試合に必要なことは何かを考える」 タグベルトの扱い タグの取り方・返し方 大まかなルール ボールの扱い方 グループ分け（6人×4グループ） ・2人タグ取り遊び ・タグ取り鬼ごっこ ・円陣パスなど ・ボール集め競争 ・ドラキュラ鬼ごっこ ・コピーラン ・ランニングパス ・対面パス 1対2のミニゲーム 2対3のミニゲーム 4対4のミニゲーム 5対5のミニゲーム ○ボールを持ったら、タグを取られるまで走ろう！ ○（ボールを持つ人が）タグを取られたら、後ろから走りこもう！
2	
3	
4	
5	
6	
	○各チームで自分のチームの特長を生かした作戦を立ててチーム対抗戦をしよう！

ウ 授業の実際（3／6時間目）

過程	授業の流れ	教師の指導・支援	形態	○留意事項 ◎評価
課題把握	○チームごとにタグベルトとタグをつけ準備運動 ○2人タグ取り遊び ○ドラキュラ鬼ごっこ ○前時の振り返り ○4対4をやってみよう！ ・前に進まないな・・・ ・なかなか点数を決められない・・・	・タグを取った時の確認をする ・タグを取った時に、大きな声で「タグ」と言うことを確認。 「前はどんな学習をしましたか？」	ペ 全	○ボールを持ったら、タグを取られるまで走ることの確認。
	（ボールを持った人がタグを取られて、その後、フォローの人は）どのようにボールをもらえばよいだろうか？ ・持つと、スピードを出してボールをもらえばいいよ。 ・ボールを持っている人の後ろを走ればいいよ。		全	
課題追求	タグをとられた人の後ろから走り込んでパスをもらおう！ ○コピーラン ○コピーラン＋ホイッスル ○後ろから走り込みパスをもらおう練習		グ	○ボールを持たない人の動きが大切なので、上手にできている人を見つけて、模範演技をさせてイメージ化させる。 ◎ボールを持っている人を追いかけて、走りながらボールをもらうことができる。 （技能） 【観察】
	○4対4をやってみよう！ ・間を簡単に抜けられたよ！ ○学習の振り返り ・今日の学習で上手にできていた人や見つけた動きを発表する。 ○後片付け	①後ろから走り込みボールをもらう際に、「右・左」と自分がどちらにいるか声をかける。 ②パスは、短いパスをする。 ③トップスピードでパスをもらう。	グ 全	

【視点1】子どもが熱中する教材づくり

身に付けさせたい動きを「攻撃重視」にしたために、得点が入りやすくなり、どの子もトライを経験する喜びを得ることができた。グループ対抗戦では、同じ子ばかりトライしないように、トライを決めた子は、誰かがトライする人が出るまで休みとした。

【視点2】課題解決学習を基盤とした、仲間とかかわり学び合う工夫

単元を通して、グループ学習を中心に活動し、協力して学習課題やグループの課題を達成することができた。試合では、「チーム全員の力で点数をとる！」を合い言葉に、作戦はチーム内での役割分担をはっきりさせた。そうすることで、個人の課題が明確になり、個人課題を達成することがチームの勝利へ結び付くようになった。

【視点3】成長や学びを実感できる評価

毎時間、友達のよい動きやがんばった人を見付け、相互評価をすることで、成長を実感したり、意欲をもって取り組んだりすることにつながった。

3 成果と課題（○成果 ▲課題）

【視点1】子どもが熱中する教材づくり

○どの学校でも使用されている教具に一工夫を加えて実践することが、運動の日常化へつながっていく。

▲運動のよさを実感した姿を、「運動に熱中している」とするが、運動に熱中しているかどうかを客観的に測るものさしが必要となってくる。現在は、教師の主観でその姿を見取っているので、具体的な検証方法を検討していく必要がある。

【視点2】課題解決学習を基盤とした、仲間とかかわり学び合う工夫

○個に応じた学習課題を設定することで、全員が運動のよさを実感させることができる。

○グループ課題の設定のためには、その運動に対して十分にグループで取り組む時間を確保することが前提となる。また、達成可能な課題を立てることができるようにする必要がある。

○グループ内での役割分担を明確化しておくことで、グループがより高まりやすい。

○課題追求場面で、技能ポイントを指導したい場合は子どもたちを一度集めて、模範となる子の動きのどこが良いのかを思考させることが、個やグループの高まりのために必要である。

【視点3】成長や学びを実感できる評価の工夫

○相互評価においては、ネームマグネットを用意することで、自分の立場がはっきりとし、進んでよいところを見付けることができる。

○よい動きや考えを進んで教師が取り上げ価値付けすることで、子どもたちの相互評価をする観点がはっきりとしてくる。

▲学習カードによる自己評価であるが、低学年においては簡易的なものにしないと、時間がかかり、運動量の低下につながるのでは、工夫が必要である。

中学校部会

第6分科会

札幌市立上野幌中学校

第7分科会

札幌市立月寒中学校

第8分科会

札幌市立向陵中学校



北海道大学 イチヨウ並木(札幌市北区)

【研究主題】

未来へつながる保健体育学習
～自ら、仲間と高め合いながら、
心と体をはぐくむ生徒の育成～

【日 程】

	9:50	11:00	13:00	14:15	14:55	
9:00	10:40	11:50	13:10	14:35	15:00	
受付	第一次公開授業	休憩	第二次公開授業	昼食休憩	開会行事	研究発表Ⅰ
						研究協議
						研究発表Ⅱ
						質疑応答
						指導講評
						閉会行事

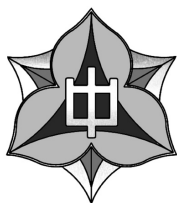
【会場案内】

**札幌市立
上野幌中学校**
〒004-0032
札幌市厚別区
上野幌 2 条 3 丁目 10-1
TEL: 011-895-0531

【アクセス】
地下鉄東西線「大谷地駅」下車
↓
～中央バス(大 92)(大 94)
「太洋団地入口」下車→徒歩 4 分
～JR バス(大 33)(大 34)(大 35)(大 38)
「上野幌中央」下車→徒歩 7 分

地下鉄東西線「新さっぽろ駅」下車
↓
～中央バス(新 93)
「太洋団地入口」下車→徒歩 4 分
～JR バス(新 11)(新 13)(新 16)
「上野幌中央公園」下車→徒歩 5 分

札幌市立上野幌中学校



所在地	札幌市厚別区上野幌2条3丁目
電 話	(011) 895-0531
学校長	下山 信 弘
生徒数	349名

◎学校教育目標

「明日をきり拓く たくましく 心豊かな生徒の育成」

- ・創造的な高い知性を育てる
- ・豊かな感性とあたたかな心を育てる
- ・たくましいからだと強い意志を育てる

◎特色

札幌市南東部、野津幌川、三里川に囲まれた、野幌森林公園に続く野幌丘陵にある落ち着いた住宅地に位置しています。札幌市内で87番目の中学校として開校し、今年で開校24年目を迎えました。明るく純朴な生徒が多く、生徒会活動や部活動などに一生懸命取り組んでいます。北京オリンピック体操男子団体銀メダリスト、坂本功貴選手の出身校でもあります。

授業者の紹介



第6分科会 授業①

札幌市立上野幌中学校

伊東 芙美枝

2年2組 担任
男女バドミントン部 顧問
陸上競技審判
基礎スキー 1級
柔道初段

授業の見どころアピール

本校では、昨年度から男女共修で柔道授業をスタートさせました。運動を苦手と感じている生徒もありますが、互いに励まし合いながら授業を進めています。クラス全員が同じ目標に向かって、それぞれの役割を担いながら課題を解決していくことができる授業を目指しています。生徒の健やかな成長につなげられるような、ご意見をいただきたいと思っています。

ひとりごと

柔道を経験したことがなく、5年前に初めて柔道着を着ました。部活動指導をしながら受け身ばかりを2年間練習していた頃は練習が長く感じましたが、やっと投げ技を教えてもらった時、初めて『楽しい』と感ずることができました。限られた10時間の授業で一人でも多くの生徒が『柔道って楽しい』と感じ、柔道に興味をもってほしいと願っています。



第6分科会 授業②

札幌市立光陽中学校

齊藤 研介

2年3組 担任
サッカー部 顧問
札幌市中体連事務局次長

授業の見どころアピール

中学校3年生で男女共修の「創作ダンス」の授業を行います。世間では、「ダンス」＝「リズムダンス」が注目されていますが、仲間とともに創りあげていく創作ダンスの魅力を発信できればと思います。テーマは「命」です。

ひとりごと

自然の中で活動する経験をもっと学校教育に取り入れられたらと感じています。山の学校、海の学校、その地域に根ざした自然体験活動が、子どものたくましい心や体を育むきっかけになるような気がしています。みなさんは、どう思われますか？

研究主題

未来へつながる保健体育学習

～自ら、仲間と高め合いながら、心と体をはぐくむ生徒の育成～

札幌市立上野幌中学校

1 研究の概要

(1) 研究主題設定の理由

ア 本校の研究経過から



写真1 陸上記録会より

本校では、開校以来「心豊かな生徒の育成」「開かれた教育と開かれた学校」「地域に根ざした学校」の実現を目指してきた。

平成18年度からの研究では、生徒の実態アンケートをとったところ、以下の点が明らかになった。

育っているところ・・・まじめさ・素直・授業に集中できる・一生懸命学習するなど。

育っていないところ・・・自分から進んでやるという生徒が少ない・自立心が育っていない・指導されるのを待っているなど。

そこで生徒が、自主的・意欲的に行動できる場面を多く設定する研究を行った。生徒のアンケートでは、当初の自分と1年過ぎた自分を比較し、「成長した」を実感している生徒が多かった。しかし、自分は成長したかもしれないが、友達を認めたり、さらに自分を高めたりしようとする努力が不足しているということが課題として上げられた。

平成21年度から「互いに認め合い、高め合う生徒の育成」を研究主題として設定した。具体的には、全学年が一斉に学活で「自分を成長させるために」の資料を活用し、年3回「どれだけ自主性や自立性が育ってきたか、自分を振り返る場面」を設定した。また、各教科・総合的な学習の時間・生徒会活動・部活動等で自主自立を促すような働きかけをした。その結果、4月時点で描いた「自分の姿」に近付いたと感じている生徒の増加率が高く、研究主題に迫ることができた。平成24年度からは「互いに学び合い、表現できる生徒の育成」を研究主題とし、学校生活を含め、自分自身の考えや意見を表現できる生徒を育てるための授業の構築に取り組んでいる。

保健体育科では、未来に生きる子どもたちに健やかな心身の育成を図るとともに、生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現させることが重要であると考え研究主題を設定した。授業の中で生徒が自主的に学習に取り組むとともに、お互いの関わりの中で学習をより深められる指導法を模索し、自ら進んで運動やスポーツに親しむ資質や能力を身に付けさせることを目指して研究を進めている。

課題を解決させる・さらに向上させる
イメージさせる・自信をもたせる
気付かせる・発見させる

イ 生徒の実態から

本校は札幌市南東部、野幌森林公園に続く野幌丘陵に位置し、野津幌川、三里川の流れをもち、緑と広い青空をもつ恵まれた自然環境の中、落ち着いた住宅地域にある市立中学校である。本校は平成元年に札幌市内で87番目の中学校として開校し、今年で開校24年目を迎える。明るく純朴な生徒が多く、生徒会活動や部活動など、様々な活動に一生懸命に取り組んでおり、大きな成果を上げている。



写真2 球技大会より

本校の生徒は学習にしっかりとした態度で臨むことができ、計画的な学習習慣が身に付いている生徒が多い。保健体育の授業でも用意や整列が早く、活動そのものはスムーズにできる。体育系の部活動の加入率も高く、運動に対して興味・関心をもつ生徒が多い。しかし、運動に対しての思考が足りない。短距離走では、ただ走っている、バレーボールでは来たボールをただ返すだけなどの生徒が多いように感じる。

このような実態を踏まえ、運動に対しての「学ぶ力」を育むような授業展開を実践した。ただ運動をするのではなく、個、グループ、全体で思考を取り入れて学習に取り組むようにした。

そこには、教えなければならない基本的な技能もあり、基礎・基本として教えながら、思考する場面を適宜入れ、少しずつ「心と体で行う体育活動」に変容しつつあるところである。

(2) 目指す生徒像

体を動かすことは人間にとって「生きる力」の一つである。生涯にわたって生き生きと運動やスポーツに親しむには、運動する楽しさや喜びを味わうことが上げられる。これは、各運動において体の動かし方を理解すること、仲間と一緒に考えたり、活動したりして達成感や成就感を味わうことなどが上げられる。そのような活動を通して知・徳・体が身に付き、豊かな心と体が育まれていく。日常生活でも仲間と協力する場面が数多くある。以上の点を踏まえ、目指す生徒像を、『自ら、仲間と高め合い、豊かな心と体を育む生徒』とした。



写真3 体づくり運動の授業

（３）研究の仮説

互いに学び合う中で、考えたことを表現することにより
生徒は豊かな心と体を育むことができる

豊かな心と体
考えたことを表現させる授業展開
気付かせる・発見させる

本校では、単元を通して、または１時間の授業の中で生徒が考えを表現し、豊かな心と体を育む学習を目指している。気付きや発見（これはすごいな、こうやればいいのかかなど）があり、それを表現することを繰り返すことで、豊かな心と体が形成され、生涯にわたって運動に親しんでいく生徒を育てることができると考えている。

授業実践に当たっては、前学年、前単元、前時で学んできたこと、課題の把握などが必要であり、これらを踏まえた授業展開を工夫する必要がある。

また、互いに学び合い、高め合い、考え合えるような場面も設定していかなければならないため、生徒にそれらの視点も明確に示していく必要がある。

教師、生徒、教材から、学び合う手だてを模索していくことが豊かな心と体を育むことにつながっていくと考え研究の仮説とした。

（４）研究の視点

〈視点１〉

「生涯スポーツにつながる
教材の開発・工夫」

〈視点１〉は単元を通しての視点である。

- ①生徒の実態把握
- ②身に付けさせたい技能の明確化
- ③興味関心・個に応じた教材
- ④運動との出会いや場の工夫
- ⑤生涯スポーツへの視点
- ⑥評価規準・評価方法

〈視点２〉

「課題解決的に取り組む学習過程の構築」

〈視点２〉は主に本時についての視点である。

- ①学習課題の把握
- ②試行活動
- ③個人課題の設定
- ④追求活動
- ⑤評価活動

2 研究の具体

(1) 実践例Ⅰ 第1学年 単元名「柔道」

ア 授業のねらい

柔道は、自身の力を最大に生かし、競技だけでなく様々な場面で有効に使うという意味をもつ『精力善用』と、他者を敬い感謝することで、互いに協力し高め合うという意味をもつ『自他共栄』という考え方から成り立っている。練習や試合を共に行う相手への敬意を表す「礼法」、相手の動きの変化に対応して行う「投げ技」や「固め技」、自身を守る「受け身」など、それぞれの学習内容には集団として学び合い、高め合うことができる要素が含まれている。学習を通して、日本古来から伝わる武道の精神を学ぶとともに、運動の楽しさや仲間の大切さを感じingことを単元のねらいとした。

【単元目標】

- (1) 次の運動について、技ができる楽しさや喜びを味わい、基本動作や基本となる技ができるようにする。
 - ・柔道では、相手の動きに応じた基本動作から、基本となる技を用いて、投げたり、抑えたりするなどの攻防を展開すること。【技能】
- (2) 武道に積極的に取り組むとともに、相手を尊重し、伝統的な行動の仕方を守ろうとすること、分担した役割を果たそうとすることなどや、禁じ技を用いないなど健康・安全に気を配ることができるようにする。【態度】
- (3) 武道の特性や成り立ち、伝統的な考え方、技の名称や行い方、関連して高まる体力などを理解し、課題に応じた運動の取り組み方を工夫できるようにする。【知識、思考・判断】

視点1) 「生涯スポーツにつながる教材の開発・工夫」

○技の理解を助ける教具

バンドや十字パットを使用することで、体さばきを考える上で思考の流れを分かりやすくする。

○技のつながりを意識した単元構成

支え釣り込み足→膝車→体落とし

○安全な授業を目指して

「合言葉」のような安全確認の仕方を徹底する。

○効果的な受け身の学習

フラフープを使い、転がる方向がより分かりやすくなる。

視点2) 「課題解決的に取り組む学習過程の構築」

○思考が見える学習プリントの作成

各技を自分が、グループがどのように考えてきたかを振り返ることができる。

○交流サイクル、表現方法の工夫

個人→グループ→全体→個人に戻り確認修正

イ 単元構成

時間	学 習 活 動
1	○サーキットトレーニング ○柔道の歴史・オリエンテーション ○柔道衣の着脱 ○礼法
2	○サーキットトレーニング・礼 ○運動場の安全確認方法（右・後ろ大股2歩分安全確認する） ○本けさ固め
3	○サーキットトレーニング・礼 ○後ろ受け身 ①仰向けのまま受け身の瞬間の正しい頭・手の位置を確認 ②長座から ③しゃがんだ姿勢から ④手押し相撲から ○フラフープを使った受け身
4	○サーキットトレーニング・礼 ○前時の復習 ○崩し8方向 ○横受け身 ①フラフープを使った横受け身の練習 ②組み方（釣り手・引き手）の方法 ③膝立ちからの右方向への崩し・受け身
5	○サーキットトレーニング・礼 ○フラフープを使った受け身の確認 ○支え釣り込み足 ①技の確認（VTR） ②体さばきを十字パットで確認
6 (本時)	○サーキットトレーニング・礼 ○フラフープを使った受け身の確認 ○前時の復習 ○膝車 ①技の確認（VTR） ②体さばき・支える部分の確認（バンド） ③グループで体さばきを考え、ワークシートに記入 ④成果発表

ウ 授業の実際（6時間目）

○正しい礼法による挨拶

正座→黙想→座礼・・・教師による指示で一斉に行うため、伝統文化に触れる雰囲気が出ていた。

○ペアでフラフープを使用した受身の確認



写真4 受け身の学習

後ろ受身から横受け身を行った。フラフープを使うことにより自然な受け身の形になっていた。安全確認も前時の学習が想起されていた。

○膝車の体さばきについて考える



写真5 バンドを使用しての支える位置確認

バンドを使用して支える位置を確認することができ、生徒にとって分かりやすかった。また、十字パットを使い、効果的に投げる体さばきを考える手助けとなっていた。「相手を自分のほうに引く」「相手の足より後ろに回す」などの言葉が個々に出ていた。

7	○サーキットトレーニング・礼 ○フラフープを使った受け身の確認 ○前時までの復習 ①支え釣り込み足 ②膝車 ○きまり練習 (制限時間、投げた後の対応方法、勝敗の判定方法)
8	○サーキットトレーニング・礼 ○体落とし ①技の確認 (VTR) ②十字パットで足の動きを確認 ③成果発表
9	○サーキットトレーニング・礼 ○フラフープを使った受け身の確認 ○前時までの復習 (グループ) ①支え釣り込み足 ②膝車 ③体落とし
10	○まよめの練習

○グループで体さばきを考える場面

実際にやってみて確かめているグループが多かった。その中でいくつかの体さばきが出てきたグループはより効果的なものに絞るのに苦労していたところもあった。前時に行った支え釣り込み足との違いについて足運びから指摘している生徒も数名おり、気付きが助長される流れになっていた。



写真6 ペアで実際に体さばきを行う

○成果発表

他のグループの発表を聞き、自分たちの考えた体さばきがどうだったか比較できている生徒も数名いた。

○柔道プリントについて

各技の達成度が分かるように横棒グラフにし、色を塗っていった。ポイントとなる言葉や考えに対して教師がアンダーラインを引いたり、印をつけたりしたため、生徒への各技の視点を見付ける手助けや、振り返りに役立った。

授業のまよめの部分は気付いたこと、工夫したこと、次への課題など毎回書いていった。



写真7 学習プリントでの振り返り

【技能のチェック】達成できたことを塗りつぶそう。技のポイントや足の動きを工夫して記入しよう。

① 受け身	② 支え釣り込み足	③ 膝車	④ 体落とし
技のポイント 足をあげて、ハドル つぎは足を相手の足のつぎへ	技のポイント 内またで足ののびる。 じくで車軸足の場所を調節する。	技のポイント つぎは足を相手の足のつぎへ	技のポイント つぎは足を相手の足のつぎへ

【授業のまよめ】

月日	時間	①	②	③	気付いたこと、工夫したこと、次回への課題など	先生から
9/30	1.2	○	○	○	つぎは足を相手の足のつぎへ	11.9.20
10/4	1.2	○	○	○	つぎは足を相手の足のつぎへ	11.10.4
10/13	1	○	○	○	つぎは足を相手の足のつぎへ	11.10.13
10/14	5	○	○	○	つぎは足を相手の足のつぎへ	11.10.14
11/3	1.2	○	○	○	つぎは足を相手の足のつぎへ	11.11.3
11/5	5	○	○	○	つぎは足を相手の足のつぎへ	11.11.5

(1) 実践例Ⅱ 第3学年 単元名「体づくり運動」

ア 授業のねらい

自分の体力を分析し、その高め方を知り生涯のスポーツライフに生かすことが単元のねらいである。

【単元目標】

(1) 次の運動を通して体を動かす楽しさや心地よさを味わい、健康の保持増進や体力の向上を図り、目的に適した運動の計画を立て取り組むことができるようにする。

・体力を高める運動では、ねらいに応じて、健康の保持増進や調和のとれた体力の向上を図るための運動の計画を立てて取り組むこと。 **【運動】**

(2) 体づくり運動に自主的に取り組むとともに、体力の違いに配慮しようとする事、自己の責任を果たそうとすることなどや、健康・安全を確保することができるようにする。 **【態度】**

(3) 運動を継続する意義、体の構造、運動の原則などを理解し、自己の課題に応じた運動の取り組み方を工夫できるようにする。 **【知識、思考・判断】**

視点1) 「生涯スポーツにつながる教材の開発・工夫」

○効果的に運動を学ぶ展開の工夫

○評価規準を明確に

視点2) 「課題解決的に取り組む学習過程の構築」

○多彩な運動種目の提示

○科学的な根拠から運動を選んだり作ったりすること

○ペアで協同的に考えていくこと

イ 単元構成

時間	学 習 活 動
1	○自分の体力を知る①
2	○自分の体力を知る②
3	○柔軟性を高める運動 ○巧みな動きを高める運動
4	○力強い動きを高める運動 ○動きを持続する能力を高める運動
5 (本時)	○自分の体力分析 ○足りない体力を高める運動を選んだり作ったりする。
6	○足りない体力を高める運動を選んだり作ったりする。 ○脈拍と関連付けて、自分に合っているかどうか確かめる。
7	○オリジナルサーキットを発表する。

ウ 授業の実際(5時間目)

○自分の体力を分析する場面では、同じ課題をもつ生徒同士で集まり、前時紹介した運動をもとにしながら運動を組み合わせたたり新しく作ったりした。人との関わりの中では、ペアでなわ跳びを跳んだり、柔軟体操をする時に「呼吸を合わせる」大切さに気付いた生徒も数名いた。

女子と男子では気付きの違いもあり、交流が

活発に行われていた。各自が作ったトレーニングは通年で行い、体力の伸びを実感させたい。



写真8 ペアでの運動

3 研究の成果と課題

【研究主題】

未来へつながる保健体育学習
～自ら、仲間と高め合いながら、心と体をはぐくむ生徒の育成～

豊かな心と体
考えたことを表現させる授業展開
気付かせる・発見させる

これまでの実践から、気付かせる・発見させる手だてはできていたか、考えたことを表現させていく授業展開になっていたか、授業後に学ぶ力や豊かな心や健やかな体を育むことができているかななどを検討し、本校保健体育科の研究について成果と課題を明らかにしていきたい。

(1) 気付かせる・発見させること

気付いたり発見したりすることの基本には、運動に関する知識や技能が必要である。例えば柔道の実践で膝車とはどのような技なのかということを知らなければその崩しの思考は出てきにくい。授業では映像を使って確認することで気付きや発見につながった。体づくり運動の授業では、どの体力を高める運動なのかを知らなくては適切な運動を選ぶこともできず、作ることもできない。まずは、思考のヒントを与えることが大切になってくる。教具については、「何のために、どう使うか」という視点が必要であると考えている。

(2) 考えたことを表現させる授業展開

柔道の実践では、各班で考えた崩しについて掲示し、全員が見ることができるようにした。それに新たな考えを付け加えていくことで、深めた考えを表現していくということにつながった。体づくり運動の授業で作ったオリジナルの運動を毎時間、ウォーミングアップとして行っているが、どんどん改良を加えたり、強さや回数を調節できたりする生徒が出てきている。その姿はまさに考えたことを表現しているといえる。しかし、そのような生徒は、まだ一部であるため、そのような姿を取り上げ、交流させていく授業展開が今後は必要であると考えている。課題に対して個での気付き→グループでの気付き→全体での交流→個での確認や修正といった課題解決の手だてを使っていくことが必要であると感じた。

(3) 豊かな心と体を育む～評価の充実

豊かな心と体を育んでいるかを見取るには、明確な評価基準の設定が必要である。その手だての一つに学習プリントがある。今後、思考や、変容していく姿が見えるような構成の工夫が必要であると考えている。



写真9 学習プリントでの振り返り

研究主題

運動の魅力を実感し、
夢中になって活動する子どもを目指して
～子どもの思考・判断の流れを踏まえた言語活動の充実～

北海道学校体育研究連盟釧路支部 釧路町立別保中学校

発表者 教諭 所 桂太郎

1 釧路支部の研究について

(1) 研究主題設定の理由

平成8年 第33回釧路大会における成果と課題を受けて、平成13年度から「運動の魅力を実感し、夢中になって活動する子どもを目指して」と研究主題を設定し、「学び方」「基礎技能の定着」「かかわり」を視点として研究を行ってきた。その結果、単元や単位時間の学習の中で、意欲的な学習活動や仲間とのかかわりを通し、子どもたちが基礎技能を習得し、定着させていく姿から研究の成果を確認することができた。

平成20年度の全道統一研究主題『自らかかわり、高め合う体育活動の創造』を受け、釧路支部では研究主題の見直しを行った。その結果、全道統一研究主題の方向と本支部の研究の方向は合致するとの見解に至った。そこで、7年間の積み重ねを生かして、これまでの課題を解決する研究を実践するとの方針から、研究主題はそのままとし、さらなる実践の積み重ねをすることとした。さらに平成23年度からは、新学習指導要領で示された「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の育成」を実践しているかどうかを検証していくことが重要であるという認識に立ち、釧路支部の研究の全体構想（図1）を立脚点として研究を再スタートした。

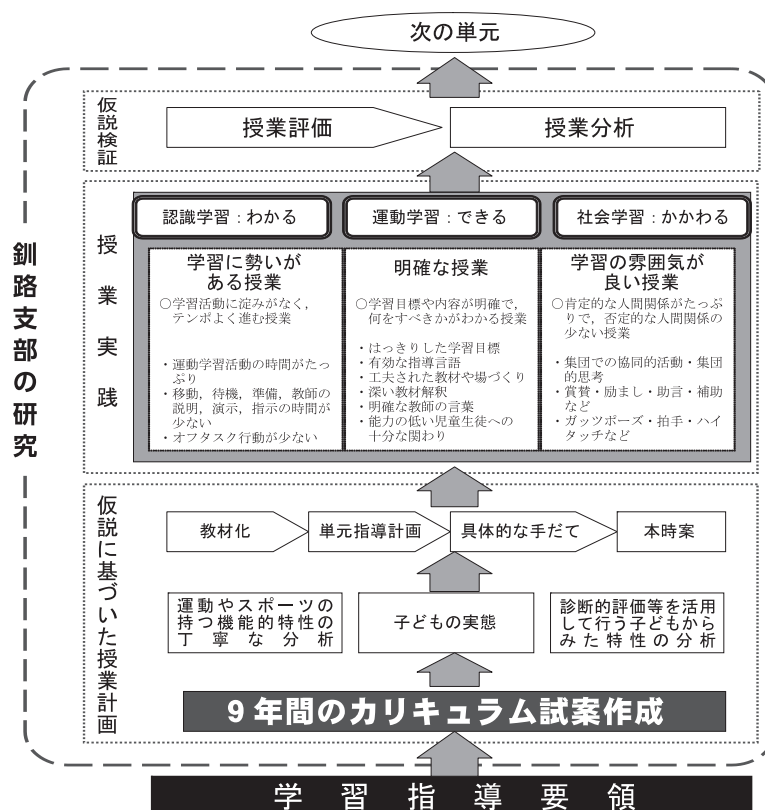


図1 釧路支部の研究の全体構想

(2) 研究仮説

9年間のカリキュラムに基づいて計画した各単元において、科学的な認識学習、個に応じたスモールステップやねらいに合ったゲーム、具体的なねらいのあるペア・グループ学習を取り入れれば、子どもの運動への志向性は高まり、意欲的に学習に取り組むであろう。

(3) 研究の視点

〈視点1〉 教師と子どもが運動特性をとらえ、学習のねらいを明確にする

①領域ごとの9年間のカリキュラム試案作成

釧路支部では平成18年度より、小学校と中学校の9年間をつないだ領域あるいは種目ごとのカリキュラム試案を作成している。9年間を見通すことによって、児童生徒の発達段階に見合った授業の計画を立案し、系統的に指導を行うことをねらいとしている。

②機能的特性、子どもからみた特性と子どもの実態を重視した授業計画

9年間のカリキュラムを基に、学年の発達段階を考慮しながら機能的特性に毎時間触れるような活動を目指して単元計画を立てていく。ここで憂慮すべきことは、子どもの実態や子どもから見た特性が機能的特性のよさを損なう可能性があるということである。そのため、学習前に取り上げる種目の学習経験やその運動・スポーツの好嫌度とその理由、興味、関心などを調査し、単元計画に生かしていく。

〈視点2〉 学習の目標を達成するための言語活動の充実

①「わかる」授業づくりのために

全ての児童生徒が認識学習に関する目標を達成するために、単元や子どもの実態に応じて手だてを工夫する。

- ・運動の原理、技術構造、技術のポイントなどの整理と提示資料の工夫
- ・教具の工夫
- ・視聴覚教材、機器の活用
- ・学習ノート of 工夫、活用 等

②「できる」授業づくりのために

全ての児童生徒が「できそうだ」「できた」と感じながら学習を進め、運動学習に関する目標を達成するための手だてを工夫する。

- ・スモールステップを取り入れた教材の工夫
- ・動き作り→ドリル→タスクゲーム
- ・場の工夫
- ・スポーツミラーなどのフィードバック装置の活用 等

③「かかわる」授業づくりのために

全ての児童生徒が、お互いに関わり合うことが「楽しい」「効果がある」と感じるができるような手だてを工夫する。

- ・ペア学習、グループ学習の効果的な活用
- ・技能や子どもの個性を生かすグループ編成
- ・アドバイスする方法や補助の方法の丁寧な指導
- ・グループ内での役割分担の明確化 等

2 研究の具体

(1) 実践例 第1学年 単元名「バレーボール～おえ！ひろえ！つなげ！めざせ

ところカップ制覇！」

釧路町立別保中学校 第1学年 授業者 所 桂太郎

ア 単元を構成するにあたって

学習前に競技経験や運動、スポーツの好嫌度とその理由・興味・関心などをアンケート調査し、授業計画に生かした。生徒への事前アンケートの結果、「バレーボールを楽しめないと感じる場面」として多かったのは、以下の3項目であった。

●ボールに触ることができない ●パスが繋がらない ●周りから文句を言われる

このような生徒の実態を考慮しつつ、バレーボールの機能的特性に毎時間触れることができるように、9年間のカリキュラム試案（釧路支部作成）内で位置付けている「小学校高学年」及び「中学校1年生」の体育的学力を参考にして単元を組み立てた。

イ 単元構成

①単元目標

ボールの落下点に入り、オーバーハンドパス、アンダーハンドパスを使って味方にパスができるようにし、仲間同士でアドバイスをし合えるようにする。また、個人やチームの課題、ボールをつなぐためのポイントなどを考え、工夫して学習に取り組むことができるようにする。

②単元指導計画（全15時間）

時	学 習 内 容	思考の流れ	留 意 点
1 2	○試しのスキルテスト・試しのゲーム ○オリエンテーション ○チームミーティング	ラリーが続かないな… ↓ 目標は「落とさないこと」「ラリーを続けること」だ	・ビデオ撮影をする。 ・VTRを活用して比較
3 4	○動き作り（基本の技の習得） ○スキルアップドリル ・ネット越えアンダー（オーバー）ハンド	レシーブが難しい… ↓ キャッチを入れよう！	・試しのゲームのラリー数を伝える。 ・技能目標やドリルの進め方を理解できるようにする。
5 6 7	○スキルアップドリル ・ネット越えアンダー（オーバー）ハンド ○ドリルゲームⅠ ・全員タッチパスゲームⅠ ～ファーストキャッチ ○タスクゲームⅠ ・6対6キャッチバレーⅠ ～ファーストキャッチ	ボールを床に落とさずにキャッチするために必要なことは何だろう？ ↓ ボールが来る前の準備をしておこう！ ↓ でも、今度はパスが繋がらない… ↓ キャッチしたボールを確実につなぐために必要なことは何だろう？	・「ボールを持たないときの動き」（名前を呼ぶ、オーライ等の声かけ、基本の構え、落下点への素早い移動）の重要性に気付くように促す。
8 9	○スキルアップドリル ・ネット越えアンダー（オーバー）ハンド ○ドリルゲームⅡ ・全員タッチパスゲームⅡ ～レシーブ→キャッチ	小さな円を作ってつなごう！ ↓ レシーブを入れてみよう！	・チームで円を作ることでボールに正対できるようにする。 ・肩より高いボールに対しては、オーバーハンドパスを使うように促す。

	○タスクゲームⅡ ・6対6キャッチバレーⅡ ～レシーブ→キャッチ	レシーブを正確に味方につなぐ ために必要なことは何だろう？	
		やわらかいパスだ！	
10 11	○スキルアップドリル ・ネット越えアンダー(オーバー)ハンド ○ドリルゲームⅢ ・全員タッチパスゲームⅢ ～レシーブ→パス→キャッチ ○タスクゲームⅢ ・6対6キャッチバレーⅢ ～「レシーブ→キャッチ」と「キャッチなし」を選択	オーバーもアンダー も使おう！ キャッチをなくして、バレーボールにつなげていこう！ 前よりもボールが落ちずにラリーが続いてきた！	・膝、ひじの曲げ伸ばしを使って、相手の取りやすい山なりのパスができるようにする。 ・レシーブをするための技術的なポイントを意識しながらラリーを続けられるようにする。
12 13	○スキルアップドリル ・ネット越えアンダー(オーバー)ハンド ○課題解決のためのチーム練習 ○ゲーム 《6対6バレー》・キャッチなし	今まで考えてきたことを整理してみよう！	・チームの課題を解決するための、練習方法を選択できるようにする。
14 15	○課題解決のためのチーム練習 ○ところカップチャンピオンシップリーグ(公式リーグ戦) ○表彰・単元のまとめ	公式リーグに向けて、チームの課題を解決していこう！	・「ひろう」「つなぐ」の単元目標を意識して試合ができるように促す。 ・VTRを活用する。

ウ 目標を達成するための手だて

①「わかる」喜びを感じることができる授業づくり

目指すゲームの姿と「ボール操作」「ボールを持たないときの動き」の認識

目指すゲームの姿を『ボールを床に落とさないように拾ってつなぐ』『相手コートにボールを返してラリーを続ける』とし、そのゲームに近付くためには、「ボール操作」だけではなく、「ボールを持たないときの動き」(本単元では〈ボールの落下点に素早く動くこと〉とした)が必要であることを認識できる場を設けた。

チーム内でのアドバイスシステム

単元を通してグループ学習(7～8名)を行った。スキルアップドリルの際には、簡単なアドバイスを行うためのチェック表を用い、相互に運動を評価し合うことで、技能のポイントを理解できる場を設けた。

学習ノートの活用とチームミーティング

学習ノートを個人に配付し、学習課題に対する個人やチームの考えを記録できるようにした。また、思考を深められるように、チームミーティングの時間を設定し、個人の考えを発表する場を保障した。

②「できる」喜びを感じることができる授業づくり

スキルアップドリル(動きづくり)の実施

毎時間ウォーミングアップで「ボール操作」「ボールを持たないときの動き」の反復メニューを行い、基礎技能の定着の支えとなるようにした。

ルールの簡易化(「キャッチ」の採用・触球回数・サーブアシスト)

ラリーを継続させることを最優先させるため、次のルールを提示した。

〈キャッチバレー〉

～単元前半は、相手コートから来たボールを「キャッチする」。中盤からは、「レシーブしてからキャッチする」。後半は、「キャッチなし」にしていく。

〈触球回数〉

～通常の3回という触球回数に制限をなくした。

〈サーブアシストシステム〉

～サービスが相手コートに入らない状況が続かないように、味方が1回だけサービスをつないでもよいルールにした。

スモールステップによる技術指導

ボールを「拾う」から「つなぐ」につなげるために、「1本目はキャッチ」→「味方のレシーブの後にキャッチ」→「キャッチしてもよい」→「キャッチなし」というように段階化し、目指すゲームの姿に近付けていった。

ドリルゲーム・タスクゲームの実施

繰り返しドリルを行うことで技能向上につなげた。また、公式のゲームではない簡易化されたタスクゲームを行うことで個人やチームの課題を明確に把握できるようにした。

ボールに触れる機会の確保

ドリルゲーム、タスクゲームにおいて人数やルールを工夫することによって、一人一人のボールに触れる機会が多くなるようにした。

③「かかわる」喜びを感じることができる授業づくり

イベント型の学習

単元全体を通して、様々なドリルゲームやタスクゲーム、公式ゲームでの勝敗ポイントを競い合うようにした。

「チーム内での役割」と「チームワークの意識」の徹底：集団

グループ学習を基本単位とし、役割を分担することで自分の役割に責任をもち、協力し合えるようにした。また、ゲーム前の円陣や仲間に対する称賛の声、ハイタッチ、「ドンマイ」の声を推奨し、メンバー全員が意欲的に取り組めるようにした。

バディを組んでのアドバイスシステム：個人

チーム内で日替わりの「バディ（相棒）」を決め、チェック表を使って、お互いに技能のポイントをアドバイスし合うようにした。

エ 授業の実際

①生徒の思考・判断の流れを踏まえた言語活動

本単元では、「課題の提示」→「予想（思考活動）」→「検証（試行活動）」→「交流（共有）」の流れで授業を構築した。

チームミーティングで出てきた予想と検証結果は全体で発表させ、生徒で共有できるようにした。また、その内容は『思考の流れ』として、ホワイトボードに記録した（図2）。

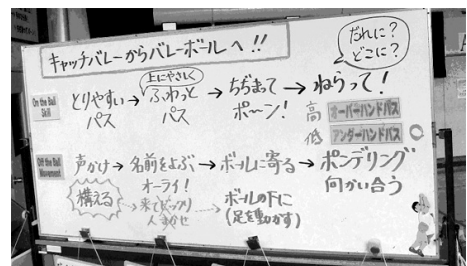
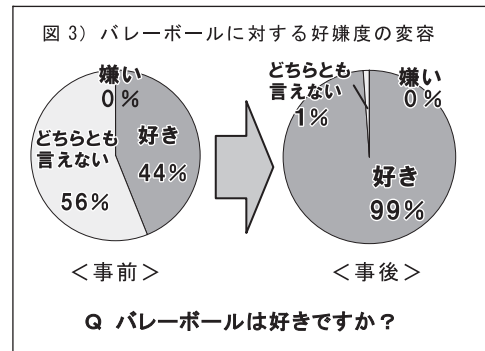


図2 生徒の思考の流れ

②単元を通しての生徒の変容

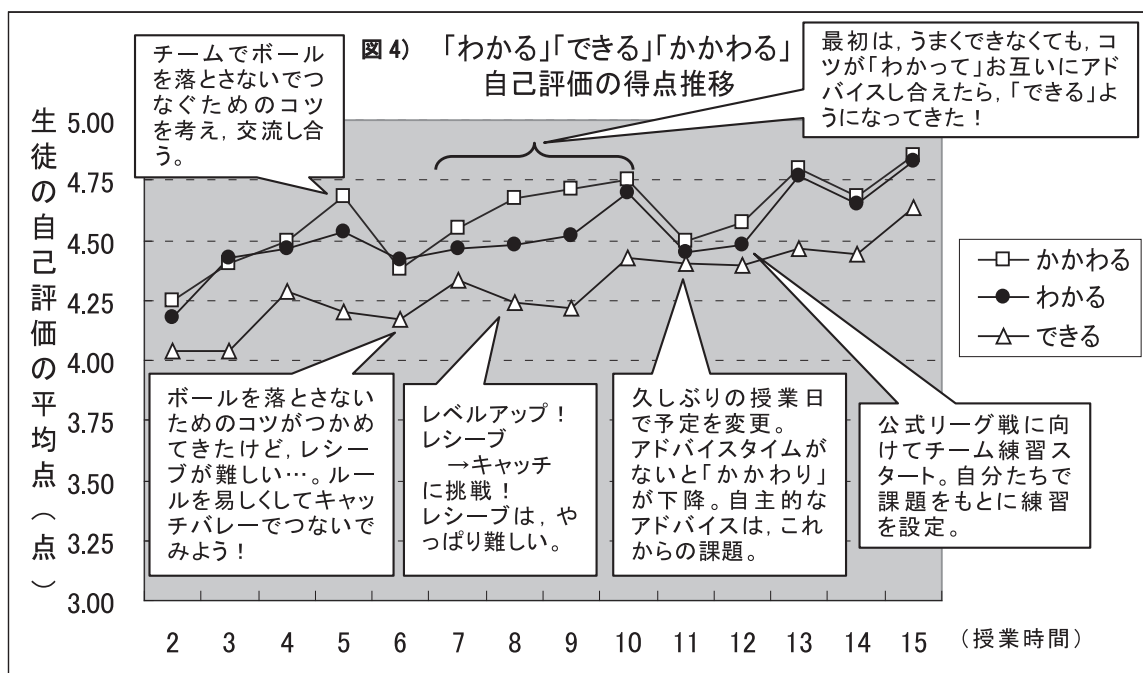
バレーボールに対する好嫌度の変容

学習前後の好嫌度調査の結果を並べてみると、図3のようになる。学習後、「嫌い」という回答はなく、「好き」と回答した生徒が99%に達した。また、「どちらとも言えない」と回答していた生徒のほとんどが「好き」と回答し、生徒の運動に対する好嫌度が高まったことがわかる。



「わかる」「できる」「かかわる」の変容

「わかる」「できる」「かかわる」および学習意欲は、5段階評価および自由記述の振り返りシートを用い、その変容を調査した（図4）。



〈「わかる」ようになったか〉

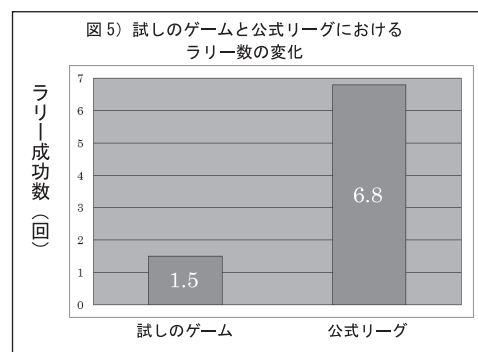
振り返りシートによる自己評価の結果、平均4.48点と高めであった。単元の途中からは、タスクゲームなどアドバイスタイム以外でもオーバーハンドパスの時には、「三角形！」パートナーが棒立ちでパスをしようとしているときには、「縮まってポーンだよ！」など声かけの中からも、様々なキーワードが出てくるようになった。生徒の感想にも以下のように学んだキーワードが多く書かれていた。

- ・パスが左右に動かないようにまっすぐパスを出せるように、腕で板をつくれるようにする。
- ・オーバーはボールを包みこむように。三角形を作る。

〈「できる」ようになったか〉

事前に行った「試しのゲーム」（6分30秒）と単元最後の「公式ゲーム」（25点マッチ）をビデオ撮影した映像を分析し、1試合あたりどれだけラリーが行われたかを調べた。なお、ここではラリーの定義として『サーブしたボールが相手コートから1回以上返球されてくる』とし、

試しのゲームと公式ゲームの条件を合わせるために、試合開始から6分30秒の記録を集計した。その結果、「試しのゲーム」ではラリーが行われたのが1試合平均1.5回あったのに対し、「公式ゲーム」では、1試合平均6.8回と明らかな差が見られた(図5)。以下のように生徒の感想からも「できる」ようになったという言葉が多く書かれていた。



・この前やったタスクゲームよりも、すごくラリーが続いてびっくりした！この調子でもっとラリーが続くようにしたい！

〈「かかわる」ようになったか〉

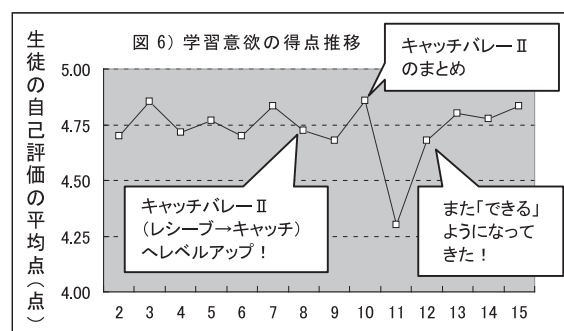
振り返りシートによる自己評価の結果、単元を通して4.3点以上の得点を継続していた。得点の推移を見ると、「わかる」の得点と比例するように「かかわる」の得点も上昇・下降を繰り返している。これは、「わかった」ことで、生徒が仲間へのアドバイスがしやすくなったということが考えられる。また、7～9時間目では、「できる」の得点が下降している中、「わかる」「かかわる」の得点が上昇し、10時間目には「できる」が大きな上昇を見せている。自分ではプレーが上手にできていなくても、コツがわかれば、お互いにアドバイスし合うことができ、それが「できる」につながったことが考えられる(図4参照)。

学習意欲の変容

〈得点推移から〉

振り返りシートによる自己評価の結果を図6に示す。学習意欲は、ほぼ4.5点以上を保ち、生徒が高い意欲で授業に参加していたことがわかる。

8時間目から学習意欲が少しずつ下降してきたのは、「レシーブしてからキャッチ」へとルールを変更し、難易度を高めたことが要因として考えられる。しかし、レシーブのポイントを考え、整理し、深まってきた10時間目には得点が上昇し、最高点を記録した。得点が急下降した11時間目は、授業日が10日間ほど空いてしまったこと、運動時間を確保するためにミーティングやアドバイスタイムを削除したことが要因と考えられる。また、12時間目から学習意欲が向上しており、同様な時間の「わかる」「かかわる」の変容(図4参照)と推移の仕方が似ていることがわかった。このことから、公式リーグ戦に向けてチーム練習を行ったミーティング(これまでの学習を振り返る)、アドバイスタイム(お互いの技能をチェックし合う)が学習意欲の向上に関わっていると言える。



3 研究の成果と課題

(1) 本実践について

〈成果〉

- 技能のポイントを耳に残りやすく、口にしやすいキーワードにすることにより、生徒同士が簡単にアドバイスをし合い、意欲的に取り組むことにつながった。
- 「思考する場」「試行する場」「共有する場」を設けることで、バレーボールにおける「ボール操作」「ボールを持たないときの動き」が整理された。また、その場で出された言葉が、生徒同士のアドバイスにも反映され、さらに深めることができた。
- 単元を通してグループ学習を基本単位とし、その中で「バディ」とのアドバイスタイムを設定することで、個を見直すとともに、集団との「かかわり」の場面が増え、技能の伸びや、好嫌度の高まりにつながった。
- 人数やルールを柔軟に変更することでボールに触る機会や活躍の場面が増え、バレーボールの好嫌度、学習意欲が高まった。事後のアンケートで99%の生徒が「好き」と答えた。

〈課題〉

- 「アドバイスタイム」を設定しなくても、自主的にアドバイスをし合える習慣を身に付けさせたかったが、大半の生徒がそこまで至らなかった。生徒へ必要感を感じさせることが今後の課題である。
- 「ボールを落とさないこと」「ラリーを継続させること」に重点を置いたため、その他の技能、特にサービスの練習時間が少なかった。本単元では「サーブアシスト」という特別ルールでサーブミスを解消したが、次の学年へのつながりを考えると、練習の時間はさらに必要であったのではないかと考える。
- 短時間でミーティングができるよう、アドバイスの観点を絞るなど内容を精査し、運動時間とのバランスをさらに検討しなければならない。

(2) 研究について

〈成果〉

- 教師が運動の原理をしっかりと認識し、それを技能のポイントとして伝えることで、児童生徒は必要感をもって練習に取り組むようになった。
- ボールゲーム単元において、ドリルゲームやタスクゲームを重視した学習を展開することで、全ての児童生徒がゲームにしっかりと参加でき、「できる」喜びや「かかわる」喜びを味わわせることができた。
- 9年間のカリキュラムがスモールステップの積み重ねの形であり、一人一人のつまづきをフィードバックできるようになったことや、新たな技への発展の見通しをもちやすくなった。

〈課題〉

- 9年間のカリキュラム試案を基に、学年に応じた発達段階を考慮しながら授業を構築してきたが、小学校とのつながり、また中学校2・3年生へのつながりは妥当なものであったのか、今後さらに検討を要する点もあり、小中の連携を深め、実践を重ねながら精査していく必要がある。

【研究主題】

「わかる」「できる」楽しさを味わう授業のあり方
～仲間と関わりながら、
健やかな心と体をはぐくむ～

【日 程】

9:55		11:05		13:00		14:15		14:55				
9:00		10:45		11:55		13:10		14:35		15:00		
	受 付	第 一 次 公 開 授 業	休 憩	第 二 次 公 開 授 業	昼 食 憩	開 會 行 事	研 究 發 表 I	研 究 協 議	研 究 發 表 II	質 疑 応 答	指 導 講 評	閉 會 行 事

【会場案内】

**札幌市立
月寒中学校**
〒062-0052
札幌市豊平区
月寒東2条2丁目4-54
TEL：011-851-8158

【アクセス】
地下鉄東西線「白石駅」下車
↓
徒歩 15 分

地下鉄東豊線「月寒中央駅」下車
↓
徒歩 15 分

中央バス(61番)(75番)
「月寒東2条2丁目」下車
↓
徒歩 2 分



札幌市立月寒中学校



所在地	札幌市豊平区月寒東2条2丁目4-54
電 話	(011) 851-8158
学校長	南 博
生徒数	551名

◎学校教育目標

「豊かな人間性の形成をめざして」

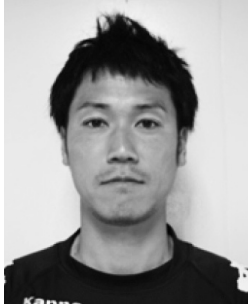
- ・知識と技能を習得し，創造的に思考し解決する生徒を育成する。
- ・人と自然を愛する情操豊かな生徒を育成する。
- ・強い意志をもち積極的に行動する生徒を育成する。
- ・健康でたくましい生徒を育成する。
- ・礼儀をわきまえ友とともに成長する生徒を育成する。

◎特色

月寒台地の西端に位置し，4つの小学校を校区とする中学校です。屋上からは札幌市街を一望でき，古くからの住宅地や商店街，工場など市街地構成は多様でありながら下町的な良さが残る地域に位置する中学校です。地域には本校にゆかりの多い方も多くキャリア教育では職業体験事業所としての協力をいただき，地域に根ざした学校として親しまれています。

部活動では，各部（運動部8つ，文化部1つ）が熱心に活動し常に全道・全国を目指すその取組は校内の特別活動の底上げだけでなく，学校教育目標実現に向けての大きな原動力になっています。

授業者の紹介



第7分科会 授業①

札幌市立月寒中学校

佐藤 光

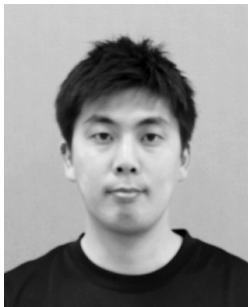
3年3組 担任
サッカー部 顧問 3級審判員
現在も北海道サッカーリーグに所属
し現役選手として活躍？中
S A J スキー検定1級
外国語（英語）教員免許

授業の見どころアピール

新学習指導要領の意図する「体育理論」の解釈を考え、練り上げました。新しい気づきを生み出す手法としてグループエンカウンターを実践し、何歳になっても親しむことができるスポーツの魅力を生徒とともに語らう授業にしていきたいです。

ひとりごと

吊り橋を叩いて渡る性格の割に、やってみたいことは盛りだくさん。失敗や迷惑をかけることも盛りだくさん。今回の授業づくりは自分を見つめ直す良い機会になりました。



第7分科会 授業②

札幌市立あやめ野中学校

津村 昌彦

2年2組 担任
男女バスケットボール部 顧問
J B A 公認D級コーチ
S A J 基礎スキー1級
日本漢字能力検定2級

授業の見どころアピール

10月の寒さが残る季節に、「ソフトボール」の授業をさせていただきます。新学習指導要領が目指している球技領域の野球型授業として表現できているのか、率直なご意見を聞かせていただきたいです。北の大地で寒さの中、目一杯ボールを追いかける生徒の姿を見ていただければと思います。

ひとりごと

10月末はさすがに寒いだろう…。防寒の準備は忘れずに(生徒はジャージ上下で大丈夫かな？), 寒さに負けない熱い授業になればいいなあ, と願う今日この頃です。

研究主題

「わかる」「できる」楽しさを
味わう授業のあり方
～仲間と関わりながら、健やかな心と体をはぐくむ～

札幌市立月寒中学校

1 研究の概要

(1) 研究主題設定の理由

ア 本校の研究経過から

本校の研究主題

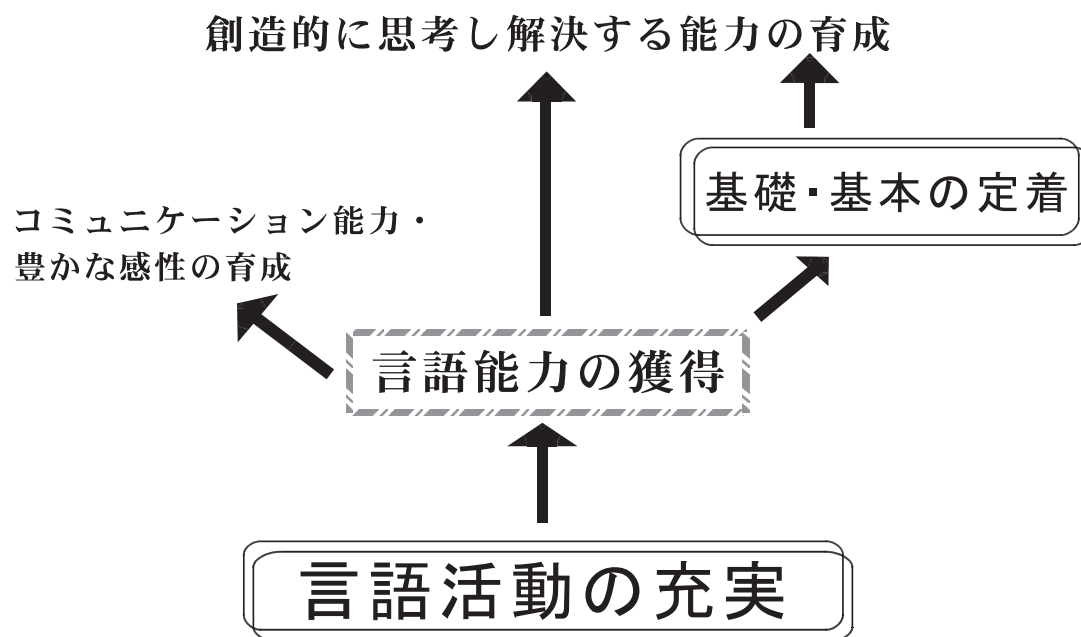
平成18年度から平成20年度まで、「生き生きとした生徒の活動を目指して」
～生徒の興味・関心を高める指導の工夫～

平成21年度から平成23年度まで、「生き生きとした生徒の活動を目指して」
～創造的に思考する学習展開の工夫～

本校ではこれらに基づき、各教科の授業を中心とした研究実践を行ってきた。保健体育科の研究実践としては、特に平成23年度には、校内研修会での保健体育科の授業公開に先立ち、「思考場面の工夫」「単元構成の工夫」に焦点をあて、日々の授業の中で思考を促し、発表させる活動を通して、子どもたちの考える力と伝える力の育成を図ってきた。その成果としては、思考活動の際に問題を解決しようとする意欲的な姿勢が見られたり、仲間とともに考え、話し合う活動を通じて、望ましい人間関係が構築されたということが挙げられた。一方、課題として、思考の必要性を全員に感じさせることができたか、考えたことを言語で表現し、伝えることができていたかということが挙げられ、充実した話し合いから発表まで習慣化する必要性を感じた。

平成24年度は、「基礎・基本を重視した確かな学力の育成」
～言語活動を中心とした学習展開の工夫～

研究仮説「言語活動を充実させることで、基礎・基本の定着がより確かなものになる。」を掲げ、教科の授業を中心として、特別活動、道徳、総合的な学習の時間などに展開し、充実した教育活動を目指すこととした。保健体育科ではこれらの研究経過から教科の研究主題を「わかる」「できる」楽しさを味わう授業の在り方～仲間と関わりながら、健やかな心と体をはぐくむ～と設定した。



イ 生徒の実態から

本校の生徒は、全体的に落ち着いた状態で授業を受ける態度が身に付いており、内容や方法がはっきりしている課題追求には意欲的に取り組むことができる。しかし、課題解決の場面では、自分の考えをまとめる、他者に自分の考えを伝えるといった思考力・コミュニケーション能力を高めていく必要があると考えられる。

また、全校的に体育への興味や関心の高い生徒が多く、体育系の部活動への加入率は58.8%と高い方である。また、野球やサッカーの校外のクラブチームに所属している生徒や校外でダンスを習っている生徒も多い。

各部への加入人数（平成24年度）

	1年	2年	3年	合 計
軟式野球	7	9	12	28
サッカー	15	9	6	30
軟式テニス	31	4	12	47
バスケットボール	13	17	9	39
バレーボール	17	12	10	39
卓球	9	17	14	40
バドミントン	10	21	11	42
ハンドボール	9	20	19	48
合 計	111	109	93	313

← 加入率は58.8%

(2) 目指す生徒像

学校教育目標 豊かな人間性をめざして

- 1 知識と技能を習得し、創造的に思考し解決する生徒を育成する。
- 2 人と自然を愛する情操豊かな生徒を育成する。
- 3 強い意志を持ち積極的に行動する生徒を育成する。
- 4 健康でたくましい生徒を育成する。
- 5 礼儀をわきまえ友とともに成長する生徒を育成する。

本校の目指す生徒像をもとに、保健体育科では以下の生徒像を設定している。

自分の目標に向け、粘り強く頑張る生徒

そして、保健体育の授業で大切にしていることが以下の4点である。

- ◆準備運動やトレーニングをきちんとする・・・安全への配慮を怠らない。
- ◆練習を積み重ねる・・・技能の向上を目指す。
- ◆真剣な取組をする・・・関心をもち、意欲的な取組をする。
- ◆仲間の動きをよく観察しよう・・・相互に評価する力を身に付ける。

(3) 研究の仮説

仲間と関わりながら、自らの課題に気づき、解決を図る学習展開の中で、「わかる」「できる」楽しさを味わうことができる。

(4) 研究の視点

〈視点1 基礎・基本の定着を目指し、言語活動を取り入れた学習展開を図る〉

学習カード記入、レポート作成、グループ学習における意見交流場面等の言語活動を取り入れた実践を通して、「わかる」「できる」ことのコツをつかむことができるよう学習展開を図る。

〈視点2 「わかる」「できる」楽しさを味わえる課題解決型の授業展開を図る〉

仲間との関わりの中で、他者との比較から「わかる」「できる」ことのコツをつかんだり、楽しさを味わうことができる。また、相互に評価し合ったり、交流する中で、「わかる」「できる」とはどういうことかを見極める目が養われていくと考えられる。

2 研究の具体

(1) 実践例 第1学年 単元名「バレーボール」

ア 授業のねらい

バレーボールは、ボールの扱いが困難で個人に求められる技能が高いスポーツである。小学校時には、集団の関係を高めるレクリエーションとしてゲームを経験している。本校の1年生男子では「パスをつないでラリーを制する」ことを目標にしてこの種目に取り組ませた。

【単元の目標】

- 次の運動について、勝敗を競う楽しさや喜びを味わい、基本的な技能や仲間と連携した動きでゲームが展開できるようにする。
 - ・ ネット型では、ボールや用具の操作と定位置に戻るなどの動きによって空いた場所をめぐる攻防を展開すること。 (技能)
- 球技に積極的に取り組むとともに、フェアなプレイを守ろうとすること、分担した役割を果たそうとすること、作戦などについての話し合いに参加しようとするなどや、健康・安全に気を配ることができるようにする。 (態度)
- 球技の特性や成り立ち、技術の名称や行い方、関連して高まる体力などを理解し、課題に応じた運動の取り組み方を工夫できるようにする。

(知識、思考・判断)

イ 単元構成

	第1学年 (14時間)	第2学年 (12時間)	第3学年 (10時間)
主な学習内容と学習活動	基本的な技能 (パス・サービス)		
	バレーボールの特性・成り立ち	1年の復習	1・2年の復習
	☐ オーバーハンドパス ☐ アンダーハンドパス ☐ アンダーハンドサービス ☐ 簡易ゲーム	☐ スパイク ☐ フローターサービス ☐ 簡易ゲーム ☆拾う→スパイクを打つ	☐ フォーマーションについて ☐ ブロック ☐ 簡易ゲーム ☆レシーブ →トス →スパイク
	グループ別練習(パス)	グループ別練習	
	「ラリーを制する」ことを目的とした、簡易試合	「拾う→つなぐ→打つ」の三段攻撃を意識した簡易試合	戦術を工夫した三段攻撃を目指した試合

1) 基本的な技能～パスの基本の習得

生徒がバレーボールの楽しさを味わうためには、正確なパスを身に付けてラリーが続くような練習が必要である。そこで、直上パスに毎時間取り組み記録を残した。また、図1の6つの目的別のドリル練習でパスの技能を高めることにした。どの練習においてもグループ対抗で競い合う形式を取り入れ、課題発見の話し合いと解決の練習を重ねた。

①隊列パス前後（図1 左上）

前後のフットワーク（移動）とボール操作をなめらかにつなげることを目的とした。

⇒個人の技能に差があり、パスの距離に長短のバラつきがあった。向かい合った互いの距離、カバーや次のパスの行方を予測した動きを意識させることが必要である。

②バスケットゴールシュート（図1 上中）

距離・高さの正確なコントロールを身に付けることを目的とした。

⇒ゴールに入れることの爽快感から、楽しく練習に取り組んでいた。ターゲットに正確にコントロールするためにはオーバーハンドパスの方が適していることは理解できていたようだが、筋力不足でゴールまで届かない生徒も多く、アンダーハンドパスを使う例が多く見られた。

③ネット越し対人パス（図1 右上）

協力してボールを落とさないことを目的とした。

⇒バドミントンコートで行った。パートナーとの距離に長短があったものの、正確なコントロールをするためにはオーバーハンドパスが有効であることを再確認できた。上達の度合いで互いの距離を伸ばしながら練習を行った。

④隊列パス左右（図1 左下）

左右のフットワーク（移動）とボールの方向転換を目的とした。

⇒ボールを追う方向と返球する方向が異なっているため、正式なゲームに迫った練習ができた。練習の質を高めるためには球出しを上手にさせる必要がある。

⑤円陣パス（図1 下中）

方向・距離の正確なコントロールと素早く落下点に入るフットワークを身に付けることを目的とした。

⇒力の弱い中学1年生にとって味方との距離が離れるほどアンダーハンドパスに頼ることが多くなる。パスを続けるためにはオーバーハンドパスを使った正確なコントロールが有効であることが再確認できた。また、生徒は自ら互いの距離（円の大きさ）を調整し、ボールを持たない時の動き（定位置に戻る）を行っていた。

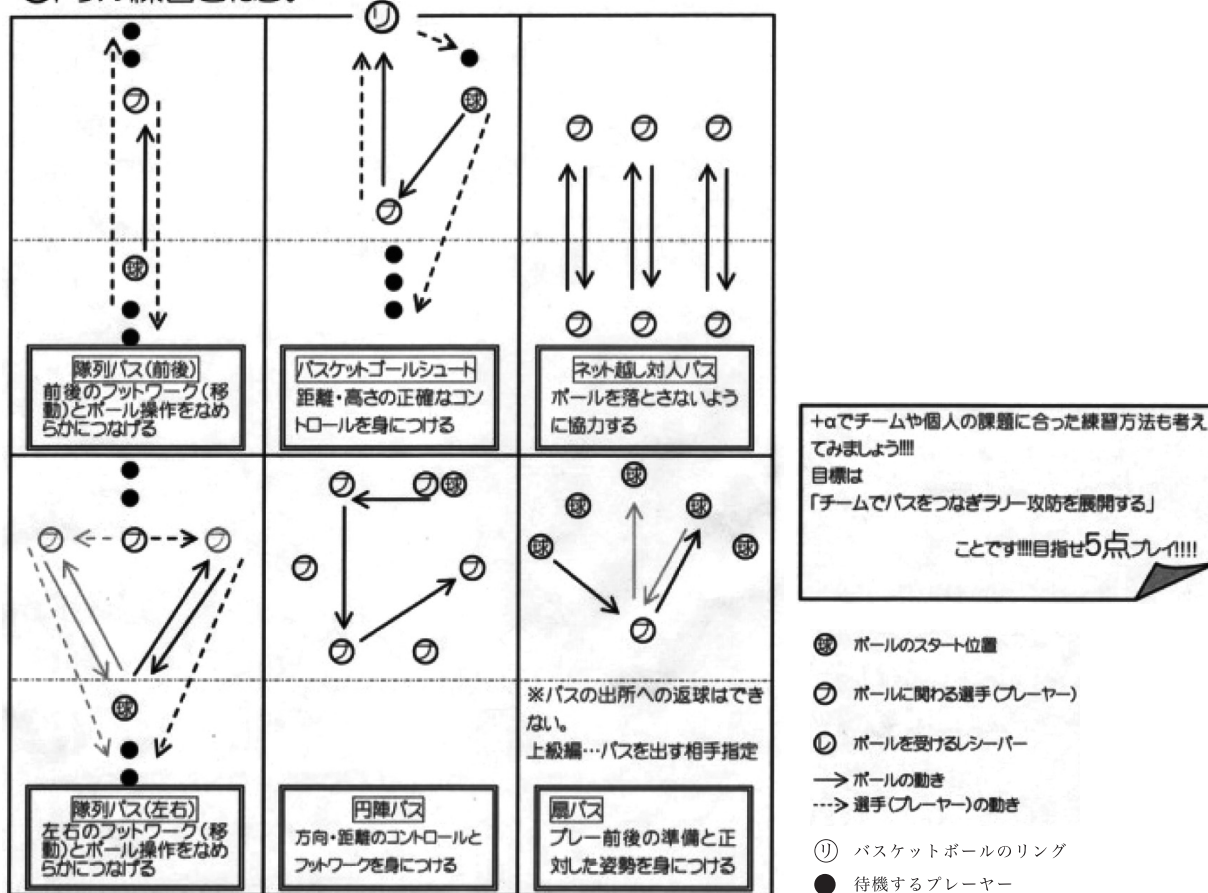
⑥扇パス（図1 右下）

プレー前後の準備とボールに正対した姿勢を身に付ける。

⇒方向転換のパスと体の向きを意識させたかったが、返球の角度が大きくなるとプレーが困難になり、現在の技能では練習が困難だった。上達すればバックパスの練習にもなるが、結果的には数人しかできなかった。

ドリル練習とねらい

図 1



2) 簡易試合で課題を深める

① ラリーを続けることを目的とした簡易試合

- ① 4対4 (ミニバレーボールコート)
- ② ネットをはさんで向かい合うチームは味方
- ③ ネットをボールが通過した回数を競い合う
- ④ サービスは下手投げ
- ⑤ チーム内で3回つないで返球した場合は5点 (その他は1点)

② ラリーを制することを目的とした簡易試合

バレーボールの本質を残した簡易ゲームは個人・集団技能の向上や新たな課題発見の場となる。

ウ 授業の実際

① 目的別のドリル練習から課題解決への取組

目的別のドリル練習が課題発見や解決への糸口となるよう、数多く設定した。あらかじめ練習の目的を意識させることにより、簡易試合で発見した個人や集団の課題を解決する選択肢を広げることができたと考えられる。



②学習カードの活用

バレーボール学習カードNO. 1

1 年 組 番

④単元目標「チームワークでラリーを制することを楽しもう!!」

I. バレーボールってどんなスポーツだろうか? (関心・意欲)

II. たのみのゲームを覚えて (思考・判断)

①個人技を
覚えていたこと

②チーム技を
覚えていたこと

III. 個人技能チェック表 (技能)

項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
1 椅子から立ち上がる姿勢でプレーできた																				
2 ボールの正面に移動できた																				
3 肘を伸ばし、手首の上でボールをヒットできた																				
4 身体全体を使ってボールを送り出した																				
5 思ったところにボールをコントロールできた																				
6 ボールの落下点に素早く移動できた																				
7 腕間と人差し指で網の前で三角指をつくることができた																				
8 指のほらでボールをヒットできた																				
9 手首を上向きに振り、ボールを返すことができた																				
10 身体全体を使ってボールを送り出した																				
11 思ったところにボールをコントロールできた																				
12 ネットに近寄り、トスを返すことができた																				
13 肩を軸に腕を振り子のように前後にスイングできた																				
14 手首近くの肉厚の部分でボールをヒットできた																				
15 腕の前面に移動しながらボールを送り出した																				
16 思ったところにボールをコントロールできた																				

評価方法: A 完璧 B 時々できる C できない

IV. スキルアップ学習表 (目標値1111回以上パス30回/1min・サービス連続得点10点/1min) (技能)

項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
アンダーハンドパス																				
オーバーハンドパス																				
アンダーハンドサービス																				

V. 学習の振り返りと個人課題設定 (関心・意欲・思考・判断)

項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
①																				
②																				
③																				
④																				
⑤																				
⑥																				

バレーボール学習カードNO. 2

1 年 組 番

V. 学習の振り返りと個人課題設定 (関心・意欲・思考・判断)

項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
①																				
②																				
③																				
④																				
⑤																				
⑥																				

先生からのアドバイス

VI. バレーボールの学習を振り返ろう (関心・意欲・態度・思考・判断)

項目	自分評価	相互評価
① 簡単にバレーボールを楽しめたことができた	A B C	A B C
② ゲームや練習に意欲的に挑戦することができた	A B C	A B C
③ 互いに助け合い、意欲を高め合っていた	A B C	A B C
④ 仲間と協力して、積極的に話し合いができた	A B C	A B C
⑤ 協力して、準備や後片付けを行うことができた	A B C	A B C
⑥ 課題解決に努め、自分の目標を達成した学習ができた	A B C	A B C
⑦ チームの課題や目標を達成してプレーできた	A B C	A B C
⑧ 目標・安全についての考えを説明できた	A B C	A B C
⑨ 練習で身につけた技能をゲームに生かすことができた	A B C	A B C
⑩ ゲームで自分のポジションや役割分担を果たすことができた	A B C	A B C
⑪ バレーボールの楽しみや楽しさ、強みの理解ができた	A B C	A B C
⑫ ゲームの進め方や作戦の立て方を理解できた	A B C	A B C
⑬ ルールや審判法を理解できた	A B C	A B C

相互評価記入者

VII. バレーボールを覚えて (関心・意欲・思考・判断)

①練習や試合で工夫したこと

②次年度への学習に向けて頑張りたいこと

学習カードは、生徒の学習過程を教師が学習の振り返りとして活用することができる。また、生徒自身が記録を残すことで自らの成長の度合いを確認することもできる。さらに、話し合いの場ではコミュニケーションの道具としても活用できる。



- 《簡易ゲーム後の生徒の感想》
- ・サービスで終わるとつまらないから、相手からの返球をとにかく高く上げてつなぎたい。
 - ・味方同士でパスが繋がらない。名前を呼ぶなど声かけて5点を狙いたい。
 - ・練習の成果が出て5点プレイがたくさんあった。

【学びを深める授業づくり】

チームスポーツであるバレーボールにおいて、課題は個人、集団の両面から設定することができた。課題に気付かせ、追求の手助けとなる練習の場を設定し課題解決を図るために、試合 (評価・反省、課題設定) — 練習 (課題追求) — 試合 (評価・反省、課題設定) の流れで単元を構成した。それにより、生徒自らが「1回返しはつまらないから3回つないで返そう。」などの進んだ課題を設定し、新たな学びを引き出すこともできた。

【楽しさや満足感から目標に迫るゲームの工夫】

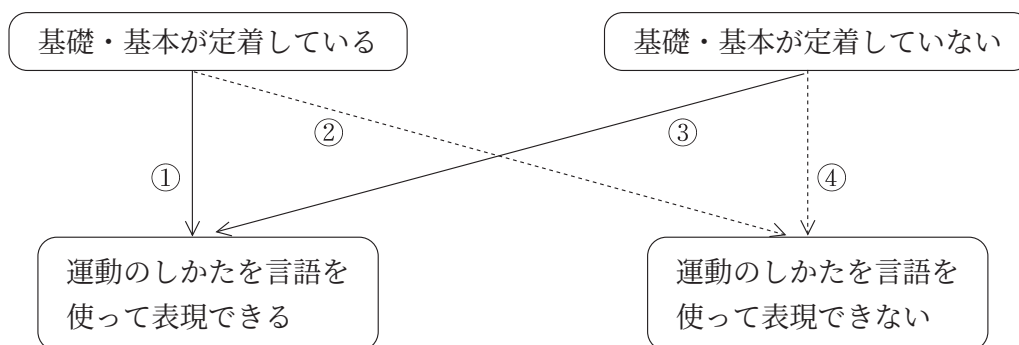
個人技能の向上のためには反復練習は欠かせないものである。今回の授業では、試合形式のゲームだけでなく、基本技能の習得においても競い合う楽しさや、上達する喜びのもてるゲームを取り入れ、どの生徒も「飽き」がこないよう練習を組み立てた。仲間とともに考え、高めあう楽しさを味わいながら課題を発見して解決することで、主体的な学びの土台をつくることができた。

3 研究の成果と課題

【研究主題】

「わかる」「できる」楽しさを味わう授業のあり方

(1) 基礎・基本の定着を目指した、言語活動を取り入れた学習展開



①～④の中でも、②または④のパターンの生徒が多い。

「書く力」「読む力」「まとめる力」「伝える力」等の基本的な言語能力の部分が不足しているために、基礎・基本の効果的な定着が阻害されているのではないかという課題が見えた。

①・③のパターンの生徒は、基礎・基本をよく理解した上で、自分の考えをまとめたり、表現する活動をさせると、更に整理されて、体をうまく使えるように（つまり基礎・基本が定着していくように）なっていくように見受けられた。

(2) 「わかる」「できる」楽しさを味わえる課題解決型の授業展開

バレーボールのような集団で行う球技では特に、練習方法を自分たちで工夫したり、ゲームの作戦を立てる等の活動を通して、仲間とともに考え、高め合いながら課題を発見して解決することで、「わかる」楽しさを味わうことのできる主体的な学びの土台がつくられた。

また、本校では全学年で毎学期に一度、20mシャトルランのテストを行い、自分の全身持久力を確認している。20mシャトルランは、生徒にとっては体力的に大変きついテストであるが、本校では、仲間との比較や前回の自己記録との比較から自分の体力の高まりを自覚することにより、「できる」楽しさを味わっている生徒が多くいる。このことは個人が自分の課題を意識し、解決している時間と捉えている。

今後も「わかった」「できた」という実感を一人一人が抱くことのできるよう、また、仲間で共有する場面を数多く設定できるようにしていきたい。そして、生徒同士で課題を見出し、解決の先にある「できる」喜びへとつなげていきたいと考えている。

〈参考文献〉

・中学校学習指導要領解説

文部科学省

研究主題

地域に根ざし、小学校と中学校の連携を図る渡島の体育 ～進んで学び、自ら高める体育学習を通して～

北海道学校体育研究連盟渡島支部 知内町立知内中学校

発表者 教諭 加藤 晃

1 渡島支部の研究について

(1) 研究主題設定の理由

ア 支部の研究経過から

社会的背景から

- ・子どもの体力の低下傾向が深刻である。
- ・特に北海道の子どもの体力は、全国に比べて劣っている傾向がある。
- ・運動する子どもとそうでない子どもの二極化の傾向が顕著である。
- ・生涯にわたって運動やスポーツに親しむ習慣や態度を育てることが学校教育に求められている。
- ・新学習指導要領が今年度から全面实施されている。

組織の特徴から

- ・渡島支部は、小学校と中学校の教師が一体となって活動しており、小一中の連携の在り方を模索している。
- ・渡島教育研究集会に置いて授業研究する一方で、本会独自による「渡島体育研究集会」を開催している。
- ・賛助会員を含め120余名で組織化され、機能的に活動している。
- ・受け身的な研究会から主体的な研究会を目指してグループワークを中心とした研究協議を行っている。

全道統一主題

地域に根ざし、小学校と中学校の連携を図る渡島の体育
～進んで学び、自ら高める体育学習を通して～

地域の特徴から

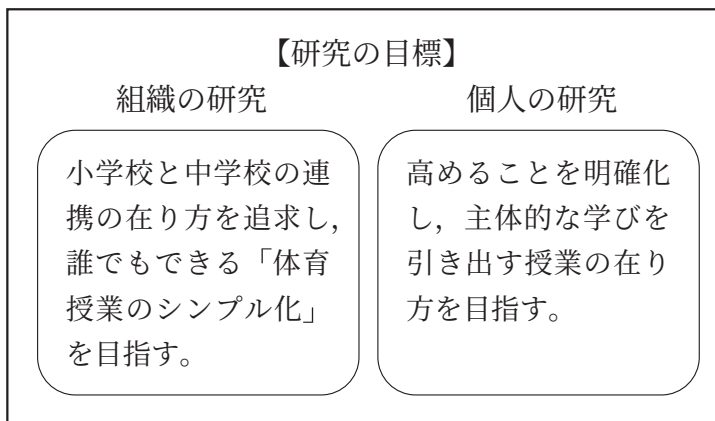
- ・渡島管内には、北は長万部町から西の松前町まで10市町があり、特色あるスポーツが行われている。
- ・大横綱を輩出した福島町。松前町の行事として行われるスーパーホッケー。道南のスキーマッカである八雲町は行政と学校が一体となって学習を取り入れている。
- ・北海道の文化として定着してきた「よさこいソーラン」は道南でも盛んに行われており、運動会の行事に合わせて取り組まれている。

社会的背景から

- ・小学校と中学校が隣接していながら、教育的連携が希薄しているところもある。
- ・小一中の連携の必要性は認めながらも、何を、どのように連携したらよいのか見通しが無い。
- ・現場では9年間を見通した種目配列によるカリキュラム連携よりも、指導実践レベルでの連携が望まれている。
- ・小一中連携の課題の他に、小学校における体育専科の教師がいる学年といない学年における児童の運動経験の違いが大きな課題である。

渡島支部が前述のような研究主題を設定した理由は、大きく分けて二つある。その一つは、組織的な研究を推進する必要性である。また、「小学校と中学校の連携」は教育現場がどこでも抱えている課題であり、渡島支部の組織としての目標でもある。

そして、もう一つは、学校現場、とりわけ体育が抱えている課題が山積している中、学校体育が目指しているのはやはり「生涯スポーツの実践者」を育てることである。私たちは、生涯スポーツに向けた自発的な学習の素地を「進んで学び、自ら高める体育学習」が展開される授業づくりを通して具現化しようと考えた。そのために教師は「主体的な学び」を引き出す手だてを工夫することが目標になる。以上のように、組織的なアプローチと教師一人一人の日常的な授業実践を通して研究主題に迫ろうと考えた。



イ 児童生徒の実態から

渡島管内の児童生徒の実態を把握するために、平成21年「体育に関するアンケート」を約2250名の小中学生を対象として実施した。その結果から中学生では以下のことが明らかになった。

- ・ 渡島の男女生徒の95%は運動することは大切であると考えている。
- ・ 体育以外の運動する機会が男子では75%程度あるのに対して、女子では50%程度である。
- ・ 「踊り・ダンス」「武道」において学年の進行に伴い、苦手・嫌いの数の増加・男女差など、明確な数字が出てきた。
- ・ 「体育がつまらないと感じる要因」の一番目に「苦手な実技種目の時」が挙げられた。

(2) 目指す児童生徒像

- ・ 目標に向かって努力する
- ・ 自ら考え行動する
- ・ 自ら判断し決定する
- ・ 仲間と協力し、高め合う

(3) 研究の仮説

・ 仮説1（小・中連携の視点から）

特色ある渡島各地域の小学校と中学校において、子どもたちの発達段階に応じた適切な運動経験・単元計画・人や物とのつながりなど、小・中学校の教師が共通認識しながら小・中連携した指導の在り方を工夫し、更には体育専科以外の教師へ普及することによって、渡島の子どものより健やかな成長が期待できるだろう。

・仮説2（日常の授業実践の視点から）

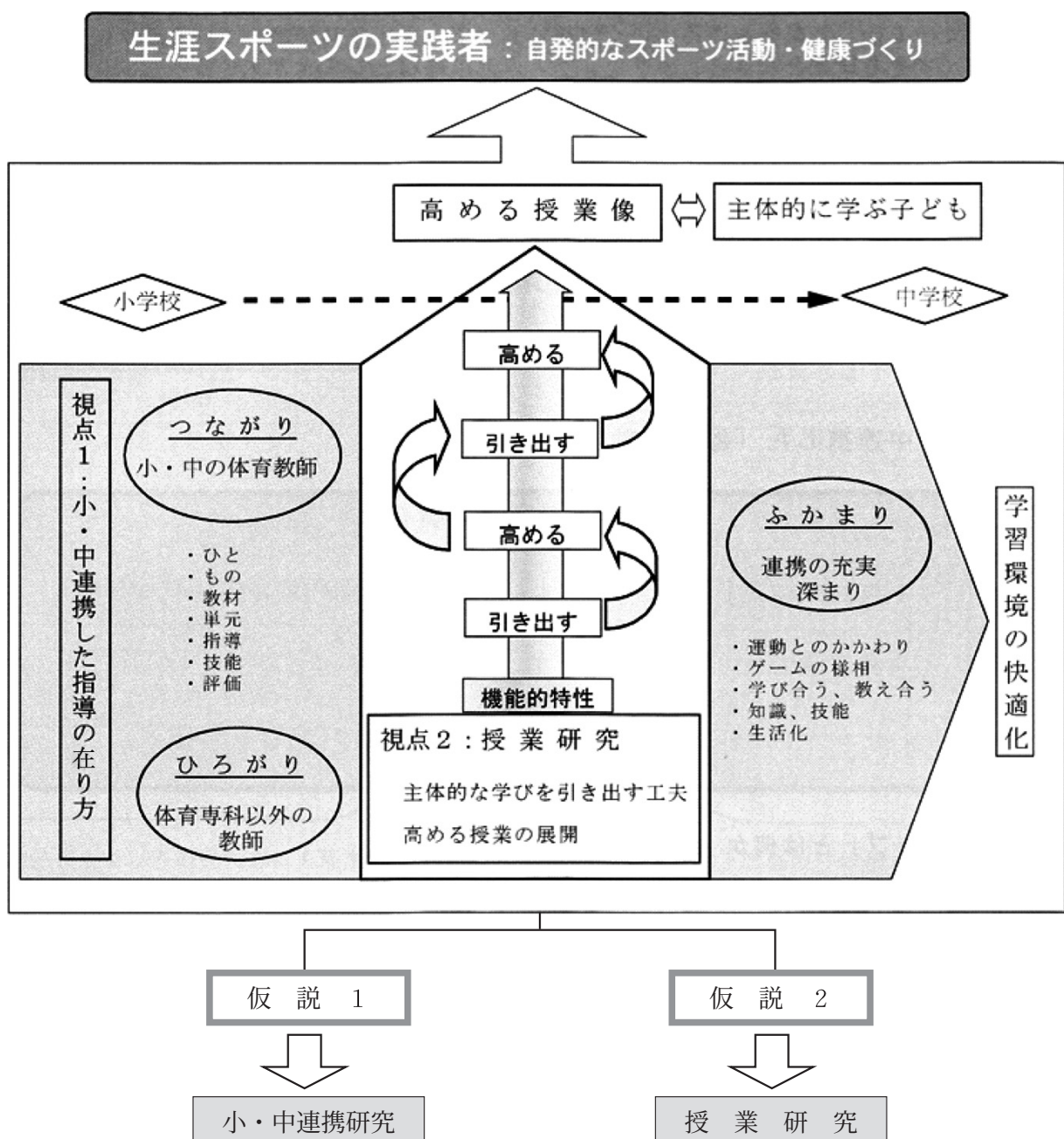
日々の授業において、

- ①子どもたちが主体的に学んでいくような仕組みを工夫する。
- ②何を高めたいか、どこを伸ばしたいかなど、教師の意図が明確な授業を実践することによって、自発的な学習が展開され、生涯スポーツの実践者としての素地が身に付いた児童生徒が育つであろう。

（４）研究の視点

〈視点１〉小・中連携した指導の在り方

〈視点２〉授業研究（主体的な学びを引き出す工夫・高める授業の展開）



2 研究の具体

(1) 実践例Ⅰ 小学校6年生・中学校2年生 単元名「チャチャチャパーティー！」 (ボールルームダンス「チャチャチャ」)

知内町立知内中学校 指導者 水口 力

※町内の3校の小学校へ中学校の教師が出前授業の形式で3時間授業を行った上で、チャチャチャパーティーを実施した。

ア 授業のねらい

- ・小学生と中学生がチャチャチャのリズムを通じて、踊る楽しさを味わう「社交型」の楽しさを追求できるようにする。
- ・パートナーと協力して学習を進めていくために必要となるコミュニケーション、そして、踊るために必要となる「リードする」「合わせる」意識から生まれる一体感を感じることができるようになる。

イ 単元構成（4時間）

	主な学習活動（○）	教師の支援（☆）と評価（◇）
1	ねらい1 チャチャチャのリズムを知って体を動かそう！ ○チャチャチャのリズムを知る。 ○リズムを口ずさむ。 ○手拍子をする。 ○歩いてみる。	☆リズムを捉えきれない子どもには、「リズムに乗る」感じを交流する。 ◇チャチャチャのリズムに合わせて踊ることができる。
2・3	ねらい2 「チャチャチャ」のリズムに乗ってパートナーとカッコよく踊ろう！ ○パートナーと協力して学習することを知る。 ○どうすれば2人で合わせ踊れるか、パートナーと相談しながら、よい方法を探す。 ○誰が一番カッコイイかな？「ダンスコンテスト」をしよう。	☆カウントの入った音楽を流す。 ☆パートナーと協力して踊る方法を発見できるように促す。 ☆「チャチャ」の動きの工夫を促す。 ◇パートナーと協力してチャチャチャを踊る楽しさを味わおうとしている。 ☆見付けたチャチャの動きを全体で交流し、動きの広がりを促す。 ☆「カッコいい」基準を子どもと決める。 ◇パートナーと基準に沿ったカッコいいチャチャチャを踊るために工夫している。
4	ねらい3 チャチャチャパーティーをしよう ○小学生と中学生でペアをつくって踊る。 ○初めてのパートナーと踊るために必要な「リードする」「合わせる」意識をもたせる。 ○1曲ごとにパートナーチェンジをする。	☆児童生徒の状況を捉え、リズムに乗ることやステップを意識するように働きかける。 ☆チャチャチャパーティーの方法を知らせ、見通しをもたせる。 ☆必要に応じてパートナーの見つけ方などを支援する。 ◇「合図」を上手にを使って、初めてのパートナーと踊ることができる。 ◇パートナーと夢中になって踊ろうとしている。

ウ 授業の実際

【視点1】小中の連携

- ・ダンスを通じて、いろいろな仲間（異学年・異性・他校）とパートナーを組み、小学生と中学生の関わりを深めることによって、授業を始める前は個人と個人が点であったものが個人と個人をつなぐ線に変化していった。これは小学生にとって中学生、あるいは中学校という存在を少しは身近なものに変えてくれた。また、小学校の教師と中学校の教師のつながりができたことはもちろんのことであったが、教師と児童とのつながりもでき、小中の接続という点でも効果が見られた。

【視点2】主体的な学び

- ・ダンスの授業を通じて、パートナーと考えてきた踊りを小学校、中学校でそれぞれ発表し、お互いのよさを認め合い、学び合う場面を設定することによって、パートナーと創り上げてきたダンスが評価され、さらによりよい踊りを創ろうとするきっかけとすることができた。
- ・学年に応じた考えを出し合いながら、小学生が中学生をリードしたり、中学生が小学生をリードして踊りを創っていく共感的な喜びを味わう場面があることで、踊りに広がりが見られた。ただし、パートナーによっては中学生の一方的なリードによって踊りが創られていた。
- ・パートナーチェンジや曲を変えることがあったが、その変化に合わせるために必要なことを引き出すことで、どうすればパートナーとリズムに合わせて踊ることができるか、みんなから出たコツを利用しながら学習を展開することができた。

【視点2】高める（主体的な学びを引き出すため、生徒に必要となる力）

- ・初めて踊るパートナーと協力してダンスを創り上げる中で、お互いのコミュニケーション、さらには、リードする、リードされるといった踊るために必要とされる力が引き出され、活用されることによって主体的な学びを引き出す要因となっていた。



図1．チャチャチャパーティーの様子①



図2．チャチャチャパーティーの様子②

ボールルームダンスの実践は「チャチャチャ」の授業から始まりました。現在は「ステップを教えない」を原則にして、リズムにのる感覚づくりから入る学習過程を基本としています。『チャチャチャ』の学習過程の例は以下のようになります。

1. リズムに乗る感覚づくり（リズムエクササイズ）→2. パートナーとリズムを感じて踊る→3. チャチャチャづくり→4. チャチャチャコンテスト（かっこよさの追求）→チャチャチャパーティー（いろいろな人と踊る）

(1) 実践例Ⅱ 小学校4年生・中学校2・3年生 単元名「器械運動」

八雲町立落部小学校 落宰 公人／八雲町立落部中学校 澁谷 尚弘

ア 授業のねらい

- ・技マップを利用し、自分の力に応じた技に挑戦し、習得していく楽しさを味わうことができるようにする。
 - ・グループで協力しながら、課題に応じた取り組み方を工夫することができるようにする。
- ※「技マップ」とは、器械運動の技の分類に従って系統的に配列し、さらに一つの技ができるようになるためのスモールステップを挿絵付きで解説した学習資料のこと。

イ 単元構成 (10時間)

	学 習 活 動 (○)	教師の支援 (☆) と評価 (◇)
1	○オリエンテーション どのように学習するのか知ろう・考えよう ・マップ探検の見通しを持つ。 《知 る》時間・マップの使い方など技を習得すると、お宝GET 《考える》学習のルールやマナー、ウォームアップなど ・小中合同のグループを作る。	☆マップ探検について見通しをもたせるために、次の支援をする。 ・全体の流れを伝える。 ・マップの使い方を説明する。 ・マップ探検に必要な事柄を考えさせ、引き出し、働きかける。 ◇学習の進め方を理解することができる。
2 3	自分の現在地を見付けよう ○マップに示された技を試して、自分が挑戦する技を見付ける。 ・自分の目的地を決める。 この技ができたから、目的地はどこにしたらよいだろう。 ・どこからやってみよう ・できるところまで、戻ってみよう ・どんな技か分からないから聞いてみよう	☆ワープとループの使い方を指導しながら、現在地を見付ける支援を行う。 ☆現在地を踏まえて、目的地を設定するよう働きかける。 ◇自分の現在地を把握し、目的地を見付けることができる。
4 10	1. マップをもとに学習を行う。 マップを進めて、宝をゲットしよう ・自分が挑戦する技を選び、それぞれのペースでマップを進める。 技ができたから、次の技に挑戦しよう ・自分ばかりが練習している・・・ ・見本を見せてもらおう。	☆技の習得が停滞している子どもを重点的に支援する。 ☆子どもの運動量が偏らないように、声かけを行う。 ◇マップに従って、技の習得をしようすることができる。 ◇仲間と協力しながら、マップを進めることができる。 ◇自分のルートを把握しながらマップを進めることができる。

ウ 授業の実際

【視点1】小中の連携

- ・技マップを用いることで、一人一人が取り組むべき内容が明らかになり、それを小学生と中学生が混在するグループで共有することにより、より多様な関わり合いの中で学びを展開することができた。
- ・小中合同で授業を行うことにより小中教師間のつながりができ、指導方法や情報の共有ができた。また、用具や器具を共有できるというメリットもあった。



図3．小中合同のW-up

【視点2】主体的な学び

- ・技マップを用いることで、自分の技の現在地がはっきりし、次に進むべき技が明らかになったことで意欲的な活動が展開された。
- ・小学生と中学生が混在するグループで学習を進める中、小学生は中学生からのアドバイスや示範などを参考にしながらの学ぶことができた。また、中学生は小学生に教えるための技のポイントの確認や補助の仕方などにも配慮する姿が見られた。お互いが刺激を受けることで活動意欲が高まり主体的な活動につながった。



図4．中学生が小学生へアドバイス

【視点2】高める（主体的な学びを引き出すため、生徒に必要となる力）

- ・教え合いや声かけ、時には補助も有効に利用しながら、小学生と中学生で直面する課題に対して解決していこうとする力（問題解決能力）を高めようとした。
- ・課題を解決していくことで異学年におけるお互いのコミュニケーション能力も高めることができた。



図5．『技マップ』の原型

3 研究の成果と課題

(1) 小・中連携した指導の在り方

渡島支部では研究部が主になりながら同一単元において小学校と中学校とがつながりある授業を公開し、それを小・中学校の先生方が一同に介してグループワークを行い、屈託がない意見を出し合っている。小・中学校の先生方が同じテーブルに座ることで話題はつきず、小学校から中学校へ、中学校から小学校への要望や現状における体育に関する問題点などが出ている。また、組織的な研究を進めていくために、組織として共通の課題意識をもってその解決を図っていくために各領域において『「おさえ」の共有化』を図っている。例えばボール運動における「おさえ」の共有化は以下になる。

ボール運動における「おさえ」の共有化

- ①「ゲーム」中心の課題解決型の授業を行う。
- ②ダイナミックな「グループ学習」を取り入れる。
- ③「ゲームの様相に応じた学習内容」を工夫する。

「おさへの共有化」を図ることによって、市研や町研レベルにおいても研究の視点を組み入れた授業が展開され、広がりが見られている。連携を小中学生と一緒に授業を行うという狭い範囲では捉えておらず、渡島支部としては小・中学校の先生方がつながり、情報交換、用具や器具の共有化も小中連携の重要な役割だと考えている。課題としては、地域によって小と中との接続が十分でないことや、小学校における体育専科の有無による学校差、学年差、クラス差が子どもの運動に大きな影響を与えていることが挙げられる。そのため、改善の手だてとして体育授業のシンプル化をさらに模索していく必要があると感じている。

(2) 授業研究（主体的な学びを引き出す工夫・高める授業の展開）

器械運動においては、おさへの共有化を以下のように設定したことで技マップを利用した授業づくりが行われている。

器械運動における「おさえ」の共有化（一部抜粋）

- ①「技マップ」を活用しよう。
- ②実践を重ねて「技マップ」を改良していこう。

「技マップ」そのものに主体的な学習を促す“仕掛け”が施されることで、生徒が意欲的に活動し、技マップを進む姿が見られている。ただし、教師がどのように関わって指導するのか、また学習集団の中でいかに個人としての活動が意味付けられていくのか検討していく必要性が出てきている。

また、表現運動（ダンス）においては、おさへの共有化を以下のように設定したことで数多くの学校において実践され、学年160名によるダンスコンテストやプロを招いてのダンス授業も公開されている。

表現運動（ダンス）における「おさえ」の共有化（一部抜粋）

- ①誰でも簡単に取り組める教材として「ボールルームダンス」を実践してみよう。

ボールルームダンスのパートナーとの創意工夫によって多様な楽しみ方ができることから主体的な学習が展開された。また、コンテストの形で競争型として楽しむこともでき、かっこよさを追求することでパートナーと踊りの完成度を高めようとする姿が見られた。渡島支部としては、ボールルームダンスの教材的な価値の高さに注目し、実践を重ねてきたが、チャチャチャ・ワルツ以外のリズムに挑戦し、リズムに乗って体を動かす楽しさを味わうことができるようにすることと、いろいろなダンスを研究することが課題となっている。

【研究主題】

仲間とともに学び合う保健体育学習

【日 程】

9:55		11:05		13:00		14:15		14:55					
9:00		10:45		11:55		13:10		14:35		15:00			
	受 付	第 一 次 公 開 授 業	休 憩	第 二 次 公 開 授 業	昼 食	休 憩	開 会 行 事	研 究 発 表 Ⅰ	研 究 協 議	研 究 発 表 Ⅱ	質 疑 応 答	指 導 講 評	閉 会 行 事

【会場案内】

**札幌市立
向陵中学校**

〒064-0824
札幌市中央区
北4条西28丁目1-30
TEL：011-611-4271

【アクセス】
地下鉄東西線
「西28丁目駅」下車
↓
3番出口より20m

札幌市立向陵中学校



所在地	札幌市中央区北4条西28丁目30-1
電話	(011) 611-4271
学校長	塚野 昭 臣
生徒数	910名

◎校訓

「自主独立・明朗潤達」

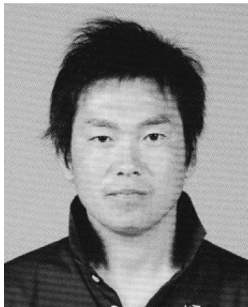
◎学校教育目標

- 1 自ら知識を磨き、すすんで創造する力を養う
- 2 自然や人間の美しさを愛し、情操を豊かにする
- 3 強い意志を持ち、節度ある行動をする
- 4 体を鍛え、明朗で健康な心身を養う
- 5 自主独立の気風を養い、社会連帯の精神を身につける

◎特色

昭和23年に札幌市で7番目の中学校として開校しました。以来、63年間に約27,000名の生徒が「自主独立・明朗潤達」の教訓を胸に巣立ち、社会の様々な分野で活躍しています。現在では、全校生徒900名を超える大規模校でありながらも地域や家庭の支えもあり、落ち着いた学校生活を送ることができています。また、部活動の加入率は75%を超え、運動や健康、文化活動に高い関心をもっています。

授業者の紹介



第8分科会 授業①

札幌市立向陵中学校

片山 慎司

1年9組 担任
サッカー部 顧問
地域C級コーチ
サッカー2級審判員
フットサル2級審判員

授業の見どころアピール

生徒が意欲的に学習活動に参加できる場面の設定を工夫しました。また、生徒と生徒、生徒と教師のコミュニケーション活動を充実し、協同的に取り組めるような授業づくりに努めました。

ひとりごと

器械運動の跳び箱運動が、同じ技であっても運動過程の一つに視点を向け、こだわることで新鮮な技となったり、少しずつ発展させることで生徒にとっても「達成できそうだ」という期待がもて、意欲的に学習できるなど、奥深いものだと感じました。



第8分科会 授業②

札幌市立稲陵中学校

市川 みお

3年4組 担任
女子バスケットボール部 顧問
JBA公認D級コーチ
日本公認審判
(現在も現役プレイヤー)

授業の見どころアピール

グループ活動を通して仲間との協力や交流を行い、運動の楽しさや心地よさを感じることで生涯スポーツへとつながる、という視点を大切にしています。授業を見ての率直なご意見を聞かせていただきたいです。

生徒が生き生きと運動し、仲間と試行錯誤をくり返しながら笑顔と汗があふれる授業をつくりたいと考え、準備してまいりました。よろしくお願いします。

ひとりごと

「体づくり運動ってなに？」というところからスタートした授業づくりです。まだまだ勉強中の身ですので、いろいろなご意見・ご感想・ご指導がもらえたらうれしいです。

研究主題

仲間とともに学び合う保健体育学習

札幌市立向陵中学校

1 研究の概要

(1) 研究主題設定の理由

ア 本校の研究経過から

本校では昭和47年度以来、研究主題は「『学ぶ側』に立つ教育の実践」と一貫している。「学ぶ側」に立つということは、永遠の課題と言えるだろう。そのため研究主題を継続し、副主題を設定することにより、主題に迫るより具体的な研究内容を明確にした。ここ10年間の研究副主題は次のようになる。

- ・第8期（平成14年度～平成16年度）「『生きる力』をはぐくむ基礎・基本の研究」
- ・第9期（平成17年度～平成20年度）「『確かな学力』と『豊かな人間性』を育む授業を求めて」
- ・第10期（平成21年度～平成24年度）「『学ぶ喜び』のある授業実践を求めて」

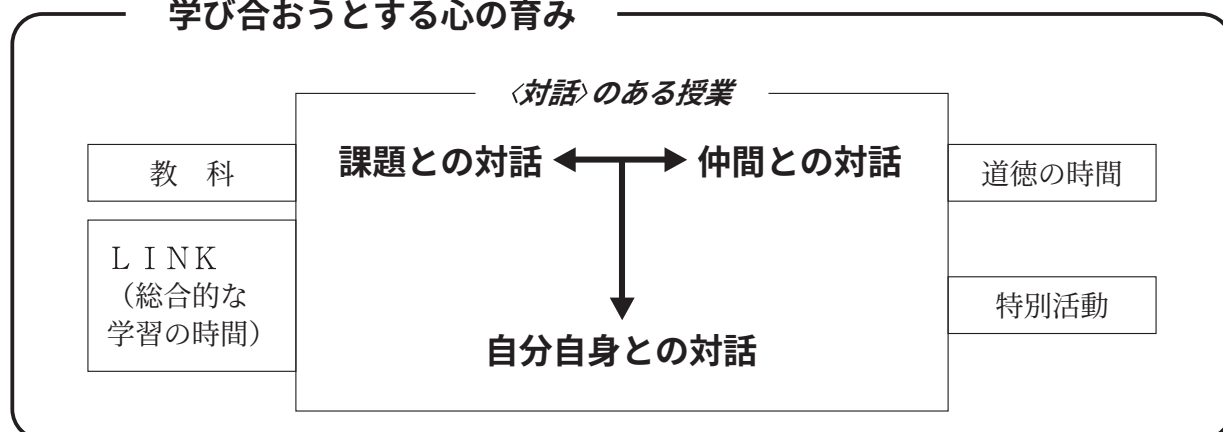
以上の研究経過から、本校の保健体育科研究主題を「仲間とともに学び合う保健体育学習」と設定した。

【本校の研究全体像】

研究主題	「学ぶ側に立つ」教育の実践
保健体育科研究主題	「仲間とともに学び合う保健体育学習」
保健体育科研究副主題	「学ぶ喜び」のある授業実践を求めて

研究実践仮説 〈対話〉のある授業を実践することにより、生徒は「学び合おうとする心」を育み、「学ぶ喜び」を感じ取るようになっていく。

学び合おうとする心の育み



イ 生徒の実態から

本校生徒は、全国学力調査の結果から全国平均を上回る生徒が多く、学習意欲の高い生徒が多い。時間やマナーなど基本的な生活習慣が身に付いている生徒が多く、校内外での生活も安定している。また、7割程度の生徒が運動系の部活動に所属している。ただ、陸上競技の平均記録と全国体力テストの記録を比較してみると、運動能力が決して高い集団とはいえない。生徒のほとんどは、積極的に授業に取り組んでいるが、運動能力が低く、意欲のない生徒もいる。しかし、体育の学習では、グループ毎に活動することに慣れており、お互いに声かけを積極的に行うことができる。話し合いにおいては、運動の苦手な生徒も積極的に意見を交流している。

以上のことから、運動の得意不得意に関わらず、仲間とともに学び合い、すべての生徒が積極的に授業に参加することが大切であると考えている。

(2) 目指す生徒像

本校の教育目標である

- ・自ら知識を磨き、進んで創造する力を養う。
- ・自然や人間の美しさを愛し、情操を豊かにする。
- ・強い意志をもち、節度ある行動をする。
- ・体を鍛え、明朗で健康的な心身を養う。
- ・自主独立の気風を養い、社会的連帯の精神を身に付ける。

をもとに、保健体育科では、「**自ら学ぶ意欲をもち、他者から良さを感じ取る心をもち、自らの健やかな体を鍛えることはもちろん、何事にも粘り強く取り組む生徒**」を目指す生徒像と設定した。

(3) 研究の仮説

〈対話〉のある授業を実践することにより、仲間とともに学び合うことができる。

仲間とともに学び合おうとする心を「課題と〈対話〉し、仲間や教師と〈対話〉し、自分自身と〈対話〉する学びを授業の中心に据える」ことによって、育もうと考えた。つまり、授業の中に〈対話〉を取り入れることにより、「学び合おうとする心」を育むことができているのである。

〈対話〉を次の3つの段階に分けて考えた。

①課題との対話 〈自己決定〉 ～ 〈対話①〉

生徒は新たな課題と出合ったときに様々な「思い」をもつであろう。その「思い」が学習を推進していく原動力になると思われる。逆に言うと、「思い」をしっかりとめさせることが「学び」を進めていく第一歩となる。

「思い」をはっきりとめさせるためには、生徒に問題意識が生じるような課題提示をしたり、興味・関心を高めたりすることが大切である。また、学習の見通しをもち、自分にもできそうだと、やってみようという意欲を高めることが大切になってくるであろう。

このように、課題との出会いの設定を工夫することにより、生徒一人一人に学びの方向性を自己決定させていくことを「課題との対話」ととらえる。課題を自分に引き寄せてとらえることにより、生徒にとって学ぶ必然性が高まっていくであろう。

②仲間（自分以外）との対話〈相互交流〉 ～ 〈対話②〉

学習を進めていく中で、「仲間はどう考えているのだろう。」「自分の考えに不十分なところはないだろうか。」と生徒は考えていくようになる。その時に仲間と交流をしたり、互いの考えや作品を発表したりすることが解決に向けて有効な方法となる。今回〈対話〉として特に考えたいのは、他から学ぼうとする姿勢である。例えば、自分の発する言葉が他の生徒に何らかの影響を及ぼし、逆に自分も他の生徒から影響を及ぼされる関係を強く意識することである。そして互いによりよい学びにしていこうとする気持ちをもつことである。ただ発表を行うだけでは、学び合いになってはいかない。

学びは必ず一人一人の個に返っていく。互いのやり取りから何を学び取っていったのかを明らかにできる〈対話〉でありたい。それが、生徒一人一人が深く豊かに考えていくきっかけになっていくであろう。

③自分自身との対話〈振り返り〉 ～ 〈対話③〉

自分自身との対話は、仲間との対話の後に、自らの学びを振り返ってみることである。

「A君の意見は自分の考えを広げてくれた。次に同じような学習をするときに役立てたい。」

「Bさんのような作品は、自分では思いもよらなかった。どうすればあのような発想ができるのだろうか。」「自分の考えを多くの友達に納得してもらうことができた。今後の学習にも生かしたい。」と振り返ることで、学習の成果が確かな学ぶ力になると考える。そして、最終的には、同じような学習場面や実生活において、自分の中にある「もう一人の自分」との対話を通すことにより、深く思考し、確かな判断ができ、豊かに表現する生徒を育てていきたい。

（４）研究の視点

〈視点１〉

「仲間とともに学び合える教材の開発・工夫（課題との対話）」

- ・課題の明確化
- ・課題解決のための資料の工夫（学習カード，教師の声かけ）

〈視点２〉

「仲間とともに学び合える学習過程の構築（仲間，自分自身との対話）」

- ・学習課題の共有の場の設定
- ・コミュニケーションの場の設定
- ・課題解決のための学習場面の設定
- ・評価の場の設定

研究の具体

(1) 実践例Ⅰ 第3学年 単元名 球技「ソフトボール」

ア 授業のねらい

3年生のソフトボールでは、「チームで守る」ことを目標としている。中学校3年生になると、基本的な「打つ」「投げる」「捕る」ことは身に付いている生徒がほとんどである。しかし、試合で守備についた時にどのように動いたらいいのか理解できていない生徒がほとんどである。そのため、守備の時にアウトを取るためにはどのように動いたらよいかを理解することをねらいとして授業を行った。

『単元の主な評価規準』

- ・チームの課題（アウトの取り方）に応じた練習方法を選んでいる。 【思考・判断】
- ・基本的なバット操作、ボール操作と定位置での守備などの動きができる。 【技能】

【視点1】「仲間とともに学び合える教材の開発・工夫」

○学習課題を明確にし、だれもが達成感を味わえるように

運動が苦手な生徒でも、まずはどう動くのかを理解し、考え、実際に動いて達成感を味わうことができる。

○学習カードの工夫、発問の工夫

頻出しやすい状況を作り出し、その状況ではどう動くのか明確になるようにした。また、課題を解決した生徒にも新たな課題に発展するような発問を行う。

【視点2】「仲間とともに学び合える学習過程の構築」

○運動が苦手でも参加できる話合いの場の設定

話合いの場面を設け、誰もが話合いに参加しやすい環境を設定した。運動が苦手な生徒も意見を述べ認めてもらうことで自己肯定感が生まれるだろう。

○頻出する場面の提示による学習課題の共有化と課題解決の場面を設定

ソフトボールの試合中によく起こりそうな場面を設定し、課題提示する。また、見本を示し、学習課題の共有化を行った。運動が苦手な生徒でも積極的に動けるような場面を設定した。

○評価の場の設定

学習課題を共有し、それからグループで練習を行う。相互評価、自己評価を行うことで、次の課題をより明確にすることができる。

イ 単元構成

時数	学 習 内 容	学 習 課 題
1	・オリエンテーション（授業の流れ、チーム分け） ・試しのゲーム	・ソフトボールの特性、簡単なルールを理解する。 ・ルールの確認を行う。
2	・基本的な送球、捕球の仕方の確認。	・基本的な送球、捕球の仕方を身に付ける。

3	・ 打撃の基礎を理解し，打撃フォームの分析。 ・ 様々なボールの捕球の仕方を身に付ける。	・ スポーツミラーを使って，自分の打撃フォームの分析を行う。 ・ ゴロやフライなど様々なボールの捕球の仕方を身に付ける。
4	・ アウトの取り方を理解する。① (ランナーがいない場合， いる場合)	・ チーム毎に動きを確認し，修正する。
5 [本時]	・ アウトの取り方を理解する。②	・ 前回のアウトの取り方の復習と，他のアウトの取り方を理解する。
6	・ 試しのゲーム	・ 試しのゲームでは，今まで学習した技能を発揮し，次回からのリーグ戦に生かす。
7	・ リーグ戦	・ 攻守が変わる毎に，守備の連携等を確認し，質の高いゲームを行う。
8		
9		

ウ 授業の実際

本題材では，他グループの練習を見て，グループ毎に，「アウトにするためには，この動きが必要だ」というように，討論する場面を設定した。そのために，チーム内でソフトボールを得意とする生徒が中心となって不得意な生徒の悩みやつまずきに対し，アドバイスを送るなどの対話が生まれた。

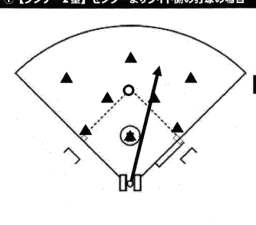
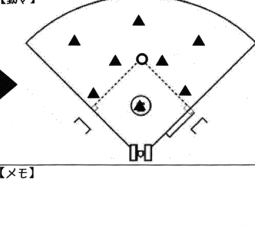
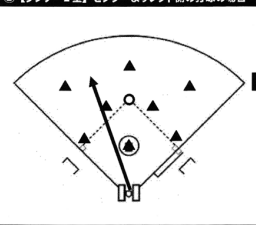
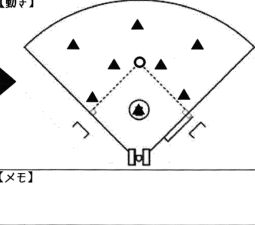
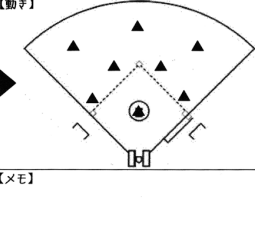
また，簡単にアウトにするだけでなく，「味方がエラーした時はどうすればいいのか」など，よりよい守備を目指していこうとする姿勢を意識させた。また，教師がすべて説明するのではなく，生徒に質問を投げかけて，考えさせる場面を設定することにより，運動を不得意とする生徒からも効率のよい動きのアドバイスやアイデアが生まれた。

さらにソフトボールの守備隊形のワークシートを作成し，生徒が自らその場で書き込めるように工夫した。このことによりグループ内で基本的な動きの他に，よりよい動きがあるかなど，お互いにワークシートを見合い，対話が生まれた。

図1 学習カード（守備の連携を高める）

守備力 LEVEL UP!!②

下の図は，守備の連携プレイが必要な場合である。右側にどのように動けばいいかを書こう！

①【ランナー2塁】センターよりライト側の打球の場合 	【動き】  【メモ】
②【ランナー2塁】センターよりレフト側の打球の場合 	【動き】  【メモ】
③自分たちで考えて見よう！（下図に説明も書き込もう） 	【動き】  【メモ】

(2) 実践例Ⅱ 第1学年 単元名 武道「柔道」

ア 授業のねらい

1年生女子は、すべての生徒が柔道未経験者である。また、柔道の授業に対しては、「痛そう」、「ケガをしそう」など不安を抱いている生徒が8割近くいるが、「試合をするのが楽しみ」、「相手を投げしてみたい」と楽しみにしている生徒も少なからずいた。

柔道の特性である相手と直接組み合い、運動を行うことから、①相手の力を利用し技をかけていく楽しさ、②自分の技を工夫し効果的なものにしていく喜び、③技が決まったときに得られる喜びを味わうことで、柔道に対する「恐怖心」や「痛みを伴う苦しみ」から少しでも脱却できる気持ちをもつことができるように授業を行った。

『単元の主な評価規準』

- ・柔道の学習に積極的に取り組もうとしている。
- ・仲間の学習を援助しようとしている。

【関心・意欲・態度】

- ・技（抑え込み）を身に付けるための運動の行い方のポイントを見付けている。
- ・課題に応じた練習方法を選んでいる。

【思考・判断】

【視点1】「仲間とともに学び合える教材の開発・工夫」

○技能ポイントを絞って提示する

初めて柔道を学習する生徒が多いので、ポイントを絞って取り組ませる。ポイントが少ないことで、課題が明確になり、その後の反省も行いやすい。

○学習カードの工夫、発問の工夫

本時のポイントが書かれた学習カードを使用し、「何を意識すればいいのか」が常に確認できるようにした。また、発問を工夫し、生徒に「どうすればできるようになるのか」を意識させる。

【視点2】「仲間とともに学び合える学習過程の構築」

○学習課題を共有する

技を習得するためには取りと受けの協力が必要なことから、お互いが確認しながら相互に練習する必要がある、学習課題の共有化ができる。

○雰囲気作り

上記で述べたように、技を習得する際に、取りと受けの協力が必要であり、必然的にコミュニケーションが必要となる。グループ内での励まし合いやアドバイスの時間を十分にとって、お互いに声かけのできる雰囲気作りを行う。

○評価の場の設定

授業の終わりには学習カードを使い、本時のポイントを確認しながら反省を行い、次時に向けての課題を明確にする。

イ 単元構成

時 数	学 習 内 容
1	オリエンテーション ・事前アンケート ・基礎知識（歴史・特性・礼法） ・柔道着の着方とたたみ方（早きがえ・早たたみ）
2, 3	投げ技の基本動作 ・姿勢（自然本体・左右自然体） ・組み方（左右組み） ・くずしと体さばき ・進退動作（歩み足・継ぎ足） 受け身の基本動作（後ろ受け身、横受け身、前回り受け身）
4 5 本時	動きの習得（マット落とし、水たまり落とし） 固め技の基本動作（攻撃に必要な基本動作、防御に必要な基本動作） 固め技の習得（けさ固め、横四方固め）
6, 7	固め技の試合（片ひざ立ち、背中合わせ） 投げ技の習得（ひざ車、体落とし、大外刈り、かかり練習、約束練習） 簡易な試合（投げ技のみ、固め技のみ）
8	試合（ルールと審判法、試合のすすめ方）

ウ 授業の実際

ワークシートを活用しながら、前時の自分自身を振り返り、試合前・試合後に自分の工夫した点や変化を考えさせて、気付かせるようにした。適切なアドバイスができる場面を意図的につくる必要があり、授業の終わりに「学習カード」を使い本時のポイントを確認しながら反省を行い、次時の意欲付けにしている。「取り」と「受け」の間での確認や試行錯誤したことの確認を十分行った。グループ内での励ましやアドバイスなどの時間を十分にとって楽しさを感じさせる必要があると考えたためである。

柔道では、基本技能を身に付けるときや技を展開する際に対人での対話、グループ内での対話を行う機会を与えることにより、よりすばやく、より正確な技能を身に付けることができた。ほとんどが柔道の経験のない生徒であるため、教師主導の授業展開になりがちであるが、教え込むのではなく、教え合う中で、お互いが柔道の楽しさを実感するためのワークシートを活用した。

図2 学習カード（固め技確認カード）

柔道 固め技の学習

1年 組 番 氏名

○固め技の基本を習得しよう

け さ 固 め

<技のポイント>

・両足を揃えて、膝全体で押える
・両足は大きく前進に開く

<自己評価>

手さばき		足さばき	
スピード		押さばき	

<自己課題（アドバイスから）>

.....

.....

横 四 方 固 め

<技のポイント>

・返されないように、胸でしっかり押える
・足を前進させ膝を倒す

<自己評価>

手さばき		足さばき	
スピード		押さばき	

<自己課題（アドバイスから）>

.....

.....

<自己評価>◎～大変良くできた ○～良くできた △～あまりできなかった ×～できなかった

○押え込みの3つの条件

①相手を大体おおむねにする。 ②相手の上で向かい合った形になっている
③尻や肩を絡まれている ※うつ伏せの相手を上から押えても、押え込みにならない。

○固め技の試合（結果：○＝勝ち、×＝負け、△＝引き分け）

月/日	相手氏名	結果	かけた技	月/日	相手氏名	結果	かけた技

○固め技の練習を覚えて

3 研究の成果と課題

〈対話〉のある授業を実践することにより、仲間とともに学び合うことができる。

(1) 課題との対話

興味・関心を高めるために、課題をいくつかのレベルに分けて生徒へ提示した。初めの課題は、多くの生徒が解決できるような課題を提示することで、「分かった。自分にもできそうだ。」と意欲を高め、その後は、自分のレベルに応じた課題が提示され、飽きることなく、学習に取り組むことができた。

しかし、つまづいている生徒への手だてを工夫する必要がある、今後の課題となる。

(2) 仲間との対話

グループで課題を共有し、課題解決をしていく中で、新たな課題が出てきた時に、運動が苦手な生徒でも発言できる雰囲気を作った。そうすることで、運動が苦手な生徒からも効率のよい動きのアドバイスやアイデアが出てきた。主体的な学びから、自ら進んで仲間や教師に関わり、互いのよさや存在感を認め合い、全員が高い意欲で授業に参加しようという姿勢が見られた。

学習課題に対して、グループ同士で教え合ったり、評価したりする場面を設定することで、「仲間のおかげでできた」「自分では気が付かなかった」というように、仲間とともに学び、コツを見付けることができ、よりよい動作の習得につながった。

グループのメンバー構成によっては、コミュニケーションが積極的に行えない場合もあるので、生徒まかせにするのではなく、教師の声かけやグループのメンバー構成を工夫する必要がある。

(3) 自分自身との対話

学習課題の共有の場やコミュニケーションの場の設定を行うことで、仲間との対話が積極的に行われた。その後、学習カードを使い自己反省を行ったが、「仲間との対話から気付いた課題」「自分自身で気付いた課題」が明確になった。

自分自身との対話を行うことで、「次の授業では、〇〇を身に付けたい」というように課題が明確になった。そして、次の授業までに各自で練習をしたり、資料を見てポイントを調べてきたりなど、課題解決への意欲が高まり、授業を楽しみにしている生徒が多くなった。

しかし、自己評価が適切に行えない場合には、意欲低下にもつながる可能性もある。教師からの適切な評価を行う場面の設定や生徒の評価する目を養うことが必要となる。

(4) まとめ

生徒の学習意欲を引き出させるワークシートの活用やグループ学習の中で〈対話〉を重視した授業展開により、①自分の工夫した点や変化を考えさせ、気付かせる。(自分自身との対話) ②その運動の特性を理解し、基本動作の習得や技能の向上を目指す。(課題との対話) ③自分では気付くことができない動作やプレーが仲間との協力やアドバイスにより、よい動作、よいプレーへとつながる。(仲間との対話) ことが実践された。

今後、適切な評価を行う場面の設定、より生徒の意欲が高まる教材開発、ワークシート等の充実を図ることが必要と考える。

研究主題

子どもたちの「今」をたがやし
「^{あす}未来」の力をはぐくむ留萌の体育
～わかって できて おもしろい！「楽しい体育」をつなぎ つみかさねて～

北海道学校体育研究連盟留萌支部 天塩町立天塩中学校

発表者 教諭 伊藤 大輔

1 留萌支部の研究について

(1) 研究主題設定の理由

ア 支部の研究経過から

平成17年度開催の北海道学校体育研究大会留萌大会を“原点”として、研究推進と授業づくりにおいては【もっと ずっと】をキーワードに、『子どものエネルギーを引き出し、体と心を育てる留萌の体育』を主題に掲げ、研究を進めてきた。

管内の研究大会においては、平成19年度に「ダンス」、平成21年度には「ダブルダッチ（体づくり）」を題材に授業の在り方と指導方法を検討し、市町村組織においても各種題材について実践を重ねてきた。学習指導要領の改訂を機に、これまでの研究や授業実践を自己評価し、そこでの課題と子どもたちのとらえ直しから、新たに上記の研究主題を設定し、管内学校体育のさらなる向上を目指していく。

イ 児童生徒の実態から

- 運動から遠ざかり、存分に、体を動かすことが少ない子どもたち…
- 体育の指導や体育的活動は行っているが、なかなか高まらない子どもの体力…
- 基本的な運動技能や運動感覚、バランスのよい動きが身に付かない子ども…

これらの状況は留萌管内の児童生徒だけに限ったことではなく、体育教師の多くが抱えている“悩み”だと思われる。その一因として「やらされるだけの授業」「達成感や満足感（できた・伸びた）に乏しい授業」「楽しさを味わうまでに至らない授業」など、私たちが行う授業の在り方にも課題があると考えられる。

楽しい！おもしろい！できた！うまくなった！『やりがいがあって、もっとやりたい！』と実感できる体育の授業を考え…つくり…積み重ねることによってこそ、子どもたちは運動やスポーツとのよい関係を築き、進んで実践できるようになる。そのために、「授業改善」を最重点課題として研究を推進する。

(2) 目指す児童生徒の姿

- ①「な～るほど」「おーそうか！」「まてよ…」など、頭と心と体をフルに使って運動に取り組み、楽しんで活動できる子ども
- ②「うまくできたっ！」「こんどこそっ！」「じょうずだなあ！」「がんばれ！」など、認め、励ます「肯定的」で「前向き」な声を出して活動する子ども

(3) 目指す授業の姿

☆「楽しい」状況をふくらませることによって指導内容がしっかりと身に付く授業☆

- ①明確なねらいと挑みたくなる活動が設定されている授業
- ②子どもたちが目一杯運動と向き合い、運動に浸る中で、身体能力が高まる授業
- ③運動の楽しさや運動することのおもしろさが味わえ、やりがいを感じる授業
- ④「高める・伸ばす・できる・味わわせる」ための手だてと指導がある授業

(4) 研究の仮説

指導の目標を明確にし、子どもの視点から教材や単元構成、学習活動を工夫するとともに、指導方法や手だてなど目標到達への道筋を吟味して準備することにより、子どもにとって「やりがい」がある体育の授業をつくることができる。

また、このような授業を積み重ねることで、子どもは「分かって、できて、身体能力が高まり、楽しく」運動に取り組めるようになり、成長とともに、運動やスポーツとのよい関係を築き、豊かなスポーツライフを実践する力を身に付けることができる。

(5) 研究の視点

〈視点1 学びへ向かわせる枠組み〉 …教材開発	
◇子どもの実態や学級における特性の的確な把握～身体能力状況や学び方の育ち等	
◇身に付けさせたい技能、高めたい力の明確化～運動技能、感覚能力の焦点化	
◇教材化の工夫と魅力ある単元づくり～運動素材の発掘、既存運動の工夫と加工	
◇動きづくりと習熟を図る活動の設定～変化のある繰り返しやCOTの活用	
◇9年間の「つながり」を意識した授業の設計～「つなぐカリキュラム」の作成	
〈視点2 学びを進める場と道すじ〉 …場の設定と学びの過程	
◇運動との出会いにおける演出～インパクトある出会い・やりたい感をわきたたせる工夫	
◇学習活動、学習形態、学習集団の工夫～諸要素をブレンドさせた学びの工夫	
◇アタマ・ココロ・カラダを働かせる学習過程～課題解決に取り組む流れの設定	
◇自らの運動を捉え、修正する活動の位置付け～自己評価の場や方法の工夫	
◇運動の場や活動方法の工夫～「次なる一手」の準備	
〈視点3 学びを深める手だて〉 …授業技能向上と評価	
教師の関わり	◇学びや運動状況の予測と手だての準備～活動状況の見通しと指導方策の練り込み
	◇教師の関わりと多様な指導技術～指示、助言、提示、賞賛、誘導、対話、指摘…等
	◇運動との関わり方、運動の学び方の育成～運動実践モデルの例示等
	◇自力解決、学び合い解決を促す指導方法～発見、気づき、ひらめきの引き出し
	◇指導場面、指導タイミング、指導内容、指導方法～教師の指導力向上
学びの 見とり 修正・改善	☐ 子どものあり様を捉える評価～子どもの活動に対する着眼点の設定
	☐ 自己の運動状況を捉える評価活動の工夫～他者視点や機器の活用等
	☐ 次の授業や活動につなげる評価の工夫～目標に基づく改善ポイントの明確化

「もっと ずっと」を未来の「^{あす}きっと」につなげよう！

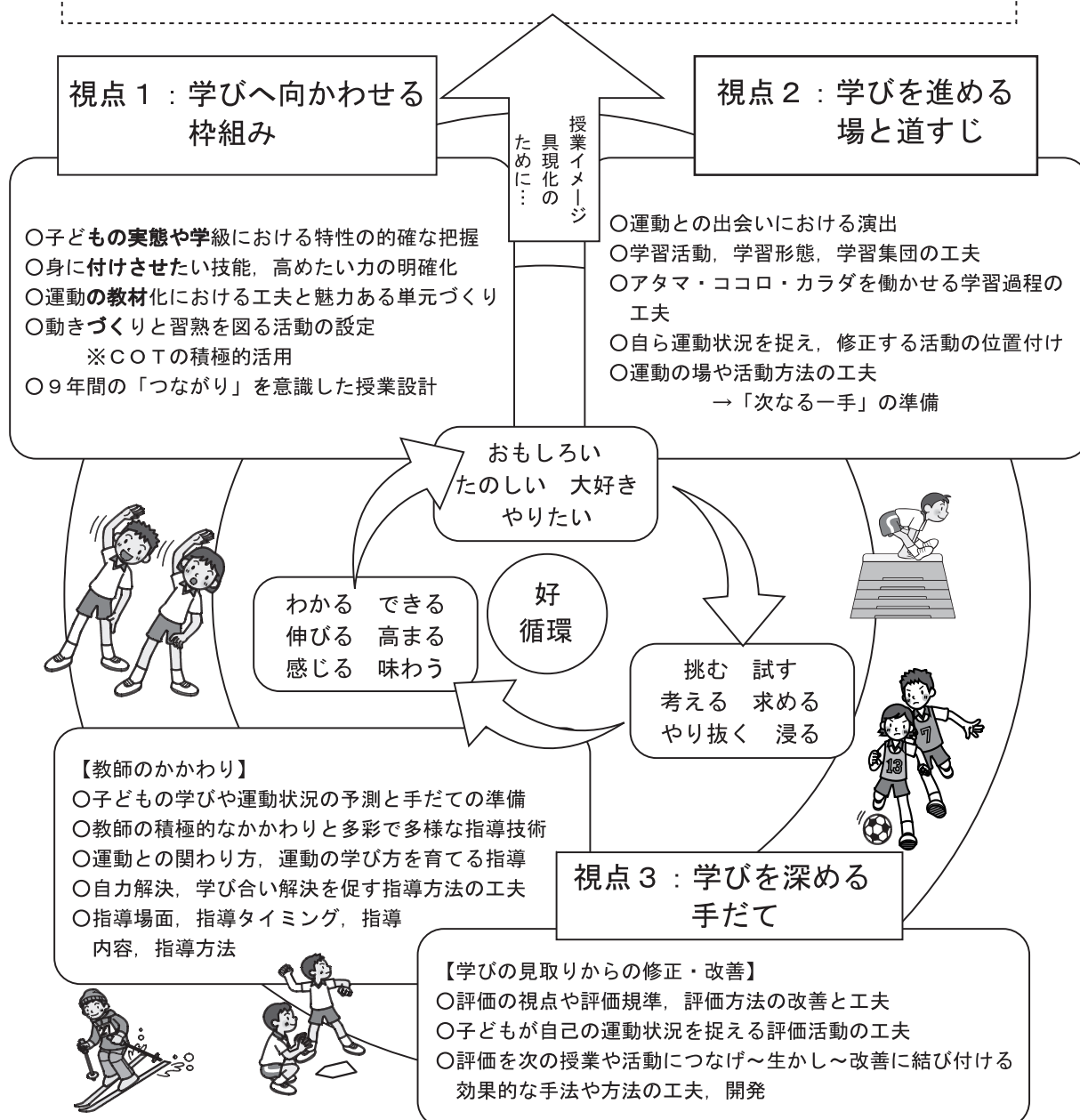
研究主題

子どもたちの「今」をたがやし「^{あす}未来」の力をはぐくむ留萌の体育

～わかって できて おもしろい！ 「楽しい体育」をつなぎ つみかさねて～

☆つくりたい授業のイメージ☆

「楽しい」状況をふくらませることによって指導内容がしっかりと身に付く授業
子どもたちから「肯定的」で「前向き」なコエが聞こえてくる授業



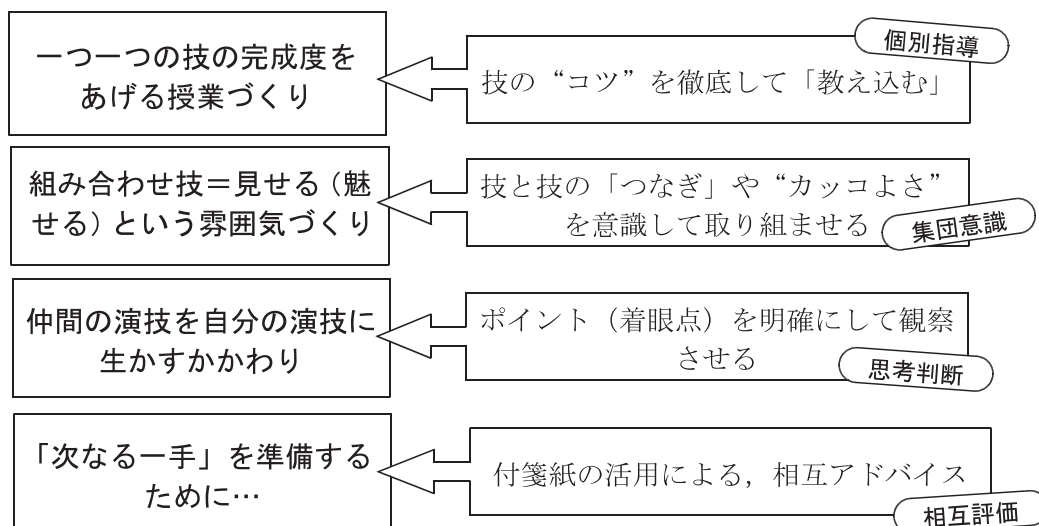
2 研究の具体

(1) 実践例Ⅰ 第1学年 単元名「連続技に挑戦! (マット運動～器械運動)」

天塩町立天塩中学校 教諭 伊藤 大輔

ア 授業のねらい

〈留体研・研究視点2 学びを進める場と道すじ〉 …場の設定と学びの過程

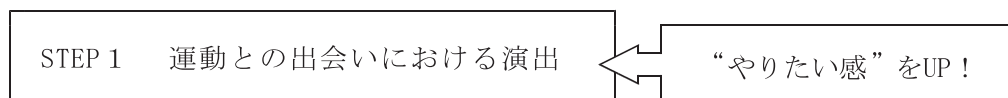


マット運動の技は、回転系（前方や後方、側方に回転することが特徴）と巧技系（倒立、バランス、ジャンプすることが特徴）の大きく2つに分かれる。

非日常の動きが多いので、生活の中ではあまり行わない動きであったり、過去のケガの経験や痛い思いなどから恐怖心が抜けなかったりするなど、一般的に生徒からは敬遠されがちな単元である。

しかし、単元の価値としては、目標に応じて自分のペースで練習に取り組むことができたり、難易度が高い技ではなくても、自分ができる技の完成度を上げるなど、授業の工夫によっては、十分に運動の楽しさや達成感などを味わうことができるものである。また、相手との競争がなく、自分自身の頑張りが結果につながるという特性もあり（克服的要素）、課題解決に向けての取組がいいがある種目でもある。

イ 単元構成



小学校での既習事項の確認をしながら、教師が連続技の例を示範し、「すごい!」「カッコいい!」というインパクトを子どもに与え、「あんなふうになりたい!」「先生みたいな技ができるようになりたい!」と意欲をわきたたせるような学習との出会わせ方を“演出”する。

【関心・意欲の高まりを引き出す段階】

STEP 2 自己の運動状況を捉える自己評価

教師による“教え込み”

子ども自身が、自分の技（演技）ができているかどうかを客観的に捉えることができるように支援していく。そのために、ビデオを活用し、自分の演技を見せて、そこでの観察ポイントを指導しながら「思考 $\longleftrightarrow$ 練習」という取組をさせる。

【自分の技を高めていこうとする段階】

STEP 3 アタマ・ココロ・カラダを働かせる学習

「STEP 3」のために必要な知識や技を伝授する

お互いに、仲間の技を見て「どうすればもっとよくなるのか？」というアドバイスを付箋紙に記入して渡す。それをもらって「何を改善すればよいのか？」「カッコよく見せるためには？」などと考えながら活動する。「アタマ」を働かせながら、仲間からのアドバイスのありがたさを“ココロ”で感じ、それをもとにして“カラダ”を動かしていく」という一連の流れで完成度を“UP”させていく。

【仲間と協力し合いながら課題解決をする段階】

STEP 4 発表会

2年後の集団演技へと発展

3年生では「集団マット運動」を実施予定

ウ 授業の実際

今回の実践は、「自己の運動状況を捉える自己評価」と「アタマ・ココロ・カラダを働かせる学習過程」に視点を置いて授業を行った。

前述したように、演技に対する感想やアドバイスを付箋紙に記入して演技者に渡すことにより、他者の演技における細かい部分にまで注目して観察することができる。このことによって、自分自身の演技を客観的に捉えられるようになり、技の向上に生かすことができると考えた。授業では、生徒が友達の演技を真剣に見て、自分なりの感想やアドバイスを送るとともに、自分の演技にも生かそうとするコメントを残した生徒もいた。一方で、アドバイスをするポイントが曖昧（技のできばえに対するアドバイスなのか、つなぎ方に対するアドバイスなのか）であったり、観察に時間がとられて1単位時間の運動量が少なすぎたり、といった課題が明らかになった。

器械運動においては、技能分析（運動技術のポイントやコツ）が大切である。生徒に考えさせることで思考力の高まりが期待できるが、まずは教師の発問や声かけによって、運動技術のポイントやコツを知識として身に付けさせることが必要だと考える。

また、言語活動については、1単位時間レベルでの取組では不十分で、単元レベルなどの長期スパンで研究主題や視点を視野に入れて工夫していく必要がある。

生徒の感想からは、「〇〇さんの演技が参考になった」、「今まで気付かなかった部分のアドバイスをもらうことができてよかった」など、前向きなものが多かった。生徒の声をしっかり受け止め、意欲を引き出す授業をさらに工夫していきたい。

(2) 実践例Ⅱ 第1学年 単元名「新しい技に挑戦しよう！(マット運動～器械運動)」

遠別町立遠別中学校 教諭 坂田 一幸

ア 授業のねらい

〈留体研・研究視点1 学びへ向かわせる枠組み〉 …教材開発

教材化の工夫と魅力ある
単元づくり

学びの探求，楽しさが深まる教材の工夫，
既存運動の教材化における工夫と加工

○学習カードを用い，生徒自身が自分の状況を把握し，目標をもって学習に取り組めるような環境をつくる。

○やさしい運動から難しい運動へとステップアップ（スモールステップの克服）させながら取り組みませ，恐怖心をもたせないようにする。

動きづくりと
動きの習熟を図る
活動の設定

変化のある繰り返しやCOTの積極的活用

視覚情報による客観的な自己評価

○マット運動（単元教材）の技能向上を図るための手だて（下位教材）としてCOT（コーディネーショントレーニング）を取り入れる。

○基本的な技を系統的に学習し，生徒の能力差に対応できるように学習を進め，一人一人が意欲をもって学習に取り組めるようにする。

○動画などの視覚的な資料（映像）を積極的に活用し，生徒が取り組む技を容易にイメージできるようにする。

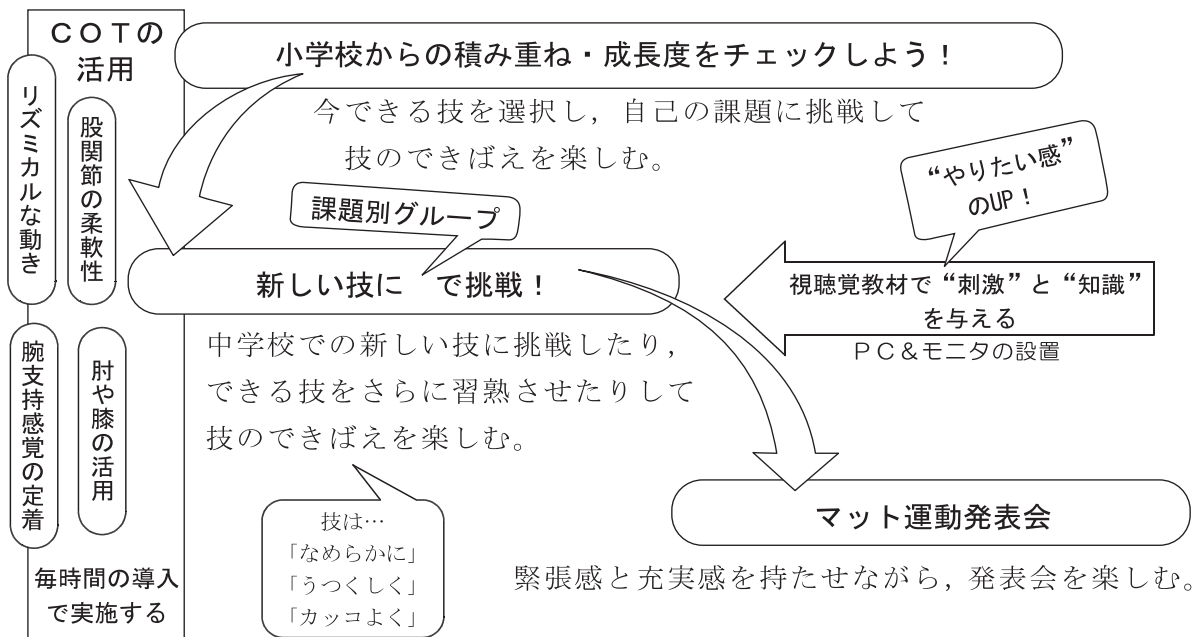
身に付けさせたい技能
高めたい技能の
明確化

学習カード（アドバイスカード）による
各種目の“コツ”の指導

○学習カード（アドバイスカード）を参考にさせ，段階的な練習において，支援器具（ロイター板，ミニマット，セーフティマットなど）を積極的に活用させる。

○各種目の「コツ＝身に付けさせたい・高めたい技能」に気付き，動き方を感じさせることによって，技の完成度を高めていくようにさせる。

イ 単元構成



ウ 授業の実際

○授業の導入段階においてCOT（コーディネーショントレーニング）を取り入れたことにより、楽しみながら体をほぐすことができると同時に心の交流も図ることができ、楽しい気持ちと肯定的な雰囲気をもって授業に臨むことができていた。

また、膝を胸の位置にもっていくことができるようになり、前転や後転、開脚前転、開脚後転などのマット運動につながる体力（筋力・柔軟性）が高まってきた。

さらには、リズムカルな動きや全体での動きの統一感も生まれてくるようになり、今後の単元にも生かしていけるのではないかという手応えを感じた。

○生徒が自分の状況を確認したい時に、視覚的な資料（動画）やアドバイスカードを使って、技術的な内容を確認できるような場の設定を工夫した。

視覚教材については、教師の予想以上に生徒たちが関心を示し、「技を試す←→画像を見る」を繰り返しながら練習を重ねる様子が多く見られたことから、授業に勢いと活気をもたらすものとなった。また、自分の体をどのようにコントロールすればよいかをイメージする上で有効な手だてであった。

しかし、模範的な動きを見ろという、やや一方的で受け身になる感が強かったことから、自分の演技や友達の演技を撮影し、これを模範演技と比較するなどの追求的な活動を取り入れるといった方法についても今後は検討していきたい。

アドバイスカードを活用については、練習方法や場の工夫を容易にできるという面で効果があった。このことによって生徒は、課題をクリアしながら段階を追って練習するとともに、恐怖心を感じることなく練習できたものとする。

しかし、生徒個々のつまづきや、技の“コツ”の習得状況に対する個への手だてについては、全員に応じるところまでは至らず、今後の課題として残った。

3 研究の成果と課題

留萌支部では、子どもたちが夢中になって運動と向き合い、運動に浸る中で、身体能力を高めていく授業をいかにしてつくっていくかということを目指して研究を進めてきた。

また、運動そのものの楽しさや運動することのおもしろさを味わえるようにするため、身に付けさせたい技能や高めたい力を明確にし、これを「高め」「伸ばし」「できる」ようにさせるための手だてを工夫・開発するべく力を入れて実践を重ねてきた。

これまでのところ、学習カードや自己評価カードの記述からは、「次は～をがんばる」「今度は～に挑戦する」「今日は楽しかったので、次回もがんばりたい」など、ワクワク感をもって授業に取り組み子どもたちの姿がうかがえるようになってきた。

運動を苦手とする子どもたちからも「体育が好きになった」「意外とおもしろかった」などという感想が増えてきており、留萌支部全体で取り組んできた実践の成果が徐々に現れてきたものと受け止めている。

また、市町村における実践交流の積み重ねや、管内小中学校教員を対象とした「留萌管内体育実技指導交流会」（平成22年度実施）を行うことで、指導者としての技能の向上や教え方のポイント・技のコツ、授業における“ネタ”などをお互いに交流することができ、微力ながらも管内における体育授業の改善に貢献できたものと考えている。

今後も、さらなる研究の深化と研修の活性化に努め、一人でも多くの子どもが体育の時間を楽しみにし、「もっと、ずっと」という気持ちを抱いて、「きっと」上手に！わかるように！できるように！育つ体育の授業づくりを求めている。

今後の取り組みの展望（今後の重点）

○9年間（小1～中3）の「つなぐカリキュラム」の活用

本支部では市町村の体育教師研修サークルにおいて、各学年における各種目（マット運動、跳び箱運動、ボール運動・球技、陸上競技、スキーなど）の指導のポイント（身に付けさせたい力の具体的な姿）を学年ごとに一覧にした「つなぐカリキュラム」を作成し、主に小学校の先生方に活用してもらっている。

留萌管内は、僻地・小規模校が多く、小学校から中学校に進学する際、子どものメンバーに変化がない地域がほとんどである。このことを利点と捉え、管内全市町村で小中連携に取り組むことにより、一般的な評価規準と並行して活用できるものにしていきたい。また、この取組は、小～中の教師の連携も図ることができ、「小学校では何を学んだのか？」「中学校では何を学ぶのか？」ということを確認する上でも効果があると考えている。さらに、異校種間での子どもたちの実態を交流しながら、より実効性のあるものに改善していきたい（幼稚園・高校への広がりも視野へ）。

○動きづくりと習熟を図る活動の設定

前述したCOTについては、現在、管内各市町村において教委主導による学校への導入が進められるような動きもあるが、学校体育の果たす役割をしっかりと認識し（地域任せにならないように・「体育」は「体育」で）、子どもたちの能力を高める一つの手法としてCOTを捉え、その効果的な活用を研究・検討していきたい。

高等学校部会

第9分科会

北海道恵庭南高等学校

第10分科会

北海道北広島高等学校



漁川ダム えにわ湖(恵庭市)



クラーク博士記念碑(北広島市)

【研究主題】

「運動好きな生徒を育て
豊かなスポーツライフの基礎をはぐくむ体育学習」
～仲間と共に心と体をはぐくむ「体づくり運動」と「剣道」の実践～

【日 程】

	10:00	11:00	13:00	14:55	
9:00	10:50	11:50	13:15	14:25	15:00
受付	第一次公開授業	休憩	第二次公開授業	昼食 休憩	開会行事
			研究発表	研究協議	指導講評
					閉会行事

【会場案内】

**北海道
恵庭南高等学校**
〒061-1412
北海道恵庭市
白樺町4丁目1-1
TEL：0123-32-2391

【アクセス】
JR 千歳線「恵庭駅」下車
↓
～エコバス「恵庭駅前」よりバスで
約10分
～中央バス「恵庭駅通り」下車
→徒歩約15分

※JR「恵庭駅」より無料の
バスが出ますので、利用
してください。
・9：10 発
・9：30 発

北海道恵庭南高等学校



所在地	恵庭市白樺町4丁目1-1
電 話	(0123) 32-2391
学校長	藤 岡 二 朗
生徒数	896名

◎教育目標

教育基本法の趣旨に則り、学力の向上、道德教育の充実に努め、人格の完成を目指して、平和的、民主的な国家および社会の形成者として、真理・正義を愛し、個人の価値を貴び、勤労と責任を重んずる心身共に健全な人物を育成する。

◎特色

北海道公立高校唯一の体育科設置校として、文武両道を教育目標に掲げ教育活動を実践している。平成23年度からスポーツ教育学科を有する北翔大学と高大連携を行い専科教育の一層の充実を図っている。体育科を中心とした運動部の活動が盛んで、全国高校総体には北海道代表として多くの生徒が出場している。恵庭スポーツフェスティバルなど地域行事には多くの生徒がボランティアスタッフとして参加する。

授業者の紹介



第9分科会 授業①

北海道恵庭南高等学校

工藤 直人

1年1組 担任

男子新体操部 顧問

指導者公認コーチ、新体操1級審判

スキー級別テスト1級、柔道初段

全日本選手権大会 団体優勝3回

授業の見どころアピール

平成25年度新学習指導要領の完全実施に向けて、生徒の実態把握をアンケートにより実施し、3年間の単元計画を作成した。生徒が自己のねらいに応じて、楽しく仲間と協力し合い運動する姿を見ていただき、素直なご感想・意見をよろしくお願いします。

ひとりごと

大学時代からスポーツの中で、テニスとサッカーが苦手でした。しかし、初任でサッカー部の顧問になり、今では、女子の授業でテニスを教えています。教員生活28年になりますが、14年間テーマは「愛」です。生徒に「愛」を教えるのに未だに研究中です。



9分科会 授業②

北海道恵庭南高等学校

栄花 英幸

2年1組 担任

剣道部 顧問

剣道教士八段

全日本剣道選手権大会準優勝1回、
第3位2回

授業の見どころアピール

剣道授業は堅いイメージをもたれているが、生徒たちの楽しくそして積極的に生き生きと活動する姿を見ていただきたい。先生方のグループ学習の進め方で効果的な活動があれば、情報提供やアドバイスをいただきたい。

ひとりごと

生徒たちが喜ぶ姿が見たい。そのために、剣道の基本を外さず、柔軟性をもって伝える授業がどこまで生徒たちに伝わるか心配。生徒と一緒に笑えるだろうか…。

研究主題

「運動好きな生徒を育て 豊かなスポーツライフの基礎をはぐくむ体育学習」 ～仲間と共に心と体をはぐくむ「体づくり運動」と「剣道」の実践～ 北海道恵庭南高等学校

1 研究の概要

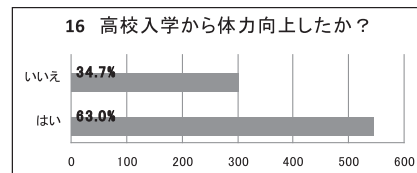
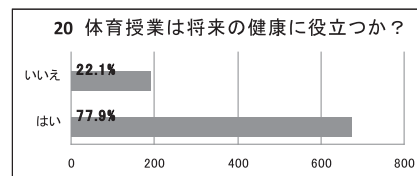
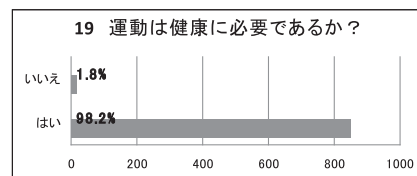
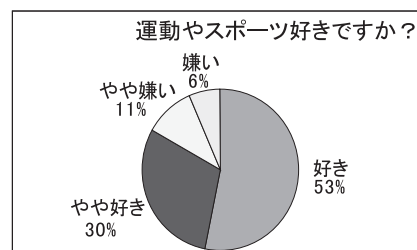
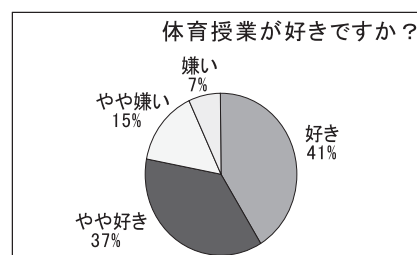
(1) 研究主題設定の理由

本校は、北海道公立高校唯一の体育科設置校として文武両道を教育目標に掲げ教育活動を実践し、石狩管内をはじめ全道各地から多くの生徒が入学してくる。体育科は、3年間で自分の専門性を高めアスリートとしての資質を身に付けることを一つの目標として取り組んでいる。体育科を中心とした部活動が盛んで、全国高校総体には北海道代表として多くの生徒が参加している。その反面、普通科生徒の部活動加入率が4割でそのうち運動部が2割とやや部活動に消極的な傾向にある。部活動に加入していない生徒にとっては体育授業が学校生活の中において、唯一運動する場となっている。

運動部以外の普通科生徒は、日常の生活で運動の楽しさを知ることは少ない。そのため彼らに運動の重要性を理解させることが必要であると考え、「生徒に運動の楽しさ、重要性を知らせる授業」を研究テーマとして設定した。

取組として、普通科生徒全員に対して体育授業に対するアンケートを実施した。生徒の意識・実態として、体育の授業が好きですかの問いに対して「好き」・「やや好き」が78%「嫌い」・「やや嫌い」が22%と全体的に体育授業は好きな生徒集団であり、運動やスポーツが「好き」・「やや好き」が83%、「嫌い」・「やや嫌い」が17%と学校全体として運動やスポーツに前向きに取り組む生徒が多い傾向にある。さらに、「将来自分達が健康的に生活する為に必要なものは」の問いに対して「体育授業」と回答した者は78%「部活動・運動」も含めると98%の生徒が運動の重要性を認識している。また、「高校に入学してから体力がついた」と答えた生徒が63%と体育授業、部活動により6割の生徒が運動することは体力が向上することを実感している。このようなことから生徒に対して何らかの方法で自分の体力を知るきっかけを作ろうと考え、運動時の心拍数を計ること、新体力テストの得点から自分の体をより客観的に知ることにより、身体を動かすこと、汗をかくこと、スポーツをすることの心地好さを体感させ、運動好きな生徒を育てる取組を進めた。

本校の体育授業は、2時間続きの100分（50分×2）で



実施し、TT（ティーム・ティーチング）の形態をとり、細かい指導体制をとっている。体育科を有することから体育施設、運動環境は充実している。体育科の生徒については、より専門性を高めることを目標に、将来、スポーツ振興に携わることができる人材を育てる授業を進め、普通科体育については、1・2年次で各種目の基本的な技能や知識を理解させることを重点に指導し、3年次ではグループによる種目選択制をとり、それぞれの興味関心の高い種目を選択させ、自ら授業計画を立て実践している。体育授業の特徴として、ウォーミングアップに必ずランニングを取り入れている。屋外の展開はグラウンド外周（1周700m）を1～2周、屋内の展開は体育館走路（1周180m）を10周程度実施してから実技に入る。

1年生の最初の頃はかなり苦労している生徒も回数を重ねるうちに楽に走れるようになり、2・3年生では体育授業は「走ること」が定着している。運動の基礎は、「走ること」から始まり運動効果としてウォーミングアップは重要であることを理解させている。



体育館走路ランニング風景



グラウンドランニング風景

（２）研究の仮説

生徒自身が体力を知るきっかけづくりとして、運動前と運動後の心拍数の変化に着目した。ランニング効果が現れやすい1年生を対象に、入学から1年間の授業展開において体力の変化を測定した。その「数値の変化から体力の向上を知ることが出来るのではないか」と仮説を立てた。生徒へ運動前と運動後には心拍数には変化があり、そのことを知ることで運動に適した状態を知ることができる事を伝えた。ウォーミングアップの重要性、体の変化を知る事が出来る授業を進めた。また体力を客観的に判断できる数値として、新体力テストを生徒全員を対象に実施し、自分の体力数値及び判定を知る事で運動への意欲をもたせた。



心拍数測定風景



新体力テスト風景

《研究データの収集・検証》

準備運動のランニングは、スポーツ活動に適した状態（120拍／分）になることを目的にしている。1年次の前期は心拍数が高くなり、授業の経過とともに心肺能力が上昇し、心拍数が運動に適した数値に落ち着き、また心拍数の回復も早まると予測した。

実験① 4月に1年生対象に運動前の心拍数とウォーミングアップ後の心拍数の測定
実験② 10月に1年生対象に運動前の心拍数とウォーミングアップ後の心拍数の測定
実験③ 12月に運動後の心拍数の回復の変化を測定
実験④ 4～5月全校一斉新体力テストの実施

*実験①・②

4月、10月に1年生全員に体育のウォーミングアップ前後の心拍数の平均値をまとめた。

（男子） Warm up 後 4月－133拍／分→10月－120拍／分 13拍／分 down

（女子） Warm up 後 4月－130拍／分→10月－122拍／分 8拍／分 down

4月では負荷が強すぎて心拍数がかかなり上昇し、きつい状態の生徒が6ヶ月後には男子で7拍／分、女子で9拍／分の拍数が減り、一般的に発汗現象の出る120拍／分程度に落ち着いた。このことは、授業の経過とともに体力が向上したといえる。

*実験③

12月に心拍数の回復過程を検証してみると、中程度の運動負荷終了後30秒から運動負荷終了後2分の間に20拍／分以上減少した。2分間で運動前の約80%の回復を示しており、このことは、心肺機能の上昇があり、同時に体力が向上したものと推察できる。

〔運動前・運動後の心拍数の回復過程〕

	運動前	①運動後30秒	②運動後2分	①－②減少数	回復率
男子	77 (拍/分)	128 (拍/分)	98 (拍/分)	30 (拍)	79 (%)
女子	73 (拍/分)	119 (拍/分)	96 (拍/分)	23 (拍)	76 (%)

（３）目指す生徒の姿

体育授業や部活動から得た知識やデータの年度推移をまとめ、分析・検証の結果を、学習指導計画に反映させた。生徒自らが体力を知り、運動への興味関心や、運動への意欲的な参加を促すなど、生徒への還元を目指す。運動時の自己管理や適正状態を知ること、スポーツ運動が日常生活の中で大切なこと、運動の心地好さを知るなどの経験知を積み上げ、将来の健康的なスポーツライフを自ら実践できる生徒を育てる。

（４）研究の視点

〈視点１〉「授業形態，グループ学習の工夫」

体を動かす心地好さ，柔軟性や動きの持続などを重点におき，仲間づくりやコミュニケーション能力を高める学習を実践する。

〈視点２〉「対人競技における導入の工夫」

剣道(武道)の特徴を生かした，対人的動作を身に付け相手に対する敬意と思いやりの精神と仲間づくりの楽しさを身に付ける。

2 研究の具体

(1) 実践例Ⅰ 第1学年 単元名「体づくり運動」

ア 単元のねらい

- ・体を動かす楽しさや心地よさを味わい、健康の保持増進や体力の向上を図り、目的に適した運動の計画や自己の体力や生活に応じた運動の計画を立て、実生活に役立てることができるようにする。
- ・体づくり運動に主体的に取り組むとともに、役割を積極的に引き受け自己の責任を果たそうとすること、健康・安全を確保することができるようにする。
- ・体づくり運動の行い方や、実生活への取り入れ方などを理解し、自己や仲間の課題に応じた運動を継続するための取り組み方を工夫できるようにする。

イ 単元計画 配当時間8時間中、本時6時間目

単 元 計 画 （ 8 時 間 ）										
《 1 学 年 》										
配 時	時系列	1	2	3	4	5	6	7	8	
導 入	0	共通学習：点呼、健康観察、ねらいの確認、ウォーミングアップ						グ ル ー プ 学 習 ①		
展 開	10	① オリエンテーション ② 学習の見通し ③ 授業ルールの確認 ④ 体づくり運動のねらい ⑤ 運動の合理的な行い方	《身体づくりの運動》 ① ベアでストレッチしたり、緊張を解いて脱力する運動 ② 仲間と動きを合わせ、対応したりする運動 ③ 用具を用いた運動 《方法・実践》 強度・時間・回数等にとらわれず、楽しく運動する				グ ル ー プ 学 習 ② 《各グループのねらいに応じた運動を組み合わせよう》 ① ベアでストレッチ ② 仲間と動きを合わせる運動 ③ 用具を用いた運動 ④ 体の柔らかさ ⑤ 巧みな動き ⑥ 力強い動き ⑦ 動きを持続する能力 ※ ①～⑦の運動のねらいについて、バランスよく組み合わせよう 《各グループのねらいに応じた運動を組み合わせよう》 ① 計画の見直し ② 修正 ③ 計画			
	20		《身体力をつける運動》 ① 体の柔らかさ ② 巧みな動き ③ 力強い動き ④ 動きを持続する能力 《方法・実践》 強度・時間・反復回数・頻度などを確認しながら運動する				《各グループのねらいに応じた運動を組み合わせよう》 ① ベアでストレッチ ② 仲間と動きを合わせる運動 ③ 用具を用いた運動 ④ 体の柔らかさ ⑤ 巧みな動き ⑥ 力強い動き ⑦ 動きを持続する能力 ※ ①～⑦の運動のねらいについて、バランスよく組み合わせよう 《各グループのねらいに応じた運動を組み合わせよう》 ① 計画の見直し ② 修正 ③ 計画			
	30	⑥ 学習カード作成					《各グループのねらいに応じた運動を組み合わせよう》 ① ベアでストレッチ ② 仲間と動きを合わせる運動 ③ 用具を用いた運動 ④ 体の柔らかさ ⑤ 巧みな動き ⑥ 力強い動き ⑦ 動きを持続する能力 ※ ①～⑦の運動のねらいについて、バランスよく組み合わせよう 《各グループのねらいに応じた運動を組み合わせよう》 ① 計画の見直し ② 修正 ③ 計画			
	40						《各グループのねらいに応じた運動を組み合わせよう》 ① ベアでストレッチ ② 仲間と動きを合わせる運動 ③ 用具を用いた運動 ④ 体の柔らかさ ⑤ 巧みな動き ⑥ 力強い動き ⑦ 動きを持続する能力 ※ ①～⑦の運動のねらいについて、バランスよく組み合わせよう 《各グループのねらいに応じた運動を組み合わせよう》 ① 計画の見直し ② 修正 ③ 計画			
整 理	50	本時の振り返り・まとめ								

ウ 授業の実際

普通科1年生に対し、体づくり運動のアンケート実施したところ、中学校の授業における体づくり運動は、78%が経験していた。学習指導要領の移行期により、中学校における実施、未実施が見られた。全体的に体育授業が好きな集団であり、運動やスポーツに前向きに取り組む生徒が多い傾向にある。

中学時に受けた内容を調査したところ、主に力試しの運動(29%)、用具を操作する運動(24%)、体のバランスをとる運動(11%)、という結果であった。

体のバランスをとる運動では、二人組エレベーター、ダルマさんが転んだ、ぐるぐる展望台、体を移動する運動では、追いかけて走、用具を操作する運動では、ボール回し、ボールの投げ上げ、短なわ跳び、長なわ跳び、力試しの運動では、手押し車、馬跳び、運びっこ等が実施されていた。

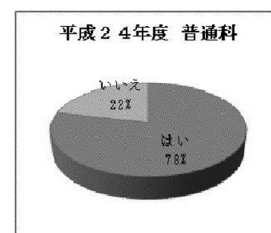


図1 アンケート集計

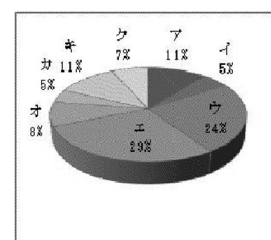


図2 アンケート集計

体力を高める運動では、手つなぎ開脚・押し合い相撲・人押し歩き・サークル馬跳び・背負い歩き・シャトルランであった。

体づくり運動は、自己の体力や生活に応じて、体の調子を整えるなどの体ほぐしを行うことや体力の向上を図ることをねらいとしている。体づくり運動は準備運動や補強運動というイメージを取り除き、楽しさに触れさせ、生涯にわたって運動に取り組む資質・能力を育成することの一助としたい。

図3 アンケート集計

ア	男	16	+	女	31	=	46	・・・	体のバランスをとる運動
イ	男	11	+	女	10	=	21	・・・	体を移動する運動
ウ	男	42	+	女	81	=	103	・・・	用具を操作する運動
エ	男	52	+	女	89	=	121	・・・	力試しの運動
オ	男	13	+	女	22	=	35	・・・	体の柔らかさを高めるための運動
カ	男	7	+	女	12	=	19	・・・	巧みな動きを高めるための運動
キ	男	23	+	女	24	=	47	・・・	力強い動きを高めるための運動
ク	男	9	+	女	20	=	29	・・・	動きを継続する能力を高めるための運動

図4 オリエンテーション1

学習の形態は、1グループ9～10名になるようにグルーピングし、それぞれの目的にあった運動の方法を計画させた。各グループには実生活で考えられる運動内容で設定し、グループで考えさせた。体育館をコーンで仕切り、練習スペースを与えることで内容や安全性について意識を高め、それらを通して、仲間との連携がとれるようになり、生き生きと楽しく授業に参加する姿が見られた。



図5 活動風景

「体づくり運動」学習カードを作成する。

〈ねらい〉

- ・自分や仲間の体の状態を意識し、運動を構成する。
- ・体づくり運動の必要性を理解できるような資質を身に付け、「わかる」「できる」「かかわる」の3点を重点とする。

〈取組の実際〉

- ・授業開始時に学習カードを配り、放課後までに記入し体育委員が回収して、授業者に提出し、授業者はコメントを入れる。

〈成果〉

- ・授業を重ねるごとに、授業に臨む意識が高まってきた。感想に関しても具体的なコメントが多くなり、記入内容も充実してきた。

体づくり運動資料を活用する。

「体づくり運動」をできるだけ効果的に、運動の方法が理解できるように、一人一人に体づくり運動資料を配付した。始めは、活用の仕方の説明等に時間がかかったが、個人で授業内容や、その効果を踏まえて、運動の内容や方法を見直し、新しい運動を考え、施設や用具を効果的に利用し、ねらいに沿った計画が立てられるようになった。



「体づくり運動」学習カード									
月	日	校	年	組	名前				
体の調子 ◎ ○ △ × 心の調子 ◎ ○ △ × 今の気持ちを言葉にする									
運動前						運動後			
◆指導者コメント◆									

(2) 実践例Ⅱ 第2学年 単元名 武道「剣道」

ア 単元のねらい

- ・相手の動きの変化に応じた基本動作から、基本となる技や得意技を用いて、相手の構えを崩し、しかけたり応じたりするなどの攻防を展開すること。
- ・自主的に取り組むとともに、相手を尊重し、伝統的な行動の仕方を大切にしようということ、自己も責任を果たそうとすることなどや、健康・安全を確保することができるようにする。
- ・伝統的な考え方、技の名称や見取り稽古の仕方、体力の高め方、運動観察の方法などを理解し、自己の課題に応じた運動の取り組み方を工夫できるようにする。

イ 単元計画 配当時間16時間中、本時13時間目

単元計画（16時間）																					
《2学年》																					
配時	時系列	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16				
導入	0	準備体操、挨拶、出欠点呼、健康観察、学習内容確認（学習ノート）																			
展開	10	ねらい①：いままで身につけた技を使って練習や攻防ができる				ねらい② 身につけた基本動作 や対人的技術を生かした 攻防ができる				グループ学習 ねらい③ 運動方法を考え、お互いに協力し合い積極的 に取り組む				ねらい④ 学習してきた技を生か し攻防を楽しむ 評価/反省							
	20	1. オリエンテーション 2. ねらい・目標を知る 3. 組編制・役割分担 4. 用具の扱い方 使用上の注意を理解 5. 礼法・立礼、正座・座礼 6. 基本動作 （1）姿勢（2）構え （3）足さばき（4）素振り 7. 防具の着脱 8. 打突部と打突部位の確認 （1）面（2）小手（3）胴 ※ 打ち方・打たせ方 9. 切り返し 10. 約束稽古 （面→小手→胴→小手・面）				《 気剣体一致の定着を目指す打突 》															
	30					◎応用動作（しかけ技）				◎応用動作（応じ技）				◎防具をつけての滑動				・ 紅白試合			
	40					・ 一本打ちの技				・ 抜き技				・ 判定試合				・ 基本動作			
開		・ 連続技				・ 返し技				◎防具をつけずに竹刀				・ 判定試合							
		・ 出ばな技								木刀での滑動											
		・ 私い技								素振り ・ 形（自由）											
		・ 引き技								◎剣道用具なしの滑動											
										手刀				・ 踏み込み							
										・ 剣道デーチキ											
整理	50	整理運動・本時の反省・次回の確認																			

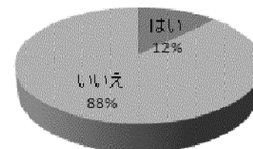
ウ 授業の実際

本校の男子生徒(普通科男子293名・体育科男子205名計498名)に対し、剣道に関するアンケート調査をしたところ、中学校まで剣道を経験した生徒は12%で、残り88%の生徒は剣道未経験者であった。北海道では中学校で剣道授業を取り入れている学校は非常に少なく、ほとんどの学校が「柔道」を行っているのが現状である。

剣道についての印象を調査したところ「痛そう」と答えた生徒が33%、「難しい」が28%である。それに対して「かっこいい」と答えた生徒が83%、「礼儀正しい」が95%でよいイメージと比較すると低い数値ではあるが、悪いイメージをもたれているということも事実といえる。このアンケート結果を真摯に受け止めるとともに、個々の意識を踏まえて、効果的な授業展開を工夫して実施することが求められる。

図6 アンケート集計

中学校までに少しでも剣道を経験したことがありますか？

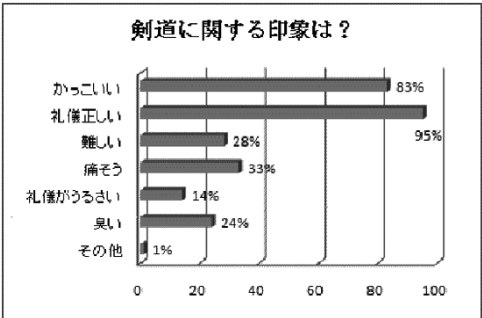


エ グループ学習における授業づくりのねらいと工夫

《授業作りのねらい》

剣道授業を実施するときに、「剣道をどう指導するか」ではなく、「体育授業としてどうあるべきか」を考えなければいけない。生涯スポーツにつながる運動への愛好的態度の形成が、剣道授業の実践を通して、学習の成果として分かるようであればいい。剣道に対するマイナスイメージを増長させるような授業を行っては意味がない。

図7 アンケート集計



《楽しさと意欲を引き出す工夫》

基本的な知識・技能を身に付けた上で1グループ8～10名とし、「防具を着けての活動」、「竹刀・木刀を使用した活動」、「剣道用具を用いないで行う活動」に分け実践した。それぞれのグループで考えた活動内容を元に、リーダーを中心に仲間と協力し合いながら意欲的に楽しく生き生き活動する姿が見られた。

図8 オリエンテーション



《剣道学習ノートの活用》

〈ねらい〉

- ・授業内容及び本時のねらいをしっかりと把握する。
- ・「意欲」「態度」「技術」「知識」それぞれの自己評価を行い、本時の授業を振り返っての反省を記入することで、次の授業につなげる。

〈活用方法〉

- ・授業開始時に配布し、教科担任の所見を確認させる。授業後各自持ち帰り、翌日体育委員が回収し教科担任に提出する。

〈成果〉

- ・剣道の専門的用語を覚え、技に関する質問も記入するなど、授業に対する関心・意欲・態度が高まってきた。また、生徒同士が共有することで、さらに授業への関心度が高まってきた。

図9 活動風景



剣道学習ノート				
1年 組 番 氏名				
第1学年次				
Q1	中学校で剣道授業を受けたか	1. はい	2. いいえ	
Q2	授業以外で剣道をしたことがあるか	1. はい	2. いいえ	
Q3	剣道に関する興味関心度(5段階)	低い→1・2・3・4・5→高い		
授業内容	1	2	3	
	オリエンテーション	構えと目付け	打突の仕方、受け方	
	・剣道の歴史や特性について	体さばき	・正面打ち(すり足)	
学習の成果と反省	1	2	3	
	礼法	構え、掛け声	・小手打ち(すり足)	
	姿勢・構え、足さばき	武道の精神となる意	・胴打ち(すり足)	
学習の成果と反省	1	2	3	
	武道の精神となる意	基本試合	・正面、小手、胴打ち	
	剣道の特性	構え、体さばき	打突の仕方と受け方	
学習の成果と反省	1	2	3	
	礼法	竹刀操作	基本試合	
	授業・練習時に取り組んだ課題(1人1題書く、互いに協力し合って取り組んだ) 授業・練習より授業後に行った課題(授業内容を復習し、)			
学習の成果と反省	1	2	3	
	全学年	1 2 3 4 5	全学年	1 2 3 4 5
	学年	1 2 3 4 5	学年	1 2 3 4 5
	学期	1 2 3 4 5	学期	1 2 3 4 5
	学期	1 2 3 4 5	学期	1 2 3 4 5

3 研究の成果と課題

(1)「体づくり運動」

体づくり運動の参考資料については、小学校や中学校向けの資料はあるが、高等学校としての資料がほとんどないことから、平成25年度の新学習指導要領の全面実施に向け各高等学校でも苦慮していると思われる。学習指導要領解説では、体ほぐしの運動は実生活に生かす様々な運動を組み合わせ実践すること、体力を高める運動は、自己のねらいに応じた運動を計画し実践することと示されている。しかし、中学校・高校ともに、新学習指導要領の移行期であるため、中学での体づくり運動の実態を把握した上で、地域の特性や生徒のニーズに対応した3年間の単元計画を作成することが重要である。

体づくり運動アンケートの分析から本校の1年生段階では、体づくり運動の学び直しを教師主導で始め、単元の前の準備的な運動と単なる補強運動であるという生徒のイメージを取り除き、自己の健康を考える上で大切な領域であると認識させている。自己のねらいに応じた「体づくり運動」を実践することにより、「わかる」「できる」「かかわる」を基本にし、2年生・3年生と段階を経て、より健康とは何か、個人・仲間・家族の健康を考える事に主眼をおいて計画を立てた。先どりをして、平成24年度から実施できたことが、大きな成果といえる。今後は生徒にとって、より効果的な学習内容となるように、Plan（計画）→Do（実行）→Check（評価）→Act（改善）の4サイクルを繰り返しながら、よりよい計画の立案と授業実践を目指し、取り組んでいきたい。

(2)「剣道」

成果として、武道は日本伝統文化であると同時に、どうしても型にはまった堅いイメージがある。今回は「剣道」を行ったが、あくまでも体育実技の剣道という考えで、剣道を通して、生涯にわたっての豊かなスポーツライフを継続できる資質や能力を育てることを目標に行った。つまり、生徒たちが楽しく、積極的に体を動かす喜びを感じてもらわなければいけない。今回、グループ別学習を取り入れ、互いに協力し合いながら活動内容を考え、さらに自己評価をしていくという方法を取り入れた。初めての取組であったが、生徒たちの笑顔や、あちらこちらで笑い声などもでる楽しそうな姿は、感動的であった。「剣道」が一見堅いイメージから柔らかいイメージに変わった瞬間であった。その中で、武道特有の“静”と“動”の関係の大切さを学び、剣道を日本の伝統文化の一つとして生徒たちに伝えることができたものとする。

課題として、今後はさらに授業内容の幅を広めるとともに、グループ学習の効果を活かして、生徒の主体的な授業参加を促し、楽しく明るく知識・技能を習得させるとともに、種目の特性である礼節の大切さを学ばせ、相手の気持ちを重んじ、仲間と協力する心を養うなど、日本伝統文化の精神が、生徒一人一人の生涯スポーツの中で活かされるよう指導法や授業形態の一層の工夫・研究を行っていきたい。

【研究主題】

仲間と共にスポーツの楽しさに触れ，知的に理解することを通して，生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質をはぐくむ体育学習の追求

～新学習指導要領の先行実施を通して～

【日 程】

9:00		9:50		10:55		13:00		14:55		15:00	
		10:40		11:45		13:15		14:25			
受	付	第 一 次 公 開 授 業	休 憩	第 二 次 公 開 授 業	昼 食 休 憩	開 会 行 事	研 究 発 表	研 究 協 議	指 導 講 評	閉 会 行 事	

【会場案内】

**北海道
北広島高等学校**
〒061-1112
北広島市共栄 305-3
TEL : 011-372-2281

【アクセス】
JR 千歳線「北広島駅」下車
↓
徒歩約 15 分

※JR「北広島駅」より無料のバスが出ますので、利用してください。
・9:00 発
・9:15 発

北海道北広島高等学校



所在地	北広島市共栄305番地 3
電 話	(011) 372-2281
学校長	三 品 純 一
生徒数	990名

◎学校教育目標

創造的で知性豊かな人間を育てる。
礼儀正しく情操豊かな人間を育てる。
勤労を愛し心身すこやかな人間を育てる。

◎特色

本校は今年で創立35年目を迎える全日制普通科の道立高校である。生徒のほとんどが大学進学を希望しており、放課後や長期休業中の講習や土曜学習を実施し、道内外の国公立大学に多数の合格者を出している。約7割の生徒が部活動に所属し、多くの生徒が文武両道を目指している。平成22年度より普通科単位制に移行し、学習面はもとより、体育活動においても活性化している。

授業者の紹介



第10分科会 授業①

北海道北広島高等学校

森田 有

1年7組 担任

野球部監督

NISAQ レベル1 インストラクター

トータルライフコーチ

授業の見どころアピール

体育理論が生涯にわたる豊かなスポーツライフを継続する力の源になるよう、さまざまな工夫をして授業展開します。また、言語活動を活発におこない思考力、判断力、表現力を磨きたいと思っています。

ひとりごと

“ 青年は教えられることより刺激を求める ”

常に刺激を与え、生徒が自主的・主体的に行動し成長していけるよう、指導をしていきたいと考えています。



第10分科会 授業②

北海道北広島高等学校

堀川 政彦

2年7組 副担任

柔道部 顧問

柔道六段

全日本柔道連盟A級ライセンス審判員

授業の見どころアピール

男子と女子が互いの動きを理解し表現や踊りによる交流を通して、仲間とのコミュニケーションを豊かにし、自己を表現することに楽しさや喜びを味わうことを期待しています。心と体が一体となる表現運動として、授業終了時には生徒全員が気持ちのいい汗をかき、笑顔で体育館から教室へ戻れるような授業であれば…。

ひとりごと

私が踊る姿は他人には見せられない。というか見せられるものではない。しかし、見てみるとやってみたくなくなっていくのがダンスと感じている。柔道で鍛えたパワーを生かさないように心がけ、生徒が「楽しさ」から「笑顔」をつくれる授業を目標にしていきたい。

研究主題

仲間と共にスポーツの楽しさに触れ、知的に理解することを通して、
生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質をはぐくむ体育学習の追求

～新学習指導要領の先行実施を通して～

北海道北広島高等学校

1 研究の概要

(1) 研究主題設定の理由

ア 本校の研究経過から

本校保健体育科では昭和53年の開校以来、生徒の体力向上と運動習慣の形成のため、立地条件・環境等の地域の特性を生かし、冬季の授業にクロスカントリースキーを実施してきた。また、冬季以外の実技の前には補強運動とランニングを実施してきた。

その成果として平成5年度に「北海道体力作り最優秀校」、平成14年度に「全国保健体育優良校」、平成21年度に「全国学校体育優良校」表彰を受賞した。

本校保健体育科では大会主題の本質を「将来の実生活でスポーツを継続するための確かな体育の力の育成」ととらえて、生徒一人一人に「自ら学ぶ力」と「仲間と共に学ぶ力」を身に付けさせ、自らスポーツに親しもうとする態度を養うことができるような授業を計画してきた。

本校は昨年度の入学生から単位制に移行し、このタイミングに合わせ、保健体育科では新学習指導要領を先行実施している。今回の指導要領改訂の趣旨を保健体育科では、①思考力・判断力・表現力の育成、②主体的に学習に取り組む態度、③言語活動の充実、と捉えて年間指導計画および各単元での指導計画を大幅に見直すこととなった。

このことに関わり、仲間とのコミュニケーションおよび言語活動の充実を通して論理的思考力を養うことから体育的学力へ、教材や学習形態の工夫から関心を起こさせ、仲間と共に学ぶ楽しさやその効果を理解することを通してスポーツを継続する資質へと結び付けたいと考えたことから研究主題を設定した。

イ 生徒の実態から

本校生徒は入学時の偏差値に比べ、卒業時には大きく成績を伸ばす者が多く、格上の進学校を大学合格実績では上回ることが多い。その背景として、教員の指導に非常に素直に従うため、各教科に於いてドリル化された宿題や課題に対して受け身ではあるが黙々と取り組む傾向があり、知らないうちに鍛えられている実態があげられる。

体育学習でもその傾向は同様に現れ、一斉指導において指示したことについては大変よく取り組み、体力や技術の向上に繋がっている。しかし、自ら計画・創造することについてはなかなか動き出せなく、仲間との言語活動を通して課題を解決することも活発には行えないことが多い。

しかし、そのままでは将来の実生活でスポーツを継続することは困難であると考え、上記の研究主題を設定した。

（２）目指す生徒像

本校の重点目標及び本大会での目指す幼児児童生徒像「生涯にわたって生き生きと運動・スポーツに親しむ子ども」を受けて、本校での目指す生徒像を以下の３点として掲げた。

- ア 自主的・主体的に学び、課題を知的に捉えて取り組み、解決していく。
- イ 仲間との言語活動を積極的に図ることから論理的思考力・判断力・表現力を養う。
- ウ 運動の必要性や楽しみ方を理解し、主体的・継続的に運動に親しむ。

（３）研究の仮説

「スポーツの楽しさ」「体育的学力」「主体性」の３点を経験、獲得することによって「豊かなスポーツライフを継続する資質」を育むことができるであろう。

ア 体育的学力とは

体育の指導内容（技能、態度、知識、思考・判断）がバランスよく身に付いた能力のことである。特に知識については学習指導要領では「言葉や文章など明確な形で表出することが可能な形式知だけでなく、勘や直感、経験に基づく知恵などの暗黙知を含む概念であり、意欲、思考力、運動の技能の源となるものである。」とあることから重きを置いて捉えている。

イ 主体性とは

自分の意志・判断で行動しようとする態度のことである。主体性のある生徒の姿とは、自ら課題を見付け、自ら学ぶ糸口を発見し、計画・創造することができるものと考えている。

（４）研究の視点

〈視点１〉学習形態や教材の工夫

ねらいに応じて日常生活の中で親しみのある題材を教材化することにより、意欲・関心を高めることができ、運動の本質的な楽しさや喜びの体験を味わうことができる。興味関心をもち、楽しく学習することから主体性が身に付き、学習内容の理解を深めることができる。

- ・教材を生かした発問
- ・参加型授業
- ・課題の発見と解決
- ・視聴覚教材の利用
- ・導入の工夫

〈視点２〉言語活動を充実させる工夫

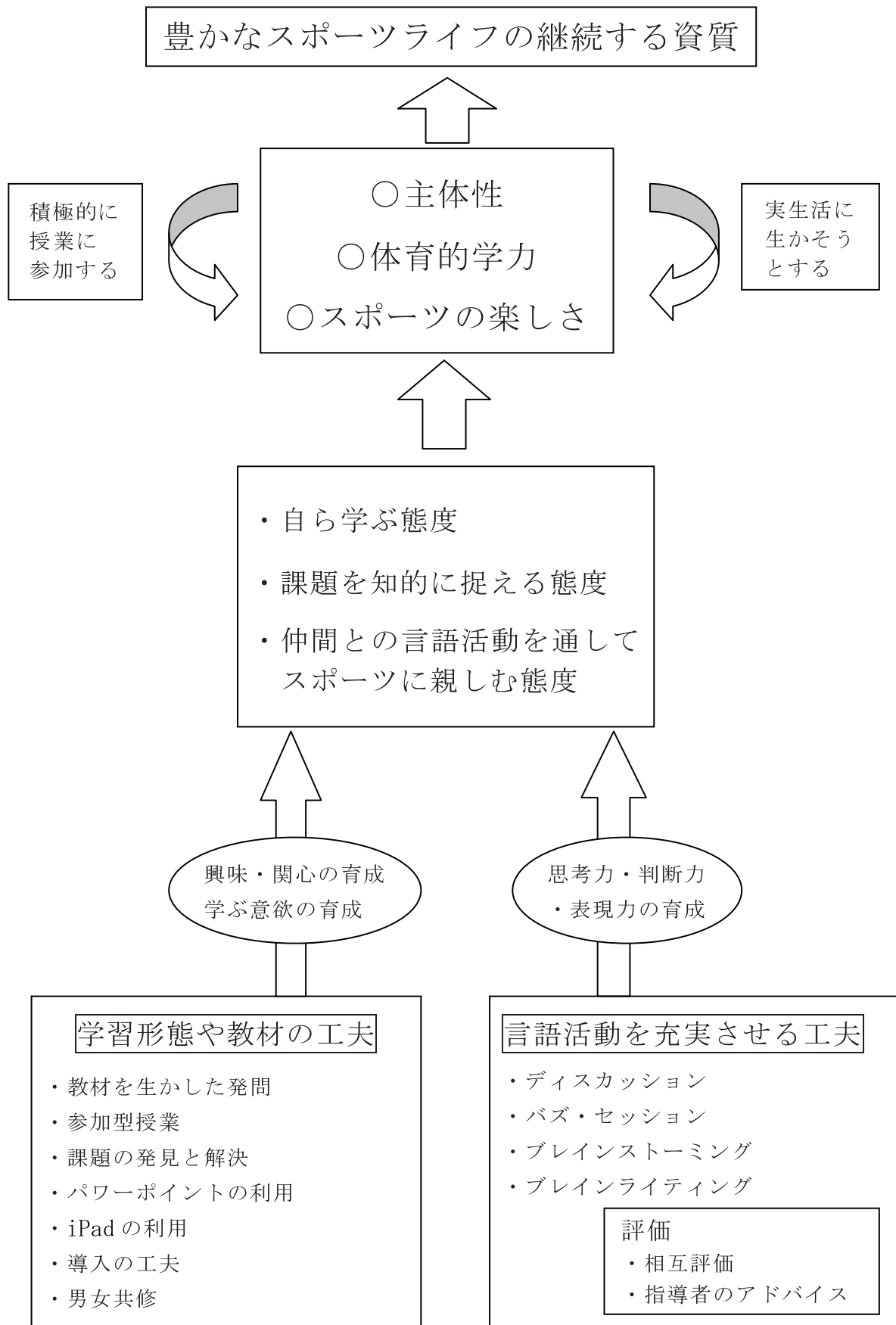
思考力・判断力・表現力を育成させるためには課題解決的な取組が必要であり、仲間とのコミュニケーションから論理的思考能力を向上させることができる。また協同的な作業を通して仲間と共に学ぶ楽しさを味わうと同時に、主体的に学習に取り組む態度も養われる。



写真１ 理論 ディスカッション

- 参加型授業
- ・ディスカッション・バズ・セッション
- ・ブレインストーミング・ブレインライティング
- 評価
- ・自己評価・相互評価・指導者のアドバイス・支援

研究の構想図



2 研究の具体

(1) 実践例Ⅰ 第1年次「体育理論」

第1単元「スポーツの歴史、文化的特性や現代のスポーツの特徴」

単元名 「エ スポーツの経済的効果とスポーツ産業 2/2」

ア 授業のねらい（単元目標）

- ①スポーツの歴史、文化的特性や現代のスポーツの特徴について意見を交換したり、自分の意見を発表したりするなどの活動を通して、学習に自主的に取り組むことができるようにする。（関心・意欲・態度）
- ②スポーツの歴史、文化的特性や現代のスポーツの特徴について必要な情報を比較したり、分析したりして、まとめた考えを説明できるようにする。（思考・判断）
- ③現代のスポーツは、経済的な波及効果があり、スポーツ産業が経済の中で大きな影響を及ぼしていることについて、話したり書き出したりできるようにする。（知識・理解）
- ④スポーツの持つ多様性について深く考え、（スポーツイノベーション）、今後のライフスタイルにスポーツを組み入れ、生活の一部として育む態度を養えるようにする。（思考・判断）



写真2 理論 発表の様子

イ 単元構成

1年次

	授業時間 時間	1	2	3	4	5	6
導入	0	挨拶，出席確認，学習内容確認					
展開		ねらい　スポーツの歴史，文化的特性や現代のスポーツの特徴について理解できるようにする					
	10	スポーツについて	スポーツの変化	オリンピックムーブメント	ドーピング	スポーツの経済的な波及効果	スポーツに関連した様々な職業
	20	スポーツの概念	メディアの発達	スポーツの文化的価値	ドーピングによる健康被害	スポーツ産業	スポーツの多様な可能性
	30	日本発祥のスポーツ	スポーツの変化がスポーツそのものを歪める可能性		アンチドーピング運動	スポーツは経済活動に大きな影響を及ぼす	
	40	オリンピック競技種目					
整理	50	本時のまとめ，次回の確認					

ウ 授業の実際

体育理論の授業を通して、いかに自主的に学び、思考力を高め、運動に親しむ態度を養わせるかを考えた時に、本単元では以下の様な手だてを考えた。

- ①言語活動を活性化させる工夫
- ②視聴覚教材の有効活用

①言語活動を活性化させる工夫

グループ活動を行うことにより、必然的に授業へ積極的に参加することが求められる。一斉指導よりも多くの生徒が発言する場面を設定し、主体的に考える機会が与えられることから自主的に取り組むことが望まれる。そしてグループ毎に発表することにより、考えをまとめたり論理的に説明したり、他の考え方を聞くことを通して、話を理解する力や物事を多方向から捉える力を養うことができる。また、他の考え方を聞くことを通して、話を理解する力や物事を多方向から捉える力を養うことができる。

A アイスブレイク

高校生にもなると、グループで活動する際に、同じクラスであってもなかなか緊張がほぐれず活発な活動になりにくいことが多く見られる。気軽に意見を述べたり、質問ができたりする雰囲気を作るために、少しの時間で楽しくコミュニケーションがとれる工夫を取り入れる。

B ディスカッション（バズ・セッション）

他の生徒の意見を理解しながら、異なる意見に対して納得させるためには論理的に話を進めることが必要となるため思考力を求めることができる。

成果) ①話す、聴くという言語活動を十分に活用でき思考を深めることができた。

②コミュニケーションを深めることになり、スポーツへの理解と実技の実践へつなげることができた。

C ブレインストーミング（ブレインライティング）

ディスカッションに比べ、仲間と直接話さなくても自分の意見を述べられる所から、比較的容易に取り入れやすい。出てきたアイデアを分類することで知識を構造的に理解し、まとめることができる。

成果) ①書くという言語活動を用いることにより、明確に意見交換ができる。

②書いた意見は分類しまとめることができるので、自己肯定感を生みやすい。また、少数意見に関しても取り入れることができる。

②視聴覚教材の有効活用

スポーツのもつリアリティと文化的特性や美的特性を視聴覚教材で効果的に活用することによって生徒の興味・関心を引き出し、つまらない印象がある理論という授業に対して興味をもたせ、モチベーションを向上させるために使用する。ポイントを明確に確認することで、理解が深めることができる。

A パワーポイントの活用

内容に沿ったスライドからポイントを言語で確認することで理解を定着させることができる。特にワークシートや発問に合わせて活用すると視覚イメージで捉えることができるため効果が高い。

B 写真や動画の活用

内容に関連する写真を多く活用することによってより実際のイメージをもたせることができる。親しみやすい題材として写真を取り入れることでスポーツをより身近に感じ取ることができる。特に動画に対しては共感しやすいためその効果は高い。



写真3 理論 バズ・セッション



写真4 パワーポイントの活用

(2) 実践例Ⅱ 第2年次「ダンス」 単元名「創作ダンス」

ア 授業のねらい（単元目標）

- ①多様なテーマから表したいイメージを捉え、動きに変化を付けて即興的に表現したり、変化のあるひとままとりの表現にして踊ることができるようにする。
- ②創作ダンスに積極的に取り組むとともに、よさを認め合おうとすること、分担した役割を果たそうとすることなどや、健康・安全に気を配ることができるようにする。
- ③創作ダンスの特性、表現の仕方、体力の高め方などを理解し、課題に応じた運動の取り組み方を工夫できるようにする。



写真5 3学年 学校祭での作品発表

イ 単元構成

2年次

授業時間 時間		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23					
導入	0	準備体操，補強運動，ランニング，挨拶，出席確認，健康観察，学習内容確認																											
	10	ねらい① 仲間とともに基本的な動きで踊る						ねらい② 即興的な表現の中で身体全部を使って自分を表現する楽しさや喜びを味わう						ねらい③ ひと流れの作品を創り，表現する楽しさや喜びを味わう															
	心と体ほぐし運動・ダンスウォーミングアップ																												
	20	オリエンテーション ねらいと学習の流れ		個や群で対局の動きや空間の使い方 で変化をつけて踊る				様々なテーマからイメージを捉えて表現する練習 「野生の動物」「ある日の私」「北海道」「春夏秋冬」「スポーツいろいろ」						グループでの作品創作 ひと流れの動き 「はじめ—なか—おわり」の動きづくり 踊り込み リハーサル															
	30	基本運動Ⅱ						即興的に表現する練習						動きに変化をつけて即興的に表現する練習						発表に向けた躍り込み 発表会・感想・まとめ									
40	見せ合いと意見交換																												
整理	50	学習ノート記入，整理運動，健康観察，本時の反省，次回の確認																											

ウ 授業の実際

①事前アンケート

生徒への事前アンケートから中学校でのダンス授業については、女子はほとんどの生徒が経験しているが、男子については16%であり、男女共修授業の経験は5%となっている。この結果からもダンスを選択してきた男子ではあるが、授業へのアプローチは導入段階の心ほぐし運動などで興味を引かせ、積極的な関わり方への導きが必要と感じる。また男女ともにダンス授業の内容は創作活動の実施がほとんどであった。そのほかのアンケート結果では、「ダンスを楽しいと思う」と感じている生徒は39%であり、音楽に合わせて体を動かすことや仲間と関わりながら踊ることに楽しさを見出すことができている生徒もいる。しかし、61%の生徒が「ダンスを楽しいと思わない・あまり思わない」と答えている。こ

の解答のほとんどの生徒は、体を動かすことは好きだが、人前で自分を表現することに不安や恥ずかしさを抱いていたり、ダンスの授業の経験がないために授業がどのように行われていくか分からないため見通しがもてないと感じていたりするなど、ダンスへの抵抗感が強いのではないかと考えられる。これらの生徒はその他の種目を選択している。

次に、ダンス選択者に「ダンスは他の種目にはない動きの面白さがある」という問いについては、67%の生徒が「そう思う」と答えている。これは、踊ることの楽しさを感じていることや仲間との一体感を感じることが楽しいと思い、積極的なダンス授業へのイメージをもっていることが分かる。

②男女による仲間との関わり

本校では第2年次において選択Ⅰ期の種目を「ダンス」と「武道(柔道)」と設定し、2クラス(80名)の男女の選択希望により各種目に分かれ、男女共修授業として展開させている。どのクラスもダンスの選択は女子が7～8割程度、男子が3～4割程度となっている。男子と女子をグループの中に混合させることにより、最初はなかなか馴染めずにぎこちない動きも見られるが、男女の動きの違いを理解しながら交流し、授業が進むにつれて、楽しさや喜びを味わうようになっている。

③心と体ほぐし運動

アンケートの結果から、多くの生徒に人前で自分を表現することへの不安や恥ずかしさがあることが分かった。他の生徒と交流したり人前で動いたりする前に、上記のような障壁を取り除くため、誰もが楽しみながら仲間と触れ合えるウォーミングアップを行うことで心と体をリラックスした雰囲気をつくることができる。

④視聴覚機器(iPad)の活用

基本となる動きを覚えたり真似たりする時やそのときの動きを確認したり、自分たちの動きの評価や次の段階への構成を進めていくなどする時に「iPad」を活用することで、グループ活動を円滑に進めて行くことができていく。操作はあらかじめ説明することで簡単に使用でき、その場その場での素早いフィードバックを可能にしている。

ダンス授業アンケート《男・女》(選択種目 ダンス 武道)

下記の問に答え、○または簡潔に記入して下さい。

- 1 今までにダンスの授業を経験したことはありますか? はい いいえ
「はい」と答えた人はどのような授業だったか記入して下さい。

- 2 今までに授業以外でダンスを経験したことはありますか? はい いいえ
「はい」と答えた人はどこでどのようなことをしたか記入して下さい。

- 3 あなたにとって「ダンス授業」とはどのようなイメージをもっているか記入して下さい。

※ 以下は、そう思うもの:3、あまり思わない:2、全然思わない:1 で答えなさい。

4 あなたはダンスを楽しんでいると思いますか	3	2	1
5 ダンスはいつもの自分と違った自分になれる	3	2	1
6 そのものになりきって踊ることが楽しい	3	2	1
7 いろいろな音楽のリズムに乗って踊ることが楽しい	3	2	1
8 ダンスは他の種目にはない動きの面白さがある	3	2	1
9 思いっくまま次々と自由に踊ることが楽しい	3	2	1
10 踊っている自分を人に見てもらうことが楽しい	3	2	1
11 自分や友達の新しい一面や意外な一面を発見できる	3	2	1
12 仲間との一体感を感じることが楽しい	3	2	1
13 友達と意見を出し合い協力して作品を創ることが楽しい	3	2	1
14 既成の創作作品を覚えて踊ることが楽しい	3	2	1
15 決められたステップや動きを覚えて踊ることが楽しい	3	2	1
16 これからの生活でダンスを行うことがある	3	2	1

資料6 ダンス 事前アンケート用紙

3 研究の成果と課題

(1) 成果

○授業の導入から親しみのある題材を用いた教材や緊張をほぐすための教材を活用することにより、生徒の興味・関心を高めることができたと感じられた。その際に写真や動画を用いたり、仲間とコミュニケーションをとらせたりするとその後の授業内での発言や活動が活発になったため、より効果的であると思われる。回を重ねる毎に自ら学ぼうとする意欲のある生徒が増えた。関心・意欲が高まることで、思考・判断や知識・理解に結びついていくものと考えられる。

○iPadを活用することにより、自分達の動きをすぐに確認できることから課題を視覚やイメージで捉えることができる生徒が多く見られた。活用する機会が増す度にコミュニケーション活動も増えるため、積極的に参加したり発言したりする生徒も増加した。

○仲間とのコミュニケーション活動を通して、共に学ぶ楽しさを十分味わわせることができたと感じられた。話し合う活動を通して論理的に考える力が養われた結果、課題を知的に捉えて解決していく手だてを考察できる様子が見られた。



写真7 ダンス iPad の活用

○話した内容をグループ毎に発表したり、ダンスの作品を発表し合うことを通して、相手のよさを認めたり課題を見付けられる様子が見られた。このことは男女共修のダンス授業でも見られ、異性の特徴を認めながら協力して課題を解決しようとしている様子は男女を分けての学習では得られないものである。

(2) 課題

○様々な学習形態を活用していく場面の設定と効果的な活用方法の工夫

○コミュニケーション活動を行う目的の明確化

○発展性のあるものや追求できる教材や発問の研究と選択

○中学校での学習内容を把握し、学びなおしを含め3年間の学習内容を見通した計画の立案

○評価規準が適切であるか、実践を通して絶えず確認する体制づくり

特別支援学校部会

第11分科会

北海道札幌市立豊明高等養護学校



大倉山ジャンプ競技場(札幌市 中央区)

【研究主題】

「生徒が主体的に取り組むための
学習と支援の在り方」
～円滑な社会活動を行うための知識の会得と実践力の育成～

【日 程】

9:20		10:00		10:45		12:45		13:15		14:50				
8:45		9:45		10:40		12:10		13:00		14:30		15:00		
	受	第	移	第	移	第	昼	休	ア	開	研	研	指	閉
	付	一	動	二	動	三	食	憩	ト	会	究	究	導	会
		次		次		次			ラ	行	発	協	講	行
		公		公		公			ク	事	表	議	評	事
		開		開		開			シ					
		授		授		授			ョ					
		業		業		業			ン					

【会場案内】

**北海道札幌市立
豊明高等養護学校**
〒002-8034
札幌市北区
西茨戸4条1丁目1-1
TEL: 011-774-2222

【アクセス】
地下鉄南北線「麻生駅」下車
↓
麻生バスターミナル内3番乗り場
(麻24)「あいの里4条1丁目行」
↓
豊明高等養護学校前下車

※地下鉄南北線「麻生駅」
北38条西5丁目ローソン
前より無料のバスが出ま
すので、利用してくださ
い。
・8:40発 ・9:15発

北海道札幌市立豊明高等養護学校



所在地	札幌市北区西茨戸4条1丁目1番1号
電 話	(011) 774-2222
学校長	北 嶋 智 史
生徒数	160名

◎学校教育目標

「豊かにたくましく生きる生徒を育てる」

校訓 豊かな心・強い体

教育方針

人間性豊かで、明るくたくましい社会人の育成を目指す

1. 健全な心身を培い、豊かな情操を育てる。
2. 家庭生活や社会生活、職業生活に必要な基礎的な知識、技能、態度を養う教育を推進する。
3. 生徒一人一人の教育ニーズを把握し、障害の程度や発達段階に応じた適切な指導を行う。
4. キャリア教育、職業教育、進路指導の充実に努める。

◎学校の特徴

生徒の個性・特性、そして人権が尊重され、一人一人が生き生きと学び合う学校を目指しています。また、地域社会での自立や主体的に社会参加のできる生徒の育成に努めるとともに、保護者、地域から信頼される学校を目指しています。

毎朝30分間を、学年毎にメニューを代えながら、「体力づくり」も行っています。各個人の最高記録を目指して頑張っています。

授業者の紹介



第11分会 授業①

北海道札幌市立豊明高等養護学校

伊藤沙保里

1年6組担任

担当教科：生活単元、家庭

担当作業：クリーニング科

特 技：バレーボール

教 員 歴：5年目

授業の見どころアピール

本校では、性教育を「大人になるために」という授業名で取り組んでいます。授業名の通り、本校の生徒達が卒業後さまざまな人間関係でのトラブルや性的な問題行動に対する知識や回避方法を身につけるために行っています。今回は、「体の成長」をテーマに授業を行わせていただきます。よろしくお願いします。

ひとりごと

全国研究大会ということで、大変緊張していますが、普段通りの生徒達の様子をお見せできればと思います。今後の本校での性教育に生かしていきますので、ぜひ率直なご意見をお聞かせいただければと思います。



第11分会 授業②

北海道札幌市立豊明高等養護学校

小原 要

2年1組担任

担当教科：生活単元、体育

公認ラグビーフットボール

指導員

教 員 歴：23年目

授業の見どころアピール

キャリア教育を目指す本校において、仲間に気遣いながら、自らも生涯スポーツを楽しむことのできる能力を育み、その力が卒業後の社会生活・余暇活動の充実へと繋がって行くような授業を目指しました。

ひとりごと

肋骨にヒビが入っている最中「閑輝暗点」という謎の症状に見舞われ、余命幾何もないのではないかと心配しております。頑張れ自分。

研究主題

「生徒が主体的に取り組むための 学習と支援の在り方」

～円滑な社会活動を行うための知識の会得と実践力の育成～

北海道札幌市立豊明高等養護学校

1 研究の概要

(1) 主題設定の理由

ア 本校の研究経過から

本校の学校教育目標は、「豊かにたくましく生きる生徒を育てる」である。本校の生徒は、卒業後、就労を目指しており、社会人として地域で生活することになる。仕事だけではなく、生涯スポーツを含む余暇活動の充実や地域の人との繋がりを通して「豊かな心」をもち、体力のみならず、仲間と協力する力や、主体的に問題を解決していくことができる「たくましさ」を身に付けてほしいと願っている。このような学校教育目標を目指し、毎日30分間の体力づくりや、週9時間の作業学習、各授業を実践している。

イ 生徒の実態から

現状として、在学中は体力づくりに意欲的に取り組むが、卒業後は運動をする機会が大幅に減少し、健康に影響を及ぼしている例もある。また、身体的機能の特性や生活経験の少なさにより、本校生徒の体力テストの結果は、全国平均より低い結果である。このような生徒が自らスポーツを楽しめるように、生涯スポーツへ繋がるさらなる取組の必要性を感じる。

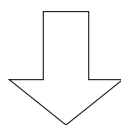
そして、人間関係の構築の仕方に支援の必要があり、問題が起きてしまうことや、トラブルに巻き込まれてしまう例もある。卒業後、円滑に社会生活を送るために、問題を未然に防ぎ、解決することができる力を育成することが重要である。

そこで、研究主題を、「生徒が主体的に取り組むための学習と支援の在り方」とし、体育の授業づくり、大人になるために（性教育）の授業づくりを行うことにした。

(2) 研究の仮説

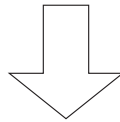
○このような生徒に

- ・毎日の体力づくりを継続して取り組むことができる生徒
- ・見通しをもてると、自主的に取り組むことができる生徒
- ・運動が苦手な生徒
- ・仲間との関わり方に課題がある生徒



○このような手だてを講じると

- ・卒業後の生活をイメージできるような教材，授業展開の工夫
- ・準備や片付けを生徒達で行う習慣づくり
- ・達成感を感じられるような目標設定や，自己評価が視覚的に分かりやすく，意欲をもてる教材の工夫
- ・仲間同士協力し，助け合う題材の設定



○こうなるだろう

- ・生涯にわたってスポーツを楽しむことができる。
- ・自ら目標をもって生活することができる。
- ・問題に直面したときに，解決するための方法を考えることができる。
- ・社会生活を送るために必要な知識や，適切な人間関係を構築することができる。
- ・地域や様々な人との繋がりを持ち，社会生活を送ることができる。

(3) 研究の視点

〈視点1〉生涯スポーツにつながる教材の開発・工夫

- ①生徒の実態把握，体力や技能の定着や推移の記録
- ②卒業後を見通し，日常に取り入れやすい種目の導入（ランニング・グラウンドゴルフ）
- ③技能差に関係なく，スポーツの楽しさを会得できるような種目の工夫

〈視点2〉協同的，課題解決的に取り組む学習過程の構築

- ①自己理解と他者理解を通して，お互いを尊重，認め合える環境づくり（性教育）
- ②生徒の理解力や実態に応じた学習グループ設定（性教育）
- ③授業の準備，後片付けをグループごとに行うことにより，仲間と協同する意識の醸成
- ④自ら目標を定め，目標を達成しようという向上心の育成

2 研究の具体

(1) 実践例Ⅰ 第2学年 単元名「球技 グラウンド・ゴルフ」

ア 授業のねらい

球技は、ボールを媒体として、個人間、集団間での攻防を通しながら、多くの運動技能を身に付けることのできるスポーツである。さらに、ゲームを進める上でコミュニケーションの能力は欠かせないものであり、円滑な社会活動を行うための基盤となる力が身に付けられる。

本実践ではグラウンド・ゴルフを取りあげた。パークゴルフが非常に盛んであるという北海道の地域性を考えると、ほぼ同じ用具を利用するグラウンド・ゴルフは、「生涯スポーツにつながる教材の開発・工夫」の観点からみて最適な題材である。また、本来屋外で行うグラウンド・ゴルフであるが、自由にコースを設定できる長所を活用し、体育館にコースを設定した。コースのアンジュレーションは日常体育で使う用具を利用して作り出した。種目の選択に悩まされる積雪期にも実施できる種目となる。

グラウンド・ゴルフの用具準備、コース設定、スコアの確認、後片付けなどを小グループで協力することにより仲間と協働する意識を醸成し、助け合いの意識を形作ること、自ら目標スコアを定め練習内容に工夫をすることで、目標達成への向上心をもつこと、社会生活へのスムーズな移行の一助となるよう努めた。本題材は四季に関係なく常に行うことができ、技能差に関係なくグループ内で助け合い、生涯にわたって楽しむことのできるスポーツであると考え、題材に設定した。

この学習活動を通じて、卒業後に運動する機会の大幅に減少する本校生徒が球技の楽しさを会得し、道内各地に設置されているパークゴルフを生涯通じて楽しめるものとなるよう願っている。

イ 単元構成（全3時間）

オリエンテーション・目標設定・グループづくり

グループ練習・コースづくり・ハーフラウンド・・・・・・・・・・ 1時間

目標再設定、コース練習・ラウンド・・・・・・・・・・ 1時間

コース練習・ラウンド・・・・・・・・・・ 1時間（本時）

ウ 授業の実際

①本時の目標

- ・ルール、マナーを守ってプレイすることができるようにする。
- ・ホール作りや後片付けなどグループで協力して行うことができるようにする。
- ・自分で目標を設定し、達成のための練習方法を考えられるようにする。

②生徒の実態

運動が苦手な生徒もいるが、球技、特にゲームを行うときなどは意欲的に行う生徒が多い。勝敗にこだわる生徒や運動制限のある生徒、団体行動が苦手な生徒もいるが、2年間指導を継続しているので、教師・生徒間の理解に問題はなく、スムーズに行われている。

③本時の展開

	学習内容	教師のはたらきかけ	留意点
導入	○集合 ○挨拶・出欠確認 ○ランニング ○体操 ○学習内容確認	・体調確認を兼ねた準備運動 ・本時の流れを説明する。	・理解の確認。
展開	○コースづくり ○用具の配布 ○課題確認 ○グループ毎にコースをまわる ○後片付け	・グループ毎にコースを作る。 T 1：1～3コース T 2：7～8コース T 3：4～6コース ・スコア・カードを記入させる。 ・個人目標と他者評価の手順を確認。 ・スタートコースの指定。 ・生徒へのアドバイスと評価。 T 1：全体 T 2：後半コース T 3：前半コース ・グループ毎に片付けさせ、共同作業を促す。	・リーダーの活用。 ・グループ内で助け合っているか。 ・自主的な取組か。
まとめ	○本時の反省 ○次時の予告 ○整理運動・挨拶	・個人目標の自己評価と他者評価をさせる。 ・次時の学習内容を知る。	

④個別の目標とキャリア教育における育てたい力との関連

「なかまのこと」

- ・協力しながら準備する。(人間関係形成)
- ・自分以外の打数も積極的に数える。(人間関係形成)
- ・声をかけあいながら楽しくプレイする。(人間関係形成)
- ・困っている人がいたら助ける。(人間関係形成)

「じぶんのこと」

- ・練習を頑張る。(意志決定能力)
- ・少しでもスコアが良くなるように努力する。(意志決定能力)
- ・方向に気を付けながら打てるようになる。(意志決定能力)
- ・力をコントロールして打てるようになる。(意志決定能力)

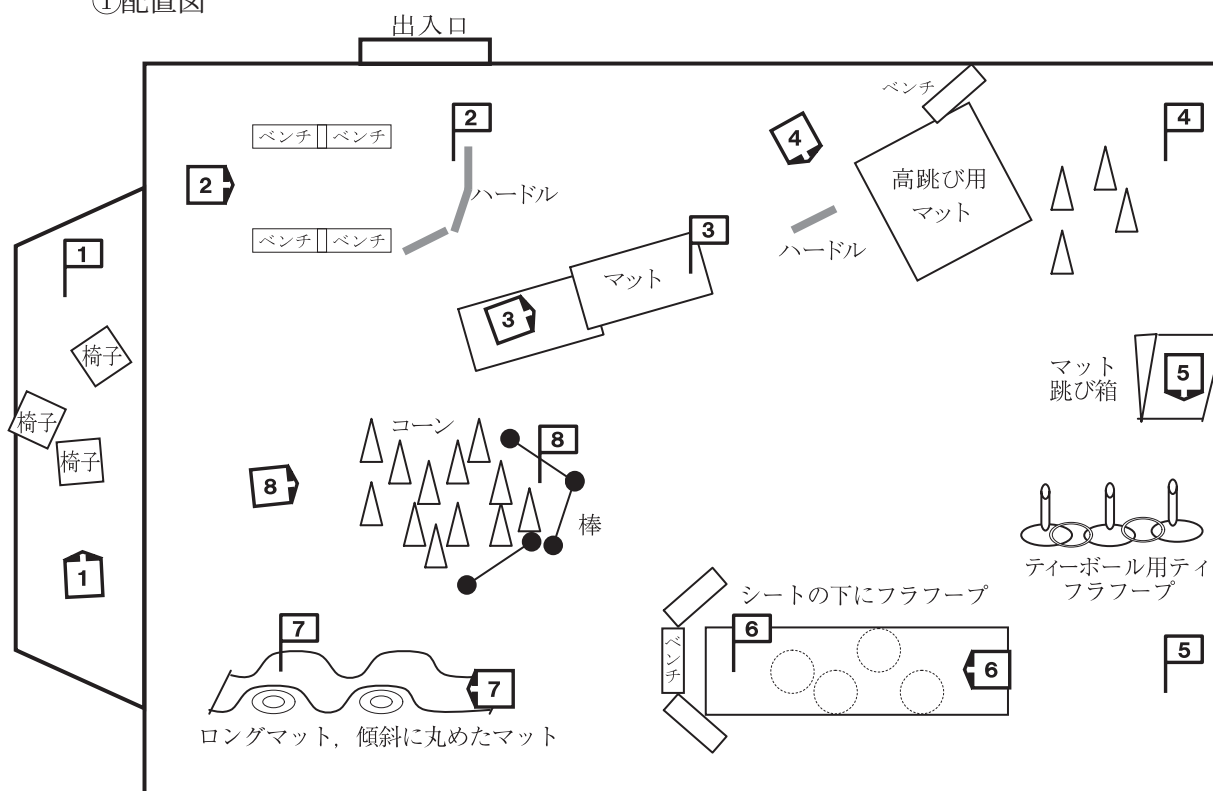
「そのた」

- ・ルールを正確に覚える。(情報活用能力)
- ・パークゴルフも上手になりたい。(将来設計能力)
- ・用具を大切に扱う。(生きる力)
- ・安全に気を付けながらプレイする。(生きる力)

※「なかまのこと」「じぶんのこと」「そのた」の中から、一つずつ重点課題を生徒自身で設定する。

エ 資料

①配置図



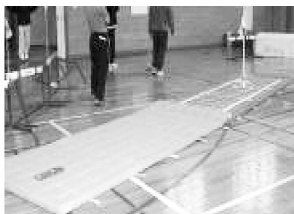
1 ホール



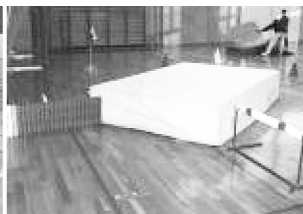
2 ホール



3 ホール



4 ホール



5 ホール



6 ホール



7 ホール



8 ホール

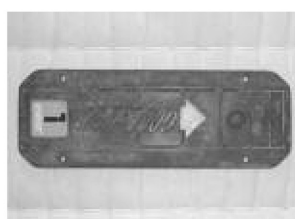


②教材の紹介

クラブとボール



ティ



旗



(2) 実践例Ⅱ 第1学年 単元名「大人になるために」

ア 授業のねらい

本校では、性教育の時間を「大人になるために」という単元名で取り組んでいる。性教育は思春期の生徒に対し、卒業後にむけて、円滑な社会生活を送るためには極めて大切であり、欠かせない学習の一つとして取り上げられる。様々な障がいを抱えている生徒達であるが、本校でも男女交際のトラブルなど起きており、正確な知識を身に付けることは必要であると考え。また、卒業後、障がいのある生徒が性的なトラブルの被害者や加害者になる危険性を防ぐために、性の指導を通して生徒達が「大人になるために」必要な知識や人間関係を構築するスキルを身に付けるために本授業を設定した。

イ 単元構成

①単元の目標

全体目標

- a 思春期の心の発達や身体の成長への理解と自己の性への認識を深め、心身の変化に適切に対応できる力を育てる。
- b 男女の性差や特性への理解を図って、異性への尊重と協力の態度を養い、男女の健全な人間関係を築こうとする意識を高める。
- c 家庭や社会の一員として必要な性に関する基礎的・基本的な事項を知らせ、性に対する健全な意識や態度を育てる。
- d 命の大切さや家族の絆に対する意識を高め、生命尊重・人間尊重の精神を養う。

1 学年目標

身体の成長や二次性徴発現への理解を図り、生理的变化や異性への関心の高まりに対応できる力を養う。

- a 自分や友達の身体の成長や二次性徴の発現について知り、自分の性を自覚できるようにする。
- b 身体の清潔や身だしなみ、異性との接し方など大人としてのマナーを習得できるようにする。

②授業内容

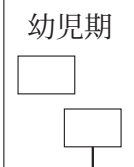
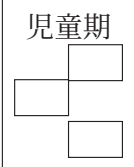
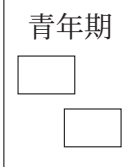
授 業 形 態	授 業 名	時 数
学 級 指 導	「大人になるために」	全7時間
	「からだの成長」(本時)	
グループ別指導	「男女の体の違い」	
	「二次性徴について」	
	「体の清潔」	
	「異性とのかわり」	
学 級 指 導	「大人としての心と体」	

ウ 授業の実際

①本時の目標

- ・誕生してからこれまでの体の成長や変化について知ることができるようにする。
- ・成長にはそれぞれ個人差があることを知り、お互いに尊重し合わなければならないことを知ることができるようにする。

②本時の展開

	学習内容	教師のはたらきかけ	留意点
導入	○前時の学習内容をふり返る。 ○本時の学習内容を知る。	・ 前は、オリエンテーションを行い、1年生の学習内容や日時などを確認したことを思い出すように問いかける。 ・ 本時は「体の成長」について学習を行うことを伝える。	
展開	○成長過程の写真やイラストを見て、幼少期・児童期・青年期にわけて体の成長を比べてみる。 ○生まれた時の身長、体重を知る。 ○実際に生まれた時の重さを実感し、現在の自分との違いを感じる。 ○成長には個人差があることを知る。 ○男女の成長にも差があることを知る。 ○個人差や男女差をお互い認め合うことが大切であることに気付く。	・それぞれの時期ごとに写真やイラストを貼ることができるように模造紙を用意し、見やすいように工夫をする。 幼児期  ↓ 写真 児童期  青年期  ・自分が調べた生まれた時の身長・体重を発表する。 ・人形を使って、自分の生まれた時の体重を感じ、現在の自分との変化を知ることができるようにする。 ・幼児期の頃はあまり違いがないが、高校生になると違いが生じてくることを説明する。 ・男女の成長の違いを確認し、知らせる。 ・成長に個人差や男女差があることは当然のことで、そのことを認め合いながら生きていくことが大切であることを説明する。	・事前に身長・体重を調べてくるように伝えておく。 ・平均的な体重で作られた人形や同じ重さのものを用意する。

まとめ	○本時の学習のまとめ ○次時の学習内容を知る。	・本時の学習の内容を問いかけ、発言してもらう。 (時間があれば、ふり返しシートに記入する。) ・次時はグループ別学習になることを伝える。	
-----	----------------------------	--	--

③共通理解の工夫

性教育の時間は生徒の実態に応じてグループ別の指導を行っている。グループ別の指導を行うにあたって、教師間で生徒の実態把握をし、共通理解を図るための工夫をしている。「生徒の実態」の用紙〈様式1〉を活用し、学習グループを設定するために、学級指導で様子を各担任が記入して、その後のグループ別指導に生かしている。また、「グループ別指導記録」の用紙〈様式2〉にグループ別指導のそれぞれの担当者が生徒一人一人の様子や発言、その他気になったことなどを毎時間記入し、学年間での情報共有を行っている。

〈様式1〉

24年度 第1学年性教育		年 組
生徒の実態		
生徒氏名	性教育に関わる生徒の実態	

〈様式2〉

24年度 第1学年性教育		グループ名 ()
グループ別指導記録		
○時間目「 題材名 」		日時： 指導者：
○本時の目標		
○主な指導内容		
学級	氏名	指導記録(理解できたこと、発言、様子など)

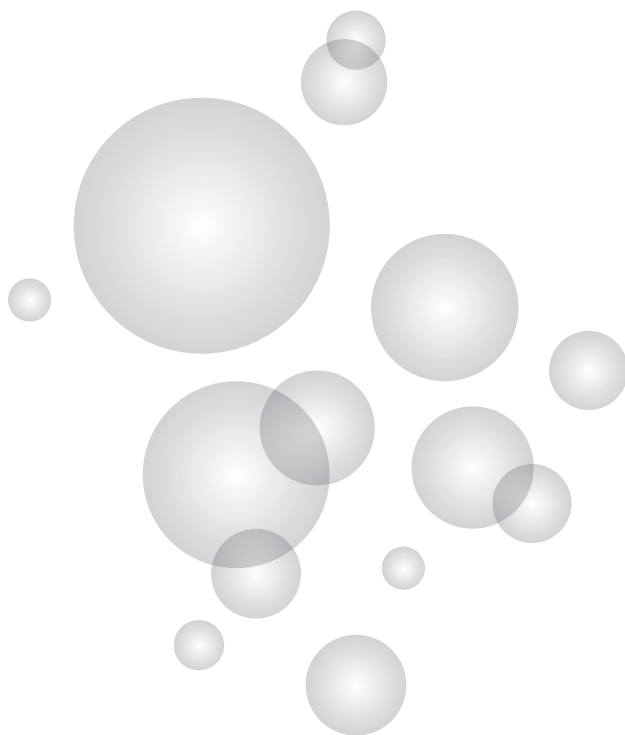
3 研究の成果と課題

本研究では円滑な社会活動を行うための知識の会得と実践力の育成のため、生徒が主体的に取り組むための学習と支援の在り方を研究してきた。

成果としては、3年生で実施される6週間にわたる現場実習において、体力的な問題で途中離脱する生徒が非常に少ないことが挙げられる。体育では、準備から片付けまでを自主的に行うことによって、協力する姿勢が培われている。共同で作業することがお互いの能力差をカバーしあうこと、弱者を排除しない姿勢、多様な障がいを受け合うことに繋がっている。性教育では、3年間継続した取組により、教員と性についてフランクに話し合うことができるようになっている。相談できる力が今後のトラブルを未然に防ぐことに繋がるのではないかと考える。

課題としては、卒業後に余暇としてスポーツをする機会が少なく、学校で取り組んできたことを継続できていないことが挙げられる。学校と地域との連携を密にし、余暇をサポートする取組を構築する必要がある。また、体育において、現状の授業時数だけでは技能向上の時間が充分にとれないことも挙げられる。最後に、性教育において、情報収集手段の多様化から間違った知識が先行している現状があり、時代に合わせた柔軟な授業内容の変化が求められていることが挙げられる。これからも生徒のよりよい社会参加を目指し、研究を進めていきたい。

分科会指導助言者紹介



札幌市時計台【旧札幌農学校演武場】(札幌市 中央区)

分科会指導助言者紹介

第1分科会		札幌市立白楊幼稚園
氏名	大 垣 清 美	札幌学院大学 教授
略歴	1967年3月 千葉大学教育学部 卒業 1967年4月 京都府向日町立向陽小学校 教諭 1972年4月 札幌市立小学校 教諭・教頭, (6校) 1999年4月 札幌市立ふくいの幼稚園 園長 2002年4月 札幌市立三角山小学校 校長 2007年4月 札幌学院大学 教授	
論文 著書 等	○発見する喜び(単著), (社)日本女子体育連盟編「女子体育」, 1990 ○模倣の運動(単著), 1991年度 北海道女子体育連盟講習会資料, 1991 ○ダンスの教育学(共著), 徳間書店, 1992 ○模倣の世界へ・表現の世界へ(単著), 札幌市教育研究協議会主催手稲区体育実技講習会資料, 1992 ○おはなしいっぱい(あさがお)～夏休みの感動を生かす学習～(単著), (社)日本女子体育連盟編「女子体育」, 1992 ○武道を考える(なぎなた)(単著), 1994年度 北海道女子体育連盟講習会資料, 1994 ○海の中の仲間たち～模倣から民舞へ組み立てる一つの試み～(単著) (社)日本女子体育連盟編「女子体育」, 1997 ○あなたのことを信じているよ, 人との関わりはこれが大切(単著) アイ・コミュニケーションズ(株), ママチャランド第14巻第4号, 2004 ○日常の生活や遊びと保健・体育活動の連動(単著), 北海道保健体育研究会編 道版保体ジャーナル第22号, 2005	

第2分科会		札幌市立白楊小学校
氏名	三 輪 佳 見	宮崎大学 教授
略歴	1985年3月 筑波大学大学院修士課程体育研究科修了(コーチ学専攻) 1985年4月 宮崎大学教育学部助手 1986年4月 宮崎大学教育学部講師 1993年4月 宮崎大学教育学部助教授 1994年10月 文部省在外研究員(ドイツ・チュービンゲン大学 10ヶ月) 2002年2月 宮崎大学教育文化学部教授 2008年4月 宮崎大学大学院教育学研究科教授	
論文 著書 等	○「こんな動きもできない」子どもの指導を考える, 体育科教育 第58巻第2号, 38-42 (2010) ○幼児の長なわとびの動感促発分析, 伝承9号, 73-88 (2009) ○子どもの平衡動感能力の発生分析, 伝承7号, 55-68 (2007) ○リレーのバトンパス指導における道しるべの構成, 伝承 第6号, 13-30 (2006) ○小学生を対象としたバレーボールのオーバーハンドパス指導に関する発生運動学的研究 ー典型的な動きの抽出と 道しるべの構成化ー, スポーツ運動学研究, 19号, 13-28 (2006) ○障害児における泳ぐ動きの発生に関するモルフォロジー的研究 ー乳幼児の運動発生を手がかりにしてー, スポーツ運動学研究, 14号, 47-58 (2001)	

第3分科会		札幌市立宮の森小学校	
氏名	城 後 豊	北海道教育大学 理事	
略歴	1969年4月 岐阜県公立小学校教諭 1972年4月 岐阜大学教育学部附属小学校教諭 1977年4月 岐阜大学教育学部講師併任 1987年4月 上越教育大学講師（学校教育学部附属実技教育研究指導センター） 1992年1月 同上 助教授（学校教育学部生活・健康系保健体育講座） 1994年4月 北海道教育大学助教授 1995年4月 同上 教授		2001年5月 北海道教育大学冬季スポーツ教育研究センター長併任 2004年4月 日本スポーツ方法学会理事長 2006年4月 北海道体育学会会長 2007年4月 北海道教育大学附属札幌中学校校長 2009年9月 北海道教育大学副学長（札幌校担当） 2011年9月 北海道教育大学理事併任
論文 著書 等	○教科・教科外を通じる基本的な態度の育成『協同』して運動をつくりあげていく態度 明治図書 1972（共） ○小学校体育科3 新しい5年の体育 明治図書 1979（共） ○個と集団がひびき合う授業 子どもは意欲をもち、活動していく『体育基礎基本の動きづくりを高める授業』明治図書 1980（共） ○能力を伸ばす体育指導6年『第4章 器械運動』 泰流社 1980（共） ○おおよスポーツ 岩崎書店 1989 ○小学校体育実践指導全集6 水泳『第10節 一人ひとりの能力に応じた弾力性のある単元計画』日本教育図書センター 1889（共） ○子どもの学びとつまづき 第6巻 体育における「わかるできる」授業の基礎研究 ー柔道授業の試みー東京書籍 共 1997（共） ○中学校体育・スポーツ教育実践講座第7巻 水の世界を楽しむアクアスポーツの授業「アクアティックスポーツの授業における学習法・指導法」「諸外国のカリキュラム」ニチブン 1998（共） ○体育科の授業と評価5年 総合的な学習と中学年の体育 2002 教育出版（共） ○地域河川を利用した着衣泳の学習効果に関する研究 2004 日本体育科教育学会第19巻第1号（共） ○競泳中心の授業を見直そう 2004 体育科教育 第52巻 ○自然体験学習が児童の自己表現に及ぼす影響ー体験型環境教育プログラムに着目してー日本野外教育学会第10巻第1号 2005（共） ○子どものこころとからだを強くする 2005 市村出版（共） ○新しい小学体育授業の展開 理論編2 水泳「水泳」の授業づくり 2006 ニチブン（共）		

第4分科会		札幌市立福住小学校	
氏名	水 島 宏 一	東京学芸大学 准教授	
略歴	1994年7月 東京学芸大学教育学部 助手 1998年7月 東京学芸大学教育学部 講師 2003年11月 東京学芸大学教育学部 准教授		
論文 著書 等	○2004年 器械運動の指導に関する研究 東京学芸大学紀要 ○2006年 マルチメディア教材を使用しての器械運動 東京学芸大学紀要 ○2009年 マット運動における側方倒立回転の開始姿勢について ー指導者の側方倒立回転のイメージに注目してー日本体操競技・器械運動学会 ○2010年 小学校体育における習得・活用・探究の学習 やってみる ひろげる ふかめる 光文書院 ○2011年 体育の学習 児童書 光文書院 ○2011年 図説 新中学校体育実技 大日本図書 ○2012年 中学校保健体育 学校指導用 DVD 器械運動（マット・跳び箱・鉄棒）大日本図書		

第5分科会		札幌市立資生館小学校
氏名	木 下 英 俊	宮城教育大学 教授
略歴	1985年3月 筑波大学体育専門学群 卒業 1987年3月 筑波大学大学院修士課程修了 体育学修士 1987年4月 九州大谷短期大学幼児教育学科専任講師 1992年9月 宮城教育大学教育学部専任講師 1995年10月 宮城教育大学教育学部助教授 1998年3月～1999年1月 テュービンゲン大学スポーツ科学部客員研究員 2007年4月 宮城教育大学教育学部准教授 2011年4月 宮城教育大学教育学部教授	
論文 著書 等	○木下英俊：鉄棒におけるけ上がりの構造認識の変遷に関するモルフォロジー的一考察。 宮城教育大学紀要第34巻．111－122頁，2000年 ○木下英俊：体操競技における技の独自性に関する構造論的一考察．日本体操競技・器械運動研究会．体操競技・器械運動研究第10号．1－12頁，2002年 ○木下英俊：マット運動の伸膝前転の習得過程に関する一考察．日本体操競技・器械運動研究会．体操競技・器械運動研究第13号．29－40頁，2005年 ○木下英俊：動感運動の形相的分析とその意義－器械運動の例証分析－．運動伝承研究会．伝承第6号．47－63頁，2006年 ○木下英俊：コツ身体知に関する指導者自身の動感創発分析の意義について－マット運動伸膝後転の事例から－．日本スポーツ運動学会．スポーツ運動学研究第23号．15－24頁，2010年 ○三木四郎ほか編著：中・高校器械運動の授業づくり．大修館書店．2006年；96－103頁を分担執筆 ○ウルリヒ・ゲーナー著，佐野淳，朝岡正雄監訳：スポーツ運動学入門．不昧堂出版．2003年；153－202頁を訳出	

第6分科会		札幌市立上野幌中学校
氏名	中 村 なおみ	東海大学 教授
略歴	1983年3月 筑波大学大学院体育研究科（修士課程）修了 体育学修士 1983年4月 筑波大学附属中学校 文部教官教諭 2003年4月 仙台大学 体育学部 助教授 2008年4月 東海大学 体育学部 准教授 2010年4月 東海大学 体育学部 教授	
論文 著書 等	○ダンス「課題学習」における主体的問題解決能力の育成～男女共修及び初めてダンス学習に取組む単元の検討～，筑波大学附属中学校紀要 第52号，1999 ○創意を拓き，仲間をつなぐ身体表現（ダンス）の実践－授業（1年生男女共修のダンス単位）と学校行事（運動会での男女120人のダンスパフォーマンス）を関連させたカリキュラムの構築－，筑波大学附属中学校紀要 第56号 2003 ○教育実践の現場からつかんだ課題学習の成果と課題～授業の映像記録とその活用～，社団法人日本女子体育連盟創立50周年記念フォーラム－第38回全国女子体育研究大会－研究紀要，86-89，2005 ○体育授業の心理学「ダンス授業の実践」（分担），大修館書店，2002 ○生きる力を育む保健体育－身体活動を通じた自己表現を目指して（分担），健学社，2002 ○中学校新保健体育科の授業モデル（分担），明治図書出版，2003 ○イラストで見る 最新 スポーツルール「ダンス」（分担），大修館書店，2006 ○ステップアップ 中学体育「体づくり運動」（分担），大修館書店，2010 ○明日からトライ！ダンスの授業，共編著年大修館書店，2011	

第7分科会		札幌市立月寒中学校
氏名	田 原 淳 子	国土館大学 教授
略歴	1986年3月 横浜国立大学教育学部卒業 1988年3月 横浜国立大学大学院教育学研究科修了（教育学修士） 1994年3月 中京大学大学院体育学研究科博士後期課程修了（博士〔体育学〕） 1994年4月 中京女子大学（現 至学館大学）専任講師 1999年4月 中京女子大学 助教授 2002年4月～9月 オーストラリア クイーンズランド大学客員研究員 2006年4月 国土館大学体育学部助教授 2009年4月 国土館大学体育学部教授	
論文 著書 等	○みんなをむすぶオリンピックー夢・感動・情熱ー（オリンピック学習読本 小学校）. 世界を結ぶオリンピックー情熱・人・スポーツー（オリンピック学習読本 中学校）. 未来と結ぶオリンピックー勇気・地球・共生ー（オリンピック学習読本 高等学校）. 共著年東京都,財団法人日本オリンピック委員会,特定非営利活動法人 東京オリンピック・パラリンピック招致委員会, 2008. ○ポケット版 オリンピック事典. 共編著年楽, 2008. ○生涯スポーツ実践論（改訂2版）. 共著年市村出版, 2006. ○教養としての体育原理. 共著年大修館書店, 2005. ○スポーツ・ジェンダー学への招待. 共著年明石書店, 2004. ○現代スポーツ倫理の探求. 共著年大修館書店, 2004. ○オリンピックと教育ーオリンピック競技大会誕生の背景とその今日的意義ー. 体育・スポーツ科学研究,第8号:7-12, 国土館大学 体育・スポーツ科学学会, 2008. ○ジェンダーの視点からみた中学校保健体育科教員の性別と運動会（体育祭）の実施種目. スポーツとジェンダー研究, 第3巻:18-25, 2005.	

第8分科会		札幌市立向陵中学校
氏名	古 川 善 夫	北海道教育大学 教授
略歴	1973年3月 東京教育大学 体育学部 体育学科 卒業 1975年3月 東京教育大学 大学院 体育学研究科 修士課程 修了 1975年5月 筑波大学 研究協力課 文部技官 1978年4月 北海道教育大学 教育学部旭川校 助手 1983年10月 北海道教育大学 教育学部旭川校 助教授 1993年4月 北海道教育大学 教育学部旭川校 教授	
論文 著書 等	○高齢者の転倒有能感と体力変化, 北海道生涯学習研究 8:139-144, 2008. ○多様な動きをつくる運動（遊び）への期待と指導のポイント, こどもと体育, 光文書院 150:24-27, 2009. ○効率よく組み合わせた体力を高める運動の推定 Mets, 体操研究（日本体操学会オンライン ジャーナル http://gym.tsukubauniv.jp/taisou/journal/ ）2012. ○保健体育科教育法 第15講「体づくり運動」, 大修館, 2009. ○ふれあい体操（組体操）, 体育科教育, 大修館, 2009.	

第9分科会		北海道恵庭南高等学校
氏名	小澤 治 夫	東海大学 教授
略歴	1975年 東京教育大学大学院体育学研究科修了 1978年 筑波大学附属駒場中高校教諭 1988年 北里大学医学部医学博士号取得 2003年 北海道教育大学教育学部釧路校教授 2007年 東海大学体育学部教授 2010年 東海大学大学院体育学研究科長 現在に至る 日本発育発達学会理事，日本スポーツ教育学会理事，日本健康行動科学会理事 （公益社団）日本フィットネス協会代表理事	
論文 著書 等	○高校生の生活習慣と血中ヘモグロビン値の実態についての基礎的研究， 東海大学スポーツ医科学雑誌，24号，2012 ○T大学体育会クラブ所属選手における生活習慣と貧血傾向， 東海大学スポーツ医科学雑誌，24号，2012 ○近年の高校生の体力，生活習慣，健康，意欲に関する調査，文明，16号，2011 ○体育教材を料理するーよい体育授業の作り方ー，ハンドボール研究，12号，2010 ○学校が変わる子どもを変えるーHQCによるスポーツ選手の健康管理，健康教室，741集，2012 ○学士レベルの質的保証について，体育科教育学研究，27(2)，2011 ○新しいゴール型教材の開発とその有効性の検討，東海大学紀要体育学部，40号，2010 ○フィットネス理論，日本フィットネス協会，2006 ○これからの授業に役立つ新学習指導要領ハンドブック，時事通信社，2008	

第10分科会		北海道北広島高等学校
氏名	友 添 秀 則	早稲田大学 教授
略歴	1980年3月 筑波大学体育専門学群卒業 1982年3月 筑波大学大学院修士課程体育研究科修了 体育学修士 1987年4月 香川大学教育学部助教授 1989～1990年 米国ニューヨーク州立大学客員教授 1996年4月 香川大学教育学部教授 2000年4月 早稲田大学人間科学部教授 2003年4月 早稲田大学スポーツ科学学術院教授 2012年9月 早稲田大学スポーツ科学学術院長（スポーツ科学部長）博士（人間科学）	
論文 著書 等	○戦前期日本の女子体育振興に関する史的研究，体育学研究，第57巻第1号，2012. ○JTPE 掲載論文にみる体育における道徳学習と責任学習の研究動向， スポーツ教育学研究，第29巻第2号，2010. ○良い子を育てる教育の試みー体育における人間形成研究をめぐって， 子どもと発育発達，第7巻第3号，2009. ○体育における人間形成論の課題，体育科教育学研究，第23巻第1号，2007. ○楽しい体育理論の授業をつくろう（編著），大修館書店，2011. ○体育科教育学の現在（共著），創文企画，2011. ○ジュニアスポーツの諸問題ー現代スポーツ評論 24（編著），創文企画，2011. ○新版 体育科教育学入門（編著），大修館書店，2010. ○体育の人間形成論（単著），大修館書店，2009.	

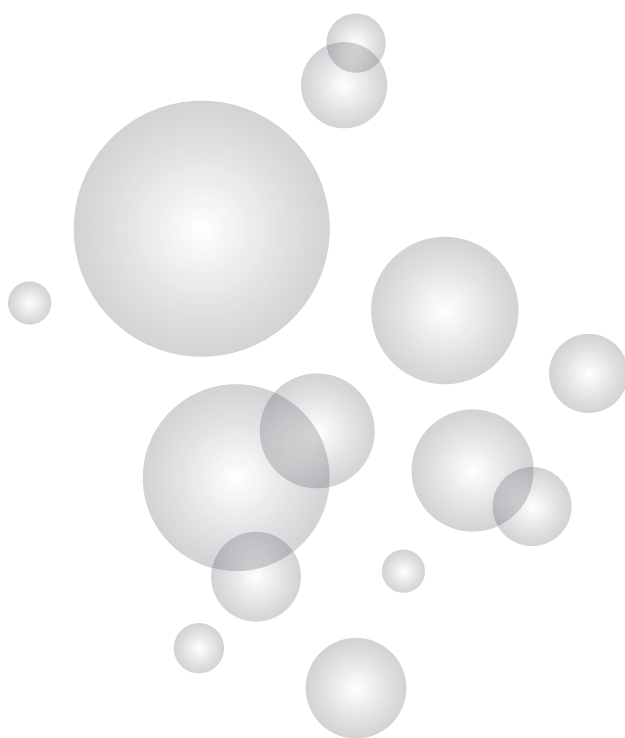
第11分科会		北海道札幌市立豊明高等養護学校
氏名	安 井 友 康	北海道教育大学 教授
略歴	1987年 3 月 横浜国立大学大学院 教育学研究科修了 1987年 4 月～1992年 9 月 神奈川県福祉部神奈川県立三浦しらとり園指導員 1992年10月～1993年10月 北海道教育大学教育学部岩見沢校社会教育課程講師 1993年10月～2003年10月 北海道教育大学教育学部岩見沢校生涯教育課程助教授 2003年10月～2009年 4 月 北海道教育大学教育学部岩見沢校生涯教育課程教授 2009年 4 月～ 北海道教育大学教育学部札幌校特別支援教育専攻教授	
論文 著書 等	○障害児者の教育と余暇・スポーツ（著）明石書店(2012) ○事例で学ぶ障害者福祉（編著）保育出版(2008) ○アダプテッドスポーツの科学（分担執筆）市村出版(2004) ○リンデン特別支援学校の教育実践と分教室による共同教育：ニーダーザクセン州ローテンブルク地域の調査から，北海道教育大学紀要（教育科学編） 61(2)，61－76，2011 ○ドイツ・ベルリン市州のインクルーシブ・スポーツ授業－フレーミング基礎学校の取り組みから－，障害者スポーツ科学， 7 (1)， 93－106， 2009 ○小中学校における障害のある児童生徒の体育授業－インクルーシブな授業に向けた工夫に関する記述の分析から－，北海道教育大学紀要，教育科学編， 58(2)，117－132， 2008 ○ドイツ・ニーダーザクセン州特別支援学校における発達障害児の支援－ヤーヌシュ・コルチャック特別支援学校におけるセンター的役割と移行支援を中心に－，千賀愛・安井友康，北海道特別支援教育研究，第 2 巻第 1 号， 45－57， 2008 ○ドイツ・ベルリン市州における障害者の地域スポーツ活動，障害者スポーツ科学， Vol.6(1)， 40－50， 2008	

[illegible]

第51回全国学校体育研究大会
北海道大会紀要

発 行 平成24年10月25日
編 集 北海道大会実行委員会編集部
発行者 北海道大会実行委員会
委員長 飯 沼 晃
連絡先 北海道大会実行委員会事務局
札幌市立手稲北小学校内
事務局長 松 井 光 一
〒006-0860
北海道札幌市手稲区手稲山口653番地 2
tel 011-681-4182 fax 011-681-7359
印 刷 株式会社 大弘社印刷
札幌市中央区北 1 条西28丁目
tel 011-614-4121

北海道大会協賛



大通公園 札幌雪祭り(札幌市 中央区)

HYBRID
SYNERGY
DRIVE

あなたもぜひ、ハイブリッドシナジードライブの感動をご体験ください。

さあ、札幌トヨタのエコカーで
感動ドライブに出かけよう！



PRIUS

ハイブリッドカーの
進化と真価。



AQUA

想像以上の「爽快ドライブ」。
10年先のフューが、駆け足でやってきた。

週末はハイブリッドの札幌トヨタへGo!

札幌トヨタ

お客様相談テレホン/フリーダイヤル

☎0120-030040

クラウン SAI アリオン プリウス アクア TOYOTA86 ポルテ アイシス エスティマ ランドクルーザー FJクルーザー

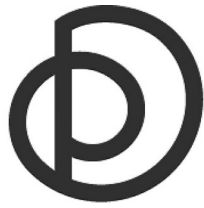


あなたのお車、高く買い取ります！

T-UP

受付専用ダイヤル(通話料無料)

☎0800-800-3636



法務・会計プラザ

第一司法書士合同事務所

〒060-0042

札幌市中央区大通西4丁目1番地 道銀ビル7階

TEL 011-231-3330(代)

FAX 011-210-0580

URL <http://www.tazawa-office.jp>

 **ホクレン**



北海道米
プレミアム
ギフト



食べ比べると、
という、贅沢。

おいしさの秘密は品質基準
プレミアム北海道米シリーズ WEB サイト

プレミアム北海道米

検索 

el clasico inc.

<http://www6.ocn.ne.jp/~ec-ink/>

株式会社 エル・クラシコ
〒005-0003
札幌市南区澄川3条3丁目3-2
NOW HILL ANNEX 2F
FAX 011-827-8821 TEL 011-827-8825
E-MAIL: elclasico-ink.sp@beetle.ocn.ne.jp

サッカー、フットサル用品、体育用品、グラウンド備品
カップ、トロフィー、キーホルダー・・・etc
何でもお気軽にお問い合わせ下さい。

チームオーダー承ります!!

URL: <http://www6.ocn.ne.jp/~ec-ink/>

スポーツで若く、明るく、たくましく
選手の皆さんの活躍を応援します。

(有) **ワボタ スポーツ**

〒063-0811 札幌市西区琴似1条2丁目3番8号

PHONE (621) 2276

F A X (643) 3708



Progress With Students

学びと成長を支援する大学



札幌学院大学

●経営学部 ●経済学部 ●人文学部
●法学部 ●社会情報学部 ●大学院

〒069-8555 江別市文京台11番地 <http://www.sgu.ac.jp>



公立学校共済組合札幌宿泊所
ホテル ライフオート 札幌

婚礼・宴会・お食事・宿泊・会議・法要

さまざまな場面でこころをこめて
皆さまのお手伝いをさせていただきます。

〒064-0810 札幌市中央区南10条西1丁目

●地下鉄南北線中島公園駅下車 1番出口より徒歩3分●

【お問い合わせ】代表 **TEL 011-521-5211** FAX 011-521-5215



創業70年余
心などむご宴会ご会合に

三川屋会館チェーン

三川屋会館本館	中央区南3条西5丁目	TEL 231-7400
三川屋会館・豊(ほう)	中央区南3条西6丁目	TEL 271-2881
炉端焼 かーにばる	中央区南6条西3丁目	TEL 531-7467
スナックかーにばるゆめや	中央区南5条西3丁目	TEL 511-7965
居酒屋 琴似 かーにばる	西区琴似2条1丁目	TEL 644-0691

<http://www.mikawayakaikan.com/>

体操着って、青春着。

仲間がいる。思い出がある。



GOOD SCHOOL LIFE
GOOD SCHOOL SPORTSWEAR
Licensed by DESCENTE

明石被服興業株式会社

札幌営業所 〒063-0846 札幌市西区八軒6条西9丁目1番7号 TEL (011) 633-2001 FAX (011) 633-2008
旭川営業所 〒070-0033 旭川市三条通り11丁目706-2 TEL (0166) 25-2593 FAX (0166) 25-2596
帯広出張所 〒080-0010 帯広市大通南13丁目5番地せりん会館ビル5階 TEL (0155) 28-4840 FAX (0155) 28-4842
函館ヨット屋敷 〒041-0851 函館市本通1丁目44番地15号 TEL (0138) 55-8585 FAX (0138) 55-8587



鍵違い
1,000兆2,800億通りの防犯力。

GOAL
SINCE 1914



ディンプルキー・GV24リバーシブルピンシリンダー
グランドファイ

GRAND V シリンダー

教育の現場に求められるセキュリティの高度化と、
教育の場としての伸びやかな空間の両立を実現します。

株式会社ゴール

URL... <http://www.goal-lock.com>

本社: 〒532-0032 大阪市淀川区三津屋北2-16-6 ☎ (06) 6309-1271 (代) FAX (06) 6302-0561
東京支店: ☎ (03) 3452-6341 (代) 大阪支店: ☎ (06) 6308-5441 (代) 富山支店: ☎ (076) 434-3971
営業所: 札幌・仙台・名古屋・広島・高松・福岡



創業明治三十二年



株式会社 札幌駅立売商会
駅弁・弁当直売店 弁菜亭



ご予算・内容等、ご相談承ります。お気軽にご連絡下さい。

〒060-0908 札幌市東区北8条東2丁目1-35

(電話011-721-6101 / FAX 011-742-1846)

～ 出会い ふれあいの複合施設 ～
ご宿泊・ご宴会・プール・レストラン・音楽ホール

札幌サンプラザ

001-0024 札幌市北区北24条西5丁目
地下鉄北24条駅1番出口より徒歩3分

TEL (011) 758-3111

<http://www.s-sunplaza.or.jp>



感動と出会う旅をプロデュース。

航空旅行、各種研修旅行のほか、列車とホテルをセットしたお得なプラン、列車と飛行機、レンタカー、バスを利用したパックなどをバラエティ豊かにご案内させていただきます。

JR北海道 法人旅行札幌支店 教育旅行センター

☎ 011-223-5766 ☎ 011-223-5767

～お気軽にお問い合わせください～

インターネットで北海道の観光情報がご覧いただけます>> <http://www.jrhokkaido.co.jp/>

特選御予約弁当

素材に、味に、彩りにとことんこだわって、生まれたおいしさ。大切な時に自信をもっておすすめします。

会議用・スポーツ大会
の昼食等にご利用下さい。
多少にかかわらず
お電話下さい。



※2日前の発注になります

FAX 011-816-8630 TEL 011-812-8289

<http://delicafresh.net/>

E-mail delica-f.since1988@solid.ocn.ne.jp

(株)デリカフレッシュ

札幌市豊平区平岸3条9丁目8-22

観光・貸切バスのご用命は



株式
会社

ドリーム観光バス

新鮮な出会い、楽しい体験
ドリーム観光バスは北海道の
素敵な「旅」の夢先案内人です。

本 社 札幌市東区本町2条8丁目2番6号
TEL (011) 784-7700
FAX (011) 781-6750
手稲営業所 札幌市手稲区曙2条4丁目4番65号
TEL (011) 683-7700
FAX (011) 683-8700

イメージ、新鮮。感性、無限に。

INFORMATION

婚礼写真・コマーシャルフォト・建築写真・スタジオ撮影
各種アルバム制作・出張撮影・D.P.E・カメラ機材修理他

株式会社 道央フオート



本 店：札幌市中央区南 23 条西 11 丁目
☎011-563-8011
平岸支店：札幌市豊平区平岸 6 条 14 丁目
☎011-812-0433

SAPPORO

和田法律事務所

弁 護 士 和田 壬三

【事務所】
札幌市中央区北 4 条西 6 丁目 1 番地
毎日札幌会館3階 郵便番号 060-0004
電 話 281-0909番(代表)
F A X 271-4336番

■電子組版／オフセット印刷／各種印刷■

■追悼集／自費出版／報告書■



株式 会社 誠 印 刷

〒063-0862 札幌市西区八軒2条東5丁目3-16

■TEL (011) 643-7602 ■FAX (011) 613-7829

E-mail: info@makoto-print.co.jp

私達は「人と環境に優しい」企業を目指しています。

TOMBOW

◆スクールウェア
◆スポーツウェア

◆シューズ



COMME ÇA DU MODE
School Label

ラッキーベルシューズ北海道代理店



推薦

(財)日本中学校体育連盟

※ラッキーベルのシューズはベルマーク商品です。



北海道トンボ株式会社

〒060-0906 札幌市東区北6条東5丁目1番4
TEL (011) 742-2551 FAX (011) 731-1176
URL <http://www.h-tombow.co.jp>



北海グループ

北海トラベル株式会社

観光庁長官登録旅行業第881号
(社)日本旅行業協会正会員

旅行事業部 北海トラベル株式会社
バス事業部 安全永楽交通バス株式会社



国内旅行から海外旅行まで
お客さまのニーズに
お応えする
旅のトータル
プランナー

〒065-0024 札幌市東区北24条東1丁目1番35号
☎011-751-6633 FAX 011-751-6634

信頼と真心を印刷する



株式 会社 大弘社印刷

本 社 〒061-3241 石狩市新港西 1 丁目 721-8
TEL (0133) 74-6111(代) FAX (0133) 74-3777

札幌事務所 〒064-0821 札幌市中央区北 1 条西 28 丁目
TEL (011) 614-4121(代)

祝 第51回 全国学校体育研究大会 北海道大会

文部科学省新体力テスト実施要項 準拠

NEW 体力テスト 診断システム

中学生用 全国版

小学生用

児童・生徒
1人あたり **210**円(税込)

体に気づく体力テスト
学習指導要領に基づく
体力診断

新指導要領に基づく体力テスト

文部科学省「新体力テスト測定項目」に準拠しながらプラスアルファを追加「体づくり運動」に対する関心や意欲を持たせるような内容と構成

「体に気づく」体力テスト

「体をつくる」ためには、「体をはかる」→「体に気づく」ことが重要
測定項目だけではなく、生活習慣や自覚症状にも着目



新学習指導要領準拠

教師用DVD-ROM付

学習カード、図版集、動画集収録

全1冊／B5判／4色刷／336頁

定価790円(税込) [本体752円]

ビジュアル 新しい 体育実技

写真点数3,500 圧倒的な迫力

鮮明な連続写真を豊富に掲載し、動きのポイントをわかりやすく提示。

2ステップ構成

新学習指導要領に合わせたステップ1(1学年～2学年用)、
ステップ2(3学年用)の2ステップ構成。

ご採用校には700点以上の動画を無料サービス

教師用DVD-ROMに14種目 700点以上の動画を収録。



東京書籍

本社 〒114-8524 東京都北区堀船2-17-1 Tel:03-5390-7306(保健編集部) Fax:03-5390-6014
北海道支社 〒064-0806 札幌市中央区南6条西14-1-5 札幌東書ビル Tel:011-562-5721 Fax:011-562-5492
ホームページ…<http://www.tokyo-shoseki.co.jp> 東書Eネット…<http://ten.tokyo-shoseki.co.jp>

新しい体育の授業づくりに取り組む先生、保健体育教師を目指す学生におすすめ！

新しい 体育 の授業づくり

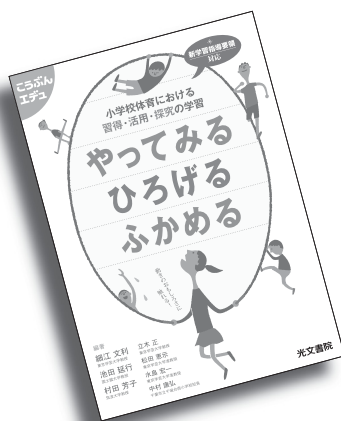
編著者 勝亦紘一（中京大学名誉教授）
家田重晴（中京大学教授）

- 体育の授業や運動部の活動を通して、生徒たちが楽しく生涯にわたるスポーツライフの基礎を築くための、指導者の道標。
- 保健体育科教育を熟知している著者が、21世紀の新しい体育への授業づくりへの挑戦。

B5判 208頁 定価（本体2,000円＋税）

大日本図書

〒112-0012 東京都文京区大塚 3-11-6 ☎03-5940-8679 FAX.03-5940-8688
大日本図書ホームページ：http://www.dainippon-tosho.co.jp



新学習指導要領対応

小学校体育における習得・活用・探究の学習

好評発売中！

やってみる ひろげる ふかめる

新たな学習過程の構想

やってみる ひろげる ふかめる

の3つのフレームの考え方をもとに
11の理論編と27の展開編で構成！

定価 1,900円（税込）
B5判・144ページ

【編著者】

- | | | | |
|------------|------|------------|------|
| ・前東京学芸大学教授 | 細江文利 | ・東京学芸大学教授 | 立木 正 |
| ・国土館大学教授 | 池田延行 | ・東京学芸大学教授 | 松田恵示 |
| ・筑波大学大学院教授 | 村田芳子 | ・東京学芸大学准教授 | 水島宏一 |



学ぶことが好きになる。

光文書院

〒102-0076 東京都千代田区五番町 14
TEL 03-3262-3271 FAX 03-3230-4190
URL http://www.wobun.co.jp/

小学校体育実技DVD

⑦、⑱…教育映像祭
最優秀作品賞
文部科学大臣賞受賞

DVDの機能を生かしてきめこまかなステップの練習が繰り返し視聴でき、必要に応じて字幕を見ることがもできます。

〈体づくり運動編〉

- ①低学年の体づくり運動
- ②中学年の体づくり運動
- ③高学年の体づくり運動

〈器械運動編〉

- ④器械・器具を使つての運動遊び
- ⑤マット運動
- ⑥鉄棒運動
- ⑦跳び箱運動

〈水泳編〉

- ⑧水遊び／浮く・泳ぐ運動
- ⑨クロール／平泳ぎ／背泳ぎ

〈ゲーム・ボール運動編〉

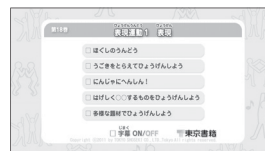
- ⑩ゲーム（ボールゲーム／鬼遊び）
- ⑪ゴール型I
- ⑫ゴール型II
- ⑬ネット型
- ⑭ベースボール型

〈陸上運動〉

- ⑮走・跳の運動遊び
- ⑯短距離走・リレー／ハードル走
- ⑰走り幅跳び／走り高跳び

〈表現運動〉

- ⑱表現
- ⑲リズムダンス



全19巻 DVD 各巻約60分
価格 各9,975円（税込）



東京書籍

〒114-8524 東京都北区堀船2-17-1 Tel:03-5390-7481 Fax:03-5390-6012
ホームページ… http://www.tokyo-shoseki.co.jp 東書Eネット…http://ten.tokyo-shoseki.co.jp

Wacoal 下着指導でお困りではありませんか？

ツボミスクールの「出張教室」「読む下着教室」をお役立てください！



出張教室

開催エリア限定

出張型授業
ツボミスクールを
開催しませんか？



ワコールでは2001年から下着教室「ツボミスクール」を開催しています。スクールでは、女の子のからだの成長と下着の基礎知識を楽しく学ぶことができます。

体型変化や下着についてご指導される際に、ぜひご利用ください。(開催費用は無料)

<各コースのご案内>

●小/中学生コース

(所要時間約60分)

対象：小4～6、中1～2の女子

※授業時間内でも対応可能

●保護者/教諭向けコース

(所要時間約60・90分)

対象：小1～中2までの女の子の保護者、教諭(保健体育など)



開催エリア 【関東】東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県
【関西】京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、滋賀県

読む下着教室

対象：全国の希望校

**テキスト「わたしたちの
カラダと下着のはなし」
を希望校へお届けします。**

Dear Girls, わたしたちのカラダと下着のはなし

ツボミスクールで講師が話している内容をまとめたテキストです。成長期の体型変化や、下着の知識・情報をわかりやすく解説。初経指導や二次性徴などのご指導にご利用ください。



下着サンプルセットのお貸し出し

テキストの補助教材として、教材用下着サンプルのお貸し出しも行っています。
(期間：3ヶ月)

※数に限りがございます。ご了承ください。



ホームページからお申し込みください。

<http://www.wacoal.jp/tsubomi/> ツボミスクール 検索

詳しい内容やお申し込みは、ホームページをご覧ください。Q&A もありますよ！

その他ご不明点は、下記までお問い合わせください。

mail tsubomi@wacoal.co.jp

TEL 0120-203-248 【受付時間】平日 9:30～17:30

株式会社ワコール

本財団は、
公益信託日本教育シューズ学校体育振興基金から
支援を受けています。

【新体力テスト集計・分析システム】

(文科省発表新体力テスト準拠)

体力づくりをめざして

- 個人カードはカット済
- 部活顧問用資料を充実
- 測定実施の完全バックアップ

集計・分析処理料金(1人分)

220円(税込)



第一学習社

TEL 082-234-6800 FAX 082-503-3084 〒733-8521 広島市西区横川新町7-14

●大阪支社/☎06-6380-1391

●新潟営業所/☎025-290-6077

●横浜営業所/☎045-953-6191

●福岡営業所/☎092-771-1651

●札幌営業所/☎011-811-1848

●つくば営業所/☎029-853-1080

●名古屋営業所/☎052-769-1339

●金沢出張所/☎076-291-5775

●仙台営業所/☎022-271-5313

●東京営業所/☎03-5803-2131

●神戸営業所/☎078-937-0255

●沖縄出張所/☎098-896-0085

以下の資料をお届けします

- 学校総括表
- 順位一覧表・級門分布表
- 判定別一覧表
- 生徒指導カード(個人カード控)
- クラス台帳
- 生徒指導台帳
- 部活分析表
- 運動部活別比較表
- 部活台帳
- 学校集計資料・保健部資料
- ★教育委員会提出資料を完備

成長期の正しい足の発育促進に大きな効果を
発揮する画期的な21世紀のシューズ。

**教育シューズ
フレッシュ21**

教育バレー®DX

推薦

(財)日本学校体育研究連合会
全国小学校体育研究連盟



4つの優しさ

- 優しさ 1 つま先ゆったり!
外反母趾予防設計
- 優しさ 2 洗たくカンタン!
はずせる中敷
- 優しさ 3 着地らくらく!
衝撃吸収材
- 優しさ 4 足にピッタリ!
0.5cmきざみ

財団法人 日本学校体育研究連合会特別賛助会員

日進ゴム株式会社

〒700-0975 岡山市北区今8丁目16番17号

TEL (086)243-2456 FAX (086)242-0550

<http://www.nisshinrubber.com/>

教育シューズ **教育バレー** は、日進ゴム(株)の登録商標です。

クロールで25m泳ぐ近道。

浮いて泳げる水着キット

クロールで25

クロールで泳げるようになりたい！
「クロールで25」はそんなお子様を
サポートする水泳キットです。

感動体験ムービー放映中！
詳しい情報はホームページへ。

<http://crawlde25.jp/>

検索 クロールで 25



品名：クロールで 25
品番：132129
サイズ：120～160cm
カラー：紺色のみ・男女兼用
仕様：オールインワン型水着
浮力シート 8 枚セット
価格：4,725 円（税込み）



泳げる近道
1
着だけで
水平に浮く

体を 4 点の浮力で吊り上げ、水平姿勢
(ストリームライン)をつくる水着です。



呼吸するときも
上半身が沈まない
ようサポート

水平に浮く

沈みやすい下半身を
浮かせて泳ぎやすい
姿勢をつくります

泳げる近道
2
浮力が調節
できる

習得段階に合わせ浮力の調節ができます。
最後は浮力シートなしで泳げるよう補助。

水着の内側にあるポケットへ浮力
シートを入れます。(左右に装着)

前にフ
アスナ
ーがあ
るの
で着
替え
も簡
単！



上達したら薄いシートへ交換

すまいるスイムシリーズ

【超はっ水で速乾・軽量】

速 乾

軽 量

超はっ水

超はっ水だからできる速乾・軽量！

着用者の90%以上が軽さを実感(当社比)。



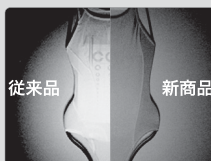
水にぬれても、肌にはりつかずさらとした軽い着心地
超はっ水だから…「着替えがラクラク!!」

※使用後の持ち運びもラクラク！ ※通常の水着より速く乾きます！

安全・安心!!「赤外線盗撮」から子供達を守ります。

●水を弾き軽い! 体が浮く感じ!

●はっ水効果は3年以上持続!



赤外線盗撮防止素材を採用! 安心・安全な水泳授業を応援!
フットマークだけのオリジナル新素材!

技術企画・開発(協賛特許) 朝倉染布 株式会社 / 山田化学工業 株式会社

フットマークの新素材は、赤外線を吸収する染料加工を施すことで
悪質な赤外線盗撮を予防し、赤外線盗撮から子供達を守ります!



www.footmark.co.jp

※右記までご連絡下さい。資料等をお送り致します。

フットマーク株式会社 スクール開発販売部
東京都墨田区緑2-7-12 TEL:03-3634-0506

FOOTMARK®

体育界の思潮をリードする

月刊

体育科教育

毎月14日発売

定価830円

■B5判

◎年間購読料
9,130円

小・中・高・大学の体育指導者や専攻学生を主対象に、体育・スポーツの諸問題を教育的視点から幅広く特集形式で編集。学校現場の課題解決に、情報入手に、理論武装に、よい授業実践に、教材開発や授業研究に、幅広く必要な情報を満載。新しい学習指導要領に対応した企画も豊富。

最近の特集

2012年10月号 体育の常識を問い直す／9月号 いまさら聞けない体育の常識Q&A Part3／8月号 ①いまこそ「遊び」の再生を ②保健の授業を創る／7月号 ロンドンオリンピックを体育授業に取り入れるために／6月号 わかる・できるを導く教具／5月号 ICT活用とこれからの体育授業／4月号 プロフェッショナル体育教師への成長プロセス／3月号 子どもの社会性と体育・スポーツ／2月号 いま、表現運動・ダンスの授業をどう創るか／1月号 みんなが楽しめる武道の授業を創ろう／2011年12月号 タグラグビーとフラッグフットボールの学習指導／11月号 女性と体育・スポーツ—いま、何が、どう問題か



別冊

体育科教育

「具体的に授業に役立つ」ことを主眼において、体育授業に必要な技術指導や授業づくりのノウハウを斯界の研究実践家がわかりやすく解説します!! イラスト多数! すぐに使える学習カード付き!!

《新学習指導要領準拠》

新しいマット運動の授業づくり

高橋健夫、藤井喜一、松本格之祐、大貫耕一[編著] ●120頁 定価1,200円

《新学習指導要領準拠》

新しい跳び箱運動の授業づくり

高橋健夫、藤井喜一、松本格之祐[編著] ●104頁 定価1,200円

《新学習指導要領準拠》

新しい鉄棒運動の授業づくり

高橋健夫、藤井喜一、松本格之祐[編著] ●120頁 定価1,200円

《新学習指導要領準拠》

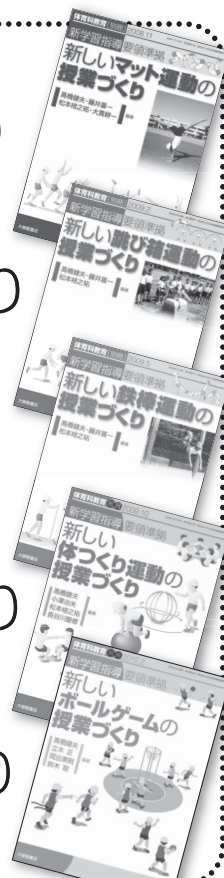
新しい体づくり運動の授業づくり

高橋健夫、小澤治夫、松本格之祐、長谷川聖修[編著] ●168頁 定価1,500円

《新学習指導要領準拠》

新しいボールゲームの授業づくり

高橋健夫、立木正、岡出美則、鈴木聡[編著] ●168頁 定価1,600円



GOLDSTAR

SPORTS SCHOOL SHOES

GX



体育館
シューズ

S P E S スペース

学校体育シューズ研究会

School Physical Education Shoes

高機能・ジャストフィットを実現
超軽量モデル 片足 (24.5cm) 290g

ASTICO

株式会社 アスティコ

岡山県岡山市中区江並417-1

TEL : 086 - 276 - 2010 (代)

Gakushin®

SCHOOL SHOES

S-2800



S P E S スペース

学校体育シューズ研究会

School Physical Education Shoes

School Shoes としての耐久性
ただ長持ちさせるのではなく、
運動性能と安全性能も大切です。

協和株式会社

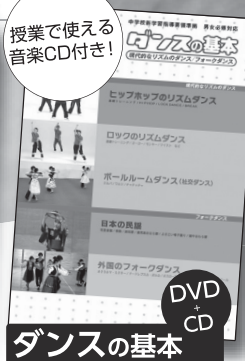
神戸市長田区西尻池町1丁目3番8号
TEL : 078 - 611 - 4376 (代)

豊かな スポーツライフの ために

単元計画
授業モデル
技の指導
が充実!

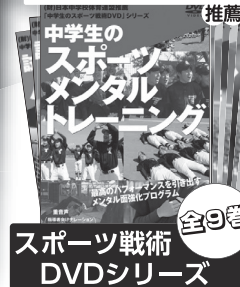


授業で使える
音楽CD付き!

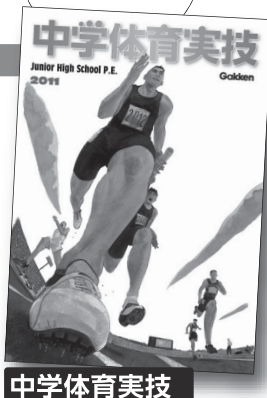


好評発売中!

(公財)日本中学校体育連盟 推薦



平成23年度
全面改訂新版
★★★



中学体育実技

平成24年度
改訂新版!
学習指導要領
対応



中学保健体育の
学習 1~3年



中学保健体育
ノート 1~3年

保健体育副読本



図解
スポーツルール



学研式 体力テスト

生活健康度の
判定もできる!

(公財)日本中学校体育連盟 特別賛助会員

(株)学研教育みらい

学校教育事業部 TEL 03-6431-1151(代表)
〒141-8416 東京都品川区西五反田2-11-8

学研 学校教育ネット

検索

<http://gakkokyoiku.gakken.co.jp/>

スクールシューズのプレミアムスタンダード

教育シューズ® PK-X3



極める

グリップ性

耐久性

超軽量

サイズ…21.0cm～28.0cm 29.0cm 30.0cm 31.0cm アッパー…ポリエステル/人工合成皮
ソール…合成ゴム/合成樹脂

(財)日本学校体育研究連合会特別賛助会員

教育シューズ振興会

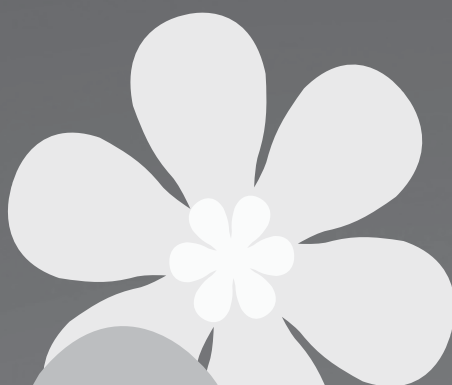
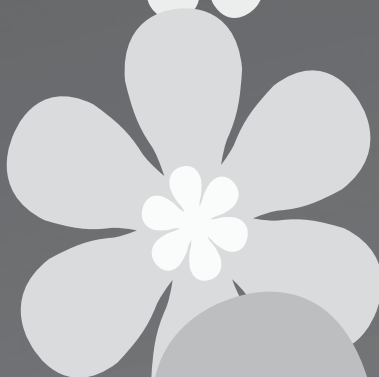
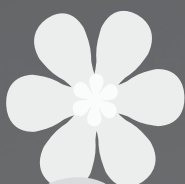
TEL(086)243-2218 FAX(086)243-2253

(製造部) 日進ゴム株式会社 TEL(086)243-2467

<http://www.nisshinrubber.co.jp>

e-mail:kyouiku-shoes@nisshinrubber.co.jp

ココロ花咲く、ステキな旅を。



お客様満足度100%+ α を追求するサービスマインド。

お客様の立場になる「想像力」、プラスアルファを創る「創造力」。

55年の実績と豊富な情報力を駆使して

高品質・高付加価値の商品とサービスを提供するトップツアー株式会社。

私たちは、旅を通じて新しい出会いと感動を創出する

「旅行インテリジェンス企業」です。



TOPTOUR

出逢い、発見、そして感動。

トップツアー株式会社

観光庁長官登録旅行業第38号 © JATA正会員・ボンド保証会員

〒153-8550 目黒区東山3丁目8番1号

<http://www.toptour.co.jp>

